
ROG(real online game)

近衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROG (real online game)

【Nコード】

N8801T

【作者名】

近衛

【あらすじ】

マッドサイエンティスト、アハリ教授が生み出した新しい通信網『仮想空間』。

そこで起きる現象は、もはやただのゲームとしての意味に留まらず現実さえも飲み込んで侵食していく。この技術革新は米帝のアルゴリズムによる支配おも揺るがしかなない可能性を秘め、そこで巻き起こる戦闘はあたかもオンラインゲームの様相を呈していた。

時は未来、仮想空間と呼ばれる新しい通信技術は、その内部に組

み込まれたプログラム『GENESIS』によってその位置づけが大きく変更される。当初は意識没入型の新しい通信技術というだけであったが、『GENESIS』というゲームをベースにしたプログラムによって相手を倒すとそのデータを物理的に強奪できるということから、一気に仮想空間は無法地帯となる。そんな中で仮想空間にとらわれた天宮水月あまみやみずきを助けるために、新城明しんじょうあきひの戦いは今日も繰り返される。(1-0-1-4までの内容)

なんとか水月を救出した明と元クラスメートの神代鏡かみしろかがみ。今度は三人でAIが主催する『GENESIS』の大会に出場することになる。彼らは仮想で繰り広げられる戦争の縮図に巻き込まれることになる。憎しみの連鎖、力には聖も邪もなく、神の愛は全てに対して平等だった。明もまた、その一部であり、争いの中へと踏み込むことになるだろう。(2-1-2-5)

用語解説とかはこちら <http://ncode.syosetu.com/n9041t/>

追記。

この作者、かなり変な更新の仕方してます。とりあえず更新 編集 さらに編集 次話投稿 次話部分が前話と統合とか平然とやります。話の整合性が取れてないなどと思ったら前の話をみるといいと思います。前書きやあとがきで補完しているつもりですが、間が空くと変だなとか感じることもあるかもしれません。そういう変なやり方が合わない、と感じる方は読まないことをお勧めします。

1 - 0 C r o s s r o a d (前書き)

ささいな偶然が交錯する。
積み重なった系は、奇跡を紡ぎだす。

1 - 0 Crossroad

00 Crossroad

2031年12月

巨大なドーム状の構造体に一群の人の群れがみえる。ドームの透明な天蓋てんがいに青い空が透かしてみえるが、光の偏光加減でオーロラオーロラのようにも映る。それは、あらゆるものが並列して存在しうる仮想空間ヴァーチャルという場所の特性をよく示しているようにも思えた。

「諸君、今日はAAでの戦闘訓練を行う。死罰デスペナルティのないアリーナでの戦闘だからといって気を抜かないようにしろ。訓練中にできないことが、実戦で使い物になる訳が無いんだからな」

ブラウンのスーツを着た男性、黒木智樹くろき ともき講師の声がドームに響く。昨今では、一般にまで広く普及しつつあるネットの代替物、仮想空間。

『PIT』と呼ばれる携帯端末を経由して自身の意識を没入めいじゆさせて使用する都合上、肉体へのフィードバック現象による現実的な危険を伴う。しかし、PIT持っていれば誰でもどこでも、さらには無料で見えるというのが爆発的な普及の背景にあるだろう。

「まずは、見本を示したい。誰か、私の相手をしてくれないだろうか」

恭しく黒木が目の前に整列する生徒達に語りかける。

AAと呼ばれる仮想空間でのロボット型戦闘ツールを使用した戦闘はで大人気のはずであるが拳手をする人間はいない。無論、生徒と教師という理由もあるが、それを差し引いても黒木が強過ぎて誰も相手をしたくないからだ。それは、単に黒木講師が大人気ないともいえるのだが。

「困ったな。では、新城明君、相手をしてくれないか」

その言葉とは裏腹に、表情には笑顔さえ浮かべる黒木。

彼に呼ばれた新城という少年は、やれやれといった表情で彼の隣に進む。

気に入られているのか、実技科目の優秀さから手ごろだと判断されているのかは定かではなかったが、こうして相手に選ばれることが多かった。そして、彼は自分が負けず嫌いであることも自覚していた。

「手を抜かないでくださいよ。勝ったときの言い訳はされたくない」

「訓練だからといって手は抜かないよ、明君」

しかし、明は勝つつもりでいた。

絶対に諦めない、根性論にも似たしぶとさが彼の売りだった。対して、黒木は最初から真剣勝負をするつもりでいた。何時如何なるとき、どんな相手でも手を抜かないのは真面目過ぎる性格の所為だろう。

二人はグラウンドに向けて飛び降り、そして、強く思考する。

《Translation》（記号変換）

オペレーティングソフトの『The Book』のメニューを開いてプログラムを起動することもできるのだが、こうやって直接起動した方が手っ取り早かった。

教師と生徒、正確にはそれを模したアバターと呼ばれる仮想空間上での肉体だったものは、デジタルのデータとなり分解されると同時に上書きされていく。

二人の姿はモザイクが掛かったようにぶれ、直後に巨大な人型の戦闘兵器『AA』へとその姿を変える。直後に彼らの間にビジュアルエフェクトが表示されシステムアウンスが挿入される。

【MISSION START（任務開始）】

「さあ、戦闘開始といこうじゃないか」

「いざ、尋常に」
ジョウジョウニ

「勝負！」

二人の声が重なりオープン回線上で響き渡る。

ただのスポーツをするには広すぎるアリーナのグラウンドに白い翼をまとった機械の天使、羽を広げた青い機械の妖精がそれぞれの得物を手に対面する。フェアリーと呼ばれる青いAAに明が姿を変えたものであり、対面しているケルビムと呼ばれる機体は黒木が記号変換したものだ。

そして、闘技場で向き合った両者が取る行動は一つだった。

地面からわずかに浮かんだフェアリーとケルビムは、武器を手に正面からぶつかり合う。真正面から振り下ろされた大剣を明は二本の細身の剣、ミスリルソードを交差させて受け止める。

後手に回った感はないが右手で受け流し左手で斬り付ける。それを火蓋^{ひふた}として左右の剣でラッシュを仕掛けるが、絶妙な間合いの取り方と身のこなし、わずかに届きそうな攻撃は全て防がれる結果に終わる。

傍目には実力は拮抗^{きっこう}しているように見えるかもしれないが、明の主観はそうではない。むしろ、焦ってすらいた。手数、攻撃速度のいずれでも勝っているのに攻撃が当たらないと言うことは、両者の間に明確な実力の差があるということの証左でしかない。

そして、それは明が攻撃し続けているのではなく、攻撃を止めた瞬間に仕留められるということの意味していた。

フェアリーは両手に持ったミスリルソードを上段や下段からの袈^け袈^さ掛け、逆袈袈、切り上げ、薙ぎ払う。しかし、一見ランダムに見える攻撃も全体としてみれば次の攻撃に繋がるようにパターン化されたものであり、見切ることとは不可能ではない。見誤れば致命傷を受けるが、それは見えてさえいれば攻撃は当たらないということでもある。

「また、腕を上げたようだ。やはり若いというのは素晴らしい」
上から目線の言葉であるが、馬鹿にしているというわけではなくこれが黒木の素の言葉だった。相手が黒木でなければ大人でも一蹴^{いっしょく}できる程に彼は強いのだ。

「あなたを超えたくて研鑽^{けんさん}を重ねたが、やはり正面からは分が悪いようだ」

そういうと明はバックステップしつつ地表面を剣でこすり砂塵をまき散らす。煙の中からの奇襲を警戒したのかケルビムは即座に空中へと逃れる。スモークの中からの攻撃は黒木が直前にいた場所を通過する。

そして、煙の背後を迂回^{うかい}した明は右手にミスリルソードを、左手にはリニアライフルを構え斬り掛かる。正面からの射撃、側面からの奇襲^{きしゅう}にも完全に反応して鍰^{つばぜ}迫り合いの形になるが、腕のばねを利用して後退しつつ弾丸を撃ち込む。

機械の天使はブリッジのように体を逸らすことでこれを交わす。この間に明は左腕部に内蔵されたアンカーを地面に打ち込んで降下しつつ、強引に前進して黒木の真下から斬り付ける。

「はああっ！」

裂帛^{れっぱく}の気合と共に放たれた一撃。

「惜しい。だが、まだ足りない」

完全な虚を突いた一撃にさえ反応し、後ろ手に構えた大剣でこれを防ぐ黒木。

反転し二人は中空で見上げ見下ろす状態でしばし向き合う。

ケルビムの上段に構えた刀身が赤く灼熱^{しゃくねつ}する。

その姿の前に陽炎^{かげろう}が見えた次の瞬間に肉薄される。

反射的に突き出したリニアライフルは、弾が放たれるよりも先に爆散する。斬られたという事実を認識した瞬間には巻き取るように剣をいなされる。擦りあわされた剣が火花を散らす姿は死へのカウントダウンのように映る。

喉元^{のどもと}に赤々と燃え立つ大剣が伸び、迫る白刃。

「これでチェックメイトかな？ 新城君」

こんな言葉でさえどこか飄々（ひょうひょう）としている黒木。彼はどんなに追い詰めても切り返してくるという状況を楽しんでいた。

「いえ、生憎と諦めが悪いんで」

明は体を逸らし首筋に迫る白刃をわずかに先延ばしする。時間稼ぎにもならないような短い紆余^{うよ}だったが伸びきった腕ではもう一步の踏み込みが必要だ。そして、払われた手に持っていた剣を投げ捨てホルスターに右腕を運ぶ。

そして、止めをさされる恐怖よりも敵の攻撃よりも、ひたすらに繰り返してきた動きが先んじた。無意識に明はリニアライフルをホルスターに入れたまま銃口を向けて放つ。

「俺は、諦めないっ！」

銃声が鳴り響き、眼前で放たれたマズルフラッシュで視界が消える。

【THE END（戦闘終了）】

AAが破壊されると同時にシステムアナウンスがエフェクトと共に響く。

「肉を切らせて骨を絶つ、ってね。危ない危ない」

そこには片腕を犠牲にして攻撃を防いだケルビムの姿と敗北が決定しポリゴンとなって霧散するフェアリーの姿があった。それは、大剣による斬撃をとつさに投擲^{とうてき}へと切り替えた黒木が辛くも勝利したことを示していた。

「惜しかったな。明」

「結果が全てだよ。俺は負けた、それだけだ」

学校指定の紺のブレザー姿で少年が二人、廊下を歩く。一人は先程の講義の際に仮想空間で黒木講師と激しい戦闘を繰り広げていた少年こと新城明。その隣に並んで歩くもう一人はその友人である三島^{しま}平治^{へいじ}だった。

少々だらしなく伸びる黒髪の明と短く活動的に刈り込まれたスポーツ狩りの彼が並んで歩くのは少々異色であるが、二人は入学当初から妙に気が合った。

「クールぶっちゃって。本当は悔しいくせに」

「悔しいからこそ、足掻^{あが}いて努力して見苦しくても勝とうとする

んだよ。俺は、誰よりも負けず嫌いだからな」

「君は元気そうで、なによりだ」

長い黒髪とふくよかな胸を揺らしながら後ろから合流してきた少女は、かみしろかがみ神代鏡。成績も優秀で容姿もいいのだが性格の問題なのか女子の友人があまりいないという変わった人物でもある。少しゆるめに作られている制服も彼女が着るとどこか引き締まって見えるのは少し鋭い目付きと高身長のせいかもしれない。

「お前の目は節穴か？ 俺は現在進行形で落ち込んでいるんだぞ」
「君は素直に励まして欲しいというような殊勝な性格でもあるまいし、それにそんなこと望んではないのだろう？」

「まあ、少なくともお前にだけは頼まないな、神代」

「ならばいいだろう。それに三島も励はげますならおごるくらいしてやればいいだろうに」

「神代さんもさりげなく俺をけしかけないで欲しいね」

「何も出てこないもんね」

間延びした声を出すのは神代のやや後ろから現れた彼女の数少ない友人の一人、あまみや みづき天宮水月。女子としては高身長の神代と、対して少し低め身長であるの彼女が並ぶとどこか姉妹のようにも映る。栗色で少しカールのかかった髪が特徴で、胸は少し控えめ、性格については本人が否定しているが周囲の多数意見は天然という結論だった。そんな彼女たちは少々ずれた感性の人間同士気が合うのかもしれない。

「てか、なんで俺のお財布事情知っているわけ。天宮さん」

「だって、平治君は万年金欠でしょ。豊かだったことが無いよ」

「ぐ」

「まあまあ、彼だって好きで金欠しているわけではないのだから、許してあげようではないか。なあ、水月」

「ぐぐぐ」

何かに耐えるようにうつむき平治がうなる。

「いつの間にか許される立場になっっているな、平治」

「お、お、俺にはなあ、玉の輿こしという希望が残されているんだよ。だから、だからなあ、別に悔しくなんかないんだからなああっ」

微妙な捨て台詞を残し、涙ながらに平治はどこかへと駆け出して言った。

「玉の輿は、希望ではなく欲望だぞ平治」とは明。

「外出なら、おみやげよろしくね、平治君」とどこかとぼけたようすの水月。

「さすが元運動部、足が速い」と全く気にも掛けない鏡。いつものことなので気にすることも無く三者三様に見送る明たちであつた。

そして、放課後。

喫茶店『止まり木』のカウンター席にて。

「結局、おみやげくれなかったね、平治君」

「お前はあいつが金欠と認めながらも、物を買ってくると期待していたのか」

「ナチュラルに鬼だね、水月は」

今時珍しい文明の利器がほとんど無いアンティーク風喫茶店『止まり木』で話す三人。そして、ぼけるのは基本的に水月一人なので突っ込み役には事欠かない。三年生進路も決めた彼らは放課後の暇をだべることで潰していた。

「平治君いい人だから。期待には応えてくれると思って」

「もはや俺は何も言うまい」

「マスター、コーヒーお代わり」

わが道に行く鏡は、会話そっちのけで注文をすると無愛想なヒゲ面の男ことマスターがカップを受け取り代わりのブラックコーヒーをカップに注ぐ。ちなみに、彼らがいつも通っているこの店はコーヒーと紅茶がお代わり自由なので学生である彼らのお財布には非常に優しかった。

「あいよ」

ぼそりとつぶやきマスターがコーヒーをカウンター席に置く。エプロン姿が妙に似合うマスターだが、真実の愛とか世界平和などといった意味不明な漢字が大きく書かれたものをよく着用していた。そのセンスから生体に至るまで全ては謎に包まれていた。ちなみに、今日は世界平和とデカデカと書かれている。

「どうも、マスター」

礼を言う鏡のことなど見向きもせずグラスを拭き始めるマスター。この店に通って大分立つ彼らだったが、未だにマスターの本名を知っている者はいなかった。

「今日も弾いてもいいですか？ マスター」

水月の唐突な申し出に無言で首だけうなずき、カウンター席の脇にあるグランドピアノをみやるマスター。文句を言う客がいないからなのか、はたまた彼女の腕前を認めているからなのかは解からないが彼女が気まぐれにピアノを弾くことを許していた。

「今日は何を弾くんさい？ 水月」

「少し指が動くままに任せて弾いた後に、思いついた曲を弾こうかな。強いて言うなら、諦めないことを教えてくれた君に送る曲」席からゆつくりと立ち上がり、脇へと移動する水月。こういった動作が少し様になっているように映るのは、彼女が多くのコンクールで入賞していることも無関係ではないのかもしれない。

「なんだそりゃ」

呆れる明、マイペースにコーヒーを飲む鏡。その耳には、おだやかな音が届く。

楽譜も無く、ただ彼女の白く美しい指が遊ぶままに奏でられるタイトルの無いその曲はどこか優しく包み込まれるような感覚になる。わずかな光だけが届く深海のようだった店内はその音が響くと風に揺られる水面のようににわかに活気付く。

別段、店内がにぎやかになった訳ではないのだが普段は仏頂面のマスターの顔さえどこか楽しげに映る。耳に心地よく響き聞いている人間の心を穏やかにしてくれる、そんな曲だと明は思った。

会話するでもなく、静かに流れる音の海に身を任せてどれだけの時間が経っただろう。明と鏡のカップの中はとくに空になっていた。窓から差し込む夕日に照らし出された水月の横顔はどこか現実離れしていて引き込まれるような美しさを放っていた。

そして、演奏が終了すると奥の席から拍手が聞こえる。

「お見事。天宮君にこんな特技があるとは知らなかったよ」

一体何時からいたのだろうか、そこには黒木講師が座っていた。

「って、黒木先生。恐縮です」

「今はただの喫茶店の客だよ、僕は。そんなにかしこまらなくてもいい」

スーツ姿よりも白衣で教鞭を取っている姿の方が似合う彼だが、眼鏡を掛けてコーヒーを飲む姿は教師というよりはサラリーマンだった。

「本日は、ご指導ありがとうございました。黒木師」

「おっと、君もいたのかい新城明君。指導なんて大それたものではないが、訓練ならば何時でも相手になろう。それと武道は礼に始まり礼に終わる。だから、こちらこそありがとう明君」

真面目すぎるきらいがある黒木講師だったが、明は彼を素直に尊敬していた。強く正しく誠実な彼は、少しクールぶって斜に構えている明が認める数少ない人物だった。

「先生の指導の賜物ですよ」

「さて、あちらの男二人は放っておいて次の曲を弾いてくれないか、水月」

「そうですね、少し情熱的な曲を奏でるとしましょうか。ふふ」
何時の間にか注文したのか大きなパフェをほおぼりながら鏡が話す。そんな店内の様子をうかがい、笑顔を浮かべた水月が栗色の髪を揺らし楽しい音を奏でていく。こうして穏やかな時が流れていたのであった。

2032年6月

木造の洋館のテラスに少女が一人。

木製のラウンドテーブルで物憂げに紅茶を口に運ぶ。ぼんやりと外を眺める彼女は、どこか達観しているようでもありあるいは諦観ていかんしているようにもみえた。プラタナスの木漏れ日の加減か、それとも礼服のような白いドレスに身を包んでいるからか、彼女の存在自体がどこか儚げはかなにも映る。

草原から風が吹き抜け、肩口まである茶色がかった巻き毛がふわりと揺れると、樹木の葉っぱがこすれる音がどこか涼しげに聞こえる。さわやかな香りが鼻腔びうをくすぐるティーカップをソーサーに置き、彼女は話す。

「この景色も、ダージリンの香りも、風に揺れる木々も、小鳥のさえずりでさえも作られた紛い物。ここにあるものは全てがにせものでしかないのかな」

しかし、彼女の前に話し相手はいなかった。

どこか自分自身に言い聞かせるようには話す少女、水月。日時感覚は曖昧で、あの日からどれだけ時間が経ったのかよく解からなかった。自分だけが取り残されて、彼らはどうなってしまったのだらう。

自分のことよりもそんなことばかりが気掛かりだった。そんなことを考えながら、彼女は日課となった散策を開始する。何もせずに過ごすよりは幾分ましだろうと始めた朝の森林浴だったが、思いのほか気晴らしになっていた。建物の中にピアノもあったが、聞かせる相手もないのに演奏するのは気分が暗くなるだけと思い弾かなかった。

巨大な湖を眺めながら歩く道は、花々で彩られ豊かな色彩を帯びていて、ただ見ているだけで暗く沈んだ気持ちも紛らわすことができた。彼女が特に気に入っているのは、小高い丘になっている場所だった。

吹き抜ける風が心地よいし、湖面の広範囲を見渡すことができるからだ。

今日は霧も無く、水面はどこまでも透き通っていた。

「きれいな景色だけど、これも偽物か」

溜め息をつくように、つぶやく水月。

遠めに眺めることは何度もあった、注視してみたのは気まぐれだった。だから、それに気付いたのは偶然だった。見下ろす水面の先に見える懐かしい姿。夢か幻か、はたまたホームシックが生み出した妄想か。それが現実の物であるかそうでないのかはどうでも良かったのかもしれない。

（夢なら覚めないで）

それは、切実な願いだった。

彼女にとつての幻想は、ほんの少し手を伸ばせば届く距離に見える。おそらくここが境界なのだろう。彼女は仮想での小さな発見を素直に嬉しいと思った。けれども、一握りの喜びは直後に寂しさへと変わり、嫉妬へとその姿を変えた。

（……なぜ、あそこにいるのが自分ではないの？）

岸から手を伸ばしても、空を切るだけのこの手は何もつかめないでいる。

（……なんで、彼女が彼の隣にいるの？）

そんなことは解かり切っているのだが、その事実を認めたくない自分がいた。手の平から零れ落ちる水滴が、自分の無力さが悔しいこんなに近くににいるのに、触れることすらできないでいる自分に涙が流れる。自分のことを必死に探してくれている親友にさえ、嫉妬してしまう自分が悲しかった。

（……ずるくて、自分勝手に、嫌になる）

それでも、思わずにはいられない。

この声が、届くなら。

この手が、触れるなら。

この想いが、叶うのなら。

もう、何も惜しくは無いとさえ思う。

透明な障壁を隔てた先に、『愛しい人』がいるのだ。

彼らは、自分のために命を賭けて闘っている。
だから、彼女は泣いてなんかいらなかった。
少女の目の前で、大剣が振るわれ、彼らの敵を両断する。
そうして、彼女は再び見えることとなる。
彼女にとって『親しい人』と。

1 - 0 C r o s s r o a d (後書き)

連載してみました。あれですね、もうやけです。一気に投稿することになりましたので面白いと思った方は一気にどうぞ。あえて言います、点数や感想をくれると激しく喜びます。しりを叩かれた馬のようにモチベーションが増加します。それと、つたない作品を読んでくれてありがとうございます。(9月8日修正)

1 - 1 H e a r t (前書き)

「……心が、わからないよ」

それは、自身の想いなのか、誰かの答えなのか。鏡に映る自分自身の姿すら曖昧だった。

1 - 1 H e a r t

0 1 H e a r t

今や第二の現実となったヴァーチャルネットワーク。その実態は、現実にはできない欲求を仮想で満たすことであつた。現実とは分離した空間であるが、そこで現実の情報がやり取りされる以上、そこで起こりうることは現実と相違無い道理だ。むしろ、現実では不可能な行動ができる分、現実以上に厄介な存在でもある。

真実は虚構によって上書きされていき、不正コピーやスラング、ポルノにヴァーチャルドラッグ、仮想空間上での擬似性行為、裏取引などの悪徳が栄えるのは旧来のインターネット世代とほぼ同様と言えるだろう。

現実を急速に侵食していくヴァーチャルリアリティ。そして、その火付け役となつたのが『GENESIS』という仮想ハードウェア用のOS『The Book』内にプリインストールされているプログラムだつた。通常に起動すれば、ただのリアルなオンラインロボットアクションゲームであつたはずだが、それがサイバースペース上で使える唯一のハッキングツールであるという側面を持っていたことで、その意義が娯楽から離れるのにそう時間は掛からなかつた。

マーケットとしては、世界中の富の半分以上を仮想空間でやり取りする昨今。

馬鹿げた海賊行為が横行するのは、時間の問題だつたのかもしれない。現金輸送車を一人で制圧することが誰にでもできるのなら、襲わない方がおかしい。そして、その方法が馬鹿げていた。文字通り、襲うのだ。

擬似ハッキングツール『GENESIS』は、仮想空間上でプロゲ

ラミングではなく、戦闘という方法で物理的に強盗行為を可能にした。

鋼鉄の巨人が瞬間的に音速を超えて空を飛び交い、広大な空間を高速で切り合い、撃ち合うといったレトロゲームのような戦闘を誰が現実の物として創造したのだろう。まるで旧世紀のアニメに描かれていたような世界が、現実の一部として再構築されるなど誰が本気で信じていただろうか。

そして、そこで行われている行為は、オンラインゲーム上で起きていたPKと呼ばれるプレイヤーを標的にした殺傷行動やRMTと呼ばれるネット上の物品を現実の金品に変換する行為よりももっと直接的な行為であった。あるいは、ゲームとしてではなく、現実の一部として同様の行為が発生していると言う方が正しいだろう。結局のところは、彼らは現実のリソースの奪い合いをしているわけなのだから。

過去のゲームを模したプログラムが、今の現実を侵食し、その方法が戦闘による奪い合いなどとは、人類は一体どれだけ過去に逆行すれば気が済むのだろうか。否、誰しもが平等に力を手に入れることができ、なおかつ日々の糧を得ることを可能にしたこの場所は正しく『楽園』なのかもしれない。

たとえ、その方法が相手を殺すことであつたとしても。

青く光り輝く剣が振られ、弾丸が飛び交い、金属が爆ぜる。

火花を散らしながら、ソルジャーと呼ばれる黒い機械の兵隊の体が両断される。

リーダー上のソルジャーのマークが消滅し、敵対勢力のAA（avatars agent 意識体代理人）の破壊を確認する。黄昏時の戦場では、鋼の身体と蝶のような淡い光の羽根を持った機械の妖精が再び空を舞う。

相手はヘッジホッグと呼ばれる灰色の重武装タイプのAA。過剰思えるほどに武装された砲塔が、あたかもハリネズミのようなのでこ

ういった名称にされているそうだ。

（前衛ぜんゑいのソルジャータイプは始末した。あとは、後衛のあいつを仕留めるだけだ）

数分前まではオフィス街といった街並みだったこの場所も、激しい銃火器の応酬で廃墟と化してすっかり見晴らしが良くなっていた。

「あんたで最後だ、無駄な抵抗は止める」

フェアリーの操縦者である新城明は、無駄だと解かりつつもいつものようにオープン回線越しに警告する。そして、仮想空間上で青白い機械の妖精がヘッジホッグにリニアライフルの銃口を向ける。

「言われて止める馬鹿がいる訳ねえだろ！ クソ野郎が！」

怒鳴りつけるようにヘッジホッグのプレイヤーが叫び、文字通り死に物狂いで攻撃する。彼は、複数の弾頭に分離する多弾頭ミサイル、高い追尾性能を持つホーミングミサイルやらガトリングガンを滅茶苦茶に撃ちまくる。

「だろうな」

くすりと笑う声に呼応するように、仮想空間でフェアリーが淡い燐りん光こうを纏まとい宙に浮き、ヘッジホッグに向けて加速する。自身に迫る無数の弾丸は、正面、左右、背後とありとあらゆる方向から押し寄せる。

しかし、彼は絶望的な火力の差にも慌てることなく、アシストプログラムを起動し弾道の予測軌道を瞬時に割り出す。予測射線が自身の視界を真っ赤に覆いつくすが、明は気にすることなくそのデータを参照に機体の航行をマニュアルからオートへと変更。

自身の軌道に重なる攻撃は、左腕に持ったリニアライフルで迎撃げいげきする。幾重にも重なり合う赤い予測射線は、大きな波が作り出すパイプラインのようにも映る。その隙間を抜けるように、機体の速度を上昇させていく。

ゆるりとした空気の壁を抜ける感覚に、

自身の機体の速度が一瞬で音速を超えたことを知覚する。

視界に映るのは、赤く黒く明滅めいめつする光。

耳に届くのは、実際の映像よりも僅かに遅れて響く爆発音。
カミカゼアタックにも似た、

彼の狂気染みた操作にヘッジホッグの操縦者は恐怖して、

絶望し、

絶叫する。

「死ね死ね死ね、死ぬ、死ぬ、死ぬ。いやだ、死にたくない、死にたくない」

付けっぱなしのオープン回線越しに相手の取り乱す声が聞こえる。

こうなると、まともにこちらを狙っている攻撃は皆無だった。

しかし、めちやくちやに放たれる攻撃は無秩序で正面から相手にしたくは無い。瞬時に自身の進行ルートを変更、軌道を脳内に思い浮かべると、そのイメージをトレースするかのように機体が連動する。サイバースペース上で、フェアリーが螺旋を描くように旋回しながら加速する。前後左右のあらゆる方向から迫る弾丸を、舞い踊るかのような動きで回避していく。

そして、眼前に迫るミサイルを迎撃してついにヘッジホッグに肉薄する。

迎撃したミサイルの爆炎を抜けると同時に右腕に握るミスリルソードを構え、振りぬく。

「……あばよ」

目の前の黒い巨体とすれ違う刹那に振り抜かれた剣が機械の動物の胴体を両断した。

センサー上でマーカーが白から黒へと変わり、突き抜けた後ろで爆発が起こる。

徐々に減速して行くうちに残響のように爆発音が耳に届く。それは、改めて機体の速度が音速を遙かに凌駕していたことを改めて知覚させ。そして、ソニックブームを受けて黒煙を巻き上げる街並みには生々しい破壊の傷跡を残すこの場所はまさに戦場だった。

そんな空虚な瓦礫の山を機械の妖精の無機質な視線が見下ろしていた。

【THE END（戦闘終了）】

戦闘終了を告げるシステムアナウンスが彼の脳に響く。

「傭兵^{ようへい}家業の末路なんかそんなものさ。いや、海賊^{かいぞく}といった方が正しいのかな」

黒煙を上げていた金属片が、ポリゴンになり霧散^{むさん}する。さっきまで明が相手にしていたのは、この近辺を根城にしていた仮想空間上で『海賊^{バイレツ}』と蔑称^{べつしょう}される手合い。敵を破壊すると仮想ハードウェア内部のデータバンクにある相手の武装、電子マネー、個人情報などを含む無数の情報が自動で統合されるというロジックを利用して、待ち伏せして無差別殺人の後、結果的に金品^{しんぴん}を強奪^{きやうだつ}する最悪な連中だ。

とはいえ、受け渡されるデータに罪はない。元の所有者がどうあれ有効利用はさせてもらうつもりだった。自動で統合されたデータに選別アルゴリズムを通してふるいをかけ、不要な情報を取り除く。

「いつもいつも、すまないねえ」

明の耳に、戦場には似つかわしくない明るい声が響く。声の主は、今回の彼の雇い主であるヘイフォン。名前からすると中国人なのかとも思うが国籍は不明だった。

「仕事だからな。不満はない」

「それは重畳^{じゆうじやう}。末の長い付き合いになればいいと思っているよ」
「俺としても、あんたとは敵対したくない」

付き合いはそこそこだが、この男にはどこか得体の知れないところがあった。昔の仲間を殺したくはない、というより敵に回したくない相手というのが明の本心だ。

ずっと静かにヘイフォンの操る黒いフレームのソルジャー^{はいきよ}が廃墟^{はいきよ}の影から現れる。危険^{かえり}を顧みずにこんな場所でやり取りをするには、それなりの理由があった。

まずは、そこでやり取りされる情報の秘匿性^{ひひくせい}の高さ。これは実際には筒抜けであるのだが、情報を管理するサーバーの所在地が宇宙であり、いずれも政府の管理下に無くそこでやり取りされる全ての情

報をAIが管理していて、そこで行われている何もかもが治外法権的な扱いになるからである。

また、旧来のインターネットや電話回線などの通信回線も依然として存在しているが、それら全てが政府のアルゴリズムの管理下におかれていて不正な取引や犯罪をするか、ほのめかす行動を取れば超高確率で捕まってしまうためだ。つまり、仮想空間は現在の法律の抜け穴であり、堂々と裏取引や違法行為ができることから多くの『合法的犯罪者』に利用されていた。

くすくすと笑い、ヘイフォンが答える。

「それは喜ばしいことです。あなたくらいの凄腕の『傭兵』^{マーセナリー}は貴重な人材ですから」

「お世辞^{せじ}はいらない、とつととゲートまで移動するぞ」

「仕事熱心なことだ」

「逆さ、仕事を早く終わらせたいから急かす。仕事熱心なら営業トークでも差し挟んでいるさ」

「ごもつとも。では、行くとしましょう」

AAと呼ばれる彼らの機体は、ハッキングツールの側面と護身用の武器の側面を併せ持っていた。加えて仮想空間での『死』は、あらゆるデータを失うといった社会的な死^{ほつしめじ}という意味を持つ。

そして、その性質上自身の意識を没入^{ぼつにゅう}した状態で行われるために現実的な意味での脳死の危険を内包していることを考慮すれば、この程度の武装は当然のことといえる。

自身が先行し、護衛と斥候^{せっこう}を兼ねる布陣でゲートに向けて進行する。

護衛^{ごゑい}を専門に請け負う『護衛』^{エスコート}に人数を割かないのは、彼自身が強いからだとは明は踏んでいた。単に高額な報酬を複数名に払いたくないからとも考えられるが、それでも彼一人だけというのは少なすぎる人数だ。それに明はヘイフォンという人物が戦闘の余波を受けてダメージを受けているところを今まで一度もみたことが無かった。

廃墟と化した街を抜け、荒野を飛ばす二人。

日本国内のエリアから中国エリアへのゲートは、荒野を突き抜けた

先のポートエリアにある。チャイナブロックへ向かうゲートが一つとは限らないが今のところ彼らが開拓したルートはこれだけである。そのルートにしても、命懸けでガーディアンと戦闘して何とかパスコードを入手してやっと安全に通過できるようになったばかりだった。

「ここを通ると、あの戦闘を思い出しますねえ」

「昔のことだ」

「彼女は、どうしているんでしょうね」

「あいつには、あいつの事情があるんだろ」

フリーの傭兵をやっていた学生時代の明にも、短いながらチームを組んでいる時期があった。今思えば先駆的な集団だった。ガーディアンを少数精鋭で撃破するという、最新の攻略法と同じやり方でチャイナブロックのガーディアンを攻略したのだから。

当時はギルドと呼ばれる一個中隊ないし一個大隊並みの戦力で一気に攻撃をして倒すやり方が主流であった。

しかし、これはギルドを率いる雇用者としてはコストが掛かってしょうがないし、被害が出るときは数十名以上の規模でメンバーが犠牲になる。そして何より、有能な人材を多数集めることと、それを完璧に統率することの難しさが廃れた原因だろ^{すた}う。

「それはそうですが、あそこにいるのは彼女ではないのですか？」
ソルジャーのAAが指差した先で戦闘しているのは、ウィザードと呼ばれる魔法使いを抽象化したようなAAで、彼女が使用していたものと同系統の機体だった。遠めに眺めているので詳細は不明であるが、どうやらガーディアンと交戦中らしい。

「そんな偶然があるわけないだろ」

『GENESIS』は、基本的にはバーチャルロボットアクションゲームである。同系統で、カラーリングが一致している程度の偶然はいくらでも起こることだろう。不自然な偶然に、明は思わず否定の言葉を口にする。

「でも、もしも本人だったら寝覚めが悪いでしょう。追加料金を

払いますから、あのA Aに助太刀^{すけだち}してくれませんか？」

「追加料金は、いらない。というより、わかっていて言っているんだろう？ 本当に抜け目の無い人だよ、あんたは」

彼に言われるよりも早く、明はすでに動き出していた。

皮肉げに言葉を言いつつも、損な性格であると自覚はしていた。

前方に加速して天使系統のガーディアンと交戦するウィザードタイプの戦闘に割って入る。両者の戦闘圏内に自分自身の『エリア』が重なった瞬間にシステムアナウンスが脳に直接響く。

【REINFORCEMENT（援軍）】

援軍として、戦闘に乱入する際に表示されるエフェクトが視界に浮かぶ。

エメラルドグリーンの燐光に包まれた直後、天使と魔道師が交戦する異様な荒野に機械の妖精が舞い降りる。目の前では、高速で飛び交う二体のA A。それらの後方に映るのは、チャイナブロックの高層ビルが乱立する。そんな摩天楼^{まてんろう}を背景に砂塵^{さじん}が吹き抜け薄ら赤い荒野で対立する両者。

白い四翼に剣と盾を携えたエンジェルシリーズの一種である純白のアークエンジェル。対するのは、とんがり帽子のようなヘッドパーツと赤いローブをまとった魔法使いを思わせる風貌^{ふうぼう}が特徴の真紅のウィザードタイプ。

さながら決闘といった風情で、二人は切り合い、往なし、剣戟^{けんげき}を重ねる。金属と金属が触れ合うたびに、火花が散り、澄んだ音が響き、土煙が巻き上がる。わずか十数秒の間に両者は一体幾度切り結んだのだろうか。手数ではウィザードが上回り常に攻勢側に立っているが、対するアークエンジェルも攻撃を一撃も浴びていない。

互角に見えた戦いにも、変化が訪れる一瞬が現れる。ウィザードの細身の剣による横薙ぎ^{よこなみ}を盾で受けそこからの唐竹割^{からたけわり}の一撃を剣で大きく薙ぎ払うアークエンジェル。息も付かせぬ連撃の空白を衝いた強引な一撃は、相手を体ごと吹き飛ばす。

ウィザードは受け流していたが、それでも殺しきれなかった勢いを

足で抑える。砂塵^{さじん}を撒き散らしながら引きずられる様に大きく後ろに下がったウィザードに、アークエンジェルは追撃をすることなく構えを整える。

「援護のつもりなら、手出し無用よ。違うのならまとめて相手になるわ」

オープン回線越しに、ウィザードのプレイヤーが話しかけてくる。音声には、フィルター処理が掛けられておりその声色はどこか機械染みていた。

「手出しは、しないでおくよ」

「……礼は言わないわ」

要件はそれだけだと言わんばかりに、オープン回線による通信を切断される。仕切りなおしとなった戦いは、さらにヒートアップしていく。

明は戦闘する両者と適度に距離を保ちながら様子を見守る。アークエンジェルは盾を前に剣をその側面に構える。ウィザードは、体を半身にしつつ両の手で剣を構える。両者は遠い間合いを取りつつ隙^{すき}を衝かんとし、しばしの沈黙が空間を支配する。

一陣の風が吹く。

舞う砂に合わせ、ウィザードが地を駆ける。

迎え撃つべく、天使が半歩下がり剣を引く。

二歩の間合い、ウィザードが乾燥した地面を薙ぎ払う。

砂埃^{すなほこり}が飛び散り、両者の姿は土煙の中へと消える。

消えた視界の中で金属を強く叩く音に続き一振りの剣が弾け飛ぶ。

スモークを突き破って弾けた剣が地面に落下する。

徐々に開けていく視界の中で、神業的な速度でフェアリーは腰に携えたりニアライフルを抜き放つ。それは、クイックドロウと呼ばれる速射技術だった。

そして、彼が状況とターゲットを認識しホルスターに手を掛け引き金を引くまでには半秒と掛からなかった。落下していた剣が地面に突き刺さると同時に、フェアリーの放った弾丸がアークエンジェル

の胸部装甲を貫通する。

【THE END（戦闘終了）】

敵対するAAを破壊すると同時にシステムアナウンスがエフェクトと共に響き、リザルトと並行してデータバンクの自動統合が開始される。

巻き起こる土煙の中で、ワイザードタイプのAAが地面に突き刺さった剣を引き抜き明に向けてくる。『GENESIS』においては、止めを刺したAAにデータの統合が行われることを考えれば当然の反応だろう。

「これは、お礼を言うべきなのかしら？ それとも、私の獲物を勝手に仕留めたと怒るところなのかしら？」

フィルター越しの声がオープン回線越しに響く。

そして、明瞭になった視界には淡い緑の燐光を放つ幾何学模様にも似た複数の方陣に包まれるワイザードの姿が見える。その周囲にはワイザード本体を守るかのように数十本のルビーの輝きを放つ赤く透き通った剣が浮いている。

「行動に至る経緯はどうあれ、結果的にいいところ取りになってしまったことは認めるよ」

「ずいぶんとあっさり認めるのね。食って掛かってくるようなら徹底抗戦しようと思っていたのだけど、そんな気も失せたわ」

今度は、フィルター越しではない本人の声がオープン回線越しに響く。そういうと、彼女の周囲に周回していた複数の剣がワイザードのローブへと収束する。あちらも元チームメイトと一戦するつもりは無いようだ。

「久しぶりね、明」

「半年振りだったか、鏡。積もる話はリアルですとしないか？」

「そうね、場所は『いつも』の喫茶店で。《Return》（帰還）」

一瞬の沈黙の後に返答した鏡は、現実へと帰るリターンを口頭で入力する。直後にワイザードの体の輪郭がぼやけ、リターンコマン

ドの認証が開始される。

「俺は仕事の残りを片付けたら向かうでしょう。すまんが、少し待っていてくれ」

「委細^{いさい}了解したわ」

返答をすると同時に、ぼやけていた彼女の体は完全にサイバースペースから消滅した。

「まさか、本当に彼女でしたとは。世間は狭いものですね」
会話が終わると廃墟^{はいきょ}の影から黒いソルジャーが現れる。

「正体が解かっていたのか？」

「なんとなくですがね。扱いの少々難しいウィザードタイプを使う人間は少ないですし、カラーリングや動きが記憶と非常に似ていましたから」

「細かいところまでよく見ているなハイフォン。観察眼の鋭さは一級品だよ」

「私は商人ですからね。さて、事情は聞きましたし仕事はここで切り上げとしましょう。それに目的地は目と鼻の先ですし」

「今回は、ご好意に甘えるでしょう」

「いえいえ、どうかお気になさらずに。最後の方ですが、盗み聞きしてしまったこともありますしね」

「これで失礼する。《Return》^{リターン}（帰還）」

「料金は、いつもの口座に振り込んでおきますよ。それでは、旧友との再会を楽しんできてください」

「心遣い、感謝する」

「何、ただの社交辞令ですよ」

コマンドの入力を受けてリターンプロセスが開始され、ぼやけた意識の中で最後に聞こえたハイフォンの言葉はいつにも増して響きに響いた。

白い部屋、といっても過言ではないくらいにその部屋には色が無かった。実際には色が無いわけが無いのだが、きれいに片付けられ

ている生活感が欠片も感じられないその部屋では、全てが空虚に映ってしまう。

そんな場所に、青年が一人椅子に座っていた。

少し長めの黒い髪に黒いスーツを着ているためか、この部屋ではより以上にその存在がはつきりと対比されているように見える。そこにいる青年、新城明は目の前の女性に話しかける。その顔にうつすらと憂いが見て取れるのは、窓から差し込む夕日の所為だけではないのだろう。

「今日は、少し懐かしい奴に会ったよ。水月も知っている奴だ」
目の前にいる天宮水月から返事はない。

当然だろう、ここは意識の戻らない患者が安置される病室だ。もう何度もこんなことを繰り返しているが、この行為自体が意識のある者の自己満足でしかないのかもしれない。

「今日も答えは、ないか。しかし、お前も大変だよな。そつちも好きで悲劇のヒロインやっているわけでもないのに、俺みたいな男が愚痴言いながら目を覚ますのを待っているなんてさ」

色白だった肌は、長期間に渡り日光を浴びていないためか病的な白さを持ち、白い服装とあいまってどこか儚げに見える。肩口までしかなかったその髪も今では肋骨の辺りまで伸びてしまっていた。

「鏡とこれから会ってくる。それで事態が進展してくれればいいんだが」

愚痴ともつかない言葉を吐き出し、彼女の横に生けられた花を見る明。少し季節には早いためか小ぶりな向日葵ひまわりが生けられていた。

「あいつも、ここに寄ったのか？俺が持ってきたのは別の花が飾ってあるな」

実際には、看護師の方が古くなった花を片付けて、別のものを生けただけなのかもしれないのだが、なんとなくそんなことを考えてしまう。

「ふう、それじゃ俺は行くとするよ。いつまでも一人で話していると、危ない人になっちゃうからね。またくるよ」

明はゆつくりと立ち上がり、パイプ椅子を部屋の隅に片付ける。空調の音以外は、何も聞こえないそこでは、彼女の規則正しい呼吸がやけに大きく聞こえる。

「今度は、伝えられるかな」

去り際に水月を見るとなんとなくそんな言葉が零れた。^{こぼ}視線を少し横にずらし彼女の枕元に置かれている時計を見ると午後六時を指している。

鏡を待たせていることを思い出し、足早に病室を後にした。

「ずいぶんと遅かったわね」

明が喫茶店についてからの初めて聞いた声はそれだった。カウンター席に座り、グレーの薄手のスーツを羽織っている女性が少し不機嫌そうに彼に話しかける。アンティークな装飾のこの店には似つかない、少しあどけなさの残る顔で明をにらむ。

「待たせる、とは言っておいたはずだが」

「相変わらず、君は口が減らない」

「ご挨拶だな、久しぶりに旧友と再会したと言うのに」

「君が来るまでにコーヒーを三杯も飲んだ」

そんな言葉が気に食わないのか、顔をしかめて彼女が言う。

「すまないな、ここの代金は俺が持とう」

「ここがコーヒーお変わり自由とわかっていて言っているんだろう？ 本当にけちくさい男だな、君は」

「ったく。おごると言つて、けちくさいと言われるとは思わなかったよ。マスター、アイスマルクティーとハムサンドを一つお願いします」

「マスター、私にも一番高いメニューとコーヒーを」

二人は、カウンター席に座っているために追加注文はスムーズだった。

「ご注文承った」

接客する気が全く無い態度で短く答えるとマスターと呼ばれた男

はカウンターの置くに引っ込んでいった。接客がいまいちなこの店がつぶれないのは、一重に彼の作るものがどれもおいしく安いからだろう。

「……あてつけかよ。お前だつてやることがせこいぞ」

「うるさいわね、女の子がパフェ食べても何もおかしくないですよ」

「それもそうか。すまん」

「まあ、いいわ。そもそも、この店を選んだ時点でたいして集れないし。それじゃあ、本題に入るわね」

「そうだな、それが今回集まった目的だった」

今思い出した、といった様子でうなずく明。

「忘れっぽいのは相変わらずね。ほんと、いい性格しているわ」
呆れるように息を吐き出し、鏡が話し出す。

「単刀直入に言うわ、水月の居場所がわかったの。彼女のアヴァターのいる場所は、国内ブロックのSCS 511よ」

「そこは、とつくの昔に俺たちが既に搜索した場所のはずだぞ？
本当なのか？」

疑惑の眼差しで彼女に問い詰める。そもそも、そこは彼女と再会したつい先ほどまで自分たちがいた戦場である。

「早まらないで、場所は同じだけど階層が違うのよ」

「階層があるなんて話は、都市伝説やゴシップの類じゃなかったのか？」

「命懸けで戦っていると忘れてしまうわよね、これが『GENE SIS』というゲームの一部でもあるということ。普通のゲームのようなエンディングは無いのかもしれないけど、先に進むというプロセスは確実に存在するのよ」

「でも、なんだつてそのことが他のプレイヤー間で全く知られていないんだ？ おかしいだろ」

当然の疑問を彼女にぶつけると鏡は待っていましたとばかりに返答する。

「強力なNPCであるガーディアンから奪えるアイテムはアトラダムで倒したプレイヤーしか入手できず、通行証のパスがその方法でしか手に入らない。そして、仮想空間上での情報のやり取りは限定的で閉鎖的^{ヘイセイ}、さらに言うなら情報もアビリティも独占するのがベストなもの」

明がパスコードを持ったアークエンジェルを倒しパスコードを手できたのはアイテムをドロップしてくれる相手を見抜いた上で鏡が戦闘していたからであり、良くも悪くも偶然であった。

過去にあった生命の安全が保証されたオンラインゲームとは完全に事情が違い、殺し殺されるという状況が絡んでくる以上、敵となる可能性のある連中に必要以上に情報は与えないのが常識だ。

そして、明や鏡のように何度も命懸けでガーディアンとの戦闘を経験していて、単身で倒せるレベルの凄腕^{すじうで}のプレイヤーはヘイフオンの言うように貴重だった。

ただ金を稼ぐだけならば『海賊』連中のように待ち伏せしてプレイヤーを殺して奪う方がはるかに安全で効率がいい。無理に強力なアビリティや役に立つかわからないパスを手に入れる必要は無いのだ。

「数パーセントのプレイヤーだけが事実気付いていて、そして実行できるのがさらに少しってことか」

「仮に気付いて先に行けたプレイヤーがいたとしても、その先で死んでしまったら結局情報は伝わらないのだから、それよりも少ないはずだわ。私みたいにアビリティで確認するプレイヤーはそこまで多くないはずだし」

「アビリティの『神^{ゴッド}の（ド）眼^{アイ}』だったか。前に聞いた話だと敵性機体の詳細情報や位置関係なんかが解かるって話だったが、それ以外の情報も解かるものだったのか」

「ええ。だから、情報自体はあのときに掴んでいたわ。ただ、意味はなかったけど」

「意味がないって、どういうことだよ？ 俺たちの目的は同じだ

「つたはずだろ」

少し怒気を孕んだ口調で明が話す。過ぎたことだったとしても、もしかしたらという可能性を考えてしまう彼だった。

「場所がわかって、そこに行く手段が無かったの。そして、そこに行くためのパスを誰が持っているか解からないという状況は変わらなかった。さっきまでは」

「さっき倒した、アークエンジェルが持っていたってことか？」

「そうよ。だから、君は特定のゲートに行けば水月のところへ行けるはずよ」

「なんというか、本当に手柄だけ横取りした感じだな。すまん」

偶然にも漁夫の利を得る形になってバツが悪くなつたのか謝る明
「いいのよ、目的は同じでしょ。事情があつたとはいえ、なんの説明もなしにいきなりなくなった私も悪かつたことだし」

「それでそれは、戦友の俺にも言えない事情だったのか？」

自分でも、ずるい言い方だと理解しつつも明は言う。そんな言葉に、鏡は少し驚いたような表情を浮かべて一瞬言葉に詰まる。

「ふふ、あなただから言えなかつた、とだけは説明しておくわ。

それにあなたに場所を教えたら近辺だけ重点的に探すでしょ。どうせ探すなら広域が探したかつたし、言ってしまったら重荷になつてしまふと思つて」

しゅんとしながら鏡は話す。実際のところ、その判断は正しかつたのだろう。

明自身、精神が磨り減っているのを自覚していた。いつ終わるとも解からない作業で、常に最悪の自体が起きる可能性が付きまとう状況。まともな神経ならば疲労しない方がおかしいのだ。そして、何も知らない状態ですらそうであるならば、知っていて何もできないと言つ状態はその状況に拍車はしけを掛ける結果にしかならなかつたろう。
「こんな言い方ずるいな。謝りはしないが、ありがとう」

「お互い、嫌な大人になつたわね」

二人そろって苦笑する。

何の打算も無しに会話していた学生時代が懐かしいとさえ思える。

「……注文の品だ」

ぼそりというマスターの声が聞こえ、狙い済ましたかのようなタイミングで先ほど注文したメニューが二人の前に置かれる。明の前にはアイスマルクティーとハムサンドが置かれる。そして、鏡の前には巨大なパフェとコーヒーが置かれた。

「……でかいな」

呆れ半分で明がつぶやく。

「乙女の嗜みよ」
たしな

明の驚いた様子を特に気にとめること無く、鏡は手元から顔の高さほどもである巨大なパフェをスプーンでつついていく。

「俺には、女性というものがよくわからなくなったよ」

「でも、少しくらいミステリアスな方が魅力的に見えるものよ」

「ま、相手のことを何もかも解かりきっているよりは、そっちの方が楽しいか。頭の片隅に置いておくよ」

「そう、知らない方がいいこともあるのよ」

ぼそりと鏡が言うが、小さすぎて明の耳には届かなかった。

彼女は黙々とパフェを食べるのを見て、明も目の前に置かれたハムサンドに手をつけることにした。しばしの沈黙、耳には店内に流れる穏やかなクラシックだけが響いていた。

明がハムサンドをちようど食べ終えたタイミングで、胸に付けた十字架型のPIIT（ポータブル）（Portable Information Terminal）
けいたいがたひょうほうたんまつ（携帯型情報端末）を介し脳に直接アラームが響く。

人間自体を生体端末として人間の意識と仮想空間を接続するこの機械は、旧世代のマシンであるパソコンや携帯電話といった機器としての役割を果たしていた。そして、意識を完全に仮想空間内に没入させなくても、自分自身を媒介に拡張現実という形でほとんどの機能を利用することができる。

もうもくとしえい 盲目投影される画像に、旧世代のマシンで言うところのマウスや

キーボードの役割を果たす思考デバイスを通じて文字通り思い通りに操作する。

円形のモニターとその外周をツリー状に広がる独特のインターフェースを操作し目的の機能へと辿り着く。ファイルを確認すると、ヘイフォンからの振込みの確認メールと定期的に行われる情報の受け渡しだった。前半部分は、いつもと同じように事務的な内容しか書かれていなかったが、後半部分に明は驚愕する。

『ジャパンブロック、SCS 511』

その座標は、先ほどカガミから伝えられた情報と全く同じだった。

「『AR Augmented Reality』(拡張現実)機能でも使っているの? 心ここにあらずって感じよ」

「メールチェックしていたら、お得意先の情報屋の報酬を二桁ほど見間違えたのさ。普段は百万のところが一億じゃ驚きもするさ」

「ふふ、疲れているの?」

覗き込むような上目遣いで鏡が明の様子を伺う。

「かも知れない。今日は、帰ったらゆっくり休むとするよ」

「帰ったら、これでも舐めて元気になって」

そういつて、鏡が大きめのキャンディをいくつか渡してくる。なんだかんだで、世話好きなところは昔から変わっていないようだ。

「ありがとう。心遣い、痛み入るよ」

これは社交辞令ではなく、本心だった。

「どう致しまして。それと、ご馳走様でした」

「つて、早えよ! というか、その小さな体のどこにあの巨大パフエが入るんだ」

「乙女の嗜みよ」

紙ナプキンで口元を拭いつつ、鏡が答える。

「……左様でございますか。ったく」

呆れるように明が苦笑ながら言う。

「やっと、素面になったわね。水月に会うときもその顔でいなさいよ。じゃないと、彼女がかわいそうなもの」

柔らかな笑顔を浮かべて、たしなめるように鏡がいう。

「そうだな。必死なのは、助け出すまでだ。すぐに助け出してやるからな」

助け出せると、彼が信じる根拠は二つあった。

水月が仮想空間上で突然消失したあの日、それ以降も彼女が現実生きていけると言う事実が一つ目。肉体が生命活動を停止していないということは、人間の本体ともいうべき意識が仮想空間上で生存している可能性が高いということを示していた。

二つ目の根拠は、鏡が明の前から去ったときに放った「彼女は生きている」という言葉が根拠だった。そして、その日以来、鏡は鏡の前から距離を置くようになりこうして再会することとなった。

「多分、彼女はあなたが助けてくれるのを望んでいるわ」

「彼女の望みがどうあれ、俺は水月を助けたい。なんとしても」
力強く明が言う。

その言葉には、強い決意が宿り、これまで無茶なことを続けてきたからこそ、最後の最後でつまらないミスはしたくないと思っていた。
「だから、俺には鏡が必要だ」

そういつて、彼女に向かって明は手を差し出す。

少し間を置いて、微笑む鏡。

「ほんと、ずるいよね。君は」

そして、少し呆れるように笑い鏡はその手を取るのだった。

深夜零時。

マンションの一室で神代鏡はソファに座り、ブラックコーヒーを口に運びながら物思いにふけていた。当初の彼女のプランでは、新城明にはもともと一緒に来てもらうつもりであった。

「あの日以来だよ。変わってなかったなあ」

別れた半年前と同じ、どうあっても助け出すという覚悟。執着や執念といってもいいほどの意志の強さ。そして、それは結果的に自分たちの人間関係を心理的にも物理的にも分断することとなる。

きっかけは些細な偶然だった。

まだ学生であり友人だった三人の関係が、
恋人二人とその友人に変わるかも知れなかったあの日。

「本当に、不意打ちだったなあ」

なんとなく、そのままの日常が繰り返していくのだと思っていたあの頃。

今日も明日も、友人であると言うことが当然のように続いていくのだと信じていた。

しかし、それは叶わない願いであった。水月が明に告白したあの日に、彼女は仮想空間で消えた。

「なんで、あのタイミングだったのかな」

もっと違うタイミングで、違う形であれば、彼女の友として祝福してあげることができたのかもしれない。追想しながら鏡は、ティーカップを持ちベランダへ向かう。

カーテンを開ける、ガラス戸を開くと夜気が肌に心地よい。

「……心が、わからないよ」

明が返答をする前に彼女は、消えてしまった。

しかし、どんな思いなのかは明に聞けばすぐに解かることだった。だけど、一度聞いてしまえばそれが真実になってしまうのが怖くて彼とは距離を置くようにしていた。そして、こんな状況で一緒にいれば互いに好きになってしまつと解かっていたからこそあえて自分から別行動を取ってきた。それに水月が何もできない状況で、自分だけが行動するという卑怯な真似はしたくなかったし、こんな状況を利用するズルイ女にもなりたくは無かった。

「……臆病者おひしょものなのかな、私は」

消えてしまいそうな声でつぶやき、窓越しに星を見上げる鏡の目には暗く澄んだ夜空が映る。

「それでも、必ず助けるからね」

自身を奮い立たせるように言い放ち、胸に付けた銀の十字架を強く握る。

深夜の星空は、淡く儚い輝きを放っていた。

1 - 1 H e a r t (後書き)

編集しました。一部加筆しましたが、内容的には大きな変化はありません。(9月8日最終更新)

1 - 2 A g a i n (前書き)

望んでいた相手との再会、望まない相手との再会。それは偶然であるのか必然であるのかはわからないが、相對する両者が取る行動は一つだった。

「もとより問答するつもりはない。ここに踏み込んだ以上、私が自ら殺すまでだ」

「それが本性というのなら、あなたを越えてみせる。今日、ここで」

1 - 2 A g a i n

0 2 A g a i n

それは、半年前の記憶だった。

白い服を着た少女がこちらを向いて微笑んでいる。明にはそれが夢であると言ったことがわかっていた。なぜなら、今はここにいない彼女の姿がそれを自覚させるからだ。こちらを向いて微笑んだ直後に彼女は音も無く消えていき、それを見送っているのは紛れも無く明自身だった。

そして、その瞬間だけが繰り返され、今も彼の目の前で一人の少女が音もなく消えていくというあつけないもの。

（引き止めるよ）

直後に視界が暗く染まり、再び光が見えると彼とその少女が親しげに話している場面が繰り返される。巻き戻った世界で結末の決まった未来へと時が流れていく。

不幸な偶然で強盗に殺されるなら犯人を恨めばいいだろう。

酔っ払いに事故で殺されたなら、そいつなり飲ませた奴なりを恨めばいい。

恨む対象すら見つけられずに死という事実だけを繰り返され、何度も愛しい人の笑顔を見せられるのは、少なくとも当人にとっては悪夢以外の何とないばいだろう。

彼には、自分に向けられる笑顔さえ自身を責めるように映る。いつそ夢の中くらい憎んでくれる方がずっと気が楽だった。彼に背中を向けて少女が歩き出す。

夢を見ている自分の意識が叫ぶ、行くなど。

夢の中の自分が、見送る。

（もう見たくない）

そのたびに、何もできないでいる自分が悔しい。

そして、しばしの別れは永久への別れになり。

（なんで笑っていられるんだよ！）

彼女の後ろ姿が消えてゆく。

彼の目の前で、残酷な未来へと時が流れる。

一人の少女の破滅。

そして、光が視界を包みそれが何度も繰り返されていく。

何度目かになる光のまぶしさに意識が覚醒する。

「いくなっ！」

熱病にうなされるような意識を振り払い、明は体を起こす。トンネルを抜けた直後のような感覚の誤差が引き起こす僅かな違和感を味わう。その感覚にここが現実の世界であると改めて認識させられる。そうして、今日も朝がやってくる。

「久しぶりだな、この夢を見るのは」

先日、懐かしい相手と再会したのが原因かもしれない。

嘆息し、着替えを済ませ仕事場に向かうのだった。

「おはよう、平治」

「おはようさん、明」

『電脳技術研究所』、略称を電研とする部署の扉を開け薄暗いデスクに座っているぼさぼさ頭の友人にあいさつをかわす。そして、この部署はこんな名前ではあるが、国の直属の機関であり士官学校のような側面を持っていた。明の正面で明るい口調で話すのは同期の三島平治、仲間内での通称を三等兵才サムとする人物だった。

「朝早くから精が出るな」

「見習え、崇めろ、そして、俺に何かおごれ」

「なんだよ、金欠か？ ここの給金はかなりいいはずだろ」

通常の給料に加えて命懸けの仕事が多いためか手当てが別個に付くし、それぞれがこなした仕事の報酬はさらに別勘定で加算される。若くして、年収数千万の人間はここではざらにいた。

「お前には、妻と子どもと親父と母親とその借金を背負う俺の気持ちなど解かるまい」

「まあ、本当に困っていたら少しぐらいは貸してやるよ。俺は金を使う時間が無いから、たまる一方だからな」

学生時代に言っていた玉の輿こしという夢を見事に実現した三島だったが、その希望が実現した直後に奥さんの会社倒産し借金を背負うことになった。ある意味では一番劇的な人生を歩んでいるのは彼だった。

「マジで、困ったら頼むかもしれん。……俺の家族を」

「はあ、お前が言つと冗談に聞こえない。勘弁してくれ」

朝から色々と重過ぎる話に嘆息し、自分のデスクに座りながら明が答える。

「くく、三等兵が二階級特進して一等兵になったときは、頼むぜ。相棒」

部屋自体が少し薄暗いためか、彼の顔にはより一層の悲壮感が漂う。仕事柄、スラングやブラックジョークには慣れているとはいえずうに笑えない明だった。ちなみに、二階級特進とは、兵隊が死んだときに行われる措置だった。

「お前は、比較的安全な中東ブロックを担当しているだろうが。現実の中東と違って仮想のあちらはやばい奴なんてそんなにいないんだろ」

「石油が枯渇こかつしかけて文明的に後退しているからな。つっても、最近最近はP I Tの普及の所為でそれなりにはやばい奴もいるさ」

とはいえ、あちらの方では裏取引などもアナログなやり方がまだ現役らしく、それに伴う情報のやり取りも仮想ではあまり行われていないのが現状だった。単純に使用している人口が少ないために広大なブロックの中でイカレタ連中と出会う可能性は低い。

「それなりに、ならいいじゃないか。こっちは、日常的にサイコ野郎に会うんだぜ」

呆れるように明は少々大げさに両手を肩の辺りで広げる。

「昨日もドンパチやっていたもんな。血の気の多いことで」

先日の戦闘も『海賊』崩れのバトルマニアとのもだった。初めはただの聞き込み調査のはずだったのだが、ヴァーチャルドラッグをきめている奴らが仲間は何人かいたらしくいきなり戦闘に巻き込まれる形となったのだった。

「好きでやっている訳じゃないさ。合法だろうが正当防衛だろうが殺しなんて後味のいいものじゃない」

殺しといっても、破壊したからといって確実に死ぬわけではないし運がよければ手持ちの金を失うだけですむ。とはいえ、それだけでは自分が殺していないとは言いいきれないので常に嫌な感覚がつきまとう事になる。

「そう思えるうちは、俺たちはまだ大丈夫さ。ところで、面白い情報があるんだが聞いてみるかい？」

おどけるように両手を胸の辺りで広げ、平治が言う。

「勿体付けるなよ。そうだな、本当に面白かったら飯をおごってやる」

「約束だぜ。俺たちが使っている、この仮想空間やP.E.T.の製作者であるアハリ・カフリ氏が現在行方不明なのは知っているよな？」

約束だぜというところをやたらと強調して平治が話し始める。案外、彼のお財布事情は深刻なのかもしれない。

「そりゃ、俺たちのような仕事をしている連中なら誰でも知っているだろ。アハリ教授を知らない人間を探す方が難しいさ」

「そう、関連する技術を軒並み一人で作り出した彼がいなくなった所為で仮想に関する技術は現代にありながらロストテクノロジー化してしまった。ここまでは、一般常識の範囲だが、実は『GENE S.I.S.』に関しては別の人間が作成しているんだ」

「たいした技術者がいたもんだな」

「しかも、何と半世紀近くも昔の奴らしい」

「それは、どういうことだ？」

仮想に関連する技術のほとんどはアハリ教授が生み出したものであ

り、ここ数年で出てきたものだった。単純に考えれば、そんなに昔の時点で存在しているのはありえないことだった。

「あれが仮想での戦闘ツールって側面ばかり見ていると思うのは当然だが、仮想が普及して初期の頃はただのゲームだったんだぜ？ そのベースになるソフトが昔に発売されていてもおかしくはないだろ」

「それもそうか。続けてくれ」

一瞬の間を置いて沈黙し、冷静になってから返答する明。平治はそれを見てニヤリと笑い続きを話し出す。

「研究者として成功していたアハリ氏は、このゲームがかなり好きだったそうだな。今の水準から見れば化石同然のレトロゲームだったこともあって、権利ごと格安で買い取ったらしい。それを転用したものが、俺たちが使っているヴァージョンって訳だ」

「確かに、興味深い話だったな。わかった、飯はおこつてやる」

「やりに、メシ確保。ついでに言うとき当時販売されたゲームの説明を少し調べてみたんだが、どうやらこいつは基本的なストーリーとしては天使の連中と悪魔やいわゆる被造物ひそくぶつが戦闘する話らしい。Aの種類の豊富なのは、天使対その他って構図だかららしいな」

明の返答に心底嬉しそうな表情で語る平治。

「ストーリーが存在するって事は、シナリオが進行するってことか？」

先日話が、明の脳裏をよぎる。過去に実際にあったゲームであるなら、その攻略方法を見つけれれば特効薬的效果も期待できる。

「おそらくは、な。つっても、単純に移植版なのかどうかははっきりしていない。何十年前前に発売されたマイナーゲームの詳細なんか調べたってでてきやしねえよ」

「権利もアハリ氏が独占しているわけだしな。詳細を調べるのは無理か」

「そついうことだ。さて、互いに仕事を開始するのでしょうか」

「時間か。《Access》（接続）」

後半部分の言葉は、明が実際に口にしたわけではなく、十字架のアクセサリーを握り強く思考する。

P I T を介して口頭でも入力は可能だが、現実では余り口頭での入力はしないのが『コンピュータ技術研究所』の方針だった。指の神経を通じ、自分自身が機械の一部であるかのように脳にイメージを浮かべると、十字架型の端末から電気信号が衛星回線を通じて衛星サーバー上に転送される。

「俺も、お仕事するとしますか。《Access》（接続）」
そうして、今日もいつものように仕事が始まるのだった。

《Permission》（許可）

合成音声によるシステムアナウンスが響き、水の中に入り込むかのような浸透感しんとうかんが全身をすり抜けると意識がヴァーチャルへと進入する。瞬間的に、現実のオフィスは広大な電腦の都市へと姿を変える。視界に映る景色が現実のモノからサイバースペース上の模倣物へと変わり、現実の自分の肉体を再現したアバターが仮想空間上に出現する。思考デバイスを操作すると自身のアターの近くにウィンドウパネルが自動で複数立ち上がり、ローディングの終了と同時に追加でコマンドを送りつける。

《Translation》（記号変換）

コマンドが実行され、サイバースペース上で自分自身を構成するアターのプログラムロジックが変換されていく。現実には存在しないものが書き換えられているだけであるはずだが、あたかも自分自身が変身するかのようにさえ感じ人間の肉体を模したアターは青白い機械の妖精へと姿を変えた。

無法地帯である仮想空間を駆け回るにはこちらの方が安全であるし、人の姿をして動き回るには広すぎるのだ。ここでは瞬間移動である転送が使えないのは不便なことこの上ないのだが、瞬間的に敵に包囲されることがないと考えれば都合がいいとさえ思える。

ワールドマップをARで展開しつつ目的地を設定し移動を開始する。

AAの背面部にある赤く輝くフライトユニットを展開して飛行しつつ自身AAのステータスの再チェックを済ませる。

先日手に入れた情報は不確定要素が多いが、他に頼るものもないのも事実だった。それに名目上は、情報屋からの情報を頼りに仮想空間を探索する任務であり、私情であることを気にする必要もない。目的地までの灰色の空を徐々に速度を上昇させて飛行する。そこで感じられたのは、雲を構築する水滴の一滴一滴、吹き抜ける風の温度、頭上に広がる青々とした大気までもが近くに思え、圧倒的な美しさに目を奪われる。

それはこれが現実のものであるのかと疑いたくなくなってしまうほどにリアルで美しい。水平線に日が沈み、視界に映る映像がその色を変えていく。音速を遥かに超えて移動するので、国内エリアであればどこに行くのも大して時間は掛からなかった。

そして、高速で変化する視界に飛び込んできたのは、戦場という名の地獄だった。

しかし、それが彼にとっては見慣れた日常でもあり、狂気であると自覚もしていた。自身AAに設定された円形の交戦『エリア』が戦場に重なり同時に複数のウィンドウパネルが立ち上がり戦場の勢力図が表示される。

示されたのは、複数の信号不明機と一体の友軍機が交戦中という情報。敵の詳細な位置関係はジャミングが展開されていて不明だが、敵対勢力の構成は二体のヘッジホッグタイプと八体のソルジャータイプだった。

「あの馬鹿。なんだって、こんなことに」

舌打ちし、援軍として友軍の勢力に加入する。

【REINFORCEMENT（援軍）】

援軍として、戦闘に乱入する際に表示されるエフェクトが視界に浮かぶ。エメラルドグリーンの燐光に包まれた直後、一対十という戦力差の中で孤軍奮闘する鏡のウィザードの姿があった。

「援護するぞ、鏡」

オープン回線越しに話し掛けながら、空中から戦闘に乱入する。
俯瞰ふかんして見えるフィールドは、ビルディングの乱立するオフィス街。
複数の敵に追われながらも全ての攻撃を捌さばきつつ迎撃げいげきするウィザードの機動は見事としかいえないが、相手が多過ぎるためにいまいち責め切れていない。ましてや、敵対勢力は情報戦もこなせるソルジャータイプ。ジャミングを展開しながらの市街戦は相手の得意分野だ。

「……邪魔にならないように、端っこの敵でも倒しておいて。巻き込むから」

ノイズ交じりの音声で早口に一方的にまくし立てる鏡。実際、武装となる無数の水晶剣を展開した彼女のウィザードは、あらゆるものを破壊する巨大な回転のこぎりなので近付くべきではないのだろう。
「解かった。だが、死ぬなよ」

「……冗談？ こんなゴミくずに負けるわけが……」

「はは、色々と違う」

ぶつ切りの音声を聞きながら会話をしつつ、明もミスリルソードを振るい有視界で捉えたソルジャーを一体撃墜する。ここにいる連中は、複数の情報屋などを介して流された情報に群がってきた海賊連中が大半だろう。

ヘッジホッグもソルジャーも彼らの専売特許と言う訳ではないが、待ち伏せに最適で扱いやすいこの二つのAAは、彼らが好んで使うからだ。

「二体目発見、と」

支援砲撃しえんほうげきに特化したタイプなのか、大型のライフルを持ち、高層ビルの上で伏せ撃ちの狙撃姿勢そげきしせいを取っていたソルジャータイプを背後からプラズマライフルで撃ち抜く。航空戦力こうくうを想定していなかったのか、何もできぬままに爆散して消えていく。

こちらの攻撃に対して反応すらできなかったのは、複数の勢力が互いにジャミングを掛け合いレーダーが完全に沈黙しているからだだろう。

ゲームのシステムとしてレーダーがジャミングに対して優先される
とはいえ、パラメータの振り分け方によっては盲目状態だ。

上空から街の中心部に向けて近付くと、下方から幾重もの銃火が瞬
く。弾道予測と同時に射線上の先に重なるように射撃をしつつ高速
旋回して回避運動を取る。

直後に空中で複数の爆発と、地上の何もなかった場所に火柱が上が
る。

視界から完全に消えるソルジャータイプの最大の売りである『透過
迷彩』のアビリティなのだが、明は経験でどんな場所に敵が潜んで
いるか検討が付いていたし、銃火から瞬時に位置を割り出すという
驚異的な反応を以ってこれに対処した。

これで、四体のソルジャーと一体のヘッジホッグが撃墜された。
自身の近くには敵がいなくなったようなので轟音が鳴り響く方へと
加速する。

眼下には、倒壊するビル郡と赤い暴風が吹き荒ぶ。回転する無数の
刃でビルを破壊しながら突き進むのは、海賊連中にとっては赤い死
神。

そして、海賊の連中と鏡のウィザードの相性は最悪だ。

彼女はアビリティの『神の（ド）眼』によって、ジャミングを無効
にできるし遠距離武装のほとんどを自身の武装で打ち落として無効
化できるからだ。

「問題なさそうだな、適当に観戦させてもらおうでしょうか」

明は周囲に警戒しつつ、鏡の戦闘を見守ることにした。

敵の数が減りジャミングは既にほとんど効果を為さないレベルまで
低下し、レーダーも回復した現在なら危険は少ない。むしろ、下手
に介入して味方の攻撃に巻き込まれる方がよほど危険だった。

「あいつ、戦闘になると結構見境ないしな。怖い怖い」

「聞こえているわよ、後で覚えておきなさい」

独り言をしていたつもりが、即座に返答される。この分だと、彼女
の方にも余裕ができたのだろう。

狩獵^{シヤウリョク}における、狩る側と狩られる側で言えば海賊連中が狩る側であり、ウィザードの方が狩られる獣といったところだろうか。数の優位性や地形と合わせたフォーメーションを展開する海賊連中だったが、実質的な立ち位置は完全に逆転している。

「と、とにかく包囲だ、引き付けて一斉射撃で仕留めるしかない」「ビルの陰に回れ、発射タイミングだけ合わせて打ちまくれ。跡形も残すな」

元の所属がばらばらだったのか、通信が漏れているのもお構いなしでオープン回線越しに会話する敵対勢力。悪魔染みた強さを誇るウィザードを倒すという共通の目的に対して一時的に協力しているのだろう。

そんな中をどこ吹く風と悠々（ゆうゆう）と歩くウィザード。

そして、敵対勢力の中央まで進んだ瞬間に鏡が凜^{りん}とした声で言い放つ。

「^{リリース}解放！」

解き放たれたように、水晶の剣が空を駆ける。

包囲された円の中心部から放射状に、無数の剣が敵に向けて飛来する。

その動きに対して僅かに遅れて敵の混成勢力が火器を放つが間に合うわけもない。

丁度彼らは、武道などと言うところの先の先を衝かれた形だった。自身が動くと思った瞬間にはもう攻撃されている状態となった彼らに待っているのは、ただただ死ぬことだけだった。

廃墟になった市街地で、断末魔の叫びを上げる間も無く彼らは散っていった。戦闘の余波を受けて巻き上がっていた土煙が掻き消え、視界がクリアになっていく。飛ばした武装を回収するウィザードの上から、飛び掛る人影が見える。

白兵戦用のナイフの武装を手に、背後からの奇襲だった。

リーダーは性能に関らず、至近距離で複数の敵が存在していると判別不能になるという欠点を利用した作戦だ。

「馬鹿、油断するな！」

空を一条の矢となつて駆けるフェアリー。戦闘継続時間に応じて速度が上昇するアビリティ『ライジンダレイド累進加速』の効果で、今のフェアリーの速度は弾丸すらも凌駕する。りょうが刹那の加速と同時に迷彩カラーのソルジャータイプに肉薄して、敵を一刀の元に両断する。

「こんなところで死ぬ気か！」

一瞬、呆けたような間を置いて鏡が返答する。

「……援護するって言っていたから」

一呼吸の間を置いて、少し拗ねたような口調で鏡が言う。

【THE END（戦闘終了）】

短い沈黙をかき消すように、システムアナウンスがフィールドに響き渡る。

「信頼の裏返しと受け取って置こう。だが、無理はしないでくれ」

「はあ、はあ。でも、無理をしなくちゃできないことをやっているのはお互い様だよ」

呼吸を乱しながら鏡が言う。仮想空間上で体が疲れるということはないのだが、精神の疲労が肉体に反映されているのだろう。

「それで、一体いつからこんなことをやってるんだ？」

「朝から、かな。百人切り、達成しちゃった」

「お前、待ち伏せされているってわかっていながらなんで俺を呼ばなかった！それに無理にそんな時間から戦闘なんてしなくても、しばらく待ってれば奴ら同士討ちしたかもしれないだろ！」

「最初は、君の露払いのつもりだった。でも、ありえないかも知れないけど、あいつら全員が同じ場所に向かって水月のところに行つて捕まったら、きっと酷いことされるから」

途切れ途切れの言葉が、明の胸に響く。

「それでも、……お前が死んだら意味ないだろ」

彼女を怒る気持ちなど、明の中からはとうに無くなっていた。そして、自分のことは棚に上げているとは思っていないかった。

「少し、疲れちゃった。先に行つて」

「お前は、もう休め」

「そうさせてもらっわ。《Translation》（記号変換）」
巨大な戦闘用のAAから、現実の肉体を模したアヴァターへと姿を
変える鏡。

この状態でいれば、戦闘の余波に巻き込まれることはあっても、エ
リアが重なつて敵性機体とエンカウントすることはない。周囲の敵
が全滅した今現状なら、当面の間は安全だろうと明は踏んだ。

「行ってくる」

「行ってくるといい。だが、君が死ぬと悲しむ人がいることを忘る
な」

瓦礫に寄りかかり、少しかすれた声で鏡が言う。

「ああ、生きて帰ってくるよ」

そういつて、明は街の外れにあるゲートへと加速する。彼がパスコ
ードを使用してゲートを開くのを見送り鏡が立ち上がる。足取りは
覚束ないが、明確な意思を持って目指す場所へと歩む。

一見すると何もない場所ではないここは、彼女にとっては意味を
持つ。

『GENESIS』の中で手に入れたアビリティは仮想空間上でも
適用され、『神の（ド）眼』を持つ彼女にはここに同時に存在する
彼女の姿が見えていた。現実世界とは異なったロジックで構成され
た仮想空間では、同じ座標に多数の物体が存在するという状況があ
り得るのだ。ただし、特定のアビリティを持たないプレイヤーはそ
こに存在するものを認識することができない。

「水月、久しぶりだね」

位相が違つたためか声は届かないのだろう。鏡は、呆けた顔をする水
月に微笑んで手を振ってみた。鏡の眼に映るのは、穏やかな景色の
中に佇む白装束をまとつた水月の姿。水月の眼が映すのは、廃墟と
なつた街で微笑む黒衣の鏡の姿。

鏡写しのように対照的な景色が互いの眼に映し出されていた。

二人はしばし呆然と見つめ合い、水月の呆けた顔は驚きへと変わり、

次に笑顔になり、最後に涙に濡れた。

「こんなことなら、もっと早くに会いにすればよかったのかな」

目の前で口を開く相手の声は聞こえない、嬉しいとか、驚いたとか、あるいは言葉にならない叫びをぶつけているのかもしれない。

「……ごめんね」

互いに伸ばす手は触れ合わず、すり抜けるだけ。

（なんて自分は無力なのだろう）

そう思いたくなかったから、今日までここに来ることができなかった。

目の前に、触れられる距離にいるのに何もできないのがもどかしい。

（いなくなつてまで、彼の気持ちを独占し続ける彼女が憎い）

（ひと時とはいえ、親友の思い人を独占した自分の心が痛い）

（自分がどんなに思いを寄せても、それ以上に思われている相手がいるのが苦しい）

（親友の不幸にさえ、嫉妬してしまう自分の感情が悲しい）

「もう、終わりにしよう」

それは、悲痛な響きだった。

涙ながらに、二人は互いの肩を抱く。

溢れる感情、

触れることのない身体、

届くことのない言葉。

それでも、伝わる思いがあった。

「必ず、救い出してあげるから」

入り乱れた感情の中、それが一体誰に向けて放たれた言葉なのか自分でもよくわからなかった。それでも、その言葉に？はなかった。

判別の付かない感情を胸に、黒衣をはためかせ鏡はゲートへと向かった。

淡い光に包まれ、視界がぼやける。

光のトンネルを抜けると不意に視界が開ける。ゲートを通過する数

秒の間は完全に沈黙していたセンサーに視認した情報が新たに書き加えられる。光点が示す位置情報と名称にはケルビムと表記されていた。

その視線の先には、白い神の化身がいた。

天を衝く巨大な塔を包み込むように、青い空に雲が流れる。大空に鐘の音が鳴り響き、エリアが重なると同時に明とその敵対者、両者の視線が交錯する。

視界が一瞬、白い光に包まれる。

【MISSION START（任務開始）】

視覚エフェクトと同時にシステムのアナウンスが響き渡る。

「ガーディアンか。……立塞^{たちふさ}がるなら倒すまでだ」

腰に携^{たずさ}えた二本の剣を抜きながら明は独白する。

「ガーディアンではないよ。まあ、『フロアマスター』である私、黒木智樹^{ともしき}を倒すことがこのミッションを終わらせる条件であることを考えれば、似たようなものではあるが」

オープン回線越しに返答する声が響く。

声の主は正面をホバリングする白い天使。

「……悪い冗談だ。なぜ、あなたがこんな事をしているんだ。答え^{こたえ}てくれ、黒木智樹」

怒り、憎しみ、不安、頭の中を駆け巡る負の感情を押し殺し、質問を投げかける。かつての師である彼を殺したくはない、間違いであつて欲しいと願っていた。

「いい殺気だ。返答次第では私を殺すと言う強い意志が伝わってくる。それから、閉じ込めてはいないよ、女神がここにいるのは彼女自身の意思だ」

上空でケルビムは両手をおおげさに広げ、操縦者である黒木が演説するかのように話す。即座に自分自身のデータバンクにある情報と彼のデータを照会してみるが、目の前にいる彼は紛れも無く本物の黒木智樹だった。

「どうか、事実がどうあれ盗人^{ぬすこ}が自分が盗みましたなんていう

訳ないだろ。あんたは彼女を女神として崇めて司祭様にでもなったつもりなのか」

黒木の陶醉とうすいするような口調に、その狂気染みた発言に、彼とのまともな対話を断念した。ここにいるのは、かつて自分自身が師として敬意を払っていた相手ではない。自分にそう言い聞かせて。

「そうだ、ここでは私は司祭であり神なのだよ。それが『支配者』ドミネーターの力、全てを司る神のなせる業よ」

「確かにアビリティはそれ一つで驚異的な力を発揮する。しかし、それだけで神気取りとは笑わせてくれる。黒木、いや、お前は『GENESIS』の道化だよ」

そう、ここにいるのはかつて自分が師として仰いだ人物ではないのだ。ただ単に『GENESIS』という巨大なシステムに踊らされているだけの哀れなピエロ。

「いいだろう。その身を持って理解するがいい、神に喧嘩を売った愚かさを」

「箱庭の神が、偉そうにほざくな。お前はただ水月を監禁している狂人だよ」

敬意は敵意へと、憎悪が怒りへと変わり感情が昂ぶってくる。

「違うな、女神は自らの意思でそこにいる。これは、神の思し召しなのだ」

「狂信者が。何を言っても無駄なようだな」

これは、もはや対話ではなかった。

「もとより問答するつもりはない。ここに踏み込んだ以上、私が自ら殺すまでだ」

「それが本性というのなら、あなたを越えてみせる。今日、ここで」

明の胸にもう迷いはなかった。何が原因で狂ってしまったのかは定かではないが少なくとも今の彼は、自分の標的であり目的そのものののだ。

もう明にためらいはなかった。

目の前にいるのは、紛れも無い敵なのだから。

「さあ、始めよう。そして、全てを捧げよう。女神のために！」

四翼の天使が大剣を振り下ろすと、塔を囲むように巨大な炎の円陣が現れる。相手の動作に合わせて、天空の塔に配置された無数の大窯から燃え立つ赤々とした炎。宙に浮かぶ巨大な闘技場のようになった、フィールドから音が聞こえる。

聞いたことのあるリズム。

そう、この合唱は、ベートーヴェン作曲の第九交響曲。

異国の歌をBGMにケルビムとフェアリーはフィールドの中央部で刃を交える。

重なる剣戟けんげきの音に合わせ、夜空に舞い散る火花が赤と黒の空間に光を明滅めいめつさせる。繰り返される旋律と歓喜の声に合わせ、中空で幾度と無く剣戟けんげきを結ぶ。吹き抜けの塔の頂上で切り結ぶ度に両者は、円を描くように徐々に間合いを詰め、鏢迫り合つばひあひいで出方を伺う。

「神への祈りは済ませましたか？ 司祭たる私に刃向かったその愚かさを、自身の破滅を以って知るがいい」

「戯言をほざくな！ お前なんかに構っている暇はないんだ」

ケルビムは、単調な鏢迫り合つばひあひいに痺れを切らしたのか、大剣で力任せにフェアリーを弾き飛ばす。

力で劣るフェアリーは為されるまま後方へ押し返される。追撃を仕掛けるべくケルビムが前方へ加速する。大上段に構えられた大剣で羽虫を叩き潰すが如く振り下ろすのは白い神の化身。

フェアリーは、右手のミスリルソードで攻撃を受け流しつつ、逆の手に持ったミスリルソードで薙ぎ払う。天使の胸部に深々と刻まれる、傷の刻印。

明は自身を鼓舞こぶしさせ、更なる連続攻撃を仕掛けるべく機体を加速させる。

「これで、片付けてやるよ」

水の中に入るときのような空気の壁を抜ける感覚に、機体の速度が音速を超えたことを知覚する。視界に映る未来は繰り返される剣戟、

切り結ぶたびに飛び散る火花、一瞬に輝き消えていく姿は、未来の自身の生か死か。

彼は望む運命を引き寄せんがために、引き金となる言葉を脳裏に思い描く。

《Attract tempest》（引き寄せる暴風雨）

罅迫り合いから、互いが離れる瞬間に合わせショットアンカーを放つフェアリー。

その言葉が引き金になり、フェアリーは登録された動作を完璧に再現する。

事前に登録した動きを再現するアシストプログラム『ARM（Auto Response Move 自動対応行動）』を利用した簡易コンボ。

そして、この瞬間からは、全ては高速に自動に処理される。

フェアリーの手首から放たれた鋼鉄のアンカーが互いの距離をゼロにした直後、薙ぎ払うようにミスリルソードがケルビムの装甲を切り裂く。

さらに傷跡を抉るかのように両手に持った剣を交互に袈裟懸けと逆袈裟に振り下ろす。

崩れ落ちるように、よろける機械の天使を突き飛ばすようにクロスさせた二本の剣を切り上げる。後ろに倒れるように大きくのけぞる相手に、右足のひざ蹴りのめり込ませ、左足で駆け上がるようにサマーソルトを決める。

弧を描くように、宙返りしつつ中空で反転し剣を収める。

傷付きぼろぼろになったケルビムに、止めとばかりにプラズマライフルを浴びせ、ひび割れたボディに止めとばかりにリニアライフルを放つ。

自動で再現された動きは、ここで終了する。最後に放たれた弾丸が天使の胸部装甲を貫通、空中でケルビムのAAが爆発し無数のパーツがとなって四散する。

動きこそオートで再現されるが、感覚としては肉体の限界を超えて

の九連続攻撃。

現実の世界においてはごくごく普通の人間である明にとっては、それなりに負担でありサイバースペース上の空でフェアリーが、呼吸を荒げ胸を上下させるように動かす。

AAに呼吸器官などは存在しないが、現実の自分が激しく動いたような錯覚がサイバースペース上で動きとして再現されていた。暗闇を照らすように、赤々と燃え上がる炎に囲まれて、フェアリーは空中でホバリングする。

周囲を覆っていた、爆発によって生じた黒雲が風によって流れていく。

歓喜が全身を突き抜け、全身に広がる心地よい疲労感。

「これで、終わったのか」

BGMとして流れるケルビムを讃^{たた}える歌詞の第九の合唱でさえも、今は自分自身の勝利を讃えるかのように聞こえる。塔を囲むように燃え上がる炎を見据えつつ、二丁の拳銃をホルスターに収める。

水平線には燃えるような太陽が見える。そのまぶしさに、一瞬だが明は視界を失う。白い光に包まれた直後に六体のケルビムに包囲される。悪い夢でもみているかのように明は震える声でつぶやく。

「馬鹿な！ 確かに倒したはず、ちっ」

幾重にも重なってばやける天使が大剣を振りかぶりフェアリーに迫る。敵の接近を見落としていた自分に舌打ちしつつ、腰部に収めた二丁の銃を取り出し間合いを確認する。

「君は愚かだなあ、神に刃向かうなんてさあつ！」

即座に両手にリニアライフルとプラズマライフルを構え正面とその右にいるケルビムに攻撃する。右の一体を仕留めるが、もう一体は仕留め損ね左と背後と正面の三方向からの攻撃が迫る。

急上昇し包囲を逃れるが、追いつがる五体のケルビム。

「邪魔^{まじ}を……するなあつ！」

左右に迫ってきた二体に弾丸とプラズマの火球をしこたま打ち込み沈黙させる。

「さあ、全力で抗ってくれたまえ。醜く、見苦しく、のた打ち回れ！ あははははは」

狂人染みた声で黒木が叫ぶ。三対一になったとはいえ、現状はまだ不利であった。

牽制の射撃を続けつつ虚空を翔けて敵を自身と直線状に配置するよう移動する。目前に迫る巨大な雲海の中に飛び込み避難する。位置情報はレーダーで解かってしまうかもしれないが、近接戦闘がメインのエンジェルシリーズが相手ならば目くらまし程度には十分だった。しかし、そうだった経験が彼の勘を鈍らせる結果となる。

一瞬の安堵、反転して攻撃をしようとして逆に背後を敵に見せることとなる。雲海の先に新たに三体のケルビムの反応を検知した時には、もう遅い。

「さあ、断末魔の悲鳴を上げる。ヒステリックな赤子のように、泣き、叫ぶがいい」

「……死ぬのか、今度も何もできないままで」

自分自身が踏み出した一步、越えてしまった境界線。それが勇気であつたのか、それとも無謀であつたのか。降り掛かる目の前の現実には後悔する時間すら与えてくれない。幾重もの刃がフェアリーを捉える。

刹那、ぼやけた明の視界は無数の剣で多い尽くされた。

「明、鏡、大丈夫だよね」

涙を拭いて水月が独白する。彼らの勝利を裏付けるプラスの材料など何もない、ただ信じて待つだけだった。緑の丘に風が吹き、白いロングスカートがはためく。無力であることが、こんなに悔しいとは思ったことがなかった。

そして、自身の持つアビリティ『シンパシー共感』を嫌悪した。

自分だけが相手の考えを知ってしまうことがこんなにも辛いことだと理解した。

「……鏡も同じ気持ちだったんだ」

涙ながらに抱擁^{ほうよう}を交わしたあの時、言葉は聞こえなくても、相手の思考を読み取る『共感^{シンパシー}』の所為で鏡の考えは通じてきた。友情と恋愛、愛情と憎しみ、優越感と嫉妬、複雑な感情が入り乱れ、それでも助けるという強い意志が伝わってきた。

「でも、同じ人を好きになっ^ててお互いに嫉妬^{しつと}するなんて、本当に似たもの同士だよ」

どんなに相手に想われても答えることができない立場、どんなに相手を想っても答えてもらえない立場、この二つにどんな違いがあるのだろうか。

幼少の頃に見た、王子様がお姫様を救い出すというストーリー。当時の彼女は、安易な考えでお姫様に憧れもしたが、実際になつてみればこれほど嫌なものはないだろう。

助けるということが成立するためには、自身の生存が条件である以上どんな目にあつていても自殺することもできないし、いつになつたら助かるのかも解からない。

自分自身を捕まえている相手の気分次第でどうにでも変わってしまった立場や状況。仮に王子が、自分を捕まえている相手を首尾よく倒すことができたとしても相打ちでは意味がないし、その前に王子が死んでしまつても意味がないのだ。

とてもではないが、こんな状況は手放しで喜べるものではなかった。

いや、それでもハッピーエンドが約束されている物語の中なら、自分自身の立場に少しは酔うことができたのかもしれない。だが、彼女は自分の親友の気持ちを知つて理解してしまった。

そんな状況で、彼女の前で愛を誓うことなどができるわけもなく親友の愛している人間を目の前で奪うことなんて、できるわけがない。それも、こんなつり橋効果のような方法でならなお更のこと。

しかし、現実には明は自分を助けに来ているし、助けられてしまえばその先の展開はもう決まっているだろう。

その未来を彼女の心が望むと望まざるに関らず。

そして、時間はもう余り残されていない、選択も限られている。そもそも親友と恋愛を天秤^{てんびん}に掛けるといふ選択ができない以上最初から答えなど出るはずもない。

終わりの見えない思考の迷路の中、今の彼女にできることは祈ることだけだった。胸に掛けられた、彼とおそろいの銀の十字架。信仰がある訳ではなく、彼がつけていたものをなんとなく選んだ。そんな些細なことで喜べた、昔の自分が懐かしい。

「無力であることが、こんなに悔しいなんて、思わなかったよ」
首から提げた十字架を食い込むほどに強く握り、水月は仲間の無事を祈る。

緑の丘から見上げる塔の頂^{いただき}は、分厚い雲に包まれていた。

【REINFORCEMENT（援軍）】

ビジュアルエフェクトのカットインが挿入された直後に、フェアリー目の前にウィザードのAAが現れる。

「《Red shield》（赤い盾）」

AAの出現と同時に鏡が声高に叫ぶ。

ウィザードのローブを構成する複数の赤い剣が、彼女の声に応えるかのように瞬時にその形を変えていく。出来上がった円形の大盾を構え、眼前に迫っていたケルビムの白刃を受け止める。激しく火花を散らし、金属と金属が激しくぶつかる音が響く。

「……か、鏡か」

「はあ、はあつ。間に、合った。よかった」

聞こえたのは親しい女性の声。

ぼやけた視界の中、呆けるように明がつぶやく。

そんな彼を叱責^{しっせき}するように鏡が叫ぶ。

「明。何をしている、早く反撃を！」

「助かった、礼は後でする」

そして、即座に平静を取り戻した明は左右から迫る二体のケルビムを仕留めるべく右手に携えたミスリルソードを薙ぎ払い、対面の一

体には左手に構えたりニアライフルをしこたま打ち込む。

「解放、^{リリース}《Crimson Lotus》（深紅の蓮）」

即座に援護に回った鏡が、凜^{りん}とした声で言い放つ。

赤い盾は声に應えるように分離し、解き放たれたように赤い剣が空を駆ける。何十もの剣が、雲の先にいた三対目のケルビムを包囲して串刺しにした。風に舞う花弁は赤き剣、恐ろしくも美しい深紅の花が天使の体を突き抜け咲き誇る。

「こいつらは複体。構わずにセンサーに表示されている本体を仕留めて、明」

「わかった、援護してくれ。鏡」

「もう一匹忍び込んでいたネズミはあなたでしたか。私自身の手で殺せないのが少々残念ですが、幕引きの時間です」

雲海から新たに出現した六対のケルビムから声が発せられる。

フェアリーとウィザードの正面に三体のケルビムがそれぞれ配置され、それら全てが完全に一致した動作で赤々と燃え立つ剣を構える。同時にコントロールできる数は、六体が上限なのだろうか。六体を越えての攻撃は今のところない。黒木の駆るケルビムと、複体が五体。この距離ではセンサーが役に立たないので最終的には何体倒せばすむのか検討もつかない。

あるいは、制限などないのかもしれないが。

「なら、皆殺しにするまでだ」

アビリティによって加速され、雷光と見紛うばかりの速度で正面にいたケルビムに切りかかるフェアリー。薙ぎ払うように構えられたミスリルブレイドの刃が敵を捉える。

しかし、その刃がつきたてられる瞬間にビジュアルエフェクトが視界に映る。

【TIME UP】

「くくく。招かれざる客には、ご退場願おうか」

視界の端に表示されていた三分のカウンtdownの消失から僅かに遅れて、機械音声によるアナウンスが無慈悲^{むじひ}に響く。同時に明の位

相がずれ、剣での攻撃はケルビムの胴体をすり抜けて空を切る。

「……馬鹿な、システムに干渉したのか？」

一瞬の忘我の後に、明の口からそんな言葉が漏れる。基本的に、仮想空間上で行われる戦闘は時間無制限でのサバイバルマッチだった。それ以外の勝敗の決定条件を明は見たことが無かった。

「言ったはずですよ、ここでは私が神であると。あははははは」

残響さんきょうのように響く黒木の嘲笑ちやうしやうの中、二人の視界に新たな文字が浮かび上がる。

【REPARIATION（強制送還）】

「くそくそくそくそ、畜生。こんなところで、水月、水月イイッ
！」

自身を構成するポリゴンが空中に霧散していく中で明は叫び、手を伸ばす。彼女がどこにいるかもわからない、届かない叫びだと理解もしていた。それでも、見えない何かに抗いたかった。こんなところで終わってしまうのを認めたくなかった。そして、何より追い続けてきたものを絶対に諦めたくなかった。

システムの音声が響くと徐々に視界が黒く埋め尽くされ、そこで彼の意識は途絶えた。

1 - 2 A g a i n (後書き)

まだまだ、続きます。というか、自分でイラストつけられるレベルになりたいです。追記、ラノベの表紙っぽい絵を描いてみた。きちんと仕上げたらあげるかもしれません。(9月8日最終更新)

1 - 3 Opt (前書き)

そのとき選んだ道は正しかったのか。過去は変えられないかもしれないけれど、それでも前に進むしかないから。

「気付いてくれない君が、悪いんだよ」

「……くそつ。最悪の寢覚めだ」

薄暗い『電腦技術研究所』のデスクでうつむいていた顔を上げる明。胸に付けた銀の十字架を食い込むほどに強く握り、痛みでこれが現実であると再認識する。仮想空間に意識を没入させている間は、本体である肉体は眠っているような状態になる。ちょうど、夢から覚めた状態とでも言うべきだろうか、現実に意識が引き戻されてもしばらくは妙な浮遊感ふゆうかんが付きまとう。

「バッドモーニング、明。メシの時間にはまだ早いぜ」

おごってもらえるからだろうか、いつにもまして陽気な声で話す三島平治。笑顔を通り越してニヤニヤとした表情を浮かべ放つて置いたらもみ手でもしだしそうな雰囲気だ。

「はあ、平治か。頭を冷やしてくるから少し待っている」

ふらふらする体を引きずるように動かし、洗面所まで辿り着く。眼にまぶしいくらいに明るいライトに映し出された顔は、ずいぶんと対照的だった。

鏡に映る自分の顔は、驚くほどにやつれていた。当然と言えばそうだろう、ただでさえ命懸けの仮想の探索と言う仕事に加えて、個人的な問題まで絡んできたのだ。心身に負担が掛からないわけもない。自動で流れる水の前に手を重ねて水を貯め、顔にぶつける。

「水月、待っているよ。絶対に助けてやるからな」

それは、何度も繰り返してきた言葉であり、誓いでも決意でもない、おそらく、暗示と言う表現が一番近いだろう。水を掛けたくらいで疲れは取れない、しかし、眼光にだけは光が取り戻される。

滴したたる水を振り払い、明はその場を後にした。

「ラーメン屋か、悪くないな」

並んで歩く明の提案を受けて、平治が答えた。

「数回しか使ってないが、味は保障する。しかし、おごってもらうのに偉そうだな」

昼休み、研究所からラボ歓楽街への道すがら、明と平治は昼食のプランが到着目前で決まったようだ。石畳の道沿いはどこか西洋めいた外食店や家具店、ブティックなどが立ち並び、都市全体が赤や茶色のレンガ造りや木造であり、一定のコンセプトに沿ったデザインで構成されている。

しかし、外見こそはレトロに作られているが中身は軽量素材や合成金属で作られており、その頑丈さはトラックが突っ込んでも平気と言う代物だ。

「俺の方が偉いから当然だろ、何を血迷っているんだ」

「はあ、血迷っているのは、今だけにしろよ。任務で死んでも、お前の家族の面倒を見る気はないぞ」

「ま、俺が死んでも合成栄養食があれば生きていけるだろう」

「死にはしないだろうが、あれは不味いぞ」

ブロックタイプやゼリータイプの合成栄養食は、確かに栄養価などの問題はクリアしているが、味の方は進んで食べたいと言うようなものではないのが現実だった。

「俺は、案外いけたぞ。訓練期間中に食べてみたが、あれは人類を救う救世主だ」

「まあ、安い、安定供給可能、栄養価が高くバランスもいい理想的な食材ではあるよ。個人的には、質の悪いサプリメントや固形栄養食と同類だと思うが」

「現実的な問題として、食糧難の解答はあれしかないだろ。実際、最下層の人間はあれで食いつないでいるんだから」

「ま、俺たちにはあまり縁のない話だよ。命賭けの仕事の報酬で金だけはあるしな」

「俺は、スラムとブルジョアの綱渡りだけだな。社長令嬢とくつついたはずが、会社が倒産して転落人生だからな」

「そういや、そうだったな。着いたぜ平治。メニューは第二視点で確認してくれ、注文は俺の方でまとめてする」

第二視点は、通話機能等と同じ拡張現実の一種で、現実に対して一種のフィルターを掛けてみることができるといったものだ。基本的には、飛び出す絵本の世界に入り込んだような状態になる。

「なんだ、この街自体のデザインコンセプトを完璧に否定した外観は！ 時代を逆行し過ぎているだろ。おごりが嫌なあてつけか、あてつけなのか？」

「まあ、落ち着け。確かにデザインは、廃墟はいきょみたいだが中身はむしろ新しい。メニューも不安ならお前が選べ」

歓楽街の外れの一角に、その店はあった。薄汚れたのれんをくぐり、先に入った明が平治を手招きする。

「お前と同じのでいいよ。調子に乗ると、すごいのが出てきそうだ」
恐る恐る、といった様子で平治が後から入店する。

「馬鹿、店の見た目はあれだが味は本当にいいんだよ。入り口は、確かに幽霊屋敷ゆうれいやしきのようだが、中はハイテクだ。それと、外見に関しては店長の趣味らしい」

「イヤミな趣味だな。と、とにかく、行くとしますか」

「第二視点は席についてから起動しろよ。広告に埋め尽くされるから」

「お、おう、わかった」

動揺を隠せない様子で平治が応えた。

白い調理服を着た初老の店長のいるカウンターの前をすり抜け、二人は奥の二人がけの席に座る。そこで二人は拡張現実を起動してメニューを確認する。平治は、目の前に飛び込んでくる広告を含めた情報量の多さに驚きを隠せない。

「しかし、人口増加でスペースの有効利用が叫ばれる現代でも、この情報量は異常だろ」

「座るまで起動するなって言った意味が解かっただろ。まあ、広告がありえないくらい入っているのさえ気にしなければ、メニュー自体は商品映像を立体視できるしレビューやコメントが併記されているから見やすいよ。店長さん、どうやら電研の出身者らしいし」

二人の視界に映るのは、室内を旧時代のネオン広告のように流れて動き回る広告の群れとテーブル上にあるメニューから立体的に投影された商品の数々だった。

「おかげで、外と中とのギャップが楽しめたよ。確かにどれも美味そうだな」

「俺と同じのでいいんだっただ、じゃあ、とんこつラーメンを二つと」

網膜に投影されるメニューの端にある数量選択のボタンで二つを選び、会計を事前に済ませて第二視点を停止させる。すると視界にはごく普通の木造の料理店といった景色が広がっていた。

「さびれた外観に対してハイテク過ぎるぞ。下手な高級店より進んでいる」

「普通の高級店は、P.E.T.を使った技術なんて毛嫌いする連中もいるからな。客にも運営側にもさ」

そっぴいながら明はテーブルの端に置かれた二つのコップに水を注ぎ、その内の一つを平治に渡す。

「おつと悪いな。で、今日のヤマで何かあったのか？」

真剣な表情で、平治が明に問う。

「はあ、水月の手掛かりが目の前で逃げて行った」

「……そいつは、辛いな。お前は、そのためにここに入ったんだからな」

事情をよく知っているからだろう、平治は苦々しげに言葉を紡ぐ。

「お前だって、俺が心配で電研に付いてきたんだろ。付き合わせて悪かったな」

「だから俺は、家族のために電研に……まあ、そういう要素もあるよ」

穏やかな表情で見つめる明に目を伏せがちに平治がうなづく。

実際、半年前の明は自分が思う以上に思いつめていた。平治の場合は、生活のためと言う理由も確かにあったが、友人が無茶をしないように隣で様子を見ていたという理由もあった。

「まあ、水月がすぐに殺されることはないと思う。準備ができ次第、殺されない限りは何度でもケルビムに再戦を挑むつもりだ」

「俺も……」

一緒にと言う前に明が言葉を重ねる。

「無理するな。それに、鏡もいるから」

「そうか。鏡もいるのか。あいつも難儀だよな」

平治は、左手の薬指にはめられた指輪型のP I E Tを眺めながら嘆息（たんそく）するように言う。

「難しい性格ではあるが、今は心強い仲間だよ」

「まあ、色々と同情するよ。しかし、修羅場だな」

呆れるような、同情するような顔で平治が苦笑いを浮かべる。

「戦場だからな。と、来たみたいだ」

「へい、お待ち」

店主の威勢のいい声と共に、二人の前にどんぶりが置かれる。輝くスープと細めの麺、ほのかに甘く鼻腔（びっかう）を刺激する香料の香り、熱々の湯気と伝わる熱。それら全てが彼らの食欲を刺激する。

「普通に上手そうだな、明」

「味は食ってから言うものだよ。まあ、喰ってみな」

「そうだな。頂きます、と」

「頂きます」

二人は手を合わせ、目の前の料理にはしを運ぶ。

恐る恐るといったようすで食べる平治の姿は、ずるずると音を立てるようになり、かき込むように変わり、惜しむようにこしのある麺をゆつくりと味わいながらかじり、最後にはスープの一滴も残らない。

「めっちゃくちゃ美味いぞ、どうしてくれる」

思わず、立ち上がりそんな勢いで平治が絶賛する。よほど感動したのか、口元を拭うことすら忘れているようだ。

「又、来ればいいんじゃないのか。ま、気に入ってくれたなら何よりだ」

少し遅れて食べ終えた明が、口元を紙ナプキンで拭いながら答える。
「むしろ、こんな美味しいものを今まで一人で食べていたお前を糾弾したいね」

「俺だつて最近知ったんだよ。まだ、数回しか来たことないし」

「これからは毎日……は、無理だとしても通うことにするよ。さて、帰るとするか」

毎日通う、と言いかけて自分の財布事情を思い出した平治は内容を修正する。そんな彼の姿に明は、笑顔を浮かべる。

「そうだな。まだ、終つてない」

店を出るときにはもう、明の顔から笑顔は消えていた。

「助かりましたよ、明さん。報酬は弾みますよ」

「敵の敵は味方。それに、目の前で死なれちゃ寝覚めも悪いだろ」
正面の敵へ牽制をリニアライフルでしつつ、黒いソルジャーのいるビルの陰に潜り込むフェアリー。眼前の敵は牛の頭にコウモリの羽を持つ、いわゆる悪魔を模した黒いAAのデーモン。正面に見える現状は二対一と有利だが、伏兵がそこら中にいる現実を鑑みれば絶望的な戦力差だ。

すでに五体ほど片付けたが、それでも数の優位は動かない。

「やれやれ、情報屋の情報が間違っていたからといって、仲間の報復に来るとは律儀なものです」

「いや、あんたの情報は正しかったよ。多分、俺と鏡が暴れたから結果的にはその報復だろ。責任の一端はこちらにもある、だから、報酬は無しでいい」

「まったく、あなたも律儀ですねえ。まあ、そこが気に入っているのですが」

「正面から突破する、援護してくれ」

「やれやれ。戦闘は本職ではないのですが、仕方ありませんね」

ビル影から空に向かって飛び出すフェアリーに一時火線が集中するが、その直後には、明とハイフォンの射撃によって撃墜されていく。もとより、空を飛ぶ相手に銃火器で迎撃するのでは最初から分が悪いのだ。互いの命中精度の差は、単純に腕だけでなくとも歴然だった。

しかし、その優位性が認められながらも、海賊連中がフライトユニットを嫌うのは火力と機動性を両立させるには装甲を、機動性と装甲を選べば火力が失われるという選択に迫られるからであった。

それはプレイヤーの思考にもよるだろうが、彼らにしてみれば命懸けの戦いで装甲が薄いというのは狂気の沙汰なのだろう。

「大した腕だよ。あんたも」

「そちらが相手の位置情報を送ってくれましたので、そこに撃ち込んだだけです」

「それをその通りに実行できるのが実力だよ。こちらは上空から敵を掃討する。引き続き援護を頼む、ハイフォン」

「了解しました。明さんも御武運を」

「あんたもな」

通信を切り、戦闘に集中する。眼下にはヘッジホッグが五体とソルジャータイプが四体、正面にデーモンが三体。十二対二という戦力比は数字の上では絶望的な現実だった。

しかし、そんな状況でも明の思考はひどく冷静だった。幾千回も切り結び、打ち倒し、敵を破壊してきたという自尊心が、幾万と繰り返してきた動作が彼を突き動かし、生き残らせる。

アビリティにより加速していく機体と対応するべく早くなる自身の反応速度。

「もっと早く、もっと正確に」

それは、地獄のような訓練を続け呪詛のように自身に言い聞かせてきた言葉。

そして、それは小遣いを稼ぐような気楽さでここにいる海賊連中との明確な意識の違いでもある。眼下のソルジャーに対しリニアライフルの射撃を仕掛けるモーシヨンと同時に、新体操にも似たアクロバティックな制動で火線を外す。放たれた弾丸は正確にソルジャーを撃ち抜いてその数を減らしていく。

左右からはヘッジホッグの多弾頭ミサイルが迫るがこれは正面のデ―モンに突っ込むことで回避する。

三体のデ―モンは矢のような陣形で、一体が先行して二体が追い掛ける布陣だ。

先頭のデ―モンが槍の上部に斧を付けた武器、ハルバードを手に迫るが眼前で半身を逸らして唐竹割の一撃を回避。逆に懐に潜り込み、右の手でミスリルソードを抜刀し切り捨てる。

「次は、どいつだ」

背後ではミサイル同士が誘爆し、後方の視界を奪う。

真二つに切り捨てられたデ―モンの金属塊にショットアンカーを左右の腕から打ち込み、さらに迫る二体のデ―モンに投げつける。ヘイフォンの援護だろうか、明のリーダー上ではヘッジホッグが一体消える。

敵からの援護射撃はない、眼前に迫る二体のデ―モンを巻き込むからだ。接敵までの時間に銃を収めミスリルソードを引き抜く。投げつけた鉄塊に相手が気を取られている虚を付き二体の間をすれ違い様に鉄塊ごとまとめて切断する。

二人が六体の敵を減らすのに要した時間は、僅かに十秒程度。

「でたらめな、はは」

「ば、化け物め」

通信が駄々漏れになっているために聞こえた声は、おそらく本音だろう。

だが、目の前で起きていることは、少なくとも明にとっては当然の現実だった。電研の人間がチームではなく単独で行動しているその

意味は、馬鹿げた訓練の量に裏打ちされた実力と人海戦術による効率を重視するためだった。

反応速度、射撃の精度、回避技術、どれ一つとっても海賊連中に負けることなどありえない水準だった。おそらく、一対一であれば半死人の状態でも負けないだろう。

「お前から見れば、俺ですら化け物なのかもしれん。だが、俺くらの実力の人間はいくらでもいるさ」

地上を見下ろし、目視でヘッジホッグを捉え加速する。

絶え間なしに打ち込まれる弾丸の軌跡さえ、肉眼で見えているかのような感覚だった。加速した意識下の中では、敵の攻撃はあたかも水面に生じた波紋のように映る。

自身を追尾するように放たれるガトリングガンの弾丸も、複数に分離して襲い掛かってくる多弾頭ミサイルも、その波紋はもんさえ見えていれば回避することは容易だった。

砲身から放たれる初撃を回避した時点で、自身を追従するその軌道が機体に当たることなどありえないことだと理解できたのはいつの頃だったか。

戦場に入り乱れる波紋を迂回し潜り抜け、ビルの真横にいたヘッジホッグに肉薄しミスリルブレイドの刃を頭上から付き立て撃破する。レーダー上で反応が一つ消え、その直後にさらにソルジャーの反応が二つ消える。

「味方ながらに恐ろしい実力ですよ。あなたは」

オープン回線越しにハイフォンの声が聞こえる。敵はかなり戦力を減らしているので、話ができる程度には余裕ができたのだろう。

「地上戦で三体仕留めたそちらの実力も、似たようなものだろう。

あとは、ソルジャーが一体とヘッジホッグが三体だ。とつとと終わらせるでしょう」

「つと、危ない。おいたが過ぎるソルジャーは、私が倒すと思いますよ」

狙撃でも受けたのか、そんなことをつぶやくハイフォン。

「援護は必要か？」

「個人的な事情で恐縮ですが、煩わしいハリネズミの相手をお願いしますよ」

「俺の依頼人様は、毎度毎度無茶な注文をしてくれる」

「私は、あなたを買っているのですよ。いろんな意味でね」

「言ってくれるな、依頼人様。なら、その期待に応えるでしょうじやないか」

黒いソルジャーが、地を這うように姿勢を低くしてブーストダッシュでビルの間を蛇のように蛇行して火花を散らしながら駆け抜ける。そして、時折、透過迷彩を起動しては、それを消すといったことを繰り返して、敵の攻撃をことごとく回避して肉薄する。

レーダー上で表示されていても、視界に全く映らなくなる透過迷彩を使いこれをやられると、下手なプレイヤーはレーダーと有視界の二つをみてしまったために動きが激しく乱れてしまう。

「あなたが悪いのですよ。それでは、さようなら」

動揺して乱れた敵の射線を掻い潜り、右腕に持ったサバイバルナイフを振りかぶる。

静かに、そして、しなやかにサバイバルナイフを突き立てるヘイフオン。僅か数秒で行われた一連の動作は美しくすらある。

倒れ伏すソルジャーを横目に、中空でフェアリーが敵に向かい加速する。自身の不利を悟ったのか、三体のヘッジホッグは密集し、その火力を膨大なものとする。

しかし、無数に見える火線にも、通り抜ける程度の穴はいくらでも存在した。

いくら火力が豊富なヘッジホッグだろうが、自身と相手の相手の間を三体程度の火力で埋め尽くす事などできるわけがなかった。左右に高速で移動し、射線を広域にすればその全てをカバーすることなど不可能な話だ。

とはいえ、弾丸自体が弾幕の役割も兼ねるのでこちらの射撃武器はそこまで有効に機能しない。確実に仕留めるのなら接近して切断す

るのがベストだった。

前進と迂回うかいを繰り返し、徐々に三体のヘッジホッグへの間合いを詰めていく。弾丸の間隔が狭くなるにつれて回避できる場所の選択が難しくなるが、不可能と言うほどの難易度でもない。

敵に対して渦を巻くように移動し、敵の一体が自身の間合いに入った瞬間に最高速までフェアリーを加速させ下降する軌道で肉薄する。まずは一体が、反応する暇すらなく引き抜かれた銀色の剣によって切断される。

等速で動きこちらの速度を相手に設定させ、安全であると勘違いさせることで、その虚を付いた攻撃である。三体のヘッジホッグが構成する三角形のフォーメーションの一端から直線状にいるもう一体に向け直進して返す手でこれを切り伏せる。

最後の一体に対して急旋回するが、動揺した相手は滅茶苦茶に攻撃をしてくるために、地上すれすれの位置から上空へと退避する。

「くるな、くるな、くるな、くるなああああ」

「死にたくないなら、最初からこんなこと……」

その先の声は、激しい爆音に飲み込まれる。

地上と上空に闇雲に放たれた何十もの銃火、砲撃、ミサイルが市街地を無作為に破壊していく。倒壊するビルディングとうかい、吹き飛ぶ窓ガラス、削り取られまき散らされる道路。

爆撃染みた攻撃で、そこにあった何もかもを吹き飛ばしていく。

「……はあ、はあ、死にやがったか」

脳内麻薬の過剰分泌かじょうぶんびつか、興奮気味に生き残った海賊が言う。

そのようすはハイになっているというよりは、むしろ、息も絶え絶えといった方が的確かもしれない。巻き上がる土煙、所々から登る黒煙。

そこには廃墟というよりも、荒野といった方が近い有様のフィールドが広がる。

「逆効果だったな、そちらの攻撃は」

スモークを突き破り、剣を振り上げるフェアリー。

奇しくも敵が仕掛けた攻撃より生じた煙幕で奇襲が成功する。そして、振り下ろされた剣が鋼の機体を両断すると同時にビジュアルエフェクトが視界に表示される。

【THE END（戦闘終了）】

撃ち抜かれ、あるいは分断されバラバラになった金属片が、ポリゴンとなって中空に霧散していく。意識の無いただの情報、虚空へと溶け融合する。

「戦闘終了ですね」

「そうだな。とりあえず、援軍が来ないうちに撤退するか」

「そうですね。では、あなたが知りたいであろう情報を渡しますの
で、ひとまずはそれで解散するとしましようか。過不足があれば、
いずれお渡ししますよ」

「了解した」

「それでは《Assignment》（譲渡）」

《Are you get these data?》（これらの情報を受け取りますか？）

視界にシステムの選択画面が映し出され、それに対する選択を迫られるが、もちろんYESと応える。

「確かに受け取った。それと、個人的な感情だが、お前のことは疑いたくないだけは言っておくよ」

「それでは、こちらは今はまだあなたと敵対するつもりは無い。と、
だけは言っておきましょう。《Return》（^{リターン}帰還）」

「それはこちらも願ったり叶ったりさ。いずれ、又、会おう。《Return》（^{リターン}帰還）」

そして、二人は現実へと回帰するのであった。

「やれやれ、午後の間探し回っても収穫なしか」

愚痴^{ぐち}りながら拡張現実を介して認証を済ませ、自宅の扉を開ける明あれからすぐにでも再戦したいという気持ちではあったが、鏡を含め連戦でベストコンディションとはとても言える状態ではなかった

こともあり、対策もせずに安易に勝てる相手ではないと考え、通常の業務をしながら情報収集に努めていた。

そして、最後に回していたSCS511の座標では、先日やられた仲間に対する報復とでも言うべき状況が展開されていた。ヘイフォンによれば、その時点で既に自分以外の情報屋が何人か糾弾^{きゅうたん}され殺されていたらしい。

また、鏡と明の件が無かったとしても、パスコードなしであの場所にある変化とえば、情報にすがり付いて群がる海賊自身であり、状況を勘違いして勝手に殺し合いになっていただろうというのが、ヘイフォンの言葉だ。結局、今日の収穫としては味方の情報屋に裏切り者はいなかったという事実が確認できたことくらいだった。

靴を脱いで手を洗い自室へと向かう。明が扉を開けると、そこにはベッドの上に乱れた着衣で寝そべる女性の姿があった。

「おかえりなさい、旦那様。なんてね」

不法侵入であるにも係わらず、少しも悪びれもせずに冗談を言うのは鏡。

明がここにくるまでは眠っていたのか髪は少しはね、ベッドの足元には黒いコートが放り出されている。

「なんでここに鏡がいるんだ？ 住所は教えてないし、セキュリティだってちゃんと機能しているはず」

自室への突然の来訪者に驚きを隠せないが、その相手が知り合いであつたのでわずかに安堵をしている明。

「釣れないわね。大家に自分は新城明の妻だつて言つて、あなたの詳細な情報を教えたならパスコードを貰えたわ。親切ね、彼女」

「どこまで教えたのかは聞かないで置いてやる、……怖いからな。とりあえず、目に毒なそのポーズを止めてくれ」

「いけずね。恥ずかしい思いをした立場がないじゃない」

からかうように大きく胸元の開いたワイシャツ姿で話す鏡。少し汗ばみ湿った長い黒髪はどこか誘っているような怪しい輝きを放つ。

「自分で恥ずかしいと自覚しているところだけは褒めてやろう。不

法侵入も、……まあ許してやろう。だが、事情だけは説明してもら
うぞ」

「そうね、まずはシャワーを借りるわね。話はそれから」

「もはや依頼ですらないのか。ふん、勝手に使え」

明がはき捨てるように言い放つのを尻目に、鏡はバスルームへと消
えていく。

「紳士過ぎるのは、悪徳よ」

通り過ぎる際に小さくそんな言葉が聞こえた気がしたが、疲れた明
の耳にはおぼろげに響くだけだった。

「明の馬鹿、甲斐性なし」
かいしょう

薄っすらと明るいバスルームには流れる水之音と鏡の音が小さく響
く。鏡面に映る自分の姿に向かって、鏡は話しかけていた。

そこに映っていたのは、しつとりと水に濡れる長い黒髪、すらりと
伸びた手足、ふくよかなバスト、くびれたウエスト、控えめなヒッ
プ。

そして、泣き出しそうな笑顔だった。

最後かも知れないと思って、やってみたが自分にはこういったこと
が向いていないということが改めてわかっただけだった。笑いたく
もなる。友人を裏切る行為だとは理解しているが、死地おもむに赴く前の
ささやかな願いだった。

悩んで、迷い、抗って、やっと踏み切った決断のつもりだったがそ
んな彼女の思惑など明が知る由よしもない。しかし、同時に安堵してい
る自分もいた。彼自身が、そんな黒い欲望に身を任せないのを知っ
た上で彼を誘惑したのだから。もとより、簡単に誘惑に負けてしま
うような人間なら好きになっていなかった。それが、嬉しくもあり
同時に切なくもあつた。親友を裏切らないで済んだという安心感と、
こうまでしても振り向いてくれない彼の態度が少し悲しくもあつた。
「……大好きだよ」

小さく発せられたその言葉が届くことはなく、狭い個室の中で反響

して、やがては水の音の中に飲み込まれていく。

「愛しているのに」

その言葉を口にもすることも無い、開いた口を空気が通り過ぎただけだった。

頬を伝う透明なはずくは、ただ流れていく。

髪についたシャンプーの泡を流しつくすと、彼女は水を止める。

「はは、似合わないことなんてするものじゃないね」

壁に掛けてあったタオルを手に、顔と身体を拭きその場を後にするのだった。

一時間後、リビングにて。

「それで、話してくれるわけだな」

「せっかちな。甲斐性なしなのに」

「不法侵入を不問にして、シャワーまで貸してやって何が不満だ」スルーしているのか、そもそも気にしていないのか甲斐性なしの部分には触れない明。

「えっと、君の態度かな」

ぷうつ、と頬を膨らませ鏡がそっぽを向く鏡。揺れる髪、横から見える白いうなじが薄っすらと赤い。そんなことを言っている場合ではないのは理解しているが、感情と理性は別物だった。

「……まあ、飲め。紅茶だが、温まるぞ」

そういつて、白いティーカップに注がれたミルクティーを差し出す明。カップは来客用に用意していたもので、自分のものは黒いマグカップに注がれていた。

「……もう、温まっているよ」

文句を言いながらも、差し出された紅茶に口を付ける鏡。風呂上りだからか、彼女の顔はほんのりと上気していた。

「落ち着いたか」

「ほどほどに」

「なら、本題に入るとしよう。まず、どうやってここを突き止めた

？」

「それは、以前君に渡したアメに発信機を……」

「って、おおい。もし、俺が食べちゃったらどうするつもりだったんだ」

内容の突拍子のなさから、動揺して思わず突っ込みを入れる明。

普段はクールぶっているが、戦闘以外の突然の振りにはめっぼう弱い彼であった。

「袋の方だから問題ないよ。それに君の性格を考えると舐めないだろうから、どっちに仕込んでも問題なかったらうけど」

「まあ、実際に机の上に置いてあるが、ナノマシンタイプを体に吸収して全身を発信機にされるのはぞつとしないんだが」

「技術屋相手にそんなことやらないよ。ばれるし」

くつろいだ様子でティーカップに口を付け、ミルクティーを飲む鏡。

「ばれなきゃいいのか。はあ、次だ」

「私も、次だ」

顔をうつすらと赤くして、いそいそとマグカップを差し出す鏡。どうやらお变わりをご所望らしい。そんな様子に機嫌を良くした明の声はどこか楽しげであった。

「気に入ってもらえて何よりだ。少し待っている、注いでくる」

席を立ちキッチンへと向かい冷えたカップをお湯で洗い、サーバーに再度火を付ける。次にマグカップ自体を暖めるためにポットのお湯を注ぎ、熱を巡らせてからお湯を捨てる。適温になったところで火を止めて、サーバーから紅茶をティーカップへと注いでいく。

「はやく、しろっ」

「すぐにできますから、待っていてくださいませ。お嬢様」

冗談めいた口調で明が言うと、お嬢様と呼ばれまんざらでもない気分なのか鏡がおとなしくなる。そんな様子を楽しみながら、明は作業を再開する。ほのかな香りが人を惑わすブランデーを、透き通るような純白のミルクを、濃い目の黒みがかった紅茶へと垂らしていく。混ぜ合わせると、三つの色が一つに溶け合っていく。

混沌としたその渦が、自身の迷いと重なるが、その感情を打ち消すかのようにスプーンで一色に染め上げていく。

「お待ちどう様です。お嬢様」

くすくすと笑いながら出来上がったオリジナルブレンドの紅茶を差し出す明。味にはそこそこ自信があったので、おかわりの依頼は彼の自尊心を大いにくすぐっていた。

「君には似合わないよ、それ」

「そうだな。本当に似合わない」

二人そろって、笑いあう。

「いつの間にこんなスキルを身につけたの？」

「スキルってほど大層なものじゃないよ。趣味が高じたってところかな」

自身のマグカップにも追加の紅茶を注ぎながら明が返答する。

「まあ、いいわ。おいしいものも飲めたことだし、続きを話すしますか」

「ああ、本題に入るとしようか。なぜ、俺の部屋にいたのか？」

「夜這い。というのは、半分冗談として。君が一人で無茶しないか、心配だったから」

「残りの半分は優しさだよな？ 某風邪薬みたいに。それに心配しているのは、こっちだって同じだよ。俺以上に無茶していたのはそちらだし、むしろ、ここに来てくれたのは好都合だった」

「心配してくれるんだ。それから、君はもう少し自分の発言に注意するべきだと思う」

少し赤くなった顔を隠すように、紅茶をすすする鏡。

（残りの半分が本気だ、と私が答えたらどうするつもりなのだろう？）

鏡は内心を言ってしまういたい衝動に駆られるが、臆病な理性がそれを邪魔する。

「夜這いに来たって言うのに、好都合なんて答えて済まないな。どうにも、注意が足りないな」

「ふふ。その方が、君らしいよ」

呆れるような笑顔で鏡がいう。

また、失敗したと明も苦笑する。

「さて、謎を解消していくとするか」

「敵の能力に関して、お互いに思うところを話しておきましょう。」

「いつても、互いに考えていることはそう遠くないと思うのだけど」

「そうだな。『フロアマスター』と黒木が言っていたことを考える

とあのフィールドけんない圏内の設定をある程度自由に変更できる能力とい

ったところが妥当だな」

ある程度自由に変更できると言うのはアキラの推測でしかないのだが、システムを完全に掌握しているのであればそもそも戦闘などせずにこちらのデータを抹消すればいい話だ。わざわざ本人が出向いてきたのは単にサディストか狂人という可能性もあるが、そもそもできないと考えるのが妥当な線だろう。

「その範囲で勝敗の条件を一般的な時間無制限のサバイバル戦から、時間制に変更したと考えられるわね。あと、私たちの出現位置に関しても、相手が操作できるかランダムといった感じでしょね」

「出現位置がばらばらなら、追加の人員を雇やとう意味はなさそうだな。数が多ければいいと言うものではないが」

「そうね、合流するまでに複体に阻まれることになるでしょうし半端な強さの人間では死ぬだけだね」

「複体の方は『支配者』ドミネーターの能力か。無制限に出てくるように思えたが、同時に出てくるのは本体を含めて六体までだったな」

「それ以上出て来ない、という確証はないけど使ってこないと言うことは出来ないと考えてもおかしくは無いわね。希望的観測でしかないけれど」

「だが、俺たちがやっていることだって結局は希望的観測なんだ。

今更、偶然や憶測が一つ増えたって大して変わらないさ」

「小さな偶然でもたくさん集まればそれは十分奇跡といえるさ。さて、ブリーフィングはこんなところかな」

「ああ。決戦は明日。今日は、こんなところしよう」

「そうね。では、私は君の部屋を借りることにする。お休み」

どうやら鏡は泊まっていくつもりらしい。明日、作戦行動を共にすることを考えれば効率的ではあるが、あまりにも無防備な態度ではある。

「はあ、わかったよ。俺はリビングのソファで寝るから勝手にしろ」
そうして、夜は更けていくのであった。

外部の騒動から時間が経ち一段落した今、水月は考えていた。

仮想空間上では、腐敗や成長ふはいという概念が存在しないために汚れることは無いのだが、毎日同じ服は女の子としてはいかなものかと
「これはこれで、すごく可愛いんだけどね……」

月明かりとガス灯のぼんやりとした明りに受ける洋館のテラスには、白いドレスの少女と一人の黒服の男がいた。

少女こと水月は例によって、木製のラウンドテーブルでゆったりと紅茶を口に運ぶ。

「どうなされた、我が女神よ」

「ちよつとね。それから、私はあなたに崇拜されたいとは思っていないよ。できれば、水月って呼んで欲しいんだけど。だめかな？」

「望むとあらば、答えましょう。水月様」

スーツ姿で恭しく礼をしながら黒木が言う。

「水月様っていうのも何か違うんだけど。まあ、いいか」

男こと、黒木智樹がこういう人物であることは、大分前から理解していたのでそれをたしなめることは諦めていた。表面上は、狂っている人物にしか見えないが、アビリティに『共感シンパシー』によって内面がある程度理解できる彼女には、今の彼をただの狂人と断定することができないでいた。

「なんで、私を殺さなかったの？」

「神を殺すことなど、誰にできませんようか」

水月が、彼の統括とうかつするエリアに侵入したあの日。

彼の目には、本当に神が舞い降りたように映っていたのだ。

そのとき既に半狂人であり理性と狂気の狭間で揺れ動いていた彼であつたが、彼女の前では幾分理性的であることができていた。そういう意味でなら、彼女が彼にとっての女神であるというのは間違つてはいなかつた。

「今日浸入してきた人たちは、どうなつたの？」

少し大きくなつた声で水月が質問する。彼女にとって、他のことなど大した意味を持つていなかった。

「撃退しておきましたが、又、来るかもしれません。そのときは、どんな手を使つてもあなたをお守りいたします。我が女神よ」

自身が原因でここに彼らが来ているとは考えもしないで黒木が言う。そして、そんな彼に死ねなどと水月が言うことができるわけも無い。先程言つて、もう彼女のことを女神と呼んでいる彼にどこまで理性が期待できるのだろうか。

それでも、ときたまやってくる海賊連中から守ってもらつてという側面もあるのだ。そして、ここに閉じ込められてこそいるが、彼らに捕まることや殺されることに比べれば、現状は破格の待遇だつた。

「できるなら、彼らとは殺し合わないで」

結局、水月の口から出てきたのはそんな言葉だつた。

行動を共にしたテロリストと人質が犯人と結託するという心理に近いのかもしれない。いっそ、彼が乱暴に扱ってくれば恨むこともできたのだろうが、そんな気持ちは沸いてこなかつた。

「可能な限り努力はします。しかし、手加減してどうにかできる相手ではないとだけ、言っておきます」

自身を神と言いながら、限界があると吐露^{とろ}している彼は、結局は人間なのだろう。

「結局、あなたは何を望んでいるの？」

それは、水月の心にふと沸いた疑問であつた。

「愛ある死でしょうか？」

それだけ言つと黒木はその場から消え去るのだった。

これは自分の過去の夢だ。

そうであると明がはつきりと解かるのは水月が彼の隣にいたからだ。夕暮れの校舎、制服姿の寝ぼけた彼を揺り起こす声が聞こえる。

「そろそろ、起きてよ。もう、放課後だよ」

学校指定の紺ブレザーと白いミニスカート姿の水月が明を揺り動かす。

「そんな時間か。どうせ起こすならもう少し早くして欲しかったんだが」

「ふふ。寝顔がすごく可愛かったので、ずっと観察させてもらいました」

照れるように笑う水月は小動物を思わせる。明としては、自分の寝顔なんかよりも彼女のしぐさ一つ一つの方が余程可愛らしいと思っていた。

「なににせよ、起こしてくれてありがとうな。帰るとするか」

「本当に仲がいいな、君たちは」

同じく学校指定のブレザー姿の少女、神代鏡だ。

退屈そう後ろに机に腰掛けていたが、明が起きたのを確認すると机の上に横になつていた黒いカバンを持ち上げる。別段、彼女は視力が悪い訳ではないのだが、掛けているとなんとなく知的に見えるという自論からこのときは眼鏡を掛けていた。

「なんだ鏡もいたのか。律儀に待っているのはいいが、それだと親切なんだか不親切なんだかわからんぞ」

寝起きの頭を動かしながら伸びをする明。

「なに、新種の生物を観察する課題があつてね。親切心とは関係なく、観察しなくてはならなかったのだよ」

机から降りて、大げさに言う彼女はどこか楽しげであった。

「水月に遠慮なんかしないで、起こせばよかったのに。友達思いの奴だな」

多少毒が効いた発言ではあったが、彼女なりの冗談であると理解している。明としては特に気にはならなかった。

「そうだった気遣い^{きづか}だったとしても、言わぬが花と言うものだよ」

「それもそうか。行こうぜ」

「ああ。行くとしよう」

そういつて鏡と明は教室を後にする。

「もう、私を置いて行かないでよ」

そして、最後に取り残された水月が白いミニスカートを揺らし追い掛けるというのがいつもの流れだった。

「今日は平治がセツトじゃないんだな」

ぼんやり歩きつつ明が言った。

「君ではあるまいし、いつも一緒にいる訳で無いよ。何でも、結婚するという話らしい。しかも、相手は社長令嬢とのことだ」

これに答えたのは鏡。

「平治君、もてもてだね」

そして、最後に様子をうかがいながら言葉を選ぶのが水月だった。

水月を真ん中に、左右にそれぞれ鏡、明という並びで季節はずれの桜並木を歩く三人。季節になればなかなか見ごたえのある景色なのだが、校門から校舎までの距離がやたら長いので学生からはあまり人気がない場所でもあった。

「相変わらずトゲがある言い方だな、鏡」

「なあに、ただの愛憎表現だ。好きなように受け取ってくれたまえ」

「鏡は本当に、素直じゃないんだから」

苦笑しながら水月がいう。鏡は素直じゃないというよりは、単に天邪鬼なのかもしれないが純粋な彼女にはそう映っていた。

「愛情ではなく、愛憎っていうあたりが実に鏡らしいよ」

「人間の感情は、愛だけではできていないよ。かわいさ余って憎さが百倍などという格言ができてしまっているくらいだ」

「鏡は、難しく考えすぎているよ。私は、好きなら好きでいいと思

うよ」

姉が妹に教えるかのような口調で、水月が鏡に答える。

「逆に、水月は単純すぎると思うぞ。少しは、鏡を見習ってみたらどうだ」

「そんなこと言われても、難しいことはわからないよう」

「明も、あんまりいじめてやるな。かわいそうじゃないか」

「いじめの元凶がそれをお願いしますか！　で、何で俺を待ってたんだ？」

「何、ガーディアン討伐をしようと思ってね。当然、参加してくれるな？」

「ガーディアン討伐か。腕が鳴るな」

早々と進路を『電脳技術研究所』のに決めて暇を持て余していた十二月、明としてはこの提案は渡りに船であった。

「緊張する分を差し引いても、格下相手のミッションだ。腕など鳴るわけが無いだろう」

そういう鏡の声も楽しげだ。

三人が通うのは、最新技術を試験的に利用した実験校の宗光学園だった。ここは、仮想における士官学校的な役割を果たしている電研に対しても多くの人材を輩出している学校であった。そんな学校に通う彼らとしては、ガーディアン討伐ミッションはちょっとした冒険のつもりであった。セーフティがあるエリアでならば、ゲームとしての『GENESIS』ならば、彼らは既に軍人と大差ない水準に達していた。

もっとも、仮想の軍隊は、現実の軍隊とは異なり寄せ集めの人材が形式的に構成している組織なので、こうした学生やゲームのヘビーユーザーなどに対して実力の逆転現象がしばしば起きていた。仮想の治安維持が目的としているが、実働部隊以外は大した戦力では無く、仕事をしているという事実のみが重要なのであった。

「……吊り橋効果」

ぼそりと、水月が何かつぶやくが小さすぎて聞き取れない。

「やっぱり、命懸けは嫌か？ 無理強いはいしないぞ、水月」

「違う、違うよ。わ、私も参加するよう」

慌てた様子で話す彼女の姿も、いつものことかと受け流す二人。水月は頭が悪い訳ではないのだが、行動が論理的というよりは直感的であるためにいわゆる天然であると感じられていた。

「よし、全員参加だな。決戦は、明日だ」

興奮を隠しきれない様子なのは、明。

「ただの思い出作りよ。決戦なんて大したものではないわ」

落ち着いた様子、でも顔が笑っているのは、鏡。

「みんなが無事に作戦が成功しますように」

不安を抱えながらも、それ以上の期待を抱いているのが水月。三者三様といった様子で意見を述べ、並木を抜けそれぞれの家路を目指すのであった。

「手紙か」

寝ている間にカバンの中に入れられたのであろう手紙を光に透かす。表にも裏にも、名前は書いていなかった。内容は、よく言えば少し詩的な愛の言葉と呼び出しのメッセージ。かなり意地悪く解釈すれば痛い文章と果たし状。とりあえず、後者の方であると思うことで心が少し軽くなった。

「明日、放課後、待つ、校舎裏で、か」

ポエムを解読して、事実だけ読み取るとそんな内容だった。愛の告白だと考えると胃が痛くなるが、一昔前の不良漫画にあるような呼び出しだと思うとかなり落ち着いた。今時、こんな古風なやり方をしてくる人間は一体どんな姿をしているのだらうと思いを巡らせてみるが答えは出ない。

夢の中のぼやけた思考は、次の断片へと意識を映す。

上の空、という表現が適切な顔で明は授業を受けていた。

一体どこの誰が、何の目的で、あんなものを渡してきたのか。答

えの出ない思考の迷宮で永遠と時間だけが過ぎていく。実際には、答えが解かかっていてもそれを認めたくないからこそ別の答えを探しているのかもしれないが、手紙を出してきそうな人物に心当たりは無かった。

気が付けば、放課後。

約束の時間が迫っている。

ふらふらとした足取りで、目的地を目指す。

その日一日、そんな調子の彼を仲間は大いに不振がっていた。それでだませたのかは解からないが水月と鏡にはガーディアン討伐が気になって浮ついてしていると説明してあった。

「PIIT全盛の時代に手紙なんて酔狂すごきやうなことをするやつが、この学園にいたとは……」

手紙の内容としては告白などを期待したいところではあるが、明には自分自身とその状況を結びつけることが出来なかった。そもそも、相手がわからない。何かの罰ゲームに巻き込まれただけという可能性もある。

「何にせよ、確認しないと事実はわからないか」
意味のない自分自身の推論を捨て、腑ふ抜けた顔をたたいて気合を入れる。

そうして辿り着いた目的地である、校舎裏。

そこにいたのは、鏡だった。

「まさか、鏡だったのか？」

「なんのこと？ 私はここに用があっただけなのだけど」

落ち着いているとも、照れ隠しとも取れるような言動だった。

「用事、って俺が関わってくる用事じゃないのか？」

（鏡ではない？）

「私は、掃除当番だったからごみを燃やしに来ただけど。むしろ、君が私に用があったりするわけではないよね？」

校舎裏は、木々が豊かで確かにきれいな場所でもあったが、その一角には焼却炉しょうくろがあり人氣が無い場所でもある。そして、鏡の言動

が誘導ではないとするのなら。

「ここにいるのはただの偶然だよ。色々あってね」

緊張が解けて疲れが噴出した明は、手近な木に寄りかかる。

「なら、色々ついでにサボりに付き合ってくれと嬉しい」

そういつて、鏡が木に寄りかかる明に近付く。しかし、踏み出した一歩は石にぶつかって明に向かい倒れることになる鏡。明の声を鏡の唇がふさぐ事となり、彼女の体は明にぶつかり事なきを得る。

しばしの沈黙の後、二人は離れるが意図せず向き合うことになり。

声も無く、呆然と見つめあう短い時間。

彼女の黒く澄んだ瞳に、引き込まれそうになる。

「……すまん。だが、君にとって幸運な偶然だ」

「……おう、そうだな」

鏡の悪戯っぽい笑顔の後に、思いきり笑われた。

ぼうつとした明の耳に駆け出すような足音が聞こえる。呆けた意識の中で、何かを追うように走り出す鏡の後姿を見送った。そして、結局その日は手紙の主と明がそこで会うことは無かった。

よじれるように場面が切り替わる。

大切な何かをすっ飛ばしているのかもしれないが、夢などと言うものに整合性を求めること自体がナンセンスと言うものだろう。今思えば、彼らにとって因縁の場所ともいえる国内ブロックのSCS

511でそれは起きていた。戦闘の傷跡で、更地になりつつある市街地で交戦をする四体のAA。

そこにいる明は意識を切り替えて、決戦に臨んでいた。

三対一という状況ではあるが、相手は決して弱くは無い。

明の正確な射撃を見切っているとでも言うような動きで全て回避し、三人がかりの近接戦闘ですら確実に勝てるという保証は無く。プレッシャーを感じていることを差し引いても厳しい戦いだっただ。

そして、油断すれば死が待つという現実。学生的身である彼らには少々荷が重かった。

AIが操作するガーディアン、アークエンジェルは良くも悪くも機械的な動きをしていた。それは先読みがしやすい反面、こちらが操作を誤れば、正確な攻撃で的確に破壊されることを意味していたからだ。

「水月はそのまま支援を頼む、しばらくは俺と鏡が引き付ける」

オーブン回線ごしに指示を飛ばす明と鏡は、フェアリーとウィザードで挟み撃ちにする形でアークエンジェルと近接戦闘を重ねる。同士討ちを避けるために距離を置いて隙をうかがうのは水月が駆る白いウィンディーネ。

ウィザードが剣と電気を武器として扱うAAであるように、ウィンディーネは水を自身の剣や盾として扱う機体だ。AAの基本的なデザインは、水で作られた巫女^{みこ}とでもいったところだろうか。どこか和服を思わせるひらひらした装束^{しょうぞく}に、幾重もの水のヴェールのような武装を纏^{まと}う姿は、踊り子といった方が近いかもしれない。

踊るような華麗^{かれい}な動きで翻弄^{ほんろう}しつつ、時に盾を形作り攻撃を防ぎ、剣や槍を以って攻撃をする水月。

三角形のフォーメーションを基本とした三人の連携は決して悪くは無い。途切れない攻撃が繰り出されてはいるが、それらはことごとくいなされ避けられていた。

「事前情報よりも、かなり強いようだな。どうする、明隊長」

こういう余裕が無いときは、鏡の軽口が精神を安定させてくれる。いらだっていた思考を冷ましあえて大きな声で返答する明。

「隊長は止める鏡。そうだな十秒後に時間差攻撃でも仕掛けてみるか。カウントダウンをセットしてくれ。タイミングをずらして俺が仕留める」

「了解したよ、明」

「了解した」

視界の脇に投射されるカウントダウンの数字が時を刻んでいく。そもそも、二体が両サイドから攻撃して、残る一人が常に背後を取る布陣であるにも拘らず相手^{かかわ}が未だに破壊されていないという現状

がイレギュラーなのだ。時が経つにつれ、戦いの興奮は次第に薄れていき、逆に死の恐怖が頭をよぎる。

早く敵を倒して、終わらせたいという焦りが生まれていた。

カウントがゼロになり、両サイドから薙ぎ払われる水の槍と大剣。二人掛かりの必殺の攻撃を宙返りするようにかわしたアークエンジェルを叩き伏せるようにフェアリーが剣を振りかぶる。上下逆さまに向き合うフェアリーとアークエンジェル。

飛び掛るように切り付ける一閃は、ひらりと身を交わされる。

即座に反撃へと転じた天使の突きを、もう一本の剣でいなすフェアリー。

しかし、いなした腕ごと突きから蹴りへの連続技で吹き飛ばされる。真横に吹き飛ばされた直後に、ミカエルが跳躍。

弓を引くように剣を構えたアークエンジェルが、眼前に迫る。

直後の死を予感し、明の体が硬直する。

機械であるＡＩからは殺気が感じられないが、それでも恐怖に身がすくむ。

（死ぬ、こんなところで）

明の目前に迫る銀の大剣。

それは、断頭台の刃のように無慈悲に迫る。

「そんなこと、させない《Blue javelin》（青い投槍）」

ARMによって高速かつ自動化された動きが彼女の意思を反映して再現される。無意識に動いた水月の体が槍を投げ、アークエンジェルの背後から突き抜ける。そして、直後に響く戦闘終了を告げるシステムアナウンスの機械音声。

【THE END（戦闘終了）】

そして、視界がぐにやりと歪む。

「……明の馬鹿」

小さくて明には聞き取れなかった声を最後に彼女は消えた。そうしている間に水月の位相が変わり仮想の奥へと取り込まれた。もっと

も、そのときはそんなものが存在しているとは明にも鏡にも理解は出来なかったのだが。

取り残された二人が何かを叫んでいるが、言葉としての意味を成さない。

視界が崩れるようにぼやけていく。

そう、これは夢の終わり。

そうして、明の意識は現実へと引き戻された。

「……鏡か。懐かしい夢をみたよ。俺たちの新しい始まりの日だ」

「あの日は、日常が終わった日でしょ」

「失ったものも多いけど、同時に得たものもあるだろ」

「そんなもの……」

ないと言い掛けて、鏡が口ごもる。自分自身の本当の気持ちに気付いたのは、あの日があったからなのだ。そういった意味でなら、何も無かったとは言い切れなかった。

「俺は、何も無い日常ってやつが本当に大切なものだと理解したよ。当たり前前に繰り返すと思っていたことが、次の瞬間にはなくなってしまうかもしれないものなんだと痛感させられた」

「そうね」

一瞬、自分の考えを読まれたのかと思ったが、見当違いの返答に鏡は安堵する。

「さて、行くでしょうか。俺は、そのソファから入るとする。鏡も好きなところから勝手に入れ」

朝日を背に明が覚悟を決める。

気合を入れるために顔を二、三回ほど自分で叩き、ソファに座る。戦闘は毎回懸けではあるが、実戦でここまで相手と実力が伯仲したのは始めてのことだった。積み重ねてきた自信、改めて実感した恐怖、相手に打ち勝ちたいという興奮、そして、プレッシャーから来る緊張といった様々なものを胸に彼は仮想へと突入する。

《Access》のコマンドを思考デバイス経由で転送し明は決戦

の地へと向かった。

「こうして見ると眠っているようにしか見えないのね」

鏡の黒く澄んだ瞳が明を見つめる。

ソファに座り、意識を仮想に沈めた彼は死んだように動かない。そもそも、この状態を現代の医学において植物人間とすべきか生きていると定義するのは不明だ。動かない明の唇を彼女のしなやかな指がなぞる。

「これくらいなら、許されるよね」

それは死を賭す代償としては安過ぎるものであり、しかし、彼女にとっては至高とも言える宝物だった。

静かに彼女は明の唇に顔を近づけさせていく。

ゆっくり、彼女のにとっては永劫^{えいこウ}とも思える時間を掛けて、互いの距離が縮まっていく。

「気付いてくれない君が、悪いんだよ」

鏡の震える唇が、閉じられた唇に重なる。

触れるような、ささやかな、それでも彼女にとっては大きな意味を持ったキス。

息が熱い、胸が苦しい、心が痛かった。

しかし、それ以上の喜びが鏡の感情を埋め尽くす。

静寂が訪れるが、彼女の心臓はうるさいくらいに鼓動^{うむどう}している。

「……あなた一人だけには、しないから。《Access》（接続）

」

鏡は、大型のソファに座る明の隣に腰掛け意識を仮想へと没入させる。

決意を胸に、最後かもしれない戦いへと向かった。

1 - 3 Opt (後書き)

まだだ、まだ終わらんよ。(9月8日最終更新。)

1 - 4 S t a r t (前書き)

やっとたどり着いた答え。でも、これは終わりではない。きっと新しい始まりなんだ。

「今日くらいは、認めてあげる」

「ごめんね、鏡。でも、嬉しいから」

1 - 4 S t a r t

0 4 S t a r t

明の視界が一瞬、白い光に包まれる。

【MISSION START（任務開始）】

視覚エフェクトと同時にシステムのアナウンスが響き渡る。
開始地点は、前回とは異なり石畳の床。

視界を埋め尽くすのは、無数の白い石柱とキューブ状の石。それらが紡ぎだすのは視界の果てまで連なる螺旋の階段。そして、それ自身が巨大な塔の内部であつた。レーダーの反応によれば黒木はこの塔の頂上にいる。

「登ってこい、つてか。本当に神様気取りだな」

垂直に加速し、塔を一直線に上昇していくフェアリー。

視線の先には、出現しつつある三体のケルビム。モザイクのようにばやけていたA Aの輪郭が徐々に形となっていく。ヒット判定が出現するタイミングを見抜き、プラズマライフルとリニアライフルをしこたま撃ち込んでいく。しかし、こんな程度で終わってくれる敵ではなかった。細い塔の内部でさらなる増援が五体出現する。

「出し惜しみはしない。何体でも、何度でも、撃墜してやるよ！」

脇の下に隠された二本のサブアームを展開して、四本の腕に二本の剣と二丁の銃を構え文字通り阿修羅の如く敵に向かう明。

背面部のブースターをさらに吹かして、上昇速度を上げていくフェアリー。

人間の反応速度の限界ともいうべき速さで戦う彼は、鬼神あるいは、羅刹^{らせつ}とも言うべきだろうか。右から左から次々と出現する増援を、切り捨て、打ち付け、叩き伏せ、撃ち抜き、破壊し葬り去る^{ほうむ}。

後方から迫る敵も何体かいたが全て背面撃ちでこれを撃破する。ポ

ツプアップの瞬間と初動のモーションさえ視認できれば、この程度のことは不可能な芸当ではなかった。

フェアリーを駆り明は目の前に守り手がそもそも存在しないかのようになただ一直線に進んでいく。一分と立たない間に撃墜した数はもう何十体になるだろうか。

「お前が、本体かあああつ！」

正面にいた複体を唐竹割に叩き切り、その先にいるケルビムを目指す。

もう何体破壊したのかも覚えていなかった。

視界の先には頂上が見え、終わりが見えなかった戦いも一段落を迎える。塔の側面にあつた空洞を抜けると狭く薄暗い視界が一気に開け、神の座とも言うべき場所に辿り着く。塔の頂上に向かい迂回してそこへと降り立つ。

そこにいたのは、探し求めていた敵。

白い神の化身、あるいは仮想でならば本当に神なのかもしれない。

「歓迎しますよ。あなたこそが、私の求めていた神の心を奪う敵いっ！」

「ちっ」

（予想したタイミングよりも早い！）

こちらの動きに合わせ、奇襲される形で接敵する。

^{みみざわ}耳障りな金切り声を上げて、ケルビムが踊り掛かる。

^{つばせ}罅迫り合いになる形でフェアリーの持つ二本の剣とケルビムの持つ大剣が交差すると中空で火花を散らして白煙を上げる。ギリギリと音を立てる剣ごと円形のフィールドの内側に押し込まれるフェアリー！。

「ど、けえええええつ」

弾き飛ばすように切り払うが、受け止める大剣の重心を完璧にコントロールして身を翻す^{ひるがえ}ケルビムに攻撃の衝撃を完全に殺される。正面に二丁の銃で追い討ちするが、その時には既にこちらの真横にいたケルビムがフェアリーをフィールドの内側へと蹴り飛ばす。

「くそっ」

フェアリーは、剣を地面に突き立て勢いを殺す。大地に爪跡を残し、その場に踏みとどまりつつも二丁の銃で射撃を続けるフェアリー。時に交わし、時に弾丸を弾きケルビムが高速で迫る。

塔の頂上にある円形闘技場のような場所で両者は殺し合う。

「さあ、さあ、さあ。私の掌の上で、踊り狂って死ぬがいい」

自身に迫る弾丸を叩き落とし、切り払い、交わして素通りするかのような気軽さで近づくケルビム。連射性能に乏しいライフルタイプの武装が裏目に出た形だが、そもそもこれだけハイレベルの相手と戦うのであれば、武装の相性など大した意味を成さないだろう。

「ったく、強さも狂ってやがるのかよ。ふざけているのは、脳味噌だけにしておけ」

そんなことは、誰よりも自分自身がよく解かっていた。それでも、やりきれない思いが明の思考にちらつく。

「神を侮辱した罪、その身で受けるがいい。今度は時間切れなどで逃がしたりはしませんよ、確実にあなたを殺します」

半狂人の黒木の妄言をただ聞いているのもいらだただけなので、オープン回線越しに話しかける明。あまり期待はしていないが、上手いけば相手の注意を逸らすことくらいはできるかもしれない。あるいは、正気に戻すことができるのかも考えてしまう。

一瞬で縮まる距離を刹那にすべく、機体を相手に向けて加速させる明。明確な策があるわけでは無く自身の力を信じて突進する。

刹那に肉薄した両者は、互いに剣を振る。

巨大な石柱に囲まれた円形フィールドの中央でぶつかり合う両者。半身に構え、左で突き出した一本目の剣を打ち落とさせ、返す手首で首を狙う。大地を蹴って左に飛んだケルビムの頭部を掠める斬撃。敵の回避運動中に右の剣を突き出すが、これも剣で弾かれる。しかし、突き出した右腕部から伸びたショットアンカーが敵の装甲を捕らえる。

だが、引き寄せる瞬間のワイヤーの硬直時にこれも切断される。

（そう、この瞬間を待っていた）

攻防の中で、明は相手の行動が確実に読めるタイミングをうかがっていた。引き寄せられてできる大きな隙を嫌うのであれば、力が釣り合う瞬間に合わせ確実にそれを阻止しようとする。そして、その瞬間だけは先読みができる。勝利を確信してサブアームに携えたりニアライフルとプラズマライフルを解き放つ。

ワイヤーの切断と同時にこちらの首をはねる軌道で迫る大剣を、バックステップでかわして離れる瞬間から同時に火を噴く二つの銃口。「天使という偶像が神を名乗るな。砕ける」

ガンスモークと砂塵で視界が白く染まる。

弾丸が放たれる瞬間は、互いに肉薄していた。意識レベルで反応ができていたとしてもAAの動きは仮想の中では実体を持つと言う制約を受けるために実質的には不可避の攻撃である。

「破壊までのタイムラグ、あるいは生存か」

勝利に酔いたいのが、しかし、フィールドやシステムに対して介入できる相手であるのなら戦闘終了時のビジュアルエフェクトが発生しない可能性も考慮して様子を見なければならぬ。

白煙が揺らぎ、霧散していく。

次の瞬間に何体ものケルビムが自身を通過したかのような錯覚に陥る。

（なんだ、この殺気は）

反射的に突き出した二本の剣。

白煙を突き抜けて振り下ろされる剣。

派手な衝突音を鳴らし、吹き飛ばされるフェアリー。スモークが消えたフィールドの中央では、赤々と燃え立つ剣を手にケルビムが剣術で言うところの残心を取り構えなおす。

「神は死なないのだよ。偶像だと言うのなら、私を破壊してくれたまえ。あはは、あは、あははははははは」

狂笑を上げ、黒木の駆るケルビムがゆっくりと上昇する。薄っすらと白煙を上げるその姿はつい先ほど造りだされたかのようにさえ映

る。

光を背に見下ろす神と、その影から反逆する被造物。

それは、キャンバスに描かれた一枚の絵画を思わせる光景であった。
「いよいよ、絶望的だな。鏡と合流する前に殺されそうだな」

現状に対して明の考えた可能性は、そもそも自分が相手にしていたのが最初から複体であったというもの。そうでないのならば、超人的な反応速度で全て防いだといったところだろうか。

乱れた体勢を立て直し、ケルビムを見上げる。

「鏡？ ああ、もう一人の方なら私の人形たちと遊んでいますよ。どうしてなかなか奮戦しておられる」

先程から複体が出現しないのは、おそらく彼女が引き受けているのだろう。

とはいえ、複体を任意の地点に出現させることができるのであれば、どんなタイミングでこちらに増援として現れるのかはわからない。不意のポップアップを警戒しないわけにはいかなかった。

「さあ、足掻いてください。醜くもがき、この私にその命を実感させるのです」

「まるで、あんたが死にたいみたいだな黒木智樹」

「願わくは、私に誇り高き死を、愛のある世界を与えてくれたまえ。この戦いは、神に捧げられる聖なるものなのだよ」

「言われなくても、くれてやるよ。黒木いつ！」

口を動かしつつ、武装や機体の設定を変えていく。

二丁の拳銃をホルスターに収め、リニアライフルをオートからマニュアルのリボルバータイプに変更する。この設定では、単純な操作を自分で行わなければならないが、瞬間的な連射速度はオートモードの比ではない。

サブアームを収納して意識を全面の敵のみに集中する。二本の剣を掲げ天上のケルビムへと向かう。敵に近付くにつれて視界が徐々にぶれ遠近間を失っていく。

「屋気楼か。さっきは、そもそも攻撃した場所にいなかったってと

「こか」

「ご名答。くくく、私にここまでさせた相手は本当に久しぶりですよ」

トリックを一瞬で看破かんぱされたと言うのにそれが楽しくてしょうがないといった様子で、黒木は話す。そして、明の目には幾重にも重なり合った虚像が歪んで見えていた。

有視界による戦闘を諦め、即座に対物センサーを起動。

ケルビムが正面にすることがわかるが、その情報だけでは遠近感を失って高速接近している現状では致命的である。ケルビムの次の行動を防御ないし回避運動へと誘導するべく左の剣を投擲とうてき。

半瞬後に右の剣を投げ飛ばす。

空に響き渡る、金属同士の衝突音。投げつけられた剣を弾き攻撃後の際に迫るケルビム。このタイミングで自身の本体よりも前に幻影を配置する意味はない。

幻影を配置して攻撃タイミングをずらすことはできるだろうが、残された射撃武器によるろくに狙いもしない射撃であっても、まぐれ当たりをさせる可能性をわざわざ作るなどしないだろう。

つまり、今このときの明の正面にいるケルビムは本体である可能性が高い。

直後の死を確信して脱力する明。

だが、それは諦めでも絶望でもなく希望への挑戦だった。

「俺は、諦めが悪いんだよっ！」

《Double strike》（二重攻撃）

発言する時間すら惜しい、一瞬の思考と同時に肉体は的確に動きを再現する。瞬時にホルスターからリアライフルを取り出し、撃鉄けきてつを起こし引き金を引くと同時にさらに撃鉄を起こし銃撃を重ねる。

響く銃声は一つ、しかし、放たれた弾丸は二発。居合いで鞘からの抜刀の方が単に刀を振るうよりも早いのも同じ要領で、構えからモーションを起こす方が全体としての速度は上昇する。

神速の攻撃がついに敵を捉える。発射音と同時に着弾音が打ち鳴ら

され、大きく剣を振りかぶったケルビムが爆発したかのように吹き飛ぶ。着弾の白煙に視界が白く染まる。
そして、静寂の中で耳に響く音が聞こえた。

（無力な私は、せめて祈りを捧げよう。この演奏に乗せて）

水月はテラスに脇^{わき}に置いてあった大型の黒いグランドピアノを弾いていた。演奏している間は全てを忘れることが出来る彼女であったが逃避であるとは考えていなかった。

自身のすぐ隣で起きている現実はどう足掻いても変えられないものでしかなく、黒木が作った空間で響くこの楽器であれば、自分自身の存在を外部に認知させることが出来るかもしれないと考えた。

ピアノに走らせる指は、踊るように鍵盤^{けんぱん}を叩く。

彼女にブランクはあったが思考と行動が直結したこの空間では間違いないなど起こりようが無かった。文字通り思った通りに体が動くのだから。

「私は、ここにいます」

風に乗って、時に軽快なリズムが、時に切ないメロディが響く。陽光が照らす緑の陽だまりで水月は演奏を続ける。目を瞑^{つむ}ついても指は正確に鍵盤を打鍵する。すぐ近くに來ているのだろう、彼女には手に取るように感じられる彼らの鼓動^{こどう}に息づかい。

もう彼らが戦闘を始めて何分になるだろうか。

今回は、確実に決着が付くのだろう。

どちらから死ぬことによつて。

中度半端な決着などありえないのだ。

ならば、せめて戦いに祈りを捧げこの曲を贈ろう。そんな感情がミズキを突き動かしていた。そう、これはこれから現れる死者に対するレクイエムだった。

どちらが死ぬにしても、死者を送ることが間違っているとは思わなかった。あるいは、彼女のにとってこれは感情の前払いなのかもしれない。

黒木が死んだとしたら、それはつまり仲間との再会を意味していた。喜びの中で彼を労わる事など出来ないだろう。明たちが死んでしまった場合は、悲しみて何もすることが出来なくなっていることは容易に想像できた。

だから、彼女は演奏する。

生者ではなく死者のために。

「お願いだから、諦めないで」

耳に響く懐かしい音楽。

確か水月が奏でていたタイトルの無い曲。

「ここにいたんだな。すぐに助けるから、あと少しだけ待っていてくれ」

明は小さくつぶやくと、武器を構え再度臨戦態勢を取る。

「馬鹿な、この私が直撃だと。ありえない、ありえない、ありえない……」

どさりと地面に落下したケルビムの胸部には、深々と貫かれた跡が見える。戦闘中の機体へのダメージは精神へとフィードバックするはずだが、それ以上に自分が被弾したことがショックなのか、放心するようにありえないといい続ける黒木。

その周りでは、燃え立つように上がる白煙。そして、全身を赤く灼熱くねつさせたケルビムが取った次の行動は闘技場の大地に剣を振り下ろすことだった。

音を立て崩れ落ちる天上の大地。

突然の奇行に明は相手の意図を見失う。

（逃走？ 誇り高い死といった黒木が？）

僅かな迷いが後方に出現した一体のケルビムの攻撃への対処を遅らせる。空中から降るように落下してきた二本の剣を手に何とか斬撃を防ぐが、そこからの蹴りに対して無防備になる。

叩き落される形で、本体に追いつがる。距離が離れた一体には、プラズマライフルを浴びせこれを撃破する。落ちるように加速する眼

前には、新たに五体のケルビムが顕現し、その輪郭を明瞭にしている。こちらにケルビムが出現したのは、鏡が死んでしまった可能性を意味しているが、彼女の生死に関しては、信じるしかない。

どの道、今は眼前の敵に集中するしかないのだ。目指す相手は、紛い物の天使達の先にいる。

（時間稼ぎではないとするなら、逃走不能な場所での包囲網の形成か）

左右を石柱やレンガに囲まれたこの場所であれば、瞬間的な逃走は不可能に近い。

下へ下へと降下するケルビムの本体を追うべく、フェアリーはその速度を上げていく。いつ反転し攻勢を仕掛けてくるか、しかし、近付かないことには倒すことはできないという状況への葛藤はあった。それでも、死の恐怖を押し殺し地面へ激突すれば確実に死ぬであろう速度へと明は加速していく。五体の敵を素通りし目指す敵へ、あるいは、畏へと自ら踏み込む。

初動の違いか、縮まらない互いの距離を保ちつつ明は二丁の銃を構えドッキングさせて一つの武器へと再構築する。熱によって揺らぐ視界を補正プログラムで修正、照準をオートで合わせつつ、複数の項目を瞬間的に再確認する。

充填率が上昇するにつれて、背面で羽のように展開されていたブースターの燃焼が大きな蝶の羽ように広がる。

反応炉、出力上昇

充填率 88%

視界に投射されるマーカーがケルビムの本体へと重なる。伏せ撃ちの姿勢のまま降下するフェアリーの背後からは、追従するかのよう

に五体の敵が続く。

照準固定

充填率 98%

砲身が熱を帯び、大気が揺れる。視界の隅では、アルファベットと無数の数式で構成された文字列が認証されたものから続々と過ぎ去

っていく。

エネルギー還流完了

《All readiness》（充足）

充填率108%

僅か一秒足らずの時間で、無数の文字列と記号が頭の中を駆け巡り、認識される毎に処理されていく。

戦いの中で高揚する明の精神を表すかのように、フェアリーの翼の輝きが落下する動きに合わせ羽ばたくかのように燃え盛る。そうしている間にも、刻一刻と石畳の床が近付いてくる。

こちらの狙いに気が付いたのか、ケルビムがその身を反転させフェアリーへと迫る。

赤く燃える剣を振りかぶり、右へ左へと狙いを外す。

充填率118%

電気を帯びたりニアレールガンの砲身加熱が徐々に過熱し、オーバードライブとエラーメッセージが視界に表示されるが無視して充填率をさらに増加させていく。

（一発だけでいい。今度こそ確実に仕留める）

両手に構えた銃を左手に持ち替え、右手には剣を構える。

オートに任せていた照準にマニュアルで補正を掛け、マーカーを再度重ねる。

充填率128%

触れる程の距離にまで相手を引き付ける。

（まだ、もう少し）

充填率138%

砲身が熱を帯び、その熱が空気を伝わる。

振るう剣の内側にケルビムが潜り込み、右腕に向けて刃が迫る。

（ぎりぎりまで引き付ける）

突き出した右腕に熱を帯びた刃が突き立てられ、装甲が切り裂かれると内側から燃えるような痛みが走るが構わずに引き金を引く。

（今だ！）

ゼロ距離まで密接した銃口を中心に、中空に薄く光の輪が重なる。

直後、光の矢が塔の中を駆け抜ける。

すさまじい衝撃波が、空気を裂き、音を越えて突き抜ける。

ケルビムが防ぐ動作に移る間も無く、音速を優に超えた弾丸がその肉体を貫通する。

光を思わせる速度の弾丸が通過した直後に、止まっていた時が動き出したかのように崩れ行くケルビムの機体。視界に映し出される光景は破壊と創造を体現するかのようなある種の美しさすら垣間見える。

中空に光が迸り、目の前で神の偶像が破壊されていく。

「……これで私も行ける、愛のある世界へ」

システムに死亡したと見做されたケルビムのヒット判定が消えた斬撃が機体を通り過ぎた直後に、ビジュアルエフェクトが表示される。

【THE END（戦闘終了）】

衝撃で吹き飛ぶよりも先に相手が死亡したという、その事実を再認識するがために強引に制動を掛け後方に向き直る。その視線の先では透過した天使の肉体がフェアリーの後方で無数のポリゴンとなつて霧散していく。

視界をさえぎるものが消えると青い空が覗く。そこには、このまま死んでもいいと思わせるような美しい景色が広がっていた。雲間から差し込む光は、神の啓示か死に行くものに対する祝福か。

目に映るのは、分厚い雲の隙間から指し込む光。レンブラント光線、あるいは、天使の梯子はしとも言われる自然現象が見上げる空に広がる。

その眩しさに、明は思わず手を伸ばす。

（ここで死んだら、行き先は天国か地獄か……）

落ちていく意識の中、機体は地面へと近付いていく。戦闘は終わっていても、肉体の延長であるAAが地面に叩きつけられれば、待っているのは死だ。敵を引き付け過ぎたことが完全に裏目に出てし

まっていた。

「全く最後の最後で詰めが甘いんだね、君は」

塔の下部にある扉を大剣で破壊して、傷だらけのウィザードが現れる。鏡のウィザードが迎え撃つかのようにフェアリーに対して剣を向ける。

「《Mag ic circle》（魔方阵）」

口頭で発せられた発動キーにあわせ、ぼろぼろの剣が空を駆け、フェアリーに迫る。

（裏切り？）

一瞬、そんな言葉が明の脳裏に浮かぶがばやけた意識では機体の駆動すらままならない。何も出来ないのならせめて彼女を信じることにした。明の眼前には、複数の剣を基点に浮かべられた淡い光で作られた星を象った魔法陣が浮かぶ。

そして、そこで彼の意識は完全に途切れた。

AAが方陣に包まれると急激に減速し空中に静止する。

「ふう。……お前が死んだら、何にもならないだろうが」

明を受け止めそういう鏡の声はどこか優しさに満ちていた。

「起きたんだね。明」

「ん、鏡か。起こしてくればよかったのに」

「何、君に恩を売っておくのもいいと思ってね」

塔の横手にある草原に二人はいた。そして、ここが入り口であると、『神の（ド）眼』^{アイ}を持つ鏡にはわかっていた。

目を覚ましたばかりで、まどろんだ明の頬^{ほお}を風がなでる。

吹き抜ける風が頬をなで、上を見ると鏡の顔が見えた。

「鏡がいるってことは、夢かそれとも死んじまったか」

大の字に横たわる明を見下ろし鏡が笑顔で答える。

「君は、死んでいると肯定して欲しいのかい？ それとも、これまでしてきたことが全て夢であったと言って欲しいのかい？ 生きているよ。私も君も」

「そうか、ならいい」

つられて明の顔にも笑顔が浮かぶ。

「それと、介抱してやっていた身としては礼の一つも欲しいところではあるよ」

「俺に恩を売りたいんじゃないのか？」

「礼儀作法と恩義に対する報酬は別問題だよ」

肩をすくめるようにして鏡がいう。

「それもそうか。ありがとう、助かった」

立ち上がり、礼をして明が答える。

「ふふ、では行くでしょうか。パスワードを起動してくれ」

「目の前まで来ていたか。準備がいいことで」

この空間を支配していた黒木を倒したことで、その支配権はデータを自動統合で引き継いだ明のものとなっていた。鏡が足踏みしていたのは、明が起きないことには前に進めなかったためだった。

「私の手柄だ。忘れないでくれたまえ」

パスワードを起動すると何も無かった空間に光り輝くゲートが出現する。

ゲートの開閉は、明がコントロールできるので鏡と一緒に通ることも可能となっていた。ぼやけた光の扉をくぐり、二人はついに目的の場所へと向かうのであった。

光の中を抜けるとそこには、穏やかな草原の風景が広がっていた。

朝日に照らされた木々、古風な洋館。木漏れ日を反射する小ぎれいなテラス。そこに佇み、ピアノを丁度演奏し終えた純白のドレス姿の少女。明と鏡の二人は、その美しさに一瞬自分自身が絵画の世界に入り込んだかのような錯覚を受ける。

「……水月」

彼女が目の前にいると言う事実を現実のものとするために小さく言葉をつぐ。明。駆け出したい、叫びたい、手を取って抱き締めたい。様々な感情が入り乱れて、結局出てきたのは彼女の名前だった。

「やっと、辿り着いた、ここまで」

既に再会を済ませた鏡は、明と違いあくまでも冷静だったがそれでも感慨深いものがあり目尻には涙が浮かんでいた。二人に遅れて水月が気付く。

「明、それに、鏡も。……夢じゃないんだね」

目元をこすり、目を凝らす水月の姿。くりくりとした彼女の瞳が二人を見つめる。

「現実だよ、これは」

「だそうだよ、水月」

一歩一歩踏みしめるように進む二人。その姿を見ると、堪えきれなくなつたように椅子から立ち上がり、水月は二人の下へと駆け出す。
「来て、くれたんだ」

涙ながらに走り出すミズキだが、動きづらい服装で慌てて駆け出したためか、草原で盛大に転んでしまう。

「「水月！」」

明と鏡の声が重なる。

「痛いよ、でも、でも、嬉しくて」

膝を付きその場に座り込む水月。目尻に浮かんだ涙は、痛みの所為ではないとわかってているがそれでも目の前の二人には見せたくなくて目をこする。そんなようすが微笑ましく思える二人は水月に近付き手を差し伸べる。

「急がなくても、私は逃げたりしないから」

「そそっかしいな、水月は」

笑みを浮かべ水月を待つ二人。照れた笑い声を上げて体を起こす水月。そして、差し出された二つの手を取り、彼女は明と鏡の首に手を回して二人を抱き寄せる。驚き戸惑うが明と鏡は二人で水月を支えてやる。

どちらかだけを選んだわけでも、どちらを選ばない訳ではない。

二人とも一緒にいることを選んだ。
それが彼女のした選択だった。

「ありがとう。私の大好きな二人」

そんな彼女の言葉に明と鏡は顔を見合わせ、答えた。

「どう致しまして、かな」

「当然のことをしたまですよ」

「やっぱり、鏡は素直じゃないよ。ふふ」

並んで立つ二人を強く抱き寄せて、微笑を浮かべる水月。

どうしようもなく嬉しくて、嬉し涙だというのは解かっている。

それでも、泣いている顔を見せたくはなかった。

「ねえ、明」

肩越しに語りかけるように水月が話す。

「なんだ、水月」

穏やかな声で答える明。

「これは、お礼だから」

唇と唇が触れ合う、両手で強く引き寄せられる。

「なっ」

突然の行動に驚いた様子の鏡からは、間抜けな声。

当事者の明は唇をふさがれて声が出ない。

「それと、宣戦布告かな」

いたずらっぽい笑みを浮かべて水月が言う。

自分が知らない間に何が起きているかはわからなかったが、直感的にこれが一番正しい対処法だと水月は思った。愛している、なんて言わせないで逆にこちらがお礼だといってしまえばそれまでの話なのだ。そうすれば、自分を助けるという目的とその対象を愛しているという行動原理が否定されるのだ。少なくとも、助けた時点で結ばれるという選択は無くなる。

つまり、三人の関係はあの日の時点にリセットされる。そして、恋敵の存在を知ってしまった以上、正々堂々と戦いたいというのが彼女の本心だった。

呆ける二人に水月は微笑みながら、言葉を放つ。

「明、設定の変更をお願い。戻って、安心したいから」

「ああ、わかった」

一瞬の間を置いて反応した明が即座に設定を変更する。

水月は眼に見えない楔^{くわい}からも、捕われていた関係からも解き放たれた。

「これを使うのも久しぶりだよ。《Return》^{リターン}（帰還）」

すぐに拡張現実を起動させ、コマンドをシステムに送りつける水月。

「ふふ、先に待っているよ。二人とも」

位相がずれ半透明になりながらミズキが言い、ポリゴンとなって霧散する。初めから最後まで彼女に振り回される形となった二人は、しばし見つめ合い大きな声で笑い合った。

「敵^{かな}わないな、水月の奴には」

「私の悩みもあんな簡単に解消してくれちゃって」

この半年で成長したと思っていた彼らだったが、まんまと出し抜かれた形だった。

「俺たちも、帰るとするか」

「そうね、夢が覚めないうちに。現実にしましよう」

「これが夢なら、覚めないことを願いたいかな。《Return》

（帰還）」

「それから、君に大事な話がある。詳細は、リアルで話すでしょう。《Return》（帰還）」

砂時計の砂が流れるように少しずつ、しかし、確実に風景が視界の中で解けてゆく。

すぐに振り向いて様子を確認するが、草原もその姿を消していく。

崩れ行く草原に、一陣の風が吹く。砂漠を通り抜ける、砂のように何もかもが崩れていく。

風景も自分自身でさえも、全てに平等に破滅が訪れる。あるいは、破壊ではなく創造なのかもしれないが。

そして、それは水月にとっては長い夢の終わりだった。

白い服を着た少女は、窓から射す光を目に感じる。

短く整えられていた黒髪は、すっかり長髪になっていて、見下ろす先にみえるのは、少しでも力を入れられればすぐにでも折れてしまいそうな細い腕。半年前とは大分変わってしまったが、それが今の水月の姿であった。震えるように手を動かし眠い目をこすり、這うように周囲を見渡す。ぼんやりと映る視界に浮かんでくるのは、簡素な部屋でそこにある全てが無機質だった。

白いベッドから起きようとするが、止めた。彼女の枕元には黄色いひまわりが飾られている。暖かく穏やかな時がゆっくりと流れていくように思えた。だから、今はこの幸せな時間がもう少し続いて欲しいと思う。目を閉じると、布団のぬくもりに意識をうずめていく。

夢見心地。

はつきりとは、していない意識だった。だけどそんなに悪い気分ではなかった。ぼんやりとした視界に、バスケットに詰まれた赤いリングが見える。

きつと見舞いの品の一つだろう。

「……アップルケーキ、食べたいな」

久しぶりに発せられた言葉は、自分がしゃべったのか、思ったことなのかいまいち判別が付かなかった。そして、半年もの間、何も食べていなかった彼女はいたく空腹であるというのは事実ではあったとはいえ、それはあくまでも感覚的な問題であり点滴などの処理により栄養は与えられてはいた。

きしむような体を起こし彼女は大好きな友人たちを待つことにした。そう、時間はいくらでも取れるのだ。そして、ここは病院だ。多少の無理はすぐに治してもらえるだろうという打算が彼女の行動を後押ししていた。

なにより夢のような時間はこれで終わりではなく、これから始まるのだから。

それは。現実と虚構（虚構）の狭間（狭間）に明がみる夢だった。そこでは、いつものように水月が現れる。

だが、その先はいつも繰り返される夢とは違っていた。

彼女が微笑んで、自分に手を振っている。

自分を呼ぶ声が聞こえる。

そこでその夢は、終わり目が覚める。

寝起きだからか、意識がいまいちと判然としていないらしい。明は、寝ぼけた意識を振りほどくように軽くストレッチして深呼吸をする。変な場所で意識を没入させていたためか、体中がきしむような感じがしていた。なぜ、こんなに硬くなっているかと言うと、実は鏡が抱きついていたために必要以上に負荷が掛かっていたからなのだが夢を見て少し出遅れた明にはそんなことを知る由も無い。

「あいたたた、体が石のようだ」

鏡がいらないところを見ると彼女は先に行ったのであろう。この部屋にはかすかな残り香を残すのみである。何も言わないでいなくなってしまう辺りは、むしろ彼女らしいとさえ思う明だった。

「鏡は、先に行ったみたいだな。俺も病院に行くとするか」

当たり前だが、返答は無い。どちらかといえばこれは自分自身への確認だった。そして、手早く身支度を済ませ彼は病院へと向かった。

「寝ているのかい。水月」

白いベッドに眠る親しい友人に、鏡が声を掛けるが反応はない。女神を思わせる美しい髪、同性から見ても嫉妬しっとしてしまう調った顔つきに思わず見とれてしまう。ベッドの脇に置いてあるパイプ椅子から立ち上がり彼女の頬をなでる。柔らかな頬は雪のように白く染み一つ無かった。

「ふふ、くすぐったいよ、鏡」

「起きていたのか。全く、人が悪い」

「二人を驚かせようと思って」

目を閉じたままで、水月が答える。

そんな彼女をばつが悪そうな様子でみつめる鏡が口を開く。

「色々と言って置きたい事があってね。喋らないでいいから、聞い

て欲しい」

そんな鏡にうなずき、先を促す。

「あの日のことは、偶然ではあった。でも、嬉しかった」
自嘲めいた声で話す鏡。

それをあくまでも落ち着いたようすで聞き入る水月。

「だけど、事情を説明する前にいなくなってしまうた水月も悪い。
少なくともあの時点では君たちの恋愛を応援するつもりだった」

一呼吸おいて続きを話す鏡。

静寂がどこか耳に優しい。

「そして、今度は懺悔だ。^{ざんげ}出し抜くつもりで明にキスをしてしまった。君に謝っても仕方の無いことかもしれないが、すまなかった」
しゅんとする鏡を笑顔で見守る水月。

そんな情けない顔を手で叩き気合を入れ直す鏡。

「最後に、水月。あなたの宣戦布告、受けて立つ」

しばしの沈黙。

そして、水月は笑顔で答える。

「受けて立つよ。鏡」

その声は、大きくは無くても決意の込められた確かなものだった。
だから、鏡も答えるように強く言い放つ。

「あの日の続きを始めましょう」

「そうだね。あーあ、鏡が男の子だった良かったのにな。私だったら、こんなかつこいい人を放っておかないよ」

「ありがとう。水月こそ、男の子だったら良かったのに……」

「それはライバルが減って嬉しいってことかな。ふふ」

そして、二人は涙ながらに笑顔を浮かべて抱き合った。

それは、友達との友情の回復の証^{あかし}でもあり、恋敵との戦いに対する決意の涙でもあった。

それから数分後、病室に向かった明の前には黒いスーツ姿の鏡がいた。扉の横に寄りかかり下を向く彼女の目元は、光の加減が少し

赤く見える。

「なんだ、見舞いの品もないのか。君は」

「それだけ急いできたと受け取って欲しいところだ」

いつものように憎まれ口を叩く二人であったが、その様子は穏やかだった。

「彼女は起きているよ。でも、医者にみせないといけないから手短に済ませるんだね」

「本格的な再会は、後日か。そのときは見舞いの品を持ってくるさ」

「いや、すぐにでも出来るさ。私たちは、繋がっているのだから」
そういつて、胸に付けた十字架型のP I Tを握る鏡。

「そうだったな。積もる話は、そっちでだな」

「そういうことだ。彼女にあまり喋らせるなよ」

「わかったよ。それから、まだ言ってなかったな」

「なんだい。……明」

彼女の小さな決意は、明に気付かれることは無かった。
しかし、

「ありがとう。お前がいなければ、ここまでくることはできなかったよ」

その言葉が全てを帳消しにした。

「なに、当然のことをしたまでさ」

彼に必要とされているという事実を再確認できた。それは、彼女にとっては何にもまして喜ばしいことだった。

だから、今はこれでもいいと思う鏡であった。

「行ってこい」

そういつ彼女の言葉がどこかそっけなく聞こえるのは、自分が泣いているのを気付かれなくなったからだ。そして、こんな時だけは彼が鈍感であると言うことに少し感謝する鏡であった。

「嬉しいときにも、涙は出るものなんだね」

窓から差し込む朝日が、彼女をあたたく照らしていた。

「久しぶりなのかな、水月」

「おはよう、だよ。明」

病室での二度目の再会に、水月は笑顔で応じる。

「それもそうか。おはよう、水月」

「二人の顔を見て、それですごく安心した」

あごの筋肉が衰弱しているためか、短い言葉を選んで話す水月。長くは喋れないというのは彼女の体力的な事情もあるのだろう。

「俺もさ、水月」

「ありがとう、明。これだけは言っておきたかったよ」

拭うことなく涙を流して水月が話す。

強い意志のこもった言葉に、明はただ耳を傾ける。

「はは、ここにくるまでにいろんなことを話そうと思っていたんだけどな。水月の顔を見たらそんなの全部吹っ飛んじゃったよ。なんというか、俺も安心したらどつと疲れた」

「起きているうちに、呼んでくれないかな」

そっという彼女の視線は、ナースコールのボタンを示している。呼んで欲しいと言うのは、快復したという事実を医者に見せたいからなのだろう。

そして、今の状態では体力的に限界なのだろう。

「わかった。積もる話は、明日の朝に仮想でな」

無邪気な笑みを浮かべ、明は呆けた顔の水月に微笑む。何のことだと、戸惑う彼女に自身の胸に付いた十字架じゅうじかを掲げかか次に彼女の胸に付いたP E E Tを指差す。その意図を理解した彼女も笑顔を返して答える。

そして、明はナースコールのボタンを押す。

そのあとのことを水月はあまり覚えていなかった。

事情に関しては、職業のこともあり説明できるようなものではなく、ただ単に奇跡が起きたとしか話せないこともあるし、何より仮想での再会が楽しみで病院関係者の話は上の空だったからだ。

仮想の草原で二人は向き合っていた。超えるべき相手であり憎むべき敵であった男の空間であったが邪魔が入らずに落ち着ける場所としては一番理想的だった。

「いい場所ですよ、ここは」

小高い丘から見下ろすように風景を眺めて水月は話す。服装はどういう意図があるのか捕われていたときと同じ白い服を着ていた。

「先生を、いや、黒木師を憎んだりはしてないんだな」

グレーのスーツ姿の明が隣に座って答える。

丘を吹き抜ける風が心地よい。

「半年も一緒にいれば、愛着も沸くというものです。それに仮初めとはいえ、私を愛してくれた人がいた場所ですから」

「一方的な愛でも、そんな風に受け取れるんだな。あいつは、黒木智樹は狂っていたんじゃないのか？」

「私の前では、それでもなかったんですよ。多分ですけど、彼は私を通して別の人間を見ていたんだと思います。発言に整合性がないと思っていましたが、彼の言う愛というのはどうやら彼女の妹さんのようでして。ときどき、拡張現実の機能を使って写真をみたりしていましたし」

「統合されたデータに写真があったが、なるほど、少し水月に似ていたよ」

「女神などと私のことを言っていました。死んだ人間が生き返ったように思っていたからなんでしょうね。そして、同時に強く愛していたからこそ絶対に手放したくない存在だったのでしょうか」

「あの日を境に、愛って名前なのかな。この子の写真の更新が止まっている。現実を認めなくなかったんだろうな、黒木師は」

確かに可哀想だとは思うが、それでも水月のように憎まないでいることは明にはできなかった。愛しい存在を知っているのであればこそ、彼はそれを他人から奪うべきではなかったと明は思った。しかし、直接の被害者である水月が恨まないと言うのなら、明もそれを

納得することにした。

「私には、相手が考えている。本当のことがわかりますから」

冗談めかして彼女は言う。しかし、その発言が彼女の持つアビリティによって裏付けられている事実であるとは明は知らなかった。だから、冗談めかして明も答える。

「愛しているよ、水月」

「ふふ、それは？ですね」

そんな言葉に対して短く断言する水月。

「はは、その通り」

わかりきった反応におどけてみせる明だった。

それから数日後。

普通に喋れる程度には快復した水月がいた。全身がどこと無く白く、服も白いというのはいまでは見慣れた姿でもある。そして、そこにあるのは病室のベッドで身を起こし、明たちとの会話に興じる姿だった。

「それで、これからどうするんだ。電研の方ならいつでも歓迎だ」

「進学するのも少し考えたけど、やっぱり鏡に差をつけられたいから私も電研コースかな」

「何の差だかわからんが、あれからお前たち妙に仲がいいよな。一体何があっただ？」

「女の秘密に突っ込んでくるのは、野暮やぼというものだよ君」

リンゴの皮を向きながら、椅子に座ったスーツ姿の鏡が代わりに答える。そういわれてしまうと男の身である彼としては黙るしかなかった。女はズルいなどとは、口が裂けてもいえない小心者の明だった。

「ふふ、そんな君にはリンゴをあげよう」

皮を向き終えたリンゴをそのまま押し付けられる明。食べるつもりも無いのに皮だけ向くのは迷惑なことこの上ないのと思うが、鏡に食べる気はさらさらないのでそのまま食べることにした。

「美味しいな、これ」

立ったまま、しよりしよりとリンゴをむさぼる明を放置して女二人は会話に興じる。

「水月なら、あのへつぽこな男なんてすぐに追い抜けるよ。それに心配しなくても訓練があるからなんとかなるよ」

「本当に、素直じゃないなあ。鏡は」

「そういう性分なんだ。わかってくれる人がわかってくれればそれでいいんだよ」

「はは。お互い、先は長そうだね」

そこには二人して苦笑する女性陣がいた。仕事帰りに立ち寄った明と鏡であつたが配属が違つたために途中で合流してここに集まつた。

「さつきから気になつていたんだけど。明が持っているその大きな袋は何？」

ちよこんと首をかしげてながら疑問を口にする水月。

「そういえば、ここに来る前から持つていたな。一体何なんだ、それは」

リンゴを食べ終えた明が、頭をかきながら勿体^{もったい}を付けるようにして答える。

「……その、なんだ、見舞いの花束だよ」

袋から大きな花束を取り出して明が抱える。これは水月のお礼に對する明なりのささやかな意趣返しのもりであつた。

そして、照れた笑みを浮かべながら明は水月に花束をかける。仕方ないなと水月の隣に座る鏡が花束を抱え彼女の前に差し出す。胸の前に差し出された花束を前に香りを楽しみ微笑を浮かべる。

「いい香り。それに、すごくきれい」

明も水月も花の名前などに詳しいわけではなかった。だが、純粹にきれいであると思えばそれでいいのだろう。花束は病院の近くにあつたフラワーショップで適当に見繕^{みつくろ}つてもらったものだ。

「喜んでもらえて、なによりだ」

素直に喜ばれてしまい、少しづつきらばうに明が言う。何がそんな

に嬉しいのかと尋ねたかつたが、その理由はおそらく三本のバラだろう。明がフラワーショップの店員に長い間再会を果たせなかった女性に送る花といったら赤、青、白の三本を中心に花束を渡されたのであった。彼は、そんなことなど知らないであろうが、その花言葉は、『真実の愛』、『奇跡』、『純潔』だった。

当の本人にその認識はないが、これは完全にプロポーズであった。

「嬉しいよ、本当に嬉しいよ、明」

もちろん、彼にそんな気が無いのはわかっていたが、嬉しいものは嬉しいのだ。

「今日くらいは、認めてあげる」

立ち上がり、すたすたと病室の外へと歩き出す鏡。

「ごめんね、鏡。でも、嬉しいから」

追求しようとする明に対して、鏡は急に用事を思い出したといういかにもわざとらしい？で黙らせると病室をあとにした。

「明」

「何だい、水月」

花束をベッドの隣にある花瓶かびんに活けながら明が答える。

「大好き」

「ああ、俺も大好きだよ」

これはまだ恋にはなっていないのだろう。互いが互いを意識するという段階にはまだ少し早いのだから。ねこがじゃれているような可愛らしい恋だったが、もどかしさも含めて水月には大切なものだった。

だから、水月はこの素敵すてきな時間が現実のものであると強く思う。

なぜなら、夢にしておくにはもったいないほどに世界は美しく色付いているのだから。

1 - 4 S t a r t (後書き)

とりあえず、だいたいの小説一本分終了。やはり、第5(6)話からさらすのには無理があつた気がします。一応、この段階で一段落します。楽しんでいただけたなら幸いです。あと感想とかもらえると超喜びます。一応表記を統一したり誤字修正しました。(9月8日再修正)

2 - 1 Demonstration (前書き)

これは再現でありデモンストレーションなのだろう。その戦いの意味が何たるかを知らしめるための。

「……どうしてこうなった？」

2 - 1 Demonstration

05 Demonstration

夜空と呼ぶには明るくなった空を白い光が照らし出していく。

白一色に染まっていた視界が徐々に輪郭りんかくを持ち始める。太陽が作り出す、光の輪から対称の位置には向かい合う機械の天使と黒い金属で造られたドラゴンがいた。

否、正確にはAA（avatars agent 意識体代理人）と呼ばれる仮想における一種の戦闘ツールを利用した戦闘が繰り広げられていた。

朝日を背景に、夜の闇が白んでいく。

雲の塊かたまりが視界の端へと流れていくのを合図に両者は肉薄する。

攻撃の軌跡きせきだけが線となつて視界に映る圧倒的な速さの攻防、それでいて互いに致命的な一発を決してもらわない高度な読み合い。一秒毎に十数発の攻撃が空を切り、弾かれ、いなされていく。

まるで、演舞や武道の型をみているかのような鮮あざやかな戦闘。

しかし、間断なしに続いていた攻防は、黒き竜が後退しながら火球を撒まき散らすことで一度中断される。

そして、視界が一瞬赤く埋め尽くされた直後、十二翼の天使、ミカエルを模したAAがついに機械の竜の体を捕らえ、銀色に輝く剣を手に切りかかる。黒い竜はその翼をはためかせ後退し、赤々とした炎を吐き出し天使を迎撃する。

間断なしに続く炎の弾丸を軽々とよけつつ、天使がドラゴンに近付いていく。息も付かせぬ攻防が数秒間に渡り、炎がついに天使を捕らえたかに見えた。

しかし、それは天使が自ら深紅の炎に突入したと言った方が近いだろう。炎を突きぬけ、白銀の天使が剣を振り上げる。その赤を写した白銀しろがねの装甲には、ドラゴンの牙が向かう。牙を向く黒竜と剣を手

にした天使が交錯する。

そして、僅かに先に攻撃を受けたドラゴンはAAの心臓部であるコアユニットに直撃を受けたのか無数の黒い破片となって砕け散る。これで決まったかに思えたが、飛び散った破片は意思を持っているかのように天使を取り囲み、その欠片は球体状に圧縮されるかのよう中央にいるミカエルへと降り注ぐ。

対するミカエルは、剣を高速で振り回し、自身も舞い踊るかのような動きで包囲網を突破する。無傷の天使が剣を構えなおし、破片の群れから距離を取る。散らばった黒い欠片は雲のような状態で一箇所に集まり、その姿は黒い天使のようだった。

聖書の中でも様々な形へと姿を変える不定形な存在の悪魔、サタン。聖書をモチーフにした絵画ではミカエルに踏みつけられるサタンがドラゴンとして描かれているものもある。また、サタン自身は高貴な天使であつたが、それゆえに自身こそが神であると思い込み、その傲慢さから追放され悪魔となった等と諸説ある。

ただ、いずれの話でも共通しているのは、天使、ドラゴン、悪魔などのいずれの姿であつたとしても神に対して仇なす存在として描かれていることだろう。結局のところ、正義の証明とは敵となる存在を作り、それを打ち倒すことでしか示すことができないという事実の証左なのかもしれないが。

黒い大剣を手にサタンがミカエルに迫る。それはまるで、神に反逆する神話の再現のようであつた。『GENESIS』というゲームがAA同士による新たな神話の構築を望んでいるとするのであれば、もしかしたらあつたかもしれない無数の神話の可能性が提示されることとなるだろう。

そして、それこそまさに新しい（ジェ）世界の（シ）創生といえるだろう。

刃と刃が火花を散らし、両者は向かい合い激突する瞬間に画面が切り替わる。

《Survival》

三つ以上の勢力が交戦する際のエフェクトであるが、この場合『生き残れ』とでも訳した方がいいのだろうか。そこでまた画面が暗転しこう続く。

《Ask for your challenge》

「あなたの挑戦をお待ちしております」とでも言ったところであろうか。画面が黒く染まりここでデモムービーは終了する。時は、午前九時。

場所は電腦技術研究所の、新城大地の研究室にて。

グレーのスーツ姿の青年、新城明は、父である新城大地と対面していた。

「と言うわけで、これに参加しろ。我が息子よ」

「仕事中にいきなり拉致^{ちゅう}つて、ムービー見せて次に言う発言がそれか。親父」

「ふむ、これでは少々味気がないか。では、最後まで鑑賞^{かんしょう}ありがとうございました、作者の続編にご期待……」

「ああもう、まともじゃない奴に対して、まともな応対を期待した俺が馬鹿だったよ！ もういいから話を続けてくれ」

「ふふ。よく解^はかっているではないか、馬鹿息子よ」
不敵に微笑^{ほほえ}み、眼鏡を中指で吊り上げる大地。光の加減で白く輝いて見えるレンズがなにやら悪役染みた雰囲気^{かも}を醸し出す。

「ったく。俺が馬鹿だつてところには、きちんと反応するんだな」
「さて、先日は困難なミッションを成功させたようだな。まずは、

ご苦労。見事な手際だな、新城明中尉」

事務用のデスク越しに白衣を着た大地が少々大げさに言葉を並べる。
「毎度ながら回りくどいな。本題は何だ、親父殿」

呆れるような声で明が答える。罰則^{ばつそく}でもくらうのかとタカをくくっていた彼であつたが、どうやら違うようである。

「親父ではない、新城大佐と呼べ。とりあえず、さつき見せたものに電研の任務として参加しろ。AIが主催する、ゲームとしての『GENESIS』だ」

「仕事ならば拒否するつもりも無いが、何の冗談だ？ その大佐だとか中尉というのは」

「これは、冗談ではない。もともと電研という組織は、神国陸軍の下部組織だ。詳細については書面を確認しろ」

そういつて、父である新城大地が紙の書面を明に渡す。

「本当に冗談ではないみたいだな。内容や事情は書面に書いてあるのか？」

「そこには、フリーランスの傭兵が正式に軍属になった旨の契約しか書かれておらんよ。事情はこれから口頭で説明する。回答は保障しないが、即時質問は認めよう」

「了解、とても言っておけばいいのか」

両手を挙げて降参だとも言うように応える明。聞き返すだけ無駄だと、納得したのか諦めたのか、言われればすぐにでも敬礼でも何でもするといったようすだ。

「そういうことだ。まず、階級に関してだが電研では少尉が一番下の階級だ。そして、私がトップダウンの形で全権を握っている。階級が上がることに面倒な仕事が増えて給料が上がるという話だ。今はそれだけ理解しろ」

「ここまででは了解した」

姿勢を正し思考した後、明がうなずく。

「では、現在仮想空間で起きている状況を説明しよう。米帝国が独自のアルゴリズムによって旧来の通信網を完全に掌握している現在、各国は秘匿性の高い通信網を独自に手に入れたがっている。そして、仮想がその役割を果たす訳だ」

「それで、ここまで不便な通信網を国家レベルで欲しがるものなのか？」

仮にも上官である人間の話を遮るのは褒められた行為ではないが、即時の質問を認められているのなら、その場で問題を解消しろと言うことなのだろう。そう考えて明は質問をしながら会話を進める。

「不便に感じるのは、お前が奥まで辿り着けていないからだ。よ

リセキュリティレベルの高い階層のフロアに進むにつれて通信や情報やり取りは逆に自由度が高くなっていく。そして、フロアマスターのツールコードを手に入れることにより、それを独占して利用することが可能になる」

仮想空間上では、個人情報や電子マネーなどを含む『パーソナルデータ』、通行許可証にあたるパスコードや情報系の各種プログラムを含む『ツールコード』、主にAA同士の戦闘などで役に立つ『アビリティ』の三種類に大別されている。

派手で目立ちやすいAAの戦闘に目を奪われがちだが、仮想空間を使用する本来の目的が通信網の確保であることを考えれば、その優先度はツールコードが一番高いのは当然の帰結^{きけつ}と言えた。

「つまり、仮想の中で国取りゲームが起きているって理解で間違いないのか？」

「大意は外れていない。帝国の支配からの脱却は、所属する多くの国が望むところであり我々電研は本国である神国の先兵と言うわけだ。そして、この情報は正式に軍属になったものにしか与えられていない。階級^{かいきゅう}を取得していないものには口外しないように」

「状況は理解したが、具体的には何をすればいいんだ？」

うつむき、短く思索した後で明が疑問を口にする。

「理解が早くて助かる。まあ、白の旅団の元幹部^{かんぶ}である黒木を撃破したお前に関しては大尉^{かいきゅう}の階級になってもおかしくないのだが現状は中尉だ。やることと言えば、少尉の者に対する連絡係と上からの作戦命令に従って行動するだけだ」

「今聞きたくない事実を聞かされた気がするが、要するに今までの仕事に加えて連絡係の仕事が増えた訳だな。ここまでは了解した。それで、白の旅団は過去の最大ギルドだろ。解散して消えたんじゃないのか？」

わざとらしく呆れた後に、さも大げさに大地が言う。役者染みた動作がくせになっているためなのか、あるいは、単に息子を馬鹿にしたいだけなのかは不明だった。

「明中尉、少し考えればわかることだろう。彼らは、いなくなつたのではなく単に奥の階層へと進んだのだよ。これは、彼らの敵対勢力であつた黒の旅団に關しても同様のことが言える。君はその片方に対して喧嘩を売ってしまった訳だ。まあ、注意しろ」

「いきなり、氣が重くなつた。あんな強さのやつがごろごろいるギルドから狙われるとかお先真つ暗だな」

「全員が全員同様の強さという訳ではないから安心しろ。それと白の教団、あるいは、黒の旅団、それ以外の国家や組織に属する部隊からの勧誘があるかもしれないが全て断るように。そして、これは最初の命令だ」

大地が静かに強く言い切るその声は、人の上に立つ人間のそれであつた。

「了解しました、大佐」

そんな雰囲気^{きふき}に氣圧されたのか、思わず敬礼して返答してしまう明に大地は苦笑する。

「そうそう、言い忘れていたが口調に關してはそこまでだわる必要は無い。階級も作戦行動以外では形式的な側面が強いからな」

形式上、電研は陸軍の下部組織であるために、こちらに幅を利かせようとする輩も存在する。そういった連中から口だしされないようにするための措置としてか階級が最初から将校扱いとなつていた。とはいえ、知識の無い人間が妄想で指揮を執ることになつても被害が増えるだけなのでこの方がお互いのためになるといえる。

「てーと、親父殿でいいのか？」

「まあ、身内だけのときはそれでいいが外部のものがいるときはきちんと呼べ。それと、フロアマスターを入手した以上、当面はそのエリアの死守と自身の生存が目下のお前の行動だ。理由はわかるな？」

急にフランクになつた息子を見て苦笑しつつ大地が答える。

「俺自身が、戦争の一部として狙われる側に組み込まれてしまつたということだろ」

「そういうことだ。そして、最後にもう一つ」

「これ以上憂鬱ゆううつな情報を増やしてくれるな、親父」

「パンドラの箱よろしく、最後に残っているのは希望であると相場が決まっているだろうが。そろそろいいだろう、入りたまえ、天宮水月少尉、神代鏡少尉」

「はい」

と、少し高めの心地よいソプラノボイスが聞こえる。

「は」

と、凜とした声が響く二人の女性が大地の後ろのある扉から入室する。

「彼女たちは、今日付けでお前の部下になる。両手に花だ、良かったではないか」

「待て、待て、待て。とりあえず、前から違う部署にいても同じ電研に所属していた鏡はともかくとして、何で水月までここにいるんだ？」

「この三人の中では彼女が最初に入隊条件を満たしたわけだ、何も問題は無いだろう。もとより、提携校ていけいこうである宗光学院にいたのだから電研に席はある。それにお前としても知り合いの方が相手ならば管理が楽でいいだろう」

手続きのな問題さえクリアしているのであれば、彼女は貴重な戦力であった。現実の肉体が病み上がりといっても、イメージを理想的な形で再現する仮想空間での行動に支障はないだろうし、水月自身がそれを望んでいるのであれば止める理由はない。

何よりも彼女は言い出したら聞かないのは友人である明と鏡が一番よく知っていた。

「はあ、自分よりも年上の部下よりはましか。それについては、了解しました。しかし、彼女達をわざわざ外で待機させなくてもよかったのではないでしょうか大佐殿」

明としては、せめてものの反撃のつもりだったがそんなことを大地は意にも介さない。

「お前の慌^{あわ}てふためく顔が見たくてわざわざ待っていてもらった訳だ。面白い顔を楽しませてもらったよ、ははは。それから彼女たちにはもう事情は説明してあるから追つての説明は不要だ」

「いきなり、信用が無いな。上官なのに下士官よりも説明が後回しかよ」

「そうそう、これ以降は座学^{ざがく}もあるから調査や作戦のスケジュールは半日単位のものが多くなる。もっとも状況次第でいくらでも変化するが」

「えらくアバウトだな」

「それはそうだろう。作戦は必ず時間通りに終わる保障なんてなく、途中退出も認められず、最悪の場合は死ぬこともありえるのだから」

「当然のことか。理解した」

「まあ、そういうことだ。そして、今更だが大佐である私がこんな説明をしているのは少しばかりの親心と、他の連中がたまたまみんな出払っているからというのと、ささやかな嫌^{いや}がらせのためだ」

「いらぬ補足^{ほそく}だったな。ロートル親父」

「ふん。AAでの戦闘なんかは若い奴に任せておけばいいのだよ。話は終わりだ、今日はもう帰っていいぞ」

「それでは、失礼しました。大佐」

「本当に失礼だったよ、全く」

「楽しげに笑い大地がはき捨てる。」

「一言余計です、大佐殿」

「口の減らない中尉殿だな。まあ、頑張^{つな}れよ馬鹿息子」

用は済んだとばかりに手を振り退室を促す大地。毎度の事ながら、動作がわざとらしく明はからかわれているようで、それが少し不快だった。

「あばよ、クソ親父」

苛立ちを隠そうともせずに親指を下に付き立て、その場を立ち去る明。

「ふふ、失礼しました」

「はは。大佐、失礼しました。……全く、君という奴は」

明の後ろに追従する二人は、笑いをかみ殺して退室するのだった。

同日、午後。

電脳技術研究所の一室にて。

「そして、これが俺達に与えられた任務と第一回作戦会議だ」

明は、そういつて書面を提示する。

「案外いい部屋ね」

品定めするように部屋の中を見渡すのは、神代鏡。

「そうですね。三人で使う分にはかなり快適みたいです」

こちらは単に新しいものに少し興奮したようすの天宮水月。

「上官の話は傾聴しろや、お前ら一応は俺の部下だろうが。まあ、実際にしようもない作戦会議だけどさ」

「要点だけ話せばいいんだよ、君は」

立場としては下であるはずなのに、なぜか偉そうな鏡。形式だけとは言われても、それを盾に偉ぶりたい気持ちに明に無いわけでもなかったが、気心の知れた相手同士なので変に気を使わないでいいのは助かってもいた。

「相変わらずだね、二人とも」

そんな様子を穏やかに見守る水月といった、ここしばらくは見る事ができなかった少々懐かしい光景が繰り広げられていた。

「とりあえず、俺に統率能力が無いのはわかった。要点は、まあ俺達のチーム名を決めると言うのと、スリーマンセル、つまりは三対三のチーム戦で、各国の組織やギルドの連中が出場する『GENESIS』の大会に出場してこいとのことだ」

「ゲームとしての『GENESIS』なら、実戦を何度も経験している私たちが今更やる必要はないのでは？」

「軍隊で下の人間に拒否権は存在しないし、理由を聞いても無駄だ。そもそも上官の俺からして何も知らないんだからな」

「使えない上官ね」

大げさに両手を胸の辺りで上に向け、はき捨てるように言う鏡。
ここでも彼女の口の悪さは相変わらずだった。

「明は上官なんだから、一応は敬おうよ。鏡」

「それ、フオローになつてないからな、水月」

「なら、それに参加して優勝しろとかが作戦ではないの？」

「それは、別にいいらしい。なんでも基本的には俺達みたいな新人が出るみたいだが、ベテランを出してくる国もあるから確実に優勝できるとは上も考えていないみたいだ」

「参加チームはどうなっているの？」

「米帝国、世界連合、EU共同体、東洋中華圏、神国皇族連、王国連、新ドイツ、共産主義連合国共同体、中東連合あたりが国や共同体として出場しているな。他には古参ギルドとして白の教団や、黒の旅団が出てくるらしいな」

「黒の旅団は犯罪組織じゃないの？」

「俺達が、仮想でPKしても裁かれないのと同じで、仮想でのさばっている奴らを裁く法律は存在しない。である以上彼らは犯罪組織ではないしテロリストとしても扱われない。実質的に同じことをやっていたとしても、だ」

明確な基準がないこそかもしれないが、仮想で行われる戦闘は正義に基づいたものではなくてはならないと明は考えていた。自分を騙す方便かもしれないが、例えば法律による死刑は、結局は法の名を借りた殺人ともいえる。それが肯定されるのは、法律という根拠、あるいは正義という意志がその背景にあるからだろう。

そして、快楽や欲得のために戦闘を行う『海賊』連中と電研で働く人間の明確な差異は、その意識の違いにある。なぜなら、初めから海賊と自分たちの両者の間に大した差異などないのだから。

「結構な顔ぶれね。それでこそ潰しがいるというものね」

「好戦的だな。まあ、血湧き肉踊るといふのは否定しないが」

こんなことを平然と言えるのは、これが実戦ではなくゲームとし

ての『GENESIS』だからだろう。少しお茶らせるように明がいう。

「物騒ぶっそうだなあ。普通に相手を倒すだけでしょ」

そういう水月の口調こそ穏おだやかであったが、倒すという断言は倒されるつもりはないということを示しているようにも聞こえた。

「そんなこといいつつも、負けるつもりは無いんだな、水月」

争いは好まないが、負けるつもりも無いということなのだろう。

なんだかんだで似たもの同士な三人なのだった。

「ふふ、当然だね」

「接待ではないのだから、負けてやる必要性が無いだろう。君とて、同じ気持ちだろう」

「そうだな、特に神国皇族連には負けたくないな。おそらくあいつも出てくるだろうし」

「うっ。できれば、当りたくない連中ではある」

自分の腕を軽く抱き締めて、そっぽを向く鏡。彼女や明、そして三島平治の三人には神国皇族連と少なからぬ因縁があった。

「確か、明と鏡、それから平治君の三人で学院生時代に出場したんだよね？」

「ああ。なかなか個性的な奴らだったよ」

「いつそ選民思想の塊かなんかならやり易かったのだが……。思い出したくも無い」

「そういう言い方をされるとかえって気になるかも。でも、嫌なら無理に話さなくてもいいよ。鏡」

「すまないな、水月。気を使わしてしまったようだ」

「はあ。とりあえず、俺たちのチーム名を決めるぞ。各自適当に名称を思いついたらマルチボードに記載きざいしていけ」

少々強引に明は脱線した話題を修正する。しかし、こういったことができるから彼が上官に選ばれたのかもしれない。世間では、それを貧乏くじと言うのだが。

丁度三人の中間点にホログラムのような四角いボードが浮かび上

がる。拡張現実の機能である第二視点とPITによる情報共有を利用した、観測する人間の視点に応じた画像を提供する^{ていきよう}どの方向にも対応したディスプレイ、多視覚共有^{マルチボード}板だ。

思考デバイス越しに、三人が思い思いの意見をマルチボードに書き込んで消していく。

そこに書き込まれるのは、『明鏡止水』、『電研の三連星』、『水月と愉快的仲間たち』、『STARGAZER』、『CYBER ARTS LABORATORY』、『チーム電腦技術研究所』、『神国電研』などなど方向性の無い意見が書き込まれていく。

「ブレインストーミングにしても、方向性くらいは決めた方がよかったか？　というか、この『水月と愉快的仲間たち』はありえないだろ」

「可愛いと思うんだけどなー。だめかな、明？」

「いやいや。可愛い顔でお願いしてもだめだからな、水月」

「むう。君の、『チーム電腦技術研究所』も酷いと思うぞ」
少し拗^すねたような声で鏡が明の意見に意義を唱える。

「所属がそのままで、わかりやすいじゃないか」

「じゃあじゃあ、私の明鏡止水ってチーム名もだめなの？　明と鏡との名前と私の水の字を使っているんだけど」

「この一つだけ異色なチーム名はそういう理由だったのか。単に四字熟語がかっこいいとか言う、思春期特有の妄想の類かと思っていたぞ」

「私としては、止める、の字が余ることが気になるのだが」

「それは、おまけだよ。鏡」

「けっこうアバウトなのね」

「やれやれといった様子で肩をすくめる鏡。

「鏡のだって、単に横文字使っただけだろ」

「君の神国電研よりは、ましだと思うよ。株式会社じゃあるまいし」

あくまでも自分のネーミングの方が上である、という認識^{にんしき}は否定

しない鏡。まし、とは言いつつも妙な自身で満ち溢れていた。

「じゃあじゃあ、私の電研の三連星はどうかな？」

「俺は、踏み台にされたくないからパスだ」

「そうね、名前の段階で白い奴に負けるのが決まっているし」

「それなら、彗星すいせいにすればよかったかな」

ちなみに、最終的にはそちらであつても白いのに負ける運命である。やはり、伊達だてじゃないということだろうか。

「まあ、そっちの方向は著作権とか色々と敵が多いからやめとけ。とりあえず埒らちが明かないから決選投票としよう。決まらない場合は、票が入っていないものを消去して行って、これを繰り返す」

「ふふ、望むところだ」

勝気な態度を崩さないのは鏡。

「ふふふ。なんか楽しいね」

そして、意味ありげな笑顔が少々怖いのは水月。

「なんだ、その無駄な自信は。一人、二票ずつ分散して入れるように。同じのに二つ入れるのは無効だ。一票ずつにすると決まらないだろうし、異論は無いな？」

「わかったよ」

と水月。

「了解だ」

静かに首肯する鏡。

「じゃあ、始めるとしようか」

そして、数分後。

「……どうしてこうなった？」

両手で頭を抱え、首だけを動かし鏡に話しかける明。

「それは、君がネタで変なのに投票するからだろう……」

同じ心境なのか鏡も少し下を向いてうつむいている。

「直前に真っ向から否定されたものに対してそのまま投票するなどとは誰が予想できるだろうか、いや、できない。まさか、一回目で決まるとは」

「わざわざ反語にしくなくても気持ちは理解できるさ。しかし、引き分け狙いなら自分の考えたものに入れるべきだったな、君は」

「はは、もう過ぎたことさ」

「しかし、これが国家代表チームの名前か」

呆れるような、諦めたような声で鏡がいう。

「ありえないことが平気で起こる、これが事実は小説よりも奇なりというやつか」

「ありえなくなる原因を作った君がそれをいうとはね。全く笑えないよ」

「何はともあれ、決定だ」

しばしの沈黙の後で明が答えた。

「大勝利。やったね」

明を恨みがましい目で見つめる鏡と、よほど嬉しいのか、はしゃぎまわってブイサインする水月が対照的だった。こうしてチーム名は、『水月と愉快な仲間たち』に決定した。

同日、正午。草原には、風が吹き渡り薄い緑色の草がたなびいていた。

先日、フロアマスターである黒木智樹を倒すことによって手に入れたこの場所は、外界から完全に隔離かくりされた場所であった。そして、プライバシーが保護されるという側面以上に明はこの場所自体がそれなりに気に入っていた。

ここが現実世界では失われた風景を再現したものか、あるいは、単に最初から作られていた空間だったのかは定かではない。また、水月が彼のことを憎み切れていない要因の一つとして、彼は狂ってはいたが、乱暴なことはしなかったという点があるだろう。

ただ、黒木が言っていた水月が自分の意思でここにいたと言うのは、単に選択肢が無かったというだけの話だということがわかっていった。帰還させてもらえなかったが、結果的に保護してもらっている側面もあったために嫌悪けんおの対象とはならなかったらしい。

「……1a」

教会の方から明の耳に声が届く。歌声のような心地よさがあるが、大きさが小さすぎてそれが何かも誰のものであるかも判別が付かなかった。また、パスコードを水月と鏡には発行しているために彼女たちも自由に立ち入ることができる。リラックスするためにここに来ていた彼女だったが、同じ理由だろうか。

様子を見るために、教会の扉を開ける明。

薄暗い室内に、扉を中央に二列に配置された長椅子、その間にある通路の先に佇む誰か。

明がゆつくりと歩みを進めると、薄暗い室内にはステンドガラスから光が降り注ぎ、白い服の少女を照らしていることがわかる。

「……水月？ いや、黒木愛か？」

一瞬、見間違えたが、以前水月がここで着ていたものと同じ服装をした少女。明の脳内に該当するのは彼女しか思いつかなかった。

「はじめまして、新城明さん」

スカートを軽く持ち上げ、恭しく礼をして彼女は言う。

「そして、ようこそ。この世界へ」

室内に反響する声は、どこか冷たく。教会と言う日常とは切り離された空間の所為か、薄闇の中で光を浴びる彼女の姿は、神や霊といった存在のようにどこか神秘的だった。

2 - 1 Demonstration (後書き)

先日、読んでいただいたないしアクセスしていただいた方には、申し訳なかったかもしれません。ここから読んでも理解はできくはないと思っていましたが、やはり冒頭から読んだ方がきちんと盛り上がり上がると思い再編いたしました。(8月18日再修正)

2 - 2 Elimination (前書き)

ここで起こるのは、戦争の縮図。不適格なものは排除され、選ばれた者達だけが力を示す権利を得る。予選、開戦。

「さあ、神聖なる戦場に不適格な者たちには退場を願いましょうか。この私が、直々に排除してあげますよ！」

2 - 2 E l i m i n a t i o n

06 E l i m i n a t i o n

少女はお辞儀をしながら言葉を述べる。

「先日は、兄を倒してくださりありがとうございました」

「君から憎まれこそすれ、感謝されることではないよ。しかし、

彼は君が死んだから狂ったのではないのかい？」

違和感^{いわかん}とでもいうべきか、何か異質なものを明は彼女から感じていた。あるいは、それは教会という特殊な空間が持つ霊^{れいてき}的な何かなのかも知れないと明は感じていた。

「教団員として、殺人を犯し過ぎていたためか、原因は定かではありませんが兄は明確に狂っていました。半端に理性が残っていたために、自責の念から死にたいとも思っていたようです。それに、あなたになら兄を殺す理由もあつた」

自身の肉親の話をしているのにも関わらず、その声には感情が全く感じられず、機械を思わせる冷たさだった。

「あいつが、黒木先生が、納得していたとでも言うつもりか」

「死にたかつたというよりは、解放されたかつたのでしょうか。負の連鎖から」

戦いに勝利し全てを奪い、あるいは、戦いに敗れ全てを奪われ、敵を殺して仲間を殺される。そういった負の連鎖から生き延びた勝者は、いずれ自分自身の死という形で敗者となるまで繰り返される地獄。ある者は憎悪^{そつお}を、又、ある者は快樂を糧に、この戦いに挑み果てていく。

「それを断ち切るために白の教団に所属していたんじゃないのか？ 自称ではあるが、彼らは司法組織であり、その目的は仮想での秩序^{ちうじよ}の構築だろう」

自分と彼らは、電研が公的な組織で白の教団は私的な組織であるということぐらいしか違いは無かった。バックに国家と言う後ろ盾がない分、彼らは純粹に実力のみがその存在証明であり、それゆえにその強さには定評があった。

「今となつては、真意は解かりません。ですが、彼が死にたがっていたのは事実です。疑問に思うのでしたら、水月さんに確認してもらつても構いませんよ」

自分の兄のことであるのに、どこか他人事のように話す彼女。彼が本当に守りたかったのは彼女だったのだろうかと思問にさえ思える。

「それで、黒木愛が俺にどういった要件なんだ？」

「ですから、黒木智樹の代わりとしてお礼が言いたかったというのと」

くすり、と彼女は笑つたようにみえたがその表情に相変わらず変化は無い。

「……明様。あなたには、これからお会いすることもあるかと思ひまして。あいさつに参りました」

深く礼をして、顔を上げるとそこには表情の読めない顔がのぞく。ぞくりとするような少し冷たく、そして、怖いくらいに美しい笑顔を浮かべる。

「これから起こるのは仮想空間上で起こっている戦争の縮図。そして、あなたはそこで力を示さなければならぬ」

静かにつぶやくと彼女はくると反転しその姿がポリゴンとなつて霧散する。

「消えた、いや、《Return》（帰還^{リターン}）したのか？」

「やつぱりここにいたんだね、明」

しばし呆然としていた明に声が掛けられる。

「……水月か」

今度こそ、彼女の姿を認め落ち着きを取り戻す明。

「ふふ。明、なんか難しい顔しているよ」

「なんだそりゃ。どんな顔だよ」

苦笑しながら答える明。

「今みたいな顔だよ。考え事しているときとかは、明はいつもそんな顔だよ。でも今は笑顔になった」

指を口の前に立てて、おどけるように水月は話す。それから、苦笑いだけど、と付け加えるのも忘れなかった。

「そうか。だけど、俺は黒木師を越えられたのかな」

「少なくとも黒木先生は、あのとき本気なっていたはずだよ。それに、多分だけど彼は明に感謝していたと思う」

明の脳裏に今さっき聞いた言葉が思い出される。

（ですが、彼が死にたがっていたのは事実です。疑問に思うのでしたら、水月さんに確認してもらっても構いませんよ）

「はあ。なんか、それをお前から聞いたら少し楽になったよ」

「どういたしまして、かな」

「さて、英気も養ったことだし大会に向けて気合を入れるとするか」

「そういえば、大会の日程はいつなの？」

「あれ、言ってなかったか。大会は明日だ」

「そうなんだ。明日っていうと、明後日の前の日のことで、て、ええええっ！」

このとき明は、久しく見ていなかった水月が驚くと言う場面を目撃することとなったのだった。

「セキュリティエリア内での戦闘なんて、何時以来だか」

「君も私も長らく無法遅滞での戦闘に明け暮れていたからね。デスゲームでない戦闘なんてほのぼのとしたことは本当に久しぶりだ」

「平和的な戦闘というのも、何か矛盾している気がするけどね」

とは、水月。

「しかし、なんだ、この格好は。改めて見てみるとデザインがこり過ぎている気がしないでもない」

漆黒^{しっく}の生地^{しんち}に金のボタン、肩に白いラインが入っているというところ以外は割と普通のスーツのように見えなくもない。そして、スーツというよりは軍服という表現の方が適切であり、実際にこの制服は先日から電腦技術研究所に正式に導入されたものだった。「私としては、男性はまだましなデザインだと思うが」

「そうかな、私は、女の子の制服もすごく可愛いらしくていいデザインだと思うよ」

「いやいや、我々は仮にも神国の陸軍なのであり、可愛いらしさは求められていないような気がするのだが」

「諦める、勧誘^{かんゆう}のポスターなんかもビジュアルが求められる時代だ。しかし、なんだ、その二人とも似合っているぞ」

少し横を向き、頬をかきながら明がいう。その視線の先には電腦技術研究所の新制服に身を包んだ二人の姿が見える。男性の物とは対照的に女性の制服は純白のブレザータイプの服に黒いラインの入った丈^{たけ}の短いプリーツスカートだった。正式に陸軍の傘下になった直後に導入されたらしく、そのデザインには新城大地大佐の趣味が多分に反映されているというが、真偽の程は定かではない。

「……あ、ありがとう。君もなんだ、悪くない」

照れたように鏡は、そつぽを向きながら小さくつぶやく。

「ふふ。明だつてすごく格好いいよ。お嫁さんに欲しいくらい」

対して水月は少々意味ありげな笑みを浮かべて、社交辞令なのか本気なのかいまいち判別の付かない返答をする。

「俺は男だつて。もらわれるのなら嫁^{よめ}じゃなくて婿^{むこ}だろうが」

「じゃあ、明は私がもらってあげるね」

そういつて、腕にしがみつく水月。明と鏡に救出されて以来、水月は明により以上になつくようになっていた。あるいはそれは、また、離れたくないという心理の表れなのかもしれないかった。

「ちょ、止めなさいよ、二人とも」

「俺までカウントするな、鏡」

「もう、何が問題なの、鏡。仲間はずれが嫌なら、左側が空いて

いるよ」

すました笑顔で水月が反対側を示す。

「ば、馬鹿。そんなの、は、恥ずかしいじゃないの」

「ふふ、鏡は本当に可愛いなあ。昔よりもすごく可愛くなったよ」

「からかわないでよ、水月」

「まあ、そうかもしれないな。とりあえず、昔よりは取っ付きやすくはなったな」

「き、君まで悪乗りするな。と、とにかく、会場まで行くぞ」

そういつてすたすと歩き始める鏡。

「もう。待ってよ、鏡」

一瞬、名残惜しそうな目をして水月が鏡を小走りに追いかける。

そして、明はやれやれと溜め息をつき、二人の後に続くのであった。

午前11時30分、国内YCYブロック。

そこには林立する超高層ビルディング、遠目から見ればオブジェに見えるような球体や円錐えんすいを組み合わせたようなアーティスティックなデザインの建物。現実には物理的に建築できない透明なツリー上の建物などが立ち並ぶ。大会は、このブロック内のアリーナで行われることになっていた。

「やっと着いたか」

「ヴァーチャルとはいえ、広すぎるのも考え物ね」

「はあ、はあ。AA化してない状態だとブロック単位の移動でもかなり掛かるんだね。車とか飛行機とかの有難みがよくわかった気がするよう」

妙に艶めなまかしく息を切らせながら水月がいう。セキュリティエリアには観戦する民間人もそれなりにいるためにこの場でのAA化は禁止されている。といっても、AA化してはいけないことになっているだけでAAになること自体は可能であるが、そうした場合テロと間違えられ本物の陸軍の一部やら民間のセキュリティ会社を敵に回すことになる。

「おいおい、仮想空間内部での運動なら現実的な肉体への負荷はそこまでないはずだろ。しっかりしろよ、水月」

「私には、どちらが仮想で現実なのかというのは曖昧だから。半年も仮想にいたらそこが現実味を帯びてきて、よく解からなくなっちゃった」

照れたように二人に微笑む水月。

「ったく。言ってくれば、おんぶでもなんでもしてやったのに」

「そこは、察してあげるべきだろう。この甲斐性なし」

「俺と一緒に気付かなかったお前が言うな、鏡」

「その手があっただね。盲点だったよ」

ぽんと手を叩き水月がおどけてみせる。といっても、彼女の場合は素でやっている場合が非常に多いのだが。

「そうそう、ここに一匹都合のいい男がいるんだから。好きに使えばいいんだよ、水月」

「あはは。じゃあ、私は色々とできるチャンスを逃しちゃったんだ。ちよつと残念」

「何を要求されたんだか多少は気になるが、聞かないでおいでやる。しかし、移動する際に転送のアビリティは欲しいところだよな。AA化とポートエリアやゲートだけでも相当便利だが、瞬間移動には敵わないよな」

「無いものねだりしても始まらないだろう。それに、かなり希少なアビリティらしいし持っている相手から奪うにしても難しいだろうね」

「それもそうか。じゃあ、アリーナに向かうとするか。確か、チーム毎にポートエリアで待機するんだったよな」

「……ねえ、少し迂回しない」

「そうだな、急に回り道がしなくなった」

「二人ともどうしたの？ 顔色が悪いよ」

「いいから急いで、水月」

「いや、もう遅いみたいだ。諦めろ、鏡」

そういつて、こちらに気付いたそぶりの男に視線をくれる明。それを一瞥^{いちべつ}して、鏡は大きく溜め息をつくのだった。

「あ、あなたは鏡様ではありませんか。おお、あなたにお会いできるとは、今日という素晴らしき日に感謝を」

純白のスーツ姿に、漆黒^{しっこく}の長髪を後ろで縛り、ポニーテールのようにまとめた男、こと御堂風雅はそう言つと鏡の前で大げさにひざまずく。

「……うつ。あなたは神国皇族連の」

「あんたは確か、神国皇族連の」
明と鏡の声が重なる。

「おお。そういうあなたは鏡様のおまけのどなたでしたっけ？」

「……はあ、あんたの記憶の中での俺の立ち位置がどういふものが説明していただいてどうもありがとう。一応、再度名乗ると、新城明中尉だ。学院生時代の大会以来だな」

半ば呆れつつも、こういう面白いやつだと覚えていた自分も人のことは言えないなと明は少し内省していた。

「これは失礼、つい本音が出てしまいました。私^{わたくし}御堂風雅は正直者でして」

「本当に失礼だよ、あんた」

妙なデジャブで少し頭が痛くなってきた明は、頭を抱えうつむいた。

「お前は、新城明。ここで会ったが百年目、決着をつけるぞ」

明がうつむいていると不意に大声で話し掛けられる。そこにいる御堂風雅と全く同じ格好をしているが、髪は少し赤茶けて短くスポーティな形でまとめられていた。

「めんどつくさいのがきたな。確か、あんたの弟だったよな」

頭をかきながら明は風雅に尋ねる。

「御堂風雅、推参^{すいさん}！ 前は負けたが今回はお前を倒すからな、コテンパンにしてやるからな、覚えとけよ！ 新城明！」

「はいはい、忘れるまでは覚えといてやるよ」

まともに取り合うのもめんどうであるが、かといって無視するとそれ以上にめんどうくさくなるので明は適当に返答をする。

「はあ、君たち兄弟は似たもの同士なのだ。しかし、君たちがいると言うことは彼女もいるのかい？」

本日、何度目かになる溜め息をついて鏡が御堂兄弟に確認する。

「御前のことですか？ おられますよ、すぐそこに」

「新城明様、神代鏡様、久しゅうございます。それと、その可愛らしいお嬢様も御機嫌よう。お初お目に掛かります。当方、天正院縁と申します」

そういつて現れたのは、赤と白の模様の生地^{しじゆ}に金の刺繡^{ししゆ}を施された和服を纏^{まと}った少女。しかし、彼女の顔つきこそあどけないが、黒く長いストレートの髪と落ち着いた立ち振る舞いのせいかむしろ大人の女性を思わせる艶^{つや}やかさを持っていた。

「わ、わ、私は天宮水月と申します。よ、よろしく願います」
彼女の持つ高貴な雰囲気^{きんぎ}に緊張してしまったのか、水月がどもりながら天正院に名乗る。実際に彼女の場合、貴族であり本物のお嬢様であつた訳であり初対面であればこういった反応をしてしまうのも無理もないことなのかもしれない。

「あら、あなたが。新城様や神代様のお話と一緒に、主人からよくお聞きしております」

「はあ、主人ですか。天正院さん、すごく若いのにもう結婚なされてるんですね」

気の抜けた顔で水月が聞き返す。

「はい。三島平治様とは、懇意^{こんい}にお付き合いをさせていたたいております。天宮様も、夫のご学友の方だとお聞き及んでいます」

「なるほど、だからあいつはこの大会のメンバーから辞退したのか」

「なんだかんだで、争いごとの嫌いな方ですから。私かあなた方かという選択がしなくなつたのでしよう」

「かもな。あいつは本当にいいやつだからな」

「ええ。一度は没落^{ぼつらく}しかけた天正院家がこうして再興できたのも、全ては平治様のご助力があつてのことです。私は、本当にいい夫を持ちました」

ちなみに彼女と三島が違う苗字である理由は、元の家柄が良かったために三島の性を受け入れたくないと言つ両親の激しい抵抗を受けたためだ。旧家のしがらみとでもところであるうが、当の本人たちはそんなに気にしていないようである。

「いい人止まりで終わってしまうタイプだと思っていたが、まさか貴女とくつつくとは思いませんでしたよ」

いつものように少々トゲがある言い方をする鏡だったが、当人には無自覚なようだった。しかし、そんな発言など、どこ吹く風としている天正院。もっとも彼女の場合、鏡はこういう性格であるというところもある程度理解した上での対応だった。

「ふふ、思えば運命的な出会いでした。戦場で互いに死力を尽くし、そして、結ばれることができたのでしたから」

「なんだかんだで、弱くはないからなあ平治も。俺には一度も勝つていないが」

「そうだな、一般的な水準から見れば三島は十分強いな」

そんな少し毒を含んだような二人の言い方も、妄想でトリップ仕掛けている彼女には意味がないようだった。

「そう、私とあの方は運命の赤い糸で結ばれていますの」

「っと、いけない。御前、そろそろ時間です」

そう言つてトリップ仕掛けた天正院の肩を叩く御堂兄。

「ふふ、楽しい時間とは過ぎるのが早いですね。それでは、皆さん大会でも互いの健闘を祈りましょう」

お辞儀をして軽く手を振りながら立ち去る天正院。

「新城明！俺が倒すまで負けるんじゃないやねえぞ！」

こちらを指差し、強く言い放つたのは御堂雷雅。

「それでは、鏡様。決勝で会える事を信じております」

そうして最後に続くのは御堂風雅。どうやら彼には他の人間は見え

ていないらしい。

「ずいぶんと個性的な方達だね、明」

「あの兄弟、二人とも雅みやびという文字を使っているが、雅とは程遠いな」

「名は体を表すというが、風と雷の部分しか合っていないな。君もそう思うだろう？」

「嵐のような連中だったな。まあいい、あいつらの言うとおりそろそろ行かないと間に合わない。試合会場に向かうポートエリアに行くぞ」

数分後、一行は同ブロック内のポートエリアに辿り着く。

『The Book』の機能の一つである時計機能で時間を確認する。

現在の時刻は11時59分。そして、視界の片隅に見えるアナログのような外見の時計の針が動く。正午、つまりは予選の開始時刻になると三人は同時にポートエリアから強制的に転送される。

《Translation》（記号変換）

そのビジュアルエフェクトが彼らの視界に表示されると、半ば反射的に彼らは祈りを捧げるかのように目を瞑りつむ思考する。

直後に自身の意識体アバターを構成する情報が書きされていく。

青い妖精、フェアリー、赤い魔術師、ウィザード、水の巫女たる、ウィンディーネの三体の姿がそこにあった。そして、三人の姿が、ただの人間のそれから力の顕現けんげんたるAAへと形を変えた直後、視界には輝く文字が表示された。

《Survival》

つい先日にも見た、あのビジュアルエフェクト。そう、三つ以上の勢力が交戦する際のエフェクトであり、『生き残れ』というのはつまり、文字通りサドンデスの戦闘が幕を開けたということだろう。こうして、予選が開始されるのだった。

「さあ、開戦と行こうじゃないか」
オープンコンバット

「大会の本戦に参加したければ、力を示せと言っことか。なら、今回は君のサポートに回るとしようか」

「そうだね、私と鏡は遠距離武装があまりないから、生存と仲間の防衛に主眼しゅがんを置いたほうがいいだろうね」

三人の視界に映るのは、古代ローマを思わせる芸術的な建築物、独特の様式で構築された教会や街並み。しかし、この美しい風景は数分後には無数の破壊者たちによって蹂躪さうりゃくされることとなるだろう。どんなに美しくとも、ここは戦場なのだから。

「了解だ、俺は砲撃で数を減らす。水月と鏡はサポートに回ってくれ」

「了解した。君は早々に敵を蹴散らしてくれ」

「わかったよ、明」

基本情報として、初期配置がと残存勢力の現状に関するデータがプレイヤーに行き渡っていた。自分自身の配置と対戦相手の配置は超大型の都市を舞台に中央に複数名と周辺部を囲むように時計の形に並ぶ。そして、明たち一行こと『水月と愉快な仲間たち』は、円形の都市で六時辺りの位置に配置されていた。

「まずは、偵察ていさつを兼ねて上空から位置情報を確認する。散らせるやつがいたらそのまま数を削る。鏡と水月は自衛と位置情報を元に迎撃を担当たんとうしてくれ」

フェアリーのAAが閑静かんせいな住宅街から空へと飛び上がる。

大人数のジャミングが合算されてフィールドに適用されるのでレーダーは沈黙しているが有視界で同じ考えのフライトユニットが数名程度確認されたが有効射程からはやや遠い。そして、自身から東の方向、時計で言えば三時の位置に煌々（こうこう）と輝くヘッジホッグの砲身を明の視界が捕らえた。

「あのヘッジホッグ、やばいぞ」

俯瞰ふかんしてみえるヘッジホッグの背面部に装備された大型の荷電粒子砲かでんりゅうしがチャージに入っていた。その威力は絶大であるのだが、効果範囲とチャージ時間が恐ろしく長いことから実戦ではあまり使用され

ない武装でもあった。

「全員、予測射線域を離脱^{りだつ}。あいつの射線から離れるんだ」

即座にデータを二人に転送して、予測される射線域からの離脱を図る。仮にあのヘッジホッグが開始と同時にチャージを始めたのであれば、まだ数秒の猶予^{ゆつよ}がある。

「了解したわ、明中尉。それにしても、荷電粒子砲なんて普通の戦闘じゃお目に掛かれない兵装を使ってくるのね」

「こういった掃討戦^{そうとうせん}ならあれほど強い武器はないだろう。うっかり、近接戦闘に夢中になっていると横から一掃されるぞ」

「じゃあ、私と鏡は念のためシールドを展開しながら移動するね。それで、明は私たちの後方を警戒して」

大きな水球を自身の周りにいくつも生成しつつウィンディーネが移動を開始する。

「そうね、まずは数が減るのを待ちましょう」

《Magic circle》（魔方円）

登録された動きを自動で再現するARM（Auto Response Move 自動対応行動）を利用して瞬時にビットを展開するウィザード。鏡の機体を囲うように複数の方陣が配置され虚空^{くう}を漂う。その二人に追従するように低空をホバリングしつつ移動するフェアリー。

こうして準備しておけば、万一こちらに射線が重なったとしてもしばらくは堪えられるはずだった。目下のところ三人はエンカウントを無視して東に向かう。予想される射撃の範囲が八時から十時の一帯、それと中央にいるチームは全員巻き込まれることになるだろう。最初からこちらを狙っていないければ当たることはないはずであるが、用心するに越したことはなかった。

「大丈夫だよ、明。きつと、当たらないから」

なぜか確信めいた発言をする水月。根拠なんてなかったが、明と鏡は不思議と彼女の発言はその通りなのだろうと信じていることができた。

「とりあえず、神の眼で確認したところ非難している間にエンカウントはしないで済みそうだ。データをリンクするから参考にして」移動しながらもやることはいくらでもあった。しかし、戦闘が始まってから時間は一分と経っていない。

「さあ、神聖なる戦場に不適合な者たちには退場を願いましょうか。この私が、直々に排除してあげますよ！」

会場一帯にオープン回線を通して嘲るような声が響く。

初期配置から割り出した操縦者は共産主義連合国共同体の一人、グリゴリー・ドウヴァ。その直後にフィールド全体を貫くように金色の光の奔流が迸る。視界に映る荘厳な建造物が融解し蒸発していく。直後に現れるのは無数の蒸気となって散っていく何十人も参加者と何もない荒野だった。

「開始一分で、四割近くのチームが戦線を離脱か。一体どこまでいなくなつた段階で予選終了なんだかな」

「君はそんなことも調べていないのか。まあ、例年通りなら16チームまで減るまでじゃないのかな。それと、一人でも生き残っていればチームとして生存になるらしい」

「考えてみれば、私たち行き当たりばったりだね」

「考えなくても行き当たりばったりだな。参加表明したのは昨日だし」

建物の影に隠れながら敵の少ない方へと移動を繰り返す。こういうときは、アビリティの絶対的な優位性を再認識する。チームによっては、リーダーが完全に沈黙している間に先のヘッジホッグの攻撃で訳も分からずに消えることになったはずだ。

「それにしても、鏡のアビリティは便利だね。何もしないで逃げればそれだけで勝ち抜けるよ」

「そうもいかないさ。また、さっきみたいな攻撃をされてはいけなから、射線に警戒しつつ比較的敵が少ないほうに移動しているだけだからね。すぐに戦闘になるさ」

「お、共有されたデータでそれらしき奴らがでてきたな」

「明、後方から敵性個体を確認した。射撃武器で即時迎撃して。水月とは私と一緒に周辺を警戒しつつ明を援護」

「やっと、戦闘らしくなってきたな。行くぜ」

「上空にはなるべく飛ぶなよ。低空で仕留めろ」

「了解。って、リーダーに命令するな、鏡」

「適材適所ということさ、ふふ」

低空で加速しつつ、正面に見えるアークエンジェルに向かう。カラーリングはメタリックシルバーとやや悪趣味なようだ。右腕でミスリルブレイドを抜剣、左手はホルスターに掛けて敵襲に備える。

「いざ、尋常に勝負」

静かにつぶやいたその言葉が聞こえるはずもないが、剣を振りかざし敵性機体がわずかに宙へと浮かびこちらへと加速する。一瞬で間合いを詰め、交錯する直前に螺旋を描く軌道で体にひねりを入れる。自身が通過したわずかに横の地面には風穴が開く。

切り捨てたアークエンジェルとすれ違いざまに建築物の陰に隠れていた、これまたメタリックシルバーのソルジャータイプ二体にリニアライフルとプラズマライフルをそれぞれ打ち込む。反応する間も無く三体のA Aが残骸となって崩れ落ちる。

「今更だが、リーダーと別枠で相手の配置がわかっているって相当ずるいな」

明は、破壊される直前まで透過迷彩で風景と同化していたソルジャーの位置を神の眼の情報を共有することで即時に対応して迎撃して見せた。無論、わずかでもタイミングがずれば自身が破壊されるために、知っていれば誰でもできるという芸当ではない。

「君の反応速度と射撃精度があつてこそだ。その能力だけなら君はトッププレイヤーにも引けを取らないと思うよ、私は」

「明、かつこいい」

普段のように冷静な鏡、久しぶりの戦闘でハイになっているのかやけに上機嫌な水月の声がチーム回線内に響く。どうせ周辺に敵はいないから問題はないが、のんきなものと明は苦笑しつつ剣を納め

る。

戦況は刻一刻と変化して、現在は共産主義連合国共同体のチームの当りに戦力が集中しているようだった。残りの勢力はAIから伝えられる数字だけから判断すれば初期の四割程度だった。

しかし、一人だけで生存しているチームもあるだろうからチーム数だけならばおそらく半分程度の数が戦場に残っている。本当の戦いはむしろこれからだろう。

これからの戦闘プランを三人で立てつつ移動していると、不意に荒野となったフィールド上に一体のAAが漂ってくる。エンペラーと呼ばれるAAが複数の敵に囲まれつつ逃げ延びているようにも映るがよく見ればそれが全く違うということが解かる。

「あははは、死んじゃえよ。お前らさ」

オープン回線越しに響く狂笑。声の主はエンペラー操縦者であるセルゲイ・ロマノフ。黄金に輝く機体を取り囲むように数十からなるレーザービット、ガトリングビットなどの遠隔射撃タイプの武装が見える。エンペラーを取り囲む敵は、攻撃を仕掛けようとした側から逆に撃墜げきついされていく。

「あいつも共産主義連合国共同体だったよな。まったく、共産の連中はどいつもこんなに派手好きなのか？」

遠めに見える異常な光景に明の視線は釘付けになる。

「馬鹿、ぼうつとしているな！ 上から攻撃がくるぞ」

「大丈夫、私が守るから」

《Water Sprite》（水の精霊）

《Magic Circle》（魔方円）

回避運動するよりも早く、フェアリーを囲うように複数の水球が合わさり巨大な水の防御壁が展開される。さらに上掛けされるように鏡の電磁障壁でんじしょうへきが展開される。そして、二重に展開された防御壁が三人への攻撃を防いだ。

「助かった。ありがとう、水月、それから鏡も」

「どういたしまして、明」

「私はついでか。全く」

少し不機嫌そうな声で話す鏡。その感情は嫉妬だった。

「強いな。しかし、何か引つかかる」

正面からでも相手集団を潰せるという絶対的な自分自身の強さへの信頼もあるのかもしれないが、それにしても彼の行動パターンは、ただ単に数が多い方へとがむしやりに突進を繰り返しているように映る。

「遠隔武装をパターン で展開、『オートレスポンスムーブシステム』を起動」

オープン回線越しにセルゲイの声が聞こえる。遠隔操作が可能な移動式砲台を複数空中に展開させると同時に彼の視界には幾重にも重なったウィンドウパネルが投影される。

「ざっと、戦力比は一对百つてところか。まあ、『GENESS』のイロハも知らないような連中はご退場願うとうるか」

武装を展開したまま、敵対勢力の中へと無造作に突っ込むエンペラー。無謀とも思える特攻だが、敵性機体であるソルジャーの射線が彼を捉えた瞬間にそれは起こった。相手が彼を捕捉した瞬間にビットによって無力化したのだ。

武術でいうならば後の先とでも言うべき動きであるが、矢継ぎ早に二体、三体と進行方向にいるAAを次々と無力化していく姿は卓越した技術によるものと言うよりは、どこか予定調和のようにさえ映る。

しかも先制攻撃ではなく、相手が動くのを確認してから仕留めている。これは、お互いの技術や速度などの力量に余程の差が無ければできないことだった。

「あはははははははははは、あは、踊り狂って死ねよ。カスどもが！」
数十個の遠隔武器を的確に操り、進行方向上に現れるAAを紙くずのように次々と撃破していく。エンペラーの名に恥じず、まさしく皇帝が行軍するが如く真つ直ぐに進んでいく。ストップウォッチが逆に進むかのように残存勢力の数字が刻一刻と減っていく。しか

し、そんなものを見るまでもなく眼の前で何十体ものA Aががらくたとなって散っているのは明らかだった。

そして、残存勢力が18となったときにエンペラーのA Aの前に、デモムービーでもみたあの純白の天使のA A、ミカエルが現れた。

「皇帝である俺の前に立塞がるのは誰であろうと、許さん。それが白の教団のリーダーであろうと、なんであろうと、ただ破壊するのみ！」

ミカエルは手を腰に携えた剣へと下ろし、わずかに腰を落とす。

それは、居合いにおける抜刀術のように映った。正面に留まった相手をなぶり殺すつもりなのか、エンペラーは自身を中心にどの方向にも対応できるように銃器を展開する。

「さあ、死ねよ。まがいものの『教皇』様があっ！」

「ふん。周りが勝手に呼んでいるだけだ」

初めて口を開いたミカエルの操縦者は、確か白の教団のリーダーであるアティド・ハレ。そして、その次の瞬間には無数の幻影、あるいは複体がエンペラーの周辺を取り囲む。

「幻影？ そんな程度の技なら、どの方向に対しても攻撃すればいいだけだろ。所詮は教皇なんていうのは名前だけな……」

「もう、終わっている」

セルゲイが言葉を言い切る前にミカエルのA Aが横を通過しエンペラーのA Aがばらばらに切り刻まれた。否、アティドが言うようにもう既に切り刻まれていた。

実際の攻撃からわずかに遅れて、斬撃の残像だけがエンペラーとのすれ違いざまに幾重にも重なり合ってかろうじて明の目には見えていた。

「皇帝である、この俺が、馬鹿な……」

「ふん、A Iの加護のあらんことを」

その場で剣を収め十字を切る動作をするミカエル。

廃墟と化した戦場に漂うように浮かぶその姿は、まさしく神の代行者とと言えるほどに神々（こうこう）しく、見ているものが無条件に

引寄せられるような怪しい美しさを孕^はんでいた。

「おいおい、？だろ。あのデモムービーの動きはただの合成じゃなかったのか。ははは、震えが止まらない。けど、おかしいな、…あいつと戦いたい」

無意識に自分に向けた明の掌は小さく震えている。

そして、それから数秒後に見計らったかのようなタイミングでフィールド全体に鐘の音が鳴り響く。残存勢力はちょうど16にまで減っていた。

【THE END（戦闘終了）】

そうして、波乱の内に予選が終了したのだった。

2 - 2 E l i m i n a t i o n (後書き)

なんとか、更新までこぎつけたぜ。ついでに黒木兄妹のやや曖昧な部分は後々明かされることになります。あと、一部表記修正・加筆します。それなりに見てる人がいてびっくり。お気に入り登録や感想をもらえると喜びます。(8月18日再修正)

2 - 3 Arrive (前書き)

「はは。あなたなら辿り着けますよ、あの高みへと」

2 - 3 Arrive

07 Arrive

午後1時、アリーナ内部の控え室にて。

『水月と愉快的仲間たち』の面々は、どういった意図が働いたのか二つのソファに男女別に腰掛けて向かい合っていた。

「明、あのまま試合が続いていたらミカエルに斬り掛かっていきそうだった」

「戦う者としては、無理もない話だろう。あれが現在仮想内にいる最強と言われているプレイヤーなのだから、君がそうなるもの無理はない。私だってそうなのだから」

鏡も震えているのか、少しうつむいて右腕で左腕を抱きかかえている。その様子は、おびえていると言うよりは、抑えきれない衝動に無理やり蓋ふたをしているようにも見えなくなかった。

「すまないな、二人とも。なんか、体が勝手に動き出しそうな勢いだった」

「なんとなくだけど、今の明じゃあの人には勝てない気がする」

「やってみなければわからない、と言いたところだが実際に見て俺とはランクが違うとは感じたよ。ただ、死ぬことがないこの大会でなら一度腕試しを試してみたいと思う」

下を向き、拳を強く握る明。その胸にあるのは、久しく味わっていなかった感情、恐れでも憎悪でもないそれは、闘志とでも言うべきか。黒木を越えたいと思っていたあの頃の感情が沸々（ふつふつ）と湧いてくるような気がしていた。

「なんにせよ、順当に勝ち進んでいけば合間見えることもあるだろう。私たちの当面の敵は、一回戦で当たる共産主義連合国共同体だろう。ミカエルの攻撃で退場してくれたかと思っただが、チームの誰

かが最後まで生きていたらしいな」

「生き残っていたのは、ウー・ヘイフォン。『マーチャント商人』を兼ねてはいるが、『マイセナリー傭兵』だ。俺の知っている奴と同一人物なら、こいつはかなり強いよ」

「開始と同時に荷電粒子砲をぶつ放したやつは『エスコート護衛』だっけ。こちらは、それなりに有名な人だな。そちらの方は、私は聞いたことがないな」

「あれで、『エスコート護衛』なのか。まあ、やっていることはほとんど『スレイバー掃除屋』の部類だったが、攻撃的護衛といえなくもないな」

「ええと、つまり、相手チームは全員強いってこと？」

「そうだな。エンペラーの奴はなんか得体がしれないし、というか、予選の半数以上のチームを葬ったのはこいつらだろうから。弱い訳はないだろうな」

「いきなりピンチだね」

「まあ、一回戦は一对一の戦闘が三回行われる形式みたいだから、一敗してもいい訳だし何とかなるだろう。というより、対戦カードは既に決まっているみたいだからじたばたしてもしょうがない」

「私がこのエンペラーだったな。面倒くさいが、とつとと片付けるでしょう」

「私は誰が相手だっけ、明」

「水月は、ヘッジホッグの奴が対戦相手だな。正直、こいつには確実に勝ってもらいたいところだ」

「じゃあ、明がヘイフォンさんだね」

「まあ、負けず嫌いが俺の信条だからな。倒すよ、絶対に」

「新城だけに？」

「そういうわけではないな」

「水月は適度に場を和ませたりしてくれるから、助かるよ。あははは」

控え室にあるソファに倒れこむようにしながら鏡が笑う。

「そうだな、癒いやされるといっか一緒に居ると落ち着くな。まあ、

時間になったらアリーナに転送されるらしいから、現実に戻らない限りは好きにしてくれていいぞ」

そういうと、明も鏡のようにソファに背中を預けて天井を見上げる。仮想のものとはいえ感覚としては超高級な家具に座っているような状態なので戦闘後の疲れを癒すにはもってこいの代物しろものだった。

「みんなが寝るなら、私も寝るよう。このソファふかふかしていてすごく気持ちいいし」

仲間はずれば嫌な水月であった。

【TRANSPORT（転送）】

ビジュアルエフェクトが表示され、仮想の肉体である意識体が強制的にアリーナの一角へと移動される。転送された先のフィールドは何もないグラウンド。事前に確認した情報では、戦闘開始はプレイヤー二人が記号変換した直後ということになっていた。

「しかし、こんなところであなたと刃を交えることになるとは思いませんでしたよ」

「こちらとしても予想外だよ、あんたが出場してくるとしたら東洋中華圏だと思っていたからな」

明の視線の先には、細身のアジア系の女性が立っていた。普段の声色がどちらとも付かない声だったので、明はなんとなく男性だと思っていたが正面にいるのはどうみても美しい女性だった。

「上の方で色々ありましたね。今回は、『傭兵』として参戦させていただいております。私としては勝ち負けなどそんなに興味はありませんが、料金分は働かないといけませんので悪しからず」

肩口当りで短めにまとめられたショートカットの黒髪。理知的な雰囲気醸し出す金縁の眼鏡を掛けているその姿は、整い過ぎた容姿と相まってどこか機械を思わせる。そんな彼女は、あくまでも普段の態度を崩さずに淡々（たんたん）と話す。

どうやら、自分自身の正体を知られるということは彼女にとってそんなに重要なことではないらしい。

「それにしても、あんたは女性だったのか。知らなかったよ」

「特に隠していたつもりはないのですが、そういえば一度も会ったことがありませんでしたね。ふふ、見つめ過ぎですよ、私に惚れ（ほ）ましたか？」

挑発するように眼鏡を指で押し上げ、口元に薄く笑みを浮かべるハイフォン。

「対戦相手を観察するのは当然だろう。まあ、実際のところあんたみたいな難しい人間の相手は、仕事だけにしたいところだ。たとえば、それがどんなに美人であってもね」

「褒め言葉として受け取っておきましょう」

「さて、雑談はこれで終わりにしよう。一応、国家代表らしいかな。普段の関係は抜きにして本気で行かせてもらうぞ、ハイフォン」

一応というところを強調して、明が話す。実際、代表などといったつも、同じ国内から多数のチームが出場している。

「ふふ、本当にあなたらしい。それでは、参りましょうか」

ハイフォンの中性的な声が聞こえたのを最後に視界が暗転する。

《Translation》（記号変換）

ビジュアルエフェクトが発生すると同時に二人の体を構成する数式の文字列が書き換えられていく。脆弱（ぜいじやく）な肉体は、破壊（うった）を訴える頑強（きやう）な機械の体へとその形を変える。人類に新しく与えられた仮想という楽園で、最初に許された自由が破壊活動をする自由とはなんとも皮肉な話だった。

アリーナのフィールドは、モザイクが掛かったようにばやけた直後にその姿を夜の密林へと変えた。雨の降りしきる南国めいたジャングル。水を吸い湿った地面の上で二体のAAが向かい合う。

明が姿を変えた青い機械の妖精、フェアリーが光の羽を広げ密林に舞い降りる。左右の腕にミスリルソードを構える。その正面には黒いソルジャーのAAが右腕に対物狙撃用ライフル、左腕にはサバイバルナイフの武装を携える。

両者は、それぞれの得物を手に対面し、フィールドへのポップアップが完了した段階で見慣れたビジュアルエフェクトが視界に映る。

【MISSION START（任務開始）】

戦闘開始の表記が互いの視線の先に映り戦いの火蓋が切られる事となる。

戦闘開始と同時に脚部にある車輪を利用してジャングルを高速で移動するヘイフォン。こういった遮蔽物が多いフィールドでは、フライトユニットであるフェアリーよりも歩兵型のソルジャー方が戦闘を有利に運べる。そもそも、航空戦力の優位性は、相手に対して一方的に攻撃できることだが、障害物が無数にあればそれは相手にも同じ条件を与えることになる。

ならば、今回は隠れる場所や敵の攻撃を防ぐ場所がいくらでもある上に透過迷彩まで保持しているソルジャーにフィールドや機体のアドバンテージがあるといえる。この条件で相手を見失うのは得策ではないと明は判断し、二本のミスリルソードを構え地上すれすれの高度で相手を追跡する。

先行するソルジャーは、抜き身の刃を下段に構え反転しつつバックダッシュのような状態でフェアリーと向かい合いながら並走する。青く茂った木々の陰から加速して、低空で跳躍するフェアリー。

飛び掛るように切り付ける一閃は、ひらりと身を交わされる。半歩引く動きに合わせ、ナイフを引き寄せ攻撃へと繋げるソルジャー。

即座に反撃へと転じたソルジャーの刺突を、もう一本の剣でいなす。しかし、いなした腕ごと、突きからの回し蹴りで吹き飛ばされ、地面に転がされるフェアリー。地面が抉れ、黒くにこった水滴が激しく視界をふさぐ。

真横に吹き飛ばされた直後に、ソルジャーが対物狙撃銃を放つが、これは体を回転させることで何とか回避する。間近に放たれた弾丸に戦慄する明。

（このまま、終われるかよー！）

腕を引きナイフを構えたソルジャーが、内心で毒づく明の眼前に迫る。突進からの突きがくるよりも早く、フェアリーがショットアンカーを地面に打ち込む。のけぞった姿勢のまま強引に地面の方へと体を引き寄せ、寸でのところで攻撃を回避する。

「やりますね」

余裕のつもりなのか、オープン回線越しにハイフォンの声が聞こえる。実際、彼女は余裕なのだろう。下手をすれば明は最初の攻防の時点でやられていたのだから。

「そうですね何か賭けませんか？ 私を倒せたら、黒木智樹について私が知っていることを教えてあげましょう。いかがです？」

「その賭け、受けるでしょう。こちらが負けたら、そちらの言うことを何でも一つ聞くというのでどうだ？」

「ふふ、これで賭けは成立ですね。では、楽しむとしましょうか。この良き宴ツキヨを」

「ああ、存分に戦おう」

闘志を燃やしつつ、明は冷静に状況を分析する。単純な戦闘能力では、悔しいが相手の方が一枚上手だろう。先程のやりとりで、こちらの攻撃が見えているかのように完璧に対処されたのは互いの格闘技術の差だろうか。

追う者と追われる者の関係をそのままに、戦闘は密林での追走劇へと戻る。フェアリーは加速、再加速、減速を交えつつ左右にジグザクに飛行する。対するソルジャーは、牽制射撃を続け、明の行動選択の余地を削いでいく。

フェイントからの斬撃も、移動から攻撃に転じる瞬間を的確に見抜かれその攻撃は虚しく空を切るに終わる。攻撃後の隙を突くようにハイフォンは、再び先程のやり取りを実行する。

しかし、フェアリーは剣を振り下ろす勢いをそのままに前転、ソルジャーの突きからの回し蹴りはその上を通過する。フェアリーは両の手を突き出し、逆立ちするように両足でソルジャーを蹴り飛ばす勢いをそのままに宙へと跳躍ちゅうまへくし相手と上下逆さまに向かい合う。

浮遊するわずかな紆余、フェアリーは剣を収めると次なる攻撃のた
めに脱力する。

「一発入れましたね、攻撃を食らうのは久しぶりですよ」

「これで終わらせてもらう」

《Double strike》（二重攻撃）

一瞬の思考と同時に肉体は的確に指定された動きを再現する。瞬時にホルスターからリニアライフルを取り出し、腰の位置で銃を固定、撃鉄を起こしハンマーが弾丸を叩くと同時にさらに銃撃を重ねる。仰向けになるように吹き飛ばされたソルジャーに止めとばかりに弾丸が放たれる。

「ふふ、それがあなたの技ですか」

ソルジャーは瞬時に軌道を読みサバイバルナイフで弾丸を受けるが、衝撃に耐え切れずその刀身は粉々に碎け散る。破片をまき散らせ、ソルジャーはバックダッシュをしながら対物狙撃銃でフェアリーを迎撃する。

しかし、ソルジャーの苦し紛れの攻撃は初動を読まれ回避される。対するフェアリーは二丁のリニアライフルで牽制射撃を続けつつ円を描くかのように移動しつつ互いに間合いを取り直す。

「これで終わりか、ヘイフォン」

「いえいえ。本当のお楽しみは、これからですよ。明さん」

「そうこなくては」

「ぞくぞくしますよ。ここまで本気になったのは、ずいぶんと久しぶりです」

「そいつは光栄だな」

「それでは、『（ミ）擬態』（ク）解放」

ヘイフォンがそう口にすると光に包まれるソルジャーの機体。ただ、勝ちに行くのなら今を狙うのがベストなのかもしれないが、それでも手を出そうとは思えない昂揚感が明を包んでいた。

「さて、鬼が出るか仏が出るか」

黒いフェアリーを思わせる細身のAA、その姿は悪魔、鬼、魔物、

その異形を形容する言葉にはどれも相応しくあり、また、異なる。むき出しの機械を思わせる全身とその背中には翼と言うには小さい骨組みのような部品が見える。

「これが私の最も得意とするAAの形、ルシファーです」

漆黒しっこくの異形は、やや前傾したような姿勢で佇たたずむ。鉤爪かぎづめのような両手、武装らしきものは手にしていないようにも見えるが、全身の至る所に鋭利な刃物を思わせる突起が突き出している。

「あなた、デビルのAAを使っているのか？」

「ご明察。私が使用しているのは擬態のアビリティを持つAA、デビルです」

デビルは、他のAAに擬態するアビリティを持つが本体の基本スペックが低いために利用者はほとんどいない。他のAAになれる利点も確かにあるのだが、使いたいAAが別にあるのなら最初からそちらを使うし、汎用性は高いが別の機体で武装を換装するなどしても結局同じことであるためだ。

「俺と同じで、不人気機体が好きなんだな」

「案外、我々は似たもの同士なのかも知れませんか」

そして、現在彼女が擬態しているルシファーのAAも不人気だった。近接戦闘特化型の割には装甲が薄く、戦闘スタイルも特殊であるためだ。

「では、再戦といこうか」

「ええ、宴を続けるとしましょうか」

フェアリーは右手にミスリルソード、左手にリニアライフルを構え必殺の間合いを探る。右に左に揺さぶりつつも間合いを取っていた両者だったが、ルシファーが先んじて前に飛び出す。

飛び出してきた相手にリニアライフルを放ち、弓を引くようにミスリルソードを振りかぶる。牽制けんせいからの突進攻撃をルシファーは、右腕部で弾丸を中空で叩き落とし、その場で両腕を交差し体を低くする。次の瞬間、黒いAAはエメラルドグリーンの光に包まれる。両腕、両足、そして、背中から伸びる翼を思わせる十二本の光の刃で武装

した異形のA Aが視界を失った一瞬に合わせ加速する。

明の視界が戻ると、目の前に淡い緑色の光を纏ったA Aがその身を刃として迫る。全身が剣でできているかのようなA Aに、ミスリルソードを突き立て応戦する。

黒い異形は、仕込み刀のように肘から突き出る刃でフェアリーの『ライジングダビッド
累進加速』も合わさり神速と化した突きを受け止める。

刃と刃が火花を散らす。フェアリーは、更なる追撃を仕掛けんとリニアライフルの射撃と連動して左腕部に装備されたショットアンカーを放つ。ハイフォンは、肘を支点として回転蹴りで首を狙いつつアンカーを回避する。

明はこれをバックステップでかわしつつ、リニアライフルで迎撃する。ルシファーは全身の武器を使い、宙返りしながら苦もなく弾丸を打ち落とす。

そのまま間合いを取り直すと、どこか楽しむようにハイフォンが言う。

「あなたの力がその程度では、死んでしまった黒木智樹が浮かばれないですね」

「言われなくとも、わかっているさ」

言うが早いか、ルシファーがフェアリーに踊りかかる。中距離射撃が有効でないと判断した明は、リニアライフルをホルスターに納めて、ミスリルソードを抜刀し敵を迎撃する。

光の刃と化した右腕と左足による攻撃を、二本の剣で受け止める。

相手の体ごと弾き飛ばそうと力を込める。

すると、ルシファーはミスリルブレイドの刃を支点に回転し、後ろ向きにショットアンカーを飛ばしてくる。

「受けられますか」

《Dragon dance》（竜の舞）

挑発するようにハイフォンが引き金となる言葉を紡ぎ、ルシファーが反転しフェアリーに向かい加速する。

（これは、俺の《Attract tempest》と同じタイプ

の……)

突き出した腕部から放たれるアンカーをミスリルブレイドで叩き落す。しかし、その刃がアンカーに引っかかり、そのまま強引に引き寄せられる。

左の掌から伸びる剣から風払うように、一閃。

右の手を振り下ろす二撃目。

交差した両腕で、切り上げにさらに一閃。

跳ね上げられた右腕の剣が宙を舞い、右足の膝蹴りが腹部に突き刺さる。その衝撃で、突き出すように伸びた首に左足の前蹴りが放たれる。錯覚として気絶してしまいそんな衝撃が脳にフィードバックするが何とか意識を保つ明。

「こんなところで、負けられるかよ!」

勢いをそのままに、駆け上がるように空中へ飛ぶ黒い天使。頭部を蹴られた衝撃で途切れそうになる意識を気合で立て直し、上を見上げる明。

直後に、両腕の掌から伸びる二本の光剣が投げ放たれる。その内の一本を左腕に持ったミスリルソードで叩き落とし、もう一本が右腕に突き刺さる。フィードバック現象で攻撃を受けた部分に激痛が走るが、構わずにルシファーに突進を仕掛ける。

中空に後退した動きに合わせ、左腕でミスリルソードを突き出し、二つのサブアームを展開して二丁のライフルをホルスターから抜き出し即座に放つクイックドロウで敵の動きを牽制する。

目前に迫るミスリルソードをすねから展開された刃で蹴り飛ばしこれを防ぐルシファー。吹き飛ばされる剣を無視して加速を続けるフェアリー。

「まだだ、今の俺にはこいつがある」

ぼろぼろになった右腕と左腕で背面部に新たに装備された炎の剣を引き抜き、思い切り振り下ろす。アクロバティックな動きからの強い制動が祟り、この攻撃に反応仕切れないようすのルシファー。

「くっ、これ程までに……」

赤く燃えたつ剣を手に踊りかかるフェアリー。

その斬撃は、再度両の手に出現した剣のガードを突き破り腕ごと両断する。陽炎^{かげろう}をただよわせフェアリーは喉元^{のどもと}に刃を付き立てる。左右のサブアームにはリニアライフルを構え、照準^{しょうじゅん}をコアユニットに向ける。

「これで、終わりだ」

「チェックメイトみたいですな」

ルシファーは、降参^{こうさん}だとも言うように両手をあげる。

「あんたとは、もう、戦いたく、ないな」

「はは。あなたなら辿り着けますよ、あの高みへと」

「つたく、俺のことをあまり見透かすなよ、ハイフォン。だから、これで終わらせよう」

そういつて、明は弾丸を放ちハイフォンに止めを刺す。呼吸を荒げるように、明は途切れ途切れに言葉を紡ぐ。フェアリーの傷だらけでぼろぼろになった姿が、僅^{わず}か数秒の攻防の凄まじさを物語っている。そして、高みとは先程の戦闘で見た白の教団のトップである、アティド・ハレを示しているのだろう。

【THE END（戦闘終了）】

ビジュアルエフェクトのカットインが挿入され、今更ながら自身の勝利を認識する。

（少なくともあんたと同じレベルにまでは、辿り着けたようだ）
拳^{こぶし}を握り、辺りを見渡す明。

そこには戦闘中の豪雨^{こうう}が？であるかのように晴れ渡り、空中から見渡す風景には虹が広がっていた。剣を背中にしまい、ホバリングしながら俯瞰^{ふかん}する風景は広大でどこまでも広がっていた。

「実力まで擬態^{ぎたい}してやがったな、あいつ」

ぼんやりと一人毒づいていると、明はポリゴンとなって霧散^{むさん}しエリアから強制的に転送されるのだった。

座標空間と呼ばれるフィールドで、鏡とセルゲイの両者は対峙^{たいじ}し

ていた。

その地形は、無数の線と透明なフロアパネルの床が組み合わせられて構築されている人間味のない空間だった。無数の線は物体の運動を阻むことはないが、宇宙空間に線が引かれているような奇妙な感覚風景が両者の視界に映し出される。

「明の戦闘は終わったみたいだね」

仮想の任意の地点、任意の情報を全て知ることができる『神の眼』の力で明の戦闘終了を確認する鏡。彼女の操る真紅のウィザードの前には、全身の至るところを金色に装飾された煌びやかなエンペラーのA Aの姿があった。

「出来損ないの分際で、ずいぶんと余裕だな。このセルゲイ・ロマノフを前にして！」

怒りは感じないが、高圧的な性格ゆえに強い言葉を並べ立てるセルゲイ。激しい性格ゆえに誤解されやすいが、本当に怒ってはいない。

「それは、私達への嫉妬しとなのかしら？　そういえば、あなたが使っているオートレスポンスムーブシステムだって、私が昔使っていたものの劣化版じゃないの」

「あの魔女の紛い物が偉そうにほざくな！」

「ふふ、あなただけが憎しみを持っていたわけじゃあないのよ。当然、私だってあなたが憎かった。与えられた地位に甘んじて、のうのうとしていたあなたが」

「互いに相手に好意を抱いていた事など一度もなかったさ、昔話はこの辺でいいだろう。ここは戦場、ならば意見を言えるのは勝者のみ」

「珍しく意見が合うわね、お礼にすぐに終わらせてあげる」

「出来損ないが俺に勝つつもりか。笑わせる」

「つもりではなく、これから起きるただの現実よ」

鏡が最後にいった言葉は静かな怒気を放っていた。そして、戦闘開始後からもしばらく続いていた会話はこれで終了した。

「ソードビット展開」

ウィザードを中心に幾重にも重なり合う魔方陣、そして、その円周を囲むように展開されたルビーの輝きを放つ赤く透き通った刃。
「貪欲なる刃よ、汝が敵を喰らい尽くせ！」

数十からなら輝く剣が彼女の号令に従って、猛獣の群れの如くその敵に対し牙を向ける。彼女があえて声に出して行動を指定するのは、対人戦闘時のブラフと自身の戦意高揚の意味を持っていた。当たり前のことだが、技名をわざわざ言うのは相手に情報を与える以外の何物でもないからだ。

「この俺にそんな攻撃が通じるとでも思っているのか？」

エンペラーは、向かい来る剣を全て打ち落とす。

「いえ、これで終わりですから」

「戯言を」

エンペラーは自身を守るように展開されているビットとは別に、さらに攻撃用に複数のビット兵器を展開する。数十からなる砲身が一斉に動く姿は、さながら王の命令に従う兵士を思わせる。

「最期にいいものを見せてあげる」

叩き落され弾かれた剣がエンペラーを包囲するかのよう展開されている。

「減らず口を」

エンペラーに再度向かう刃を順次、システムに自動で制御された無数の銃口が迎撃する。その間にウィザードは自身の装甲を兼ねるソードビットをさらに展開する。

《Magic Circle》（魔方円）

ゆったりとしたローブのようだった装甲は、上着のようになり、肩口にあるものを残すのみとなる。彼女の周囲を覆うかのよう三重に連ねられた円形の電磁障壁が展開される。その円の内の一つが彼女の正面にリングのように配置される。

ウィザードはリングをくぐるように走り、自身の機体が重なった瞬間さらに加速する。勢いをそのままに背中にある大剣を引き抜く

ウィザード。弾丸が如き速さで放たれた攻撃をエンペラーは体を反らすことでかわす。

普段、鏡は電磁障壁を用いて相手の攻撃を逸らし受け止めることに利用している。だが、これはその逆で物体の運動を加速させることに利用していた。

「あつけないな、出来損ないはその程度なのか」

「私の攻撃がこれで終わりなんて誰が言ったの？」

くすりと笑い、鏡はエンペラーを包囲する剣の一振りにぶつかるときのようにそのまま加速を続ける。そして、ぶつかる直前に弾かれるように加速し、今度はエンペラーの真横から切り付ける。

磁化した剣を中継地点として自身を強制的に移動させる。

「また、かわしたね。さて、何時までもつかない」

「く、舐めるなああつ！」

銃口が高速で動き回るウィザードを自動で捕捉し、攻撃をするがコンピュータの予測移動地点にウィザードの姿はない。上下左右、前後に斜め、不規則に立体的な軌道で永遠と加速を続けるウィザードの姿は既にシステムで捕捉できる速度を完全に凌駕していた。

システムによって自動で放たれてしまう攻撃以外にも、手動で一部を制御して反撃を試みるセルゲイであったが、システムに依存しきった彼は純粹にそれを超える物には対処しきれない。

「なんで私がそれを使うのを止めたか、理解出来たろう？ 結局のところ欠陥品なんだ、その戦闘スタイルは。相手の動きに対して自動で反応してしまうがゆえに、簡単に誘導に引つかかってしまう」

「く、だが、俺はそれでも負けるわけにはいかんだ。システムを高速化すれば、まだ対処は可能はずだ」

セルゲイ本人は、回避を主体にアシストプログラムの改変を試みているが既にビット武装の三分の一は破壊されていた。そして、自身の剣を媒介に、ピンボールのように跳ね回るウィザードの姿は魔術師と言うよりも曲芸師という方が合っているだろう。

点から点への移動は直線的なものであるが、それを細分化し無数

に繰り返すことでその動きは曲線となり、螺旋を描き、循環する。

「もういいだろう。終わりにしよう、セルゲイ・ロマノフ」

「それでも、俺には皇帝としての矜持がある。最後まで、戦いを続ける」

致命傷といえる攻撃こそ避けてはいるが、既にエンペラーの姿はぼろぼろだった。その姿にもはや君主としての威厳は感じられず、敗軍の将といったようすだ。

「ご立派。なら、取って置きをくれてやろう」

高速で移動しつつ、ウィザードは大剣を左手に持ち、やや下段に構える。そして、緩慢な動きをした次の瞬間、数十の残像がエンペラーに襲い掛かる。それは、あたかも予選の最後にミカエルが見せたあの攻撃のようでもあった。

「……やはり、そなたは天才だな。だからこそ、俺は目指し続けていた」

エンペラーの真横を通過した瞬間に、エンペラーは無数の斬撃に切り刻まれる。加速し過ぎた自分自身の機体を前面に展開した魔方阵が受け止める。そして、背中に剣を収めると同時に展開されていたビットが自身に集まりローブとなって再構築される。

「目指しているだけでは、永遠に辿り着くことはできないよ。理想とは、目指すものの先にあるのだから」

「ふん。ならば、今度は俺自身の力でぶつかるとしよう」

うずくまる様に前のめりにエンペラーはよろける。無数の攻撃が突き抜けた衝撃が全身を駆け巡り、機体が弾ける。

「君のそういうところだけは評価しているよ。それに、君のことを憎んではいたが嫌いではなかったからね」

【THE END（戦闘終了）】

彼女の言葉を最後に、エンペラーの姿が空間から消失する。そして、自分にとって本当に嫌いな相手であれば、顔も見たくない言葉も交わしたくないと思うのが自然だろう。なればこそ、好意という感情の裏返しは憎悪などではなく、無関心なのだろう。

「彼の動きをトレースしたつもりだが、それでも再現率は半分以下といったところか。本当に化け物だな、教皇様は。果たして、誰があそこまで辿り着けるのだろうか」

鏡が、わざわざ予選での敗北を再現してまで屈辱くつじやくを味合わせたかったのか、それとも彼に進むべき道を示したのかは定さだかではない。ただ、真実がどうあれ問題点を指摘するという行為は、その後の変化を期待するものであるといえるだろう。

現時点で、チーム『水月と愉快な仲間たち』の二勝が確定した。

2 - 3 Arrive (後書き)

暫定、終了。うーん、見てる人結構いるんですね。アクセス数それなりに増えてるみたいなんです。でも、お気に入りとかはまだまだ少ないんですよ。加筆、誤字一部修正(8月18日)

2 - 4 T r u t h (前書き)

明かされていく真実。
過去に何があったのか。

2 - 4 Truth

08 Truth

時は、鏡の戦闘が終わる少し前に遡る。さかのぼ

水月とグリゴリーの戦闘に選ばれたフィールドは古代の闘技場、アリーナ。そこでは、水月の操るウィンディーネとグリゴリーの操るヘッジホッグが対峙していた。

「こうして戦うのって本当に久しぶり。わくわくしてきます」

オープン回線越しに無邪気に話し掛ける水月。

本来であれば使用している言語が異なるために通じるわけがないのだが、仮想空間上では機械言語を介して即時翻訳がなされるのでどのような人間とでもかなりの部分で意思疎通いしそつうが可能だった。

『バベルコード』と呼ばれるプログラミング言語を介して、自動翻ほんや訳がAIによってなされるためにごくごく自然に会話が成立する。

仮想空間では、行動と意識がイコールであるがゆえに思考から記号変換される過程を逆に翻訳することで万能翻訳機としている。

もっとも使用され始めて初期の頃は精度の悪い翻訳機能しか持っていなかった。しかし、仮想空間上に無数に存在するモルモットたちのデータを参照にその精度を徐々に確かなものへ進化させるに至った。

「ブランクがあっても勝てると思っているのか？ この俺も舐められたものだ」

「ブランク？ 関係ありませんよ、そんなことは。それに今の私は、誰にも負けないと思います」

「ジョークにしては笑えないな。君が俺より強いとでもいうつもりかい」

「言葉を尽くしても無駄むだでしょう。結果が全てを示します」

「一分で終わらせよう。時間は有限だ」

「その意見には同意です。では、始めましょう」

両者は戦闘後、初めて武器を構える。

《Water Sprite》（水の精霊）

水月の思考と連動してウィンディーネは、先端に装飾が施された儀式槍を構え水流を展開する。予選のときのように防御主体ではなく、攻撃にもすぐに移れるように展開されたそれは、彼女を守護し共に戦う精霊のようにも映る。

対するヘッジホッグは要塞が如く、全ての砲台をあらゆる方向に展開する。

標準装備されている『多重照準』のアビリティとそれによる命中補正は、プレイヤーのレベルが一定水準以上であれば回避が困難になる。なぜなら、紙一重で回避を行った場合には全て命中したものとみなされるからだ。

互いの戦闘準備が終わり、両者の視線が交錯する。

「それでは、演舞を始めましょう」

「お前が踊るのは、俺の掌の上だ」

オープン回線越しに言葉を放ち、戦いが始まる。

先手を打ったのは、強気な言葉を放ったグリゴリーの方だった。

波のうねりのように、複数の砲台から弾幕が展開されていく。ミサイル、弾丸、光学兵器、チャフ、あらゆる種類の兵器がわずか数秒でアリーナを覆い尽くす。その鮮やかな手腕は、海賊連中には期待するべくもない力量差の表れでもある。

対する水月は、フィールドの表面に薄っすらと水を張りその上を滑るように進んでいく。牽制の目的なのか、わざと外すように近くで爆発が散発的に起こる。

（安易で、愚直。優秀な戦術ではあるけれど手管は見えています）
その後も爆撃染みた攻撃は前に後ろに上空からも降り注ぐ。しかし、それでも水月の操るウィンディーネは、一度たりとも被弾しない。防御の姿勢を取ってはいるが、それが防御するために使われた

ことはない。十秒、二十秒と攻撃を完璧に交わされ続け、やっと事態の異常さに気付いたのかグリゴリーの方にも焦りが見て取れる。別段高速移動しているわけでもない、しかし、ゆっくりとではあるが確実に水月の操るウィンディーネがヘッジホッグに近付いてきているのだ。

「……ありえん。俺は悪夢でもみているのか？」

『GENESIS』におけるプレイヤーの強さとは、攻撃の正確さ、状況に対する反応速度、防御技術、回避技術、技術を行使する判断能力、そして、それら全てを同時にこなす並列処理ができるかどうかが重要になってくる。

ヘッジホッグは機体の火力とアビリティの補正があるために初心者にも使いやすい機体という認識が広まっているが、実際のところは武器が多過ぎるために完璧に使いこなすのは初心者には不可能だった。

これらは、全て同時に展開して初めて意味を持つからだ。

基本的な戦術としては、チャフを散布さんぷしつつ相手の動きを牽制けんせい、移動を制限して火力で問答無用に仕留める。そういった攻撃パターンがセオリーであると言える。しかし、実際にはそれらを並列的に全て処理できる人間などほとんどいないのが現実である。

エンペラーを扱っていたセルゲイのように半自動化してしまえば、あるいは普通の人間にでも扱えるのかも知れないが、そんなことができる人間はグリゴリーなどを含めてほんの一握りである。

「左右からの誘導に上空からの牽制も含め、全て、全てこちらの思惑通りに動いているはずだぞ。なのに、なのに、なぜ当らん！」
切り忘れているのか、それとも、ただ単に付けっぱなしにしているのか、オープン回線にグリゴリーの声が響く。その声には怒りのようなものが見え隠れする。

「ふふ、一分までは、あと30秒もありますね」

弾丸の嵐を掻かき潜もぐり、ついにヘッジホッグの眼前に辿り着くウィンディーネ。その声は、もはや彼にとってはその少女のそれでは

なく悪魔のささやきだった。少なくとも大会での死ぬと言うことは無いが、しかし、自分自身が追い詰められているという状況に久しくなっていないかった彼の恐怖はどれほどのものだろうか。

《Aqua Lance》（水の突撃槍）

その言葉を発動キーとして、ウィンディーネの持つ儀式槍に周囲の水が巻き上げられる。

移動しながらも彼女の周囲を渦巻いていた水流の全てがその集まっていく。そして、巨大な槍は、武器であり盾ともなる。至近距離で回避しきれなくなった弾を全て受け止めながら正面進んでいく。

肉薄されたヘッジホッグは、正面に装備されたの二門の大型砲身を放つ。それを水月は槍に集められた水流をヘッジホッグにぶつけることで無効化しつつ、飛び上がる。水の塊に包まれたヘッジホッグを飛び上がったウィンディーネの儀式槍が捉える。その一撃は片側の砲身を潰し頭部を貫通する。

《Flash Freeze》（瞬間凍結）

水月の言葉を合図に、フィールドを薄っすらと覆っていた水は一部を気化させ急速に失われた熱量で凍結する。出来上がったのは水晶の原石のような粗い氷の彫像。別段周囲に潤沢な水源があるわけでもないで大した足止めにもならないが足止めとしては一瞬で十分だった。そして、儀式槍が地面に突き刺さると同時に彼女はさらに高く飛翔する。

壊れた砲身から誤爆しつつもなんとか状況を把握するグリゴリー。しかし、その間に行われるはずだった弾頭の制御やチャフの散布は完全に空白となる。制御からあぶれた兵器が周囲に意味もなく撒き散らされる。

「……槍で棒高跳びだと」

相手を見失うが、それでも直後に意識を立て直す。グリゴリーは敵の位置をリーダーで確認すると、視点を別のカメラに切り替えウィンディーネを再度視界に捉える。そこには、反転し水の槍を構える水の巫女が投影される。

《Blue javelin》（青い投槍）

ARMによつて高速かつ自動化された動きが彼女の思考に従い再現される。大気を凝縮し高密度に圧縮された水の槍がその手に大きく掲げられる。上空で渦を巻き回転する水の槍を、ウィンディーネはヘッジホッグに向けて思い切り振り下ろす。

矢の如き速さで放たれた水の刃は、氷を打ち砕きヘッジホッグの背面の砲身を貫通し突き抜ける。そして、彼女の着地直後に、アーナに響く戦闘終了を告げるシステムアナウンスの機械音声。

【THE END（戦闘終了）】

「ふふ、本当に一分掛からなかったな」

目の前で起きたことは、彼女自身が一番信じられなかった。

ただ、戦闘中に異常に冴えてくる自分自身の意識と、相手の思考を先読みしてそのわずかに先へ先へと移動していた。対戦相手であるグリゴリーは、それを自分の戦略の上で起こっているものと勘違いしていた。

だから、彼女のわずかに後ろや横で爆発が起こり、弾丸が通過した。射線が重ならない軌道であればその攻撃にアビリティの補正は掛からない。カス当たりが直撃に変わるという程度のものであるがそれでも一撃死がありうるこのゲームではかなり強力なアビリティだった。

「……私はもう、誰にも負けたくないから」

そうつぶやいた彼女の心中は、氷のように冷え切っていた。

目の前のことなど水月にとってはどうでもいいことだった。ただ、すぐに終わらせて少しでも長く彼と一緒にいたい。一時であつても離れたくない。そして、自分の弱さのせいで以前のようなことが起きるのも二度とごめんだった。

砕け散った氷と水滴がダイヤモンドダストとなり、彼女の勝利を彩るかのよう^{いろど}に輝き、無数の欠片となって霧散した。

午後2時、アーリーナ内部の控え室にて。

『水月と愉快的仲間たち』の面々が、再度二つのソファに男女別に腰掛けて向かい合っていたところ、来客があった。

「一回戦突破、おめでとうございます。明さん」

恭しく礼をして、祝いの言葉を述べるハイフォンだが、冷たい声色のせいかどこまで本気で言っているのかいまいち判別が付かない。「ついさっき倒したばかりの相手からそう言われるのは、妙な気分だな」

「古来より、戦いの勝者には最大限の賛美を、敗者には服従が約束されていますからね。至極当然のことですよ」

さも、それが常識だとばかりに話すハイフォン。いったいそれはどこの世界の、何時の時代の常識なのだと問いただしたくなる明だったが、適当に流すことに決める。

「また、極端な話だな。それで賭けは俺の勝ちだな、ハイフォン」
「ええ。これで私は明さんの愛の奴隷ですね」

その発言を聞き『水月と愉快的仲間たち』の一同は一瞬で凍り付き、そして、止まっていた時が動き出す。

「不潔な！ 君という奴は」

「明の馬鹿！ いつのまにそんなうらやましい関係に……。って、あれ？」

二人は、身を乗り出して明に詰め寄る。

もちろん、明にそんな心当たりは無かった。

「二人とも落ち着け、誤解というか、冗談なんだよな？ ハイフォン。しかし、面と向かって話したことはほとんど無かったが、あんたそういうキャラだったんだな」

「さあ、どうでしょう？」

目をつむり、口元だけで笑うハイフォン。どうやら、完全に遊ばれているようである。

「頼むから、火に油を注がないでくれ。收拾が付かなくなる」

「少々惜しいですが、あなたがそう望むのでしたら」

名残惜しそうに三人を見渡し、目で合図をすると明の隣に腰掛け

る。

……なぜか、やたらと体を密着みつちゃくさせて。

「とりあえず、離れる。ハイフォン」

「いけず、ですね。まあ、そんなところが気に入っているのですが。関係はゆつくりと進めて行くとしましょう。ふふふ」

演技でもしているつもりなのか、かなり大げさにすくすくこと引き下がるハイフォン。

とりあえず、明には女性陣二人の視線が痛かったのでじりじりとソファの端っこまで移動しつつ口を開く明。

「それで、あの日の真実を教えてくださいんだな。ハイフォン」

「ウーで構いませんよ。まあ、好きな方でお呼び下さい。それでは、黒木智樹、並びに黒木愛について、私が知っていることをお話しするとしましょう」

「なら、ウーちゃん。って、呼びますね」

「私はウーさんで」

「そういうところだけ反応いいな、お前ら。まあ、俺は付き合いも長いことだしウーと呼ばせてもらうよ」

「本当に面白い方達だ。では、話を始めましょう。まず、黒木智樹には黒木愛という妹がいたことはご存知ですね」

「ああ。それは、データで確認した」

「彼女がこの話のキーパーソンとなっていたようです。彼女は、皆さんと同じ学校の生徒でしたが病気がちのため、病院に入退院を繰り返すような形だったそうです。とはいえ、流石にあの黒木智樹の妹だけあって、成績は優秀だったそうです」

「そうか、続けてくれ」

少しうつむいて、明は話の続きを促す。

「学校も、今は仮想技術を使った遠隔地からの出席が認められていますから特に問題は無かったようです。そして、昨年その彼女の容態ようたいが悪化したそうです」

「先生は、そんなこと一言も言っていなかったな。いや、わざわざ

ざ言つようなことではないか」

「手の施ほししようが無い、その最後通告を受けて彼は彼女を仮想で生き永らえさせようと持てる全ての知識を動員したようです。黒木智樹は、もともと仮想空間の開発に関わっていた人間ですから」

「その発想が既に狂気であると、気付かなかったのか」

胸の前で十字架を握り鏡が押し殺したような声でつぶやく。

「そして、彼の実験は成功を収めますが、彼は自らの行為を呪い狂気に取り付かれます」

「でも、実験は成功したんだよね？」

「そうです、水月さん。あくまで、客観的に見た場合は成功であるのですが、しかし、主観的に見た場合はおそらく自分自身の手で一番救いたかった人間を殺してしまったことになると思います」

感情のあまりこもっていない彼女の声だからこそ、明にはそれが真実なのだと思えた。

「それは、俺が仮想で見た黒木愛と関係しているのか？」

「それが実験の成功例なんですよ。現代の技術を以ってしても不可能と言われている完全なAIとして生まれ変わった姿、それが今の黒木愛」

「完全な自律思考を獲得かくとくしたとでもいうのかい？」

不可能だ、とでも言いたげな鏡。

「計算と記憶をコンピュータが、思考と判断の部分を人間が分業している擬似AIではありますが。今では人間と見紛みまごう程のものとなった。それは、明さん自身が目に行っているでしょう？」

確かに明としても違和感はあるが、それが人間ではないという判断には至らなかった。実際に自分自身が会話していてもなお、あれがただのAIであったとは思えなかった。そう思えるほどには彼女の会話は人間的だった。

「今という言葉が散見しているが、作られた当初は不完全だったということか？」

「当初は、機械的なプログラミング程度のものでしたようです。」

特定の行動に対して特定の返答をするという旧世代の遺物。^{いぶつ}しかし、黒木愛のデータを取り込んだことにより成長の概念^{がいねん}を獲得したAIは、仮想に存在する膨大なデータ^{ぼうだい}を参照に自己を修正し始めた」

参照されるデータとは、こうやって会話している自分達やそこに存在する全ての人間の行動を指しているのだろう。より人間のする行動へと近付こうとするAIであるが、人間をベースに作られたAIはむしろ最初から人間そのものなのではないだろうか。

「バベルコードが急速に使いやすくなったのと同じ、ということなの？」

子リスのように少し首を傾^{かたむ}けて水月が質問をする。

「そもそもバベルコードの開発者は黒木智樹ですよ。といってもこちらはあまり表の世界に出て来ない話ではありますが。宗光学院へは新城大地氏の招聘^{しょうへい}で、教職は隠れ蓑^{みの}となっていたそうで」

「つまりは、より人間に近い思考を獲得する以前の状態のAIを見て、妹を救うはずがむしろ自分自身で殺してしまったと思い、狂ってしまったとでもいうのか？」

「私が調べた情報と、私自身の推測が一部含まれていますが、概^{おおむ}ねその通りかと」

「今、彼女はどうなっているんだ？」

「肉体は植物人間状態で安置され、現状は仮想で思考ルーチンのみ存在ですね。仮想に脳を複製^{ふくせい}し、その記憶を継承^{けいしょう}し、統合されたAIは判断経路を参照にする。そして、仮想においてAIと統合^{とうごう}された彼女は神そのものと言えるでしょう」

「黒木先生が言っていた女神、ってそういうことなのかな。私を彼女と勘違いしていたみたいだけど」

「彼の真意の程は測^{はか}りかねます。ですが、外れてもいないと思いますよ」

「どういうことだ？」

「そのままの意味ですよ。とはいえ、彼にとっては仮想で神になるよりも、人として再会したかったのだでしょうが」

「そうか。俺は先生の事情なんて考えもしなかった」

うつむき、明が搾^{しぼ}り出すような声で話す。

「自分の正義が、相手にとっても正しいかなんて誰にもわからないさ。それに知ったところでどうなるようなものでもないだろう。水月を助けるにはどの道、他の選択なんて無かった。説^{せうとく}得できたかもしれないなどと思うのはうぬばれだよ」

「鏡、言い過ぎだよ」

「いや、鏡の言う通りだ。知ったところで何も変わらなかっただろう」

だが、といって明は続ける。

「知ってしまつてからなら、何かできることがあるはずだ。せいぜい俺達にできることをしよう」

「前向きですね。さて、これで私から話せることは終わりです。またのご利用をお待ちしております、明さん」

立ち上がり、扉へと向かうヘイフォン。

「ああ、その内また利用させてもらう。そのときはよろしく頼む」
外に出ようとするヘイフォンを見送り、手を振る三人。

去り際の彼女の顔はさわやかな営業スマイルだった。

「さて、彼女との関係を話してもらおうか」

「そうだね、是非とも丁寧^{ていねい}に説明して欲しいね」

「え、さっきので終わりじゃないのか。というか、お前らが楽しめる情報は何もないと思うぞ。女性だって知ったのは、さっきの戦闘開始直前だし」

「といって、この朴念仁^{ぼくねんじん}がどうこうするというのはどの道ありえないか。はあ」

「あははは」

溜め息を付く鏡と、乾いた笑いを浮かべる水月。

「朴念仁は鏡も同じだろう。愛想の欠片もない」

失礼な、とでも言いたげに明が鏡をにらみつけると、そんなことは

知らないとかかりに鏡は視線を横にそらす。

「確かに鏡はクールだね。うんうん」

そして、そんな両者のことなどどこ吹く風と明に同意する水月。

「だろだろ。もう少し愛想あいそが良ければもてるのに、もったいない奴だよな」

「く、もてない君が言っても説得力がないね。全く馬鹿らしい」

引きつった笑みを浮かべはき捨てるように鏡が言う。

「それはお互い様だろうが、この天邪鬼あまのじゃく」

「はあ、止めよう。互いの傷に塩を塗るだけだ。興奮してすまない」
ヒートアップしそうになったところで、鏡が自重する。実際、不幸自慢など言っていて悲しくなってくるだけだった。ソファに座りなおし、どっかりと寄りかかる鏡。

「青春していますね」

そこには、ウーが少し扉を開けて明たちを覗のぞき見していた。

「ぶつ。な、なんでもまだウーがそこにいるんだよ」

「いえ、何、面白そ……大きな声が聞こえましたので何事かと」

「本音が漏れているぞ。ウー」

せめてものの反撃なのか、明は恨みがましい視線をウーにぶつける。

「それは失礼。痴話喧嘩ちわげんかは程ほどに、くく」

彼女にとっては余程面白いのだろうか、笑いを殺しきれずにウーが堪こたえるように話す。

「痴話喧嘩ではないです、失礼な」

正面からは否定しにくいのか、目を合わせずに鏡が答える。

「そうです、夫婦喧嘩ふうふげんかです」

鏡の返答に合いの手を入れるように水月が応じる。その返答が思わずノリで答えてしまったものなのか、本気でそう思っているのかは定かではない。

「馬鹿！ これ以上火に油を注ぐんじゃない、水月」

「そんなに私の腹筋をいじめないで下さい、あはははは」

その場でしゃがみこんで笑い出すウー。どうやら彼女は相当に笑い

上戸らしい。だが、これはこれで反撃に成功したとも言えよう。

そして、それから数分後。かなり本気で笑い転がっていたウーがいつもの調子を取り戻して、再度ソファの同じ席に鎮座する。ちんざ

「話せるようになったか」

「失礼しました。ありがとうございます」

「それで、本当にただ俺達のようにすを見にきた訳じゃあないよな」

「ここで冗談の一つも言いたいところですが、筋肉痛にはなりたくないなので要件だけをお話しましょう」

右手でお腹を押さえつつ、もう片方の手を口元にあてて、こほん、と咳払いをしてウーが話し出す。どうやら彼女は相当な笑い上戸らしい。

「二回戦こと、決勝戦は残りのチームが一つになるまでのサバイバルマッチなのはA Iからの連絡で知っていますね」

「ああ。そうみたいだな」

「黒の旅団が、米帝のチームとして参加しています。そして、白の教団のトップと並び立つとされる男がそちらから出場しています」

「米帝が本気なのはわかるが、それほどの男がなぜ別チームから参加しているんだ？」

「両者に何らかの合意や約定があつたのかもしれませんが、快樂主義者であるあの男がどこまでそれを守るのかはわかりません。そして、彼の操るサタンと直接対決になるようでしたら絶対に逃げてください」

「これはゲームとしての『GENESIS』だろう？ 危険がある訳でもないのに、なぜ私達が逃げる必要があるんだ、ウーさん」

「嗜虐趣味のあの男の前では、死ねない方が地獄ですよ。最低でも生きたままだるまにされる覚悟があるのでしたら止めはしませんが」

「死なないんじゃないって、死ねないんだね」

そういう水月の虚ろな瞳は、何を移しているのだろうか。明はむしろそちらの方に妙な不安に駆られる。

「加えて、それ以上にあの男の持つアビリティが問題です。『ルールブレイク破戒』」

のアビリティは、AIの支配から部分的にですが脱却するものです。一回戦で彼らとあたったチームは、私と連絡を取り合っていたのですが、おそらく既に統合されたのだと思われます」

「そう、か。貴重な情報ありがとう、ウー」

「礼には及びませんよ。他には固有のアビリティとして『混沌』^{カオス}これは、デビルの擬態の強化版とでも言いましょうか。複数のAAの武装や自身でイメージしたものをキメラ的に融合^{ふごう}し使用することができます」

「デモムービーのドラゴンの形態^{けいたい}を取っていたように、戦闘中に好き勝手に形を変えることができるってことか」

「その通りです。そして、あのムービーのように教団トップ、アテイド・ハレの操縦するミカエルと戦闘するものと思われますので極力あの二人には近付かないことをお勧めします。死にたくないのですしたら、ですが」

「ご忠告痛み入るよ、ウーさん」

「ありがとう、ウーちゃん」

「最後に『転送』^{トランスポート}のアビリティです。上位のプレイヤーは基本的に全員持っているものと思われますので注意してください。といっても、彼らは戦闘中にあまり使用しないようですから記憶の隅^{すみ}に止める程度で」

「以上です、と結ぶウー。」

「まあ、すぐに降参するつもりは無いがな。どうせいずれは戦わなければならぬ相手なんだろう。俺にしたってウーにしたって。なら、戦闘は間近で見たい。それに命懸けはもう慣れてしまったよ」

別段、明たちが死の恐怖を克服した訳ではない。ただ単に感覚が麻痺^{まひ}してしまっただけの話だった。

「本当に馬鹿ですね、あなたは。少なくとも一騎打ちになるような状況は避けてくださいな。それが、早々にやられて退場するか。…

…お得意様は失いたくないものでして」

「素直じゃないのはみんな同じなんだね、ふふ」

「誰のことを言っているんだか、水月」

おどけるように笑う水月に呆れるように問い掛ける明、鏡はそつぽを向き、ウーは爽やかな営業スマイルを浮かべている。

「さあ、誰でしょう」

そうして時は過ぎていく。

再び命を賭けた戦いの時が、刻一刻と迫っていた。

2 - 4 Truth (後書き)

とりあえず、設定資料更新しました。
(8月27日更新)

2・5 Heil（前書き）

明には、自身に喰らいつこうと迫る竜の牙が酷く雑な動きに見えた。

「驕ったな、あんた」

ぞくりとするような殺気と共に静かにつぶやいた明。

2 - 5 H e l l

09 H e l l

目の前に映るのは暗い闇。

視界には混沌こんとんとした炎とも煙とも似つかない何かが漂う。それは、この景色が光に満ちた生者の世界などではなく、死者のための世界なのだと思わせる。眼下には、地面と思われる場所が散見さんけんし赤黒いマグマのような濁流だくりゅうが川となって流れる様子は、人体に張り巡らされた血管を連想させる。

戦闘に選ばれたフィールドは、地獄じごく。

それは、これから起きる不吉を象徴しているかのようなだった。

《Survival》

エフェクトが視界に投射されると同時にフィールドに等間隔で配置された八チームが闘争を求めて動き出す。ここまで勝ち残ったのは、『白の教団』、『黒の旅団』、『米帝』、『世界連合』、『王国連』、『神国皇族連』、『水月と愉快な仲間達』、『nameless』というチーム。

最後の『nameless』は、どこかのギルドの出身なのだろうか。明には聞いたことのないチーム名だった。

淡い光が眩く輝き、暗い空の闇を照らし出していく。

視界が白一色に染まっていく。

天が割れたという表現が近いのだろうか。

天を覆う混沌おおが紅蓮くれんの炎によって切り開かれ、そこには黒いドラゴンの姿が見えた。そして、竜の前に白い光が立塞がった。狂笑と共に雪崩れ込んだ黒い竜、そして、直後に割り込んだ白い光に包まれた何かがフィールド上空で対峙たいじする。

それは、美しく、神々しく、無条件に崇めたくなってしまうような、

神の威光いこうとも言つべき何かがそこにはあつた。

「このフィールドにいる全員に告ぐ。死にたくなければ、すみやかにここから帰還リターンしろ。この場は私こと白の教団の『教皇』が引き継ぐ」

カリスマめいた何かを持った声がオープン回線越しにフィールド全体に響き渡ると金縛りが解けたかのような錯覚に陥る。一瞬だが、呆然としていたと、明は後になってから自覚する。

一瞬の沈黙ちんもくの直後に、王国連のチームが怒りと共にミカエルに襲い掛かる。そんな様子を見物したいのか、サタンの使い手は後方に下がり待機たいきする。

「何様のつもりだ、てめえ」

「教皇と呼ばれていい気になってるようですな」

「俺達に命令していいのは、女王陛下だけなんだよ」

メイス、大剣、大盾と槍をそれぞれ携えた三体のアークエンジェルが連携れんけいしてミカエルに襲い掛かる。剣を中段に構えミカエルが応戦する。

「引き継ぐといった。リターンしないのならば、倒すだけだ」

叩き潰すように振り下ろされたメイス、これはギリギリで見切られ回避される、そして、大振りの隙をカバーするように盾の影からの槍による連突き、相手が防御に回った瞬間に合わせた大剣の横なぎ。しかし、これも当たらない。

とはいえ、見事な連携だった。互いが互いの隙すきを埋めるように、行動しつつ攻撃は決して途切れさせない。十秒程度の間に一体何発の攻撃が仕掛けられただろうか。ついに教皇の操るミカエルから一瞬の硬直を奪うことに成功する。

「死ね、下郎が」

「我らの手に掛かつてくたばるがいい」

「陛下にその首を捧たもげよう」

三者は、それぞれの得物を手に躍り掛かる。

《Purge》（肅清）

力ある言葉が紡がれると同時に白い光が瞬き、次の瞬間には王国連の三人はばらばらに砕け散っていた。

「信仰無き者は全て殺す、神は自らの民を選んだもう」

「教皇様は、優しいことで。ひひひ」

その間、しばし傍観者としてホバリングしていたサタンの使い手が、下品な笑い声と共に再度アティドの前に立塞がる。

「貴様の罪を浄化してやろう。神の前にその血を捧げろ、ニクム・ツアラ」

白銀に煌めく長剣を突きつけ、声高に宣言するアティド。

「は、やってみるや」

黒々とした雲間に雷鳴がとどろき、闇夜に幾重かの光が走る。激しい嵐の中を白と黒のAAがぶつかり合う。あたかもデモムービーの再現のような戦闘が又、始まるのだった。

一方、明達こと水月と愉快な仲間達は神国皇族連と地上で向かい合っていた。神国皇族連のチームは、ロイヤルガードと呼ばれる人型のAAが三体、異なる武装のバリエーションでスリーマンセルを構成していた。

甲冑と和服が混ざったようなゆつたりしたデザインのボディに、槍、斧、弓でそれぞれ武装している。木彫の仮面のようなフェイスマスクも、騎士というよりは武士という方が近いかもしれない。ちなみに、槍を持っている機体から順番に御堂風雅、御堂雷雅、天正院縁という布陣である。

対する明達はウィザードとウィンディーネを前面に、後方にはフェアリーという布陣を取っていた。中、近距離の武装が主体の二人が前衛となり、遠距離攻撃ができるフェアリーが後方支援に回るのは当然であるが、明としては女性二人に守られるのは今一格好が付かないところである。

「周囲のことはどうあれ、我々だけでも決着をつけたいところですが、それが本当でしたら一時的に協力することも惜しみません。そ

れにあなたは平治様の親友ですしね」

「平治様様だな。今度又、ラーメンをおごってやらないとな」

「平治君、ずいぶん安いね」

周囲への警戒をしつつ神代がおどける。

「別に直接何かをしたわけじゃあないしな。では、俺達の交戦目標は、黒の旅団だ。」

「委細いさいじょうかい了解しました。行きますよ、風雅、雷雅」

「「御意」」

「明、鏡。私達も行こう」

六人は中央の戦鬪を避け、フィールドの西で戦う黒の旅団を目指す。組織内部のどの程度の強さの連中が参加しているのかは不明であるが、仮想の深部に辿り着ける実力であるということは、間違いないのだろう。

そうして、お気楽な試合は、あたかも死合いへとその姿を変える。

しかし、それでも彼らは引き下がるという選択を良しとしなかった。それは、この場が国家のパワーバランスを示す場でもあるということとを理解しているからだった。

ここは、組織が自らの力を示す場でもあり、同時に威信いしんを失う場でもあるのだ。強ければそれは威嚇力いかくりょくとなり、逆に弱者と認められれば相手に攻める理由を与えることとなる。しかし、相手に意図的に攻めさせ返討ちにする場合もあり一筋縄ひとすじなわとはいかない問題ではあるのだった。

明達がそこに辿り着いたときには、黒の旅団チームのものと思われる二体分の残骸ざんがいだけがそこにあった。執拗しつようなほど破壊されつくしたその残骸は、対戦者の怨念おんねん染みたものを感じさせた。

「……今回の対戦は死罰デスペナルティなし、つまりは死ねないんだったよな？」
死なないのではなく、死ねない。

それは、生存している限りは苦痛を与えられ続けるということだった。セオリーであれば、相手の反撃の可能性を迅速に摘み取るため

に的確にコアユニットを破壊するが、中破から大破の間程度、ギリギリのラインで相手を生かしたまま行動不能にすることは不可能ではない。

「生きたまま火の中で焙あぶられるような苦痛を味わったことでしょうか、悪趣味な」

「闘技者の風上にも置けんな。俺がぶつたおして、目を覚まさせてやる！」

明の独りつぶやいた言葉に御堂兄弟が答える。そういう彼らの言葉には明確な怒気どきが込められていた。

「どうやら、ノーマークだった『nameless』の仕業しわざらしいね。あくまでも位置関係から推測した情報でしかないが」

「……強い、怨念おんねんのようなものを感じます。誰かの復讐ふくしゅうなのでしょうか？」

表層とそこに込められた情動について、鏡と水月が異なつた見解を述べる。事実を事実のまま汲み取る鏡と、起こつたことに対して理由を考えてしまう水月の思考はそれぞれの性格ゆえの反応だろう。

「その可能性は濃厚のうこうといえるでしょう。とするなら、次に向かうのはあの二人が戦っているフィールドの中央部。我らも向かうとしましょう、風雅、雷雅」

「「仰せのままに、我らが君」」

怒りという感情が先立ってしまっているのか、御堂兄弟が先行してそれを御するぎよかのように天正院が続く。先走る彼らを見て、逆に冷静になつた明達は後方から支援するべく後ろに続くのであつた。

白銀に輝く剣を手に銀翼の天使、ケルビムがドラゴンの姿となつたサタンに切りかかる。竜は黒い翼をはためかせて後方によけつつ、赤々とした炎を吐き出して天使を迎撃する。間断なしに続く炎の矢を軽々とよけつつ、天使がドラゴンに近付いていく。

「お前だけは、絶対に許さない」

オープン回線越しに響き渡る女性の声。

「おいおい、お前さんがついさつき俺の部下にやったことと俺がしたことに何の違いがあるって。ええ、おい、レナさんよ」

いかにも相手を馬鹿にしたような態度でサタンの使い手、ニクムが答える。

「黙れえええっ！」

激昂げっこうと共に激しさを増していく剣舞。大きく楕円だえんを描くような剣の軌道は、幾重にも重なりもつれドラゴンの装甲を削っていく。しかし、いかに動作が俊敏しゅんびんであつても大振りな攻撃には隙がある。黒き竜が吐き出す炎がついに天使を捕らえ、そして、深紅の炎に飲み込まれていくケルビム。

「炎の剣よ。我が叫びに応え、焼き払えええっ！」

叫びにも似た声が、炎の中から響き渡る。火炎に飲み込まれていた天使を中心に逆巻く炎の渦うず。そう、この剣の真価は自身の周囲の炎や熱を自在に操れることにある。

炎を突きぬけ、白銀の天使が剣を振り上げる。その赤を写した白銀の騎士が、黒い天蓋てんがいを飛び交うドラゴンへと向かう。

牙を向く黒竜と、剣を手にした天使が交錯こうかくする。

「死ね、死ね、死ねえええっ！」

鬼気迫る掛け声と共に何十もの突きが止めどなく繰り出され、サタンの装甲に同じ数の風穴を開けていく。不定形な姿を持つサタンは、コアユニットの位置を自分自身で任意に設定できるために明確な急所が存在しない。強引に装甲を引き剥はがすか、まぐれ当たりを狙うしか倒す方法は存在しない。

「そうだ、それでいい。さあ、存分に殺し合おう」

ぼろぼろになった姿のサタンが、弾けて戦闘開始直後と同じ姿で再構築される。しかし、それさえも見越みこしていたのか再構築された頭部を即座に真二つに引き裂くケルビム。竜の頭頂部から腹部に掛けて上段から鋭い斬撃が走る。

「あんたの恋人と同じ姿になっちまったなあ。ええ、おい」

フィードバック現象で頭部に激痛おそが襲おそっているはずであるが、そん

なことはまるで感じさせずにニクムがおどける。

「貴様ああああっ！」

殺気と共に踊り掛かる、ケルビム。しかし、その動きを待っていたとばかりに瞬時に肉体を再構築し、二つ首の竜が喰らいつく。混沌のアビリティは、擬態とは異なり、自信のイメージ次第で同時にどのようなものでも再現が可能だった。

もともと、強烈な催眠術さいみんじゆつに掛かっているような状態の操作するシステムの都合、肉体を変化させ再度構築するのは自殺するに等しい。それゆえに、サタンが強力なユニットであるといわれながら使用するプレイヤーはほとんどいない。

「そうだ、もっと叫べ。醜くもがき、猛り、怒れ。そして、俺をぎりぎりまで追い詰めてみせろおおおおっ！」

喰らいついた胴体を引きちぎり、その場で前方に回転して長大な尻尾ししほで地面に向かってケルビムを叩きつける。二つ首のドラゴンは、彼の言葉に答えるかのように大きく胸を張り咆哮ほうこうする。

「退屈そうだな、アティド。どうだ、そろそろ再戦といくか？」

「遠慮えんりょしておこう。私は復讐劇ふくしゅうげきに水を指すほど無粋ぶすいではない」

そっけなくアティドが答えるが、全くの嘘うそというわけでもなかった。事実、一時戦闘を中断して彼女に相手を譲ゆずっているのだから。もともと、彼にしても当て馬にしているという側面がないというわけでもない。

辛うじて叩きつけられるのを免れたケルビムは、上空のサタンを見上げる。遊ばれたという事実が、レナをさらに怒らせる。

「……許さない、許さない、許さない。『支配者ドミネーター』、我が意に答え、敵を討てええっ！」

彼女の支配化にある、二体のアークエンジェルが左右からサタンに迫る。

レナは、一人で三人分の登録を済ませ今回の戦いに参加していた。一人であっても、複数の参加はルールのにはなんら問題ない行為であるが、実際にやっている人間はほとんどいない。当たり前だが、

複数人分の思考を同時にしなければA Aの操作はできない。ルールの可能性であっても技術的には非常に困難だからだ。

「やっと、本気になったか。そうだ、そうでなきゃ潰し甲斐がねえ」

見下ろし、急降下しながら機械の双頭竜が咆える。

天を仰ぎ、地上から空へと舞い上がるのは三体の機械の天使。

ハイレベルな操縦技術を要求される空中での高速近接戦闘だが、それこそが『GENESIS』というゲームの一番の華ともいえる。

「お前は、お前だけは絶対に許さない！」

「許すだあ？ 神にでもなったつもりか、クソアマが。本当の戦いつて奴をてめえの体に刻んでやる」

そうして、両者の叫び共に戦闘が苛烈さを増していくのだった。

「辿り着いたな」

「戦闘中、みたいね」

空には三条の光が打ち上げられ、天には暗い闇が佇む。

三方から、三重の螺旋を描くように襲い掛かるレナのA A。嵐のような剣戟がサタンを襲うが、先ほどのように削らせることなく、爪や尻尾で往なし、交わす二クム。彼女の連携は王国連の三人のような直線的なコンビネーションではなく、立体的な軌道であるにも関わらず背後からの攻撃さえも命中することはなかった。

「一対一の決闘に水を差すつもりなら、止めておけ。俺の逆鱗に触ることにある」

静かな殺気と共に放たれた言葉は、ミカエルの持つ剣と同じく鋭利な刃のようだった。中空に浮くミカエルが明達に向けた刃は、こちらの方が数の上での有利に立っていることとは無関係に全員に畏怖を抱かせた。

「おもしれえ。じゃあ、てめえから片付けてやるよ」

一瞬であっても恐怖した自分自身が許せないのか、御堂雷雅の操るロイヤルガードが宙に浮かぶミカエルに踊りかかる。

「馬鹿、早まるな。縁様、雷雅の援護に入ります」

「もとより、いずれは刃を交える運命。勝ちに行きましょう」

まだ、ミカエルと雷雅の操るロイヤルガードの距離は離れているが、先行し過ぎれば援護もままならない。天正院、風雅が即座に雷雅のバックアップに回る。もともとある程度はそういった事態を想定していたのか、彼らの行動は迅速だった。

「いいだろう。神への祈りは届かないが、断末魔だけは聞き届けよう」

三人を迎え撃つべく剣を構えるアティド。その言葉には、おごりではない自身の力への絶対的な自身が漲っていた。アティドの怖い程に強い闘志のせいかな神国皇族連の三人には、彼の背後に流れる雲が揺らめいて見える。

「御武運を祈ります、天正院さん」

「こちらは、俺達だけで何とかする。全力でぶつかってこい」

「君達の無様な姿はみたくないからな。だから、こちらはそちらが全力で戦えるように尽くすつもりだ」

六対一で戦闘するのが数の上では理想的であるが、つたない連携は相互に不利益であると両チームは判断し、一方のチームが戦闘し、残りが支援にあたることを選んだ。そして、明達の目の前にあったのは、敵意でも闘志でもない。

明達が一番身近に感じていたもの。

純粹な殺意だった。

「少し前の俺もあんな感じだったのかな」

他人が命を賭して戦う姿をみて、逆に冷静になった思考は明にそんなことを思わせる。命懸けの戦闘を繰り返すことにより生まれる強固な仲間の絆は、逆に怨嗟となって関わってきた人間達を束縛することとなる。

「そうだね、君と少し似ているかもしれない」

当人が必死であればあるほど、周囲の人間からは痛ましくみえていた。

彼にとって、水月を助けることがいつの間にか電研に入った理由に成り代わり、いるかどうか分からない犯人に怨念を燃やし続けた。その執念の炎を燃やし続けたためか、三島や神代から気を使われていたことに明はなかなか気付かなかった。

「冷静になつてみると、気付かれない訳がないんだな。戦う理由が別にできた今ならわかる気がする」

守るべき仲間のため、国家のため、自身が生き延びるため。人によつて戦う理由は様々だったが、共通しているのは誰も命を粗末にしようとは思っていないことだった。仲間を助けることが自分の命を助けることに繋がり、助けてもらえるという意識がより強く人を生き永らえさせる。不合理ともいえる合理がそこにあつた。

「助けているものが近くにいると気付けただけでも、大した進歩だ」

「その敏感さを別のところにも活かせばいいのに」

ぼそりとつぶやく水月だが、その言葉が二人に届かぬ内に前方で爆発が起こり、大音響がその声を掻き消した。

「まったく、アーケエンジェルの装甲は頑丈だな。その方が、齒応えがあつてちょうどいいんだがなああつ！」

爆炎を吐き出した双頭竜が牙を剥き、威嚇するように咆哮を上げる。首の数に合わせたのか、四枚の大きな羽をはためかせるその姿は、機械というよりは一体の生きた怪物がそこに存在しているかのように思わせる。

対するケルビムと二体のアーケエンジェルタイプは、炎の剣、槍と盾をそれぞれに構え三角形の頂点にそれぞれ位置するかのようにサタンを囲い込む。三体のAAを同時に操ることができるレナだったが、精神的な疲労はその分大きくなる。

複数体のAAによる、高度な連携をすればするほどにその負荷は増加していく。そんな状態を反映するかのように、三体のAAは肩で息をするかのように体を揺らす。

「はあ、はあ。はあああああつ！」

レナは、まだ負けたわけではないとばかりに気合を入れ直して、再度ニクムへと攻撃を仕掛ける三体のA A。しかし、もはや完全に見切られているのか、彼女の攻撃は虚しく空を切るばかりであった。「……何で、何であたらないのよ!」

それは、怒りというよりは悲痛な叫びだった。

攻撃自体は、最初に小競り合いをしていた時と比べて単純に三倍。怒りを伴い激しさを増した攻撃自体の速度も先程よりも遥かに加速している。

「見るに堪えないねえ。そろそろ飽きてきたことだし、終わりにしようか」

ニクムの軽い口調とは裏腹に、その言葉は確定された未来への死刑宣告だった。黒き竜の体が隆起し無数の棘となつて球体状に展開される。サタンの周囲を旋回していた三体のA Aに逃げ場はなく、複雑に絡み合う棘がその肉体を破壊していく。

レナは声にならない悲鳴を上げるが、地獄はそれだけでは終わらない。一瞬の間に傷口を抉り強引に引き寄せ、その肉体を喰らいつき、火で焙る。生かさず殺さず、苦痛を与え続ける。

「なんだあ、泣き叫ぶこともできねえのか、あん。俺を殺しにきたんだろ? この程度で死んでくれるなよなあ」

爪で裂き、蹴り上げ、ジャグリングでもするかのような気軽さでぼろぼろになったレナの機体を弄ぶ。おそらく彼女はもう事切れているだろう。仮に統合されなかったとしても、既に人間が受けられる限界を超えるダメージを負っていた。

(なんで平然とそんなことができる?)

その光景に対して明が抱いていたのは、恐怖ではなかった。そして、彼の静かな怒りに応えるかのように肉体が稼動する。彼の意思は肉体を正確に敵の元へと運び、その腕は敵を倒すべく呼応する。

《Double strike》(二重攻撃)

クイックドロウの速射が宙に浮かぶサタンに向かい放たれる。第三者からの攻撃が予想外だったのか、サタンはレナの機体を取り落と

す。

「新手か、退屈しのぎにやちょうどいい」

向けられた敵意はわずかなものであったが、それでさえ戦慄せずにはいられないほど濃密な不吉を孕^{はら}んでいた。

（怖いな、だが、そんな状況を楽しんでいる自分もいる）

敵の方が自身よりも強いということは解かっていた。

だが、それでも不思議と負ける気がしない。

今の自分には、信じられる仲間がいるから、守るべきものがあるから、理由なら後からいくらでも付けられた。

銃をホルスターに収め、両手に振りなれたミスリルブレードを握り、サブアームで炎の剣を引き抜く。眼前に迫る敵に向け、声をあげて挑みかかる。

「おおおおおおおつ！」

咆哮^{ほうこう}とは裏腹に思考は驚く程冷めていた。

あるいは、それは自身の死期を理解しているからなのかも知れなかった。だから、俺は冷静に水月と鏡に冷静に指示を出しつつ囃^はの役目を自ら引き受けることにした。

そんな彼の行動に対して返って来た返答は短く。

「「明の馬鹿」」

ぴたりと息の合った返答であった。そういつつも、指示にはきちんと従ってくれるあたりは信頼関係があつてこそそのものだろう。

一度でも被弾すれば死に直結するというリスクは、逆に明の脳を研ぎ澄まさせ生き永らえさせていた。敵は文字通りの怪物であり、触れればたちどころに引き裂かれ先程のレナと同じ末路^{まつろ}を辿ることになるだろう。

「その剣は、あいつのか。って、ことはあんたプロフェッサーを殺したのか？」

通常のケルビムが標準装備している剣とはデザインが異なる明の持つ、炎の剣を見てニクムがつぶやく。

「そうだ、俺が殺した」

「惜しい奴が死んだな。だが、そういうことならお前の方があの女よりはあんたの方が楽しめそうだな」

「楽しませるつもりはない、終わらせる」

「いいねえ、あんた。俺が直々に殺してやるよ、あはははは」

双頭の竜が天に向かって雄叫びおたけを上げながら、蒼の騎士へと牙を剥く。

明の操るフェアリーは、いつの間にか増えた四本の鉤爪かぎづめと双頭の猛攻を三本の剣を以って縦と横の斬撃を同時にこなしつつ敵の攻撃を往なしていく。通常の人間型A Aであればありえない挙動と彼の驚異的な反射神経が正面からの近接戦闘を可能にしていた。

脇わきを掠める竜の牙、鋼鉄すらも易々と切り裂くであろう鉤爪の間を抜け、肌を焼く灼熱の火炎を潜り抜け、何度切り結んだのだろうアンカーを打ち込み、曲芸の如き立体軌道で攻撃を交わしつつ、銃を放つ。

何度も撃ち貫き、切り裂いても手応えはない。

体感時間が無限に引き延ばされる死の舞を続け麻痺まひした感覚の中で、もうどれだけの時間剣を振るい、銃を放ったのか明は覚えてはいない。しかし、実際の戦闘時間は一分経ったかそこらだろう。

今はまだ、恐れよりも興奮が勝っていた。

だが、勝てないことを自覚していることは、必ずしも弱さではない。自分が弱者であると自覚することは、強者に対してに驕おこらないということでもある。

（今の俺にならできるはずだ）

明は、あの時その眼に焼きついた光景を自分なりにアレンジして再現する。

そう、予選においてセルゲイ・ロマノフの操るエンペラーを一蹴いっしょくして見せた技、目の前にいる男に教皇と呼ばれていた、アティド・ハレが使用していたもの。

（いや、あいつがこの動作を技として認識しているかはわからないか）

どこかずれた思考。

そして、明はあえて、二本の剣を脇に収め炎の剣を振りかざし思考を脳裏に焼きついた一枚の画像へと集約していく。

「目の前をちよろちよろとうざいんだよ、蠅がああああっ！」

それは、ニクム自身が強者であると自覚しているがゆえにできた間隙^{げき}だった。

自身が相手を一方的に蹂躪^{じゅうりつ}する側であると自覚している彼は、近付いてきた弱者を噛み砕くべく獐^{じょう}猛^{もう}な牙を剥く。

明には、自身に喰らいいつこうと迫る竜の牙が酷く雑な動きに見えた。「驕^{じょう}ったな、あんた」

ぞくりとするような殺気と共に静かにつぶやいた明。

相手が弱者であると決め付けた思い上がりが、作り出した偶然の産物。

爪や炎による何十もの波状攻撃を交わし、耐え忍ぶことでやっと辿り着いたチャンス。

歓喜^{たか}に明の心が昂^{たか}ぶる。

だが、そんな興奮状態にある精神とは真逆に彼の肉体は冷静に、そして、完璧に動き完全な形で技を再現していく。

すれ違いざまに抜刀と同時に切っ先による一太刀、返す手で二発目が、

体が重なる瞬間にもう一度右手で切り裂き、左手に渡された剣は背面から敵の首筋を目指し走る。

突き刺された切っ先を支点に円舞曲でも踊るかのように体位を強引に反転させサタンの背面と向かい合う。回転した速度を乗せた剣を再度右腕に持ち替え袈裟^{けさ}懸^がけに振り下ろし、再度、剣を収める。

（ここまででは、完璧。あとは、これを可能な限り加速し続けて放ち続ける）

明が認識できたのは、この五連動作の繰り返し初動と後半のみだった。間のつなぎの部分は目視したものなのか残像なのだが判別できなかった。それでも間違っではないと明は確信していた。

意識の加速に合わせて高まる肉体の動きと精神の高揚こうよう。

『ライジングダーク累進加速』による無限の上昇感覚を味わいつつ、一太刀毎にアクセラレートしていく自身の思考速度。ほとんど反射的に剣を振るい、マグマの噴出ふんしゅつの如く激しい斬撃を重ねていく。無意識の内に口から出たのは、言葉にならない叫び。

「あああうううおおああああつ」

「あんた、最高だぜ。あひや、あひや、あは」

痛みなどまるで存在しないかのよう、不気味に笑うニクム。

明もそんなことはお構い無しに、否、構っている余裕などないからこそ、ひたすらに攻撃を放ち続ける。そして、思考と直結しているがゆえに、こういった脳内麻薬が過剰分泌かじょうぶんびつしているような興奮状態のときの音声は、曖昧あいまいなものとなる。

今の明には、自身に見えている視界が仮想のものであるのか、ぼやけた思考が生み出した幻想なのか判別できなかった。

加速していく程にシビアになっていく斬撃のタイミングに、一瞬を無限に分割したような時がついには現実に戻る瞬間が訪れる。行きつけの駄賃だちんとばかりに持ち替えた手で相手を思い切り弾き飛ばし、その反作用を利用し自身を加速させ間合いから離脱する。

数秒という時間に何十の剣戟けんげきを重ねたのか、明はもう覚えていない。

（これで、必要な時間は稼いだはずだ）

明の後方では、ずたずたになったサタンのAAが即座に再構築されていく。

《M a g i c C i r c l e》（魔方円）

この間だけは、無防備になるというタイミングに水月のAA、ウィンディーネがサタンの真下からウィザードによって打ち出される。ロケットのような勢いで強制的に加速せられたAAは高々と天空へと飛翔する。

そして、加速装置として使われたウィザードの装甲兼ねるソードピットは、完全に展開され無防備な本体が地面に構える。彼女の構え

る右手の先には円柱のように細く五重に連ねられたリング状の電磁障壁が展開されている。

《Water Sprite》（水の精霊）

空を飛ぶウィンディーネは、自身の周りにある水球の水をぶつけ、儀式槍をサタンに突き刺しさらに技を重ねる。

《Flash Freeze》（瞬間凍結）

突き刺さったままの武器を放棄して、即座にその場から離脱する水月。

「薙ぎ払え、我が剣」

突き出されたウィザードの手の先で展開された、五重の魔方陣の中央には、雷光を纏い静止した剣が見える。電気の弾ける音に空気が震え、暗い闇を薄つすらと照らしている。

《Excalibur》（聖なる剣）

祈りの言葉と共に放たれた剣は、夜気を裂き、音を置き去りにして天へと駆け上る。

「まさか、この俺が。クソったれ」

凍り付き身動きの取れないサタンにこれから起きる攻撃は避けようがなかった。

だが、ニクムが本当に恐れているのは、本体を粉々にされることではなかった。はき捨てられた言葉の直後に、ばらばらに砕け散った破片の中にはコアユニットは存在せず、剣は黒い空に赤々と燃える太陽へと立ち上る。

そして、サタンのAAを貫通した剣は、太陽の光に隠されたコアユニットを完全に捉え破壊したのだった。

「そのガキ、お前の名前は？」

破壊されてから行動停止するまでのわずかな時間に話し掛けるニクム。その言葉に明は短く思索し答えた。

「……新城明だ」

「貴様が死ぬまでは、覚えといてやる」

（どうやら俺は、自分が思う以上に厄介事に巻き込まれやすい体質

のようだな。はあ)

行動停止処置が為され、完全に沈黙するサタンのA.A。

三対一、それでもなお手強い相手だったと明は感じていた。

相手がこちらを適度な齒応えがある雑魚ざさという程度の認識で挑んでくれていたことや相手の絶対に負けることはない、という油断をしていてくれたこと。水月や鏡が指示した通りに的確そつに動いてくれたこと、そして、最後は作戦が功を奏したただけだった。

勝てたのは偶然が重なっただけに過ぎなかった。

「君は、なかなか強いんだね」

宙に浮かぶミカエルのA.Aから声が聞こえる。

「偶然が重なっただけだ」

「偶然を重ねるのも実力の内さ。君自身の手で勝ち取ったものならば、それは誇ってもいいものだろう」

全とお見通しだとばかりに話すアティド。偶然が重なったというのではなく、『重ねる』と言い直す辺り、明のことを過大評価しているのかもしれない。

「あんたの技、勝手に使わせてもらった。すまん」

「そんなことで咎めたりはしないさ。だが、あれを完全に再現できたのならA.I.の加護にあやかっただけということか」

意味深な発言だったが明にはそれが何を意味しているのか理解できなかった。

「今度は、メインディッシュだけ取りやがったな畜生」

相変わらず苛立いらだちを隠せない声で話すのは御堂雷雅。

「やはり、神代様は美しい」

心酔するかのような声で話すのは、御堂風雅。

「お疲れ様でした、お三方」

最後に聞こえた穏やかな声は、天正院縁。

神国皇族連の機体は一体どれだけの攻撃を受けたのか、細かく刻み込まれた傷が縦横に走っている。いや、傷を付けるだけですませられたということは、手心を加えられたということだろう。あれだけ

の傷を付けるなら、撃破する方が安易であることは想像に難くない。

「白の教団は、いつでも君を歓迎しよう。それでは、失礼する。」

《Return》（^{リターン}帰還）

三人にはまるで興味がないのか、教皇は明に一方的に連絡先を送りつけると、もうこの場には用はないとばかりにリターンプロセスへと入り、ミカエルは直後にフィールドから姿を消したのだった。

「フィールドに残っているのは、私達だけみたいだけど最後に一戦やるとする？」

神国皇族連に対して、挑発的な言葉で確認するのは鏡。

「現状の戦力での攻略は困難です。ここは、今回の立て手役者に手柄を譲ります。構いませんね、風雅、雷雅」

「女性の誘いをお断りするのは気が引けますが、御前の意思を尊重します」

「うう、異論ねえよ」

ミカエルに遊ばれたというのがわかっていて、口惜しそうに雷雅がいい、それを了承と受け取り天正院達は、リターンを始める。フィールドには明達三体のAAを残すのみとなり、直後に響く戦闘終了を告げるシステムアナウンスの機械音声。

【THE END（^{あんだん}戦闘終了）】

『地獄』フィールドの暗澹とした雲は掻き分けられて、煌々とした光が勝者を祝福するかのように照らしていた。

勝者、『水月と愉快な仲間たち』。

草原に風が吹き、草がたなびく。

勝者となった明は、強制的にプライベートエリアに転送されていた。

「また、お会いしましたね」

「黒木愛か？」

「半分は正解、半分は不正解」

「イエスでもノーでもない解答ができるんだな」

零と一以外の論理も内包したAIであると明は理解した。彼女と

の会話が自然に行えるのは、ただ単に似た事例を参照にしているだけではなかった。

「擬似人格プログラムでもあり、人間でもあり、数式の羅列でもありそれらは全て私という情報体を構築する一面の真理ですから」

「それで、俺はあんたをなんて呼べばいい」

「愛ちゃんともお呼びください」

明はハンマーで叩かれるような衝撃を受けていた。鉄面皮だと思っ
ていた相手はどうやら、相当な不思議ちゃんらしい。

「その参照データは著しく不正確なのではないか？ あんた、白の教団なんかには神だと崇められる存在じゃなかったか」

「黒木愛なら、そう望むというだけの話です。今の私は、酷く人間くさいのです」

どうやら彼女の自律思考において、ベースとなった人格である黒木愛の好みが多分に反映されているらしい。

「はあ。で、その愛ちゃんは俺を呼び出してどうするつもりなんだ？」

「勝者に祝福を与えるためです」

落ち着き、鈴の音のような透き通る声で話す彼女は明の目に神秘的に映る。しかし、それは彼女の一部であり、先程のような一面も彼女は持ち合わせていた。

神であり人でもある、人であり神でもある。

思えば、古来の神話の多くは神に対して人格を与えているものばかりだ。人が生み出した神という概念は、どこまでいつても人間的な存在でしかないのだから、それは当然の帰結といえるのかもしれないが。

「賞品の授与、ってところか。まあ、観客がいらないというのは堅苦しくなくていいな」

「そうですね。ですが、正直なところ貴方が優勝するとは思っていませんでした」

「はは、俺もそう思う。それで、女神様は俺に何をくれるんだい

？」

明に女神と言われ照れているのか、黒木愛は頬^{ほお}を赤く染めて、軽く目を伏せながら明の方をちらちらと見つめる。その仕種は、プログラムが機械的に再現しているというよりは、本物の人間がそこにいるようにしか映らなかった。

「こちらのものを進呈いたします」

彼女が虚空に右手で線を描くとそこから物体が出現する。差し出された書状を明は、騎士の誓いを真似るかのように跪いて受け取る。紙を丸めた書簡のような物体は、実質的にはデータの塊で構成された『GENESIS』第一階層ゲートフリーパスだった。

「使い道の無い特殊兵装や電子マネーを予想はしていたが、案外実用的な賞品だな」

「仮想空間中に散らばっていますから、頑張つて集めて下さいね」

「スタンプラリーのような気楽さで言ってくれるな。ガーディアンとの戦闘が必至なら一個集めるたびに命懸けになるんだが」

「私がシステムの一部である以上は、そのようにしか言えません」

「まあ、当たりませんよと言って売る宝くじはないか」

「そういうことです。それに、誰に対しても等しい存在であるがゆえに、『白の教団』は『私』を神格化している訳ですしね」

「まあ、君は仮想という世界においては秩序を司る存在だからな。君のする全てはシステムによって完全にコントロールされた神の博愛とも取れるか」

「でもそれは、受け取り方次第なのですけどね。等しいということとは、そこにある不平等を是正しないということでもありますから」

「結局はコインの表と裏なんだよな。一見正しいことをしている白の教団もその実態はエゴの押し付けだ。取り締まられる側の黒の旅団は、むしろ正しくシステムの法則を利用しているだけの存在であつて悪ではない」

これがただの感情論ならば、黒の旅団を断罪することは正しいことになるが、それは私刑を認めることであり、レナのような復讐者^{ふくしゅうしや}

を肯定することになる。しかし、仮想の法は初めから明白だ。

勝者は全てを手に入れ、敗者は全てを失う。

今回の大会のようなケースや特定のエリアを除き、仮想において適用される大原則。

ゆえに、殺されたくないなら、殺したくないのなら、そもそも利用しなければいいのだが、P I Tさえ持つていれば誰もが無料でできるといふ安易さが落とし穴となっている。

そして、そこでは殺人が肯定され、略奪が許されている。

どんなに正義や理想を振りかざしても、欲望に負ける人間は後を絶たない。まして、それが犯罪であると見做みなされないのであればなおさらだ。

「そうかもしれませんが。それでも、認めたくないと思ってしまうのはA Iとしてはいけないことなのでしょう。おかしいですね、人間としての私はもう死んでいるのに」

「自分で思い、考えるあなたは人間だ。そして、その事実に対してどういった判断を下し、どんな結論に至るとしてもそれは間違いない」

「あなたはとても優しく、卑怯です」

彼女はそつと微笑み、涙を流す。

「そうかもしれない。でも、俺の言葉は死者への憐憫れんぴんではないつもりだ」

「死とは、何なのでしょう。ここではそれが、酷く曖昧です」

これがただのゲームであれば死ぬ訳がない、だが、ここで殺されたのであれば全てを失う。

今の彼女は、人の生殺与奪を全て握っていると言ええる。その彼女自身さえ、生きているのか死んでいるのかはつきりとはしていない。

A Iとして生きているのか、人間としての生の延長なのか、そもそも植物人間状態の自分が見ている夢なのかもしれない、真実がどうであれ、他人からどう言われたとしてもそれが本当であると確認

する術を彼女は持っていないのだから。

そんな彼女の質問に、明は短くこう答えた。

「答えは、あなたの中にある」

それは、どんな答えを与えるよりも、確かなものだと思ふ。

デカルトは『我思う、ゆえに我あり』という言葉を残した。彼は意識の内容は疑い得てもその存在は疑い得ないとした。そして、意識が生きる者の特権であれば、死者には思考することはできない道理だ。

「本当に、あなたは、ずるい人です」

ゆっくりと呼吸に合わせて愛は言葉を紡ぐ。

それがどんな存在であったとしても彼女は確かにここに生きている。そして、その状態をどう定義するかは誰かに言われるものではなく、彼女自身が決めることだった。

「だから、あなたの好きなようにするべきだ」

突き放すような言葉は、絶対の真実よりもよほど優しかった。なぜなら、今の彼女は願うとおりの自分になれるのだから。

「それでは、私のことを愛と呼んでください」

少々意表を突かれたが、明は笑い答える。

「それが君の出した答えなんだな。愛」

「だって、その方が楽しいじゃないですか。明さん」

「そうだな。さて、俺はそろそろ戻るとするよ。控え室まで転送してくれるかい？」

「お安い御用です。それでは、また会う時まで」

「ありがとう、愛」

転送され始めた明に愛は、さらに言葉を掛ける。

「さようなら、明さん。ふふ、そういえば私の趣味は手紙を書くことだったんですよ」

明の口がわずかに開く。

愛は何も言わずに微笑む。

草原に風が吹く。

二人の言葉は、
ただ電子の海へと消えていった。

同時刻、選手控え室にして。

水月が駄々（だだ）をこねていた。

「明一人だけ表彰されるなんて、ずるい」

「チームリーダーとして登録されている人物が行くのだから仕方ないだろう。だが、我々としては協力した分はしっかりと返してもらおうとしようじゃないか」

邪悪な笑みを浮かべて、鏡が笑う。

「しかし、私の忠告は全く意味がなかったようですね」

一人お茶を飲みながらマイペースにしているのは、ウー。

「確かに忠告は意味がなかったかもしれないが、情報はかなり役立ちました。まさか完全にコアユニットを分離しているとは予想外でした」

「でも、鏡はA Aとコアユニットの位置情報が異なるって事は気付いてたんでしょ」

「それでも、やぶを突いて蛇を出したくはないよ。正直、私はウーさんの意見に賛成だったからね。教皇とあの男の戦闘を放置して、機を見て介入するのがいいと思っていた」

全てのA Aに標準装備されているレーダー機能のみであれば、からくり^{からくり}に気付かずに最終的には破壊されていたことだろう。レーダー機能は平面図での相手の位置を示すだけのものであり、その座標に確かにサタンは存在していたのだ。

鏡は、アビリティ『神の眼』をもって早々にトリック見破っていた。明も戦闘直前にそのことに自力で気が付いていた。

「漁夫の利という奴ですね。まあ、最初から戦わずに降参^{じやんさん}するといつも^{いつも}の安全策としてはありなんです、そんな選択をする明さんではありませんね」

「そうですね、それに命懸けの戦いだから戦闘は避けようという

のは本当に今更過ぎますね。死罰が怖いのならそもそもこんな仕事やっていますし」

「思えば学生時代から、結構無茶ばかりしていたものね。私達」「我々の実力を考えればガーディアンとの戦闘ぐらい不可能ではないという戦力分析だったのだが、あいつは例外的な強さだった」

明、水月、鏡の三人で卒業記念ということで決行されたガーディアン討伐作戦は、辛くも成功したが結果的に水月は仮想に捕われることとなった。その後の記憶の方が強烈過ぎるために色あせてしまっているが、作戦はすぐに終了し思い出となるだけのはずだった。「ふむ、それは希少種という奴かと思われます。ごく一部の敵がそのような存在として出現するようです」

「情報屋の本領発揮、ですか。確かに、ガーディアンの強さは均質ではありませんね」

「そんなことどうでもいいから、ガールズトークしようよ。今は、男の子いないし」

「それもそうですね、水月さん。これ以上は有料ですし」
そこは商人らしく、ちゃっかりしているウー。

「それは陰口になるではないか」

普段は毒舌なのに、本人がいけないときは妙に気を使う鏡。

「まあまあ。こういうときじゃないと話せないし」

しかし、そんなことはどこ吹く風とマイペースな水月。

「そうですね、私も加わって四角関係が形成されつつあるこの状況をどうすべきか考えないといけませんし」

「ハーレムだね、鏡」

「ふん。最終的にどうするか決めるのはあいつだ」

実は、既に五角関係になりつつあることを彼女達は知らない。

「それではまず、彼は巨乳派なんでしょうか、貧乳派なんでしょうか？ お二人に確認したいです」

「難しい問題だね。今度、家探してもしょうか？」

あごに手を掛け、考え込むような表情で水月が答える。

「ぶつ。いきなり、何を言い出すんですか二人とも」

飲んでいたアールグレイ風の紅茶を吹き出しかけながら、鏡が突っ込む。とはいえ、以前に犯罪同然のやり方で明の家に侵入した彼女が言えるようなことではなかった。

「まあ、いずれにしても彼の好みを後で変えてしまえばいいことです。色仕掛けでもなんでもして適当にたらしこみましょう」

「当たって砕ける、だね」

「いや、くだけたら終わりだろう」

軽く頭を抱える鏡。

「ですが、私が思うに彼は押しに弱いと思いますので、悪くはない戦術かと」

「言われて見ればそうかも」

ウーに言われて思い返すように水月が思案する。

「考えてみれば、あの朴念仁ぼくねんじん相手ならストレート過ぎるくらいの方が丁度いいか」

そういえば、自分も正面から攻めたことはなかったと思う鏡。色仕掛けのようなことはしてみたが、自分自身のキャラクターではなく。返ってありのままの自分で攻める方が正解だったのかもしれないと思ひ直す。

「まあ、あなた方とは末の長いお付き合いになりそうですし、楽しみながら行かせてもらいましょう」

そんなことを話していると、ソファの近くの空間が歪み出す。

三者に走る一瞬の緊張、しかし、それが見知った人の輪郭りんかくを持ち始めると安堵あんどする。

何かが転送されてくる兆候ちやうきが現れた後、明の姿が出現した。

「これでガールズトークは終了だね」

鏡とウーに笑いかけて水月がいう。

「そう、だね」

少し安心したような、残念そうな表情で鏡が話す。

「酒池肉林の始まりですね」

どこまでが本気なのか、爽やかな営業スマイルを浮かべてそんなことをいうウー。

「いつの間にか仲良くなったようだな、三人ともか
かましい様子の三人をみて、明が少し微笑む。

「ううん。四人だよ」

水月が笑ってそういうと、全員が笑顔になる。

仮想という戦場が、殺伐とした、何かを奪うだけの地獄であつても、そこで生まれる絆も確かに存在するのだと、そこにある笑顔の花をみて明はそう思うのだった。

2・5 H e l l (後書き)

一応、完結です。前書きに上げたところなど、明が少しかつこよくなっています。あと、一部修正しました。(8月31日)

3 1 1 R e t u r n (前書き)

「という訳だ、新城明、三島平治、神代鏡、天宮水月の4人には、宗光学院に教育実習生として赴任^{ふにん}してもらう」

3 1 1 R e t u r n

3 1 1 R e t u r n

某日、時は午前九時。

場所は電脳技術研究所、新城大地の研究室にて。

電研の新制服姿の男性が二人。

いつかのように、新城明と新城大地が向き合っていた。

「という訳だ、新城明、三島平治、神代鏡、天宮水月の4人には、宗光学院に教育実習生として赴任^{ふにん}してもらう」

「まだ、説明してないのに『という訳だ』で通じると思っているのか？」

「いや、任務だし。今言った通りのことだから説明要らないかな、と」

「頭痛^{めまい}くなってきた」

軽い目眩^{めまい}を覚え、頭を抱える明。

「知恵熱か？ ふむ、お前には少々難しすぎる説明だったようだ」眼鏡に手を掛け、足を組み替えつつ、いやらしく笑う新城大地。そのいかにも小ばかにされているような態度が明には気に食わない。

「だから、説明してねえよ！」

そもそも、こうやって怒るからからかわれていることを考えれば、それは完全に大地の思う壺だった。

「落ち着け。そもそも、お前が通っていた頃もこういった活動はやっていたぞ。まあ、黒木智樹に指導してもらっていれば新人教師の印象が薄くなるのもわからんでもないが」

「もういい。そちらが話したいようにしてくれ」

軽くそつぱを向くようにして、明は言う。

感情が隠しきれない様子は、公としての自分ではなく完全に、ありのままの姿をさらけ出した明だった。案外、そんな明の自然な

姿を見たいがために大地は明をからかっているのかもしれない。

「ふむ。といっても、先に述べたように教育実習生として学生の子を見ることを主題としているが、お前達の休暇きゅうかという側面もあるのが今回の任務だ。慣れるまではそれなりに大変だろうが、事故でもない限りは安全だ。気楽に過ごしてこい」

宗光学院生の様子を見ることが任務なのは、卒業生がそのまま電研で働くことになるので、その下調べの意味を兼ねかているのだろう。任務としての重要度はそれほど高くはないが、だからと言ってないがしろに出来るものでもない。

また、新人である明達に仕事が来たのは、年が近い方が学生と教師の関係は構築しやすく、内偵として動くにはやりやすいという側面もある。

「休暇なんか別にいらないが。週に二日は休みをもらっているし」

「部下の管理も仕事のうちだ。そして、今回の任務をどう捉えるかは、お前達次第だ」

部下の管理といわれては、引き下がるしかない明。彼は管理される側であると同時に管理する側でもあるのだ。彼が平気だといっても、彼の部下である神代鏡、天宮水月までもが平気であるかはわからないのだ。

「いや、任務だったな。了解しました、大佐」

「それでいい。適度に緊張し、適度に休め。それが自身や仲間と共に生きることにつながる」

思わず敬礼してしまった明に軽く微笑み、敬礼で答える大地。

彼もまた、人の親であった。

「それでは、失礼しました」

「健闘を祈る」

そうして、今回の任務が始まるのだった。

3 1 1 R e t u r n (後書き)

もしかしたら、そのうちノベルゲームのように分岐するかもしれない。

てか、この作品はゲームシナリオとして書いてたものを小説用に直したものですから。まあ、メインの話を完結させた後でIFとしてやる可能性があるだけですがね。(9月6日一部修正)

3 1 2 R e t u r n (前書き)

「私と付き合ってください」

目を輝かせつつ白百合が質問する。

「遠慮させてもらいます。というより、それは質問ではない」

3 1 2 R e t u r n

3 1 2 R e t u r n

新城明の場合。

宗光学院。

電腦技術研究所と提携している国立の学校であり、専門教育に特化した教育機関である。

新城明、神代鏡、天宮水月の三人はここに教育実習生として赴任することになる。

無論、一時的な赴任ではあるのだが、それぞれが講義を行うことになっていった。全員、服装は電頭の新制服の着用が義務付けられており、近く配属されることになる電研の宣伝という側面もあった。

「今日からしばらく、ここで講義を行うことになった新城明だ。若輩者ではあるが、全力を尽くしたいと思うのでよろしく頼む。といっても、つい最近までは自分自身がこの学生だったのでそんなに堅苦しくしないで構わない、気楽にいこう。質問があれば、挙手してくれ」

一気にまくし立てるように明は話したが、最後の気楽にいこうという部分だけは伝わったのか、生徒達はそれぞれに挙手をして質問を始める。

「はい、先生は何の科目を受け持つんですか？」

「AAでの実技や座学なんかを担当する。同時に赴任してきた三島平治、神代鏡、天宮水月も細部は違うが似たような部分を担当することになっている」

「二股を掛けているんですか？」

連続して質問をしてくる女子生徒。

名前は、姫川百合だったか。

ウェーブの掛かったロングの茶髪がなかなか印象的な学生だ。

「ノーコメントで」

とりあえず、さらりと流す。

「そもそも恋仲ですか？」

案外ねばるようだ。

「それもノーコメントで」

華麗にスルーパスする明。

「好きな料理はなんですか？」

これは、別な生徒。

普通な質問をしてきたのは姫川のお隣、白百合真菜。

なんとなく、お嬢様然とした雰^{ふんいき}囲気の生徒だった。整った身だしなみに、切り揃えられた黒髪はどこか育ちのよさを感じさせる。

「ラーメンだ。特にとんこつが好きだな」

「実技担当ということとは、強いんですか？」

やはり男子生徒の興味はそういった部分が大きいのだろうか、質問に性別がある程度関わっているように明は感じた。少し感心して事前に渡されていた生徒のプロフィールをARで確認しつつ話を聞く（こいつの名前は、四葉剣三か。確かかなり成績がいい生徒だったな）

「まあ、そこそこは。多分、学生よりは強い」

「曖昧ですね」

ポーズなのか、長めの髪をかき上げそれとも普通にずれているかなのか眼鏡の位置を直しつつ口を開く四葉。

「そちらの実力を完全に把握している訳ではないからな」

「巨乳派ですか、貧乳派ですか？」

再び姫川。

いわゆる、彼女はパパラッチというやつなのだろうか。

「どちらでもいい」

たまにはこういったふざけた質問にも答えてやる明。女教師相手ならば普通にセクハラな気がするが、年齢は一つしか離れてはいな

いとはいえ相手は子どもだ。

「眼鏡はかけますか？」

と今度は眼鏡の白百合が再度質問してくる。

彼女は、割とおとなしそうな印象だったがそうでもないようだ。

「視力はいい方だ」

無難に回答する。

「BLはいける方ですか？」

さらにもう一つ質問してくる。

「いけない方だ」

（お前は一体何が目的だ……）

「神代先生のスリーサイズは？」

小生意気な感じの短髪の男子は、三井猛。

活発な奴は固まっているのか、四葉の隣だ。

（というか、俺を経由してまで知りたい情報なのか）

「死にたくなければ自分で聞け」

かなりへこんだ様子の三井を放置して続きに移る。

「受けですか？ 攻めですか？」

どうやら、おとなしいという印象は勘違いだったようだ。

マシンガンのように質問してくる白百合。

「そもそも質問が意味不明だ」

「新城先生の趣味はなんですか？」

助け舟のつもりなのか、四葉がまともな質問をしてくる。

「読書。質問をそろそろ打ち切るぞ、本当にしたい質問にしばれ

よ」

「神代先生と天宮先生はどちらのスタイルが好きですか？」

これは三井。

案外こいつもこりない。

「どちらも敵には回したくないバトルスタイルではあるな」

「あ、逃げた」

と姫川。

「大人の処世術だ」

「攻略するならどちらが楽ですか？」

とは、三井。本当にこりない奴である。

「又、意味深な。危険球は投げたくないのノーコメントで。次で最後だ」

パパラッチ姫川の小さく舌打ちする音が聞こえる。

（あぶね）

「私と付き合ってください」

目を輝かせつつ白百合が質問する。

「ご遠慮させてもらいます。というより、それは質問ではない」

「じゃあ、決闘してもらえますか？」

これは四葉だった。

彼は明達と同じ人種なのかもしれない。

「疑問系にすればいいという問題でもないような。まあ、実技演習なら付き合ってやる。放課後にでも待っている。そろそろ、講義を開始する」

「はい」

割と和やかな雰囲気です授業が開始される。

「AAでの戦闘に関する技術について、説明する。といっても、俺の場合は体で覚えた口なので実技部分が多くなる。説明も下手だと思うが、そこは諦めろ」

「しゃー。実技だ」

三井が大げさに喜ぶ。

しかし、彼らは知らないのであった。

これから起こるであろう地獄を。

「まあ、軽く流すつもりでやるが、希望者は四葉のように俺に挑んできても構わん。俺自身、先生に指名されて何度も戦闘訓練をしてきたからな。とりあえず、今日は座学だ。いいな」

「はい、新城先生」

クラスで声が重なる。

くすぐつたいような気もするが、悪くはないと思う明。

「まずは、仮想空間での戦闘で最優先されるのは、相手の破壊でも、任務の完遂でもない。自身の生存である。ゆえに、俺は基本的な戦闘技術についてレクチャーする」

教壇に手をつき、クラスを見渡す。

（俺は、値踏みされているのか？ 最初ぐらいはみんな真剣だな）

「AAでの戦闘は、基本的に二種類の武器を使用することで行われる。一つ目は近接武器、二つ目が遠距離武装だ。そして、遠距離武装の最大の利点は一方的に相手を制圧できることにあるが、戦闘において近接武器が未だに使われていることには理由がある」

疑問に思ったのか、考え込むような生徒がちらほらみえる。

「それは遠距離武装の命中精度の悪さだ。これは、使用される兵器の性能が低いということではなく、直進しかしない弾丸が立体的な軌道で、なおかつ高速で動き回るAAを捕捉できないことに起因する」

一定以上の距離を保ってさえいれば、相手が発射モーションに入った直後に始動しても回避がほぼ確実に成功する。これはAAが初速からかなりの速度を発揮できることと、一方的に攻撃できる間合いでは、両者の距離が相当程度離れているなどの理由がある。

「ゆえに、相手に確実に命中させるためにはかなり近付かないといけない、というメリットとは矛盾した状況が発生する。これが、我々が戦闘の際には一定程度の距離を保ちつつ円を描くように移動しつつ戦闘する理由だ」

フィールドによっては、円の形が途切れたりすることや、楕円を描く場合、あるいは八の字を描く場合もあるが基本となるのは円だ。

「ゆえに、相手の動きに反応さえできれば射撃武器はほぼ当たらない。また、索敵の範囲を最大レベルである5に設定しておけば弾丸が認識できた直後に回避に移ることで回避が可能だ。無論、相手のジャミングによる相殺があるので理論どおりには行かないが」

索敵、ジャミングは対応関係にあり、合計五段階に割り振ることで設定する。自身を中心とした円状の範囲にレベルに応じて拡大する。しかし、ジャミングに対して索敵は優先されるので一定程度の視界、レベルゼロであっても有視界のみは常に確保される。

これは、ゲームとしての『GENESIS』の名残なのだろうといわれている。おそらく、互いにジャミングを高レベルに設定して共に視界が完全になくなり、両者が盲目状態もうちもくで戦闘するという状況をなくすための処置ではないかといわれている。

「しかし、機体の運動のみで完全に回避することは困難な場合もある。そこで登場するのが近接武器だ。刀剣によるパリィ、盾による防御が比較的容易だ。これ以外にも弾丸による相殺、チャフによる妨害などが有効な対処手段といえる」

「えーと、剣で防ぐ方が弾丸による相殺より難しいのではないでしょう？」

勉強に関しては自身がないのか、おどおどしながら三井が質問する。

「いい質問だ。これは簡単な話だが、剣や盾で防ぐのは重要な部分だけをカバーすればいいから、自分は相手の攻撃を受けるだけだ。逆に弾丸は相手の攻撃に対してある程度は正確に命中させなければ意味がなく能動的な動作が必要となる。どちらが簡単かは、わかるだろう？」

納得したのか、してないのかよくわからない表情で三井が引き下がる。

「まあ、言われても理解しにくいだろうから演習のときにでも実演してやる。見て理解しろ。その方が手っ取り早い。捕捉となるが、弾幕での相殺も有効だが、無駄弾が多く弾丸の再装填までの時間が掛かること、ときたま抜けてくる攻撃に対処しにくくなることがあるのでベストな選択とは言いにくい」

とはいえ、どの対処の方法もかなりの訓練が必要であることは言うまでもない。

又、弾丸の再装填さいそうてんについてはゲームのシステムがオートで行うために一定以上の速度に変化する事はない。

「ベストな選択ではないのでしたら、ベストな選択はなんなのでしょうか？」

これは、四葉だった。

真面目そうな性格が質問からにもにじみ出ている。

「答えなど状況に応じていくらでも変わると言ってしまうえそうだが、これは些いさか無責任な解答だな。強いて言うならば、相手より先に制圧して、そもそも攻撃させないことだな」

啞然あぜんとした顔で四葉が引き下がる。

それができれば苦労はしなくても言いたげだ。

終業のチャイムが鳴り響く。

こうして、初の初めての授業はつつがなく終了した。

3 1 2 R e t u r n (後書き)

以降、しばらくこんな感じの更新が続きます。

座学、実習、その他もろもろが進んでいきます。

(9月6日一部修

正)

3 1 3 R e t u r n (前書き)

再び講義。

しばらく、こんな感じですか。

3 1 3 R e t u r n

3 1 3 R e t u r n

神代鏡の場合。

「神代鏡だ。本日より、授業を受け持つことになった。以上だ」
電研の制服に身を包んだ彼女の姿は、新制服のお披露目ひるめと同時に
宣伝の効果も兼ねていた。

「質問タイムとかはないんですか？」

お調子者の学生こと三井が声をあげる。

「ない。しかし、質問は認めよう」

「じゃあ、先生のスリーサイズは？」

「どうやら、明の忠告は無駄に終わったようだ。」

「ほお。いい度胸だ。今死ぬか、後で死ぬか選ばしてやろう。どちらがいい？」

殺気だけで相手が殺せるような強烈な念を相手にぶつける鏡。

顔は笑っているが、その声は強烈な殺意に満ちていた。

「……あとで死ぬ方をお願いします」

足元にあったカバンからスタンガンのようなものを出そうとしていた鏡の姿をみて、学生はそれ以上危険なことはしようとはしなかった。三井は、お調子者ではあっても自殺志願者ではないようだった。

「放課後に演習室にこい。戦いの何たるかを体に刻んでやる」

「……死なない程度をお願いします」

「それはお前次第だ。保障しかねる」

「ひいいひいいひいっ。てか、そこは約束してくださいよ」

悲鳴が教室に響き渡るがそんなことはどこ吹く風と、授業を開始する鏡。

「さて、馬鹿は放って置いて授業を開始しよう。仮想における物体の運動とその操作に関して説明する。いいな」

「は、はい」

「イエス、サー」

「りよ、了解しました」

「お願いします」

その迫力にびびってしまったのか、一部のクラスのメンバーは変な解答を返すが、やはりそんなことなど全く気にしない鏡。

「一般的に複数の対象を並列して処理することは困難だ。遠距離武装、特に遠隔操作系の武装が好まれないのは、その扱いの難しさ故といえる。これは、右の手で円を、左の手で三角形を同時に描こうとするときに描けないことから解かるだろう」

「操作する対象が多くなればなるだけ、その操作は煩雑はんざつを極めることになる。ならばその問題点を解決する策がどういったものか、わかるものはいるか？」

「はい」

優等生然とした態度で四葉が、その場で挙手きょしゅして答える。

「言ってみる」

「アシストプログラムを起動し、対象の処理をグループ化して自己の処理する情報量を減らすこと。訓練による習熟などが考えられます」

「悪くはない。だが、プログラムによる固定的な動作では対処法が画一的になつてしまう欠点がある。訓練による習熟については、確かにそれで操作する対象をある程度は増やすことが可能になるだろうが、限度がある。それも大した上昇も見込めないだろう」

「テストでは、それで正解だったと思うんですけど。何かおかしいんですか？」

姫川が合いの手を入れる。

「私の話の途中だ、できるだけ遮おさへるな。それに、悪くはないと言っている。だが、根本的に自己の処理する情報量を減らすこと。こ

れが、一番の早道だ。複数の対象を操作するのが難しいなら単一の対象にしまえばいい。それだけのことだ」

「それって、矛盾していませんか？ 複数の対象を操作するのに単一の対象にするって」

絶望の淵^{ふち}から復活した三井が聞く。

「そうだな、少々説明が足りなかったな。ふむ、お前達は普段文章を読む際にどうやってそれをこなしているか説明できるか？」

「えっと、文字を追って、それを黙読して、頭の中で文を復唱しているところでしょうか？」

「概ね正解だ。一文字一文字を認識し、単語化し、それらの組み合わせを読み取ることこれが文章となるわけだ。では、本を早く読むにはどうしたらいいと思う？」

「文字を早く追えばいいのでしょうか」

「斜め読みをする」

と三井。

「単語を拾い読みする」

次いで、姫川が続く。

「根本的な勘違いをしているな。もっと効率的なやり方があるだろう。ページ毎の文章を一枚の絵として認識すればいい。そうすれば、君達が認識するべきものは何百もの文字ではなく、たった一枚の絵に変わる。ページごとに何十秒と掛かっていた時間は、一秒かそこらに短縮される」

「要するに、速読のメカニズムの応用ですか」

無駄に眼鏡を押し上げ、静かに答える四葉。

「なかなか察しがいい人もいるみたいね。複数の対象を同時に操作使用とするのではなく、一枚の絵が切り替わっているようなイメージで操作をすれば、結果的には同じ効果が得られるというわけ。どちらが簡単なのかは言うまでのないでしょう」

右手と左手で別のことをすると意識するよりは、現実の自分がどう動いているかをイメージする方が簡単なのは言うまでもない。無

論、実際にそれだけで何とかなるほど楽なものではないのだが、イメージという思考が直接的に結果として働く仮想空間ではそれです分だった。

「すげえ、二年以上聞いてきてさっぱりだった座学が一時間で理解できたぞ。あのクソ教師どんだけほんこつなんだよ」

「あの無能は、まだいたのか。って、一年しか経ってないか」

「無能って、教師的にはまずい台詞な気がしますけど……」

さりげなく白百合が突っ込む。

「事実だろう。どうせ運動に対して、適切な物理エネルギーが伝わるようにルーチン化した運動をどうたらとか意味不明な内容を永遠と続けていたんだろう」

「まあ、その通りなんだけどさ」

おどけるように三井が言う。

「とりあえず、ポンコツが誰を指しているか伏せておけば問題ない。ここまでで質問があるものはいるか？」

「スリーサイズをお願いします」

さりげなく、質問する三井。

ここまでくるといっそ清々しい。

「カップがFで上から96……、しまった、条件反射的に回答してしまった」

鏡が顔を真っ赤にして口を覆うが、既に遅い。

一部の男子生徒たちが大いに盛り上がり、女子生徒たちは可愛いなどとはやし立てる。

「そうか、男子諸君は死にたいらしいな。四葉以外全員で、放課後に演習室にこい。まとめて相手をしてやる」

どす黒い殺気をみなぎらせ、不気味に目を輝かせて鏡が不敵に笑う。

その笑顔は本来、笑うという行為が攻撃的な行為であることを強く感じさせた。女子生徒たちは自分達が対象から外れたことに安堵あんどしている。

「ちょ、なんで四葉以外なんすか！ 不公平だ」

恐怖に一瞬たじろぐが、一方的な言い方に至る所から不平不満が噴出する。
ふんしゅつ

「ただ単に先約があるならそちらを優先させた方がいいと思っただけだ。新城先生と決闘するのだろう？」

「はい」

静かに四葉が答える。

「とりあえず、私の方に来てもあちらに行っても同じ結果になるだろう。不満があるものは、あちらに行っても構わないぞ。ただし、そちらの方が楽だとは思わないことだ」

「それは、一体どういうことですか？」

ふと、疑問を口にする四葉。

「演習室のレコードは全て学生時代のあいつものだからな。同じ水準を要求されるとは言わないが、かなりハードなものになるだろう」

沈黙する教室。

「あれって、デフォルトで設定されているスコアじゃなかったんだ。全部同じ名前だったから気にしたことなかった」

呆けたように姫川が口を開く。

「どうやら、とんでもない人に喧嘩けんかを売ってしまったようだ」

武者震いなのか、軽く体を震わせる四葉。
むしやふる

明本人はそれほど自覚していないが、学生時代から彼はそれなりに有名な人物だった。電脳技術研究所の所長でもある、新城大地の息子であることや、実技の実力がトップだったこともあり他の学年にまで名前が知れていた。

「まあ、せいぜい瞬殺されないように注意しろ。トラウマになるから」

『強いて言うならば、相手より先に制圧して、そもそも攻撃させないことだな』という明の発言が、彼の中で急に現実味を帯びてくる。

「さて、そろそろ時間のようだ。理解しにくかった部分は実践で理解してもらうことにする」

そのタイミングを見計らったかのように、終業のチャイムが鳴り響く。

「それでは、放課後に会おう。男子諸君」

死刑宣告にも等しいその言葉は、教室に絶叫をもたらしたのだった。

3 1 3 Return (後書き)

とりあえず、先日が続いて更新。(9月6日一部修正)

3 1 4 R e t u r n (前書き)

座学パート3。

今回少しややこしい内容かもしれません。

3 1 4 R e t u r n

3 1 4 R e t u r n

天宮水月の場合。

「本日より、皆さんに一部の科目を教えることになりました、天宮水月です。私自身、宗光学院を卒業して間もないので、教える事以上に皆さんから教えられることも多いと思います。初めての事ばかりですから、わからないと思ったらどんどん質問してくださいね」
無難なあいさつを済ませる水月。神代の前例もあるので、若干おとなしくなっているがそこは若い学生。質問していいとなれば行動が早かった。

「天宮先生、神代先生、新城先生の三人は、電腦技術研究所のポスターになっていましたかどのようなご関係で？」

これはパラッチ姫川からの質問。

「学院生時代からの友達ですね。あのポスター、鏡と明の二人はすごく格好良く映っていたから取りなおして欲しかったなあ」

あと平治君も友達だよ、と慌てて付け足す水月。

「……無難な解答ですね」

ぼそりとつぶやく白百合。

しかし、その言葉は笑顔の水月には全く届いていない。

「それでは、最近になっていきなり電研に新制服が導入された経緯について何かご存知でしょうか？」

「単純に宗光学院生のためのPR目的、それとあとは新城大佐の趣味らしいね。男子の制服については、適当に流してデザインして女子の制服は、その何倍もの時間を掛けて打ち合わせして作成したらしいよ」

これ、言っているのかな。と完全に言い切ったあとに言い出す水

月。

そんな彼女の様子にしばしクラス全体が呆然とする。

「ふふ、新城大佐とは話が合いそうです」

誰もが沈黙する中、白百合だけが目を輝かせて答える。

「ほんと、格好良さと可愛さが上手く融合しているよね。それに、私としても服を選ぶ必要がなくなつてすごく助かっているのです」

「特に女性は助かりそうですね。ええとそれでは次の質問に移ります。お聞きしたところによると新城先生と神代先生はかなり強いらしいですが、天宮先生と三島先生も同じくらい強いのでしょうか？」

戦闘での実力が彼らと同じか、それ以上のものであれば割と死活問題なので、姫川は三角関係などのスキャンダルより実利を選んだ。「うーんと。私は二人に助けられたばかりだし、平治君は最近会ってないからよく解からないかな。でも、学院生時代に明、鏡、平治君の三人は、大会に参加したりしていたから同じくらいの強さなんじゃないのかな」

姫川は教師を選択するタイプである演習系の授業は、天宮先生にしておけば平気であると確信して足元で小さくガッツポーズをした。三人が同じ程度、そして、助けられたという発言からそこまで推測したのは悪くはなかったが、その選択が正しいのは定かではない。

「ところで、天宮先生はどのような講義を担当しているのでしょうか？」

四葉が、根が真面目過ぎるのか本気で興味があるような様子で講義について質問する。

「そうだった、講義しなくちゃいけないんだ。忘れていたよ、ありがとうね」

手を軽く叩き、水月が満面の笑みで感謝すると、四葉がたじろぐ。そして、クラスの中で彼女の印象が固まり始める。

どうやらこの人は、天然という奴なのではなからうか、と。

「それでは、仮想空間における現象の発生に関して説明します。」

多少難しいかもしれませんが頑張って理解してください。いきますよう」

そういつて、生徒達に微笑みかける水月。

「が、頑張ります」

「はい」

そんな様子に生徒達は少々緊張^{きんぎょう}して応じた。しかし、鏡のときに比べれば穏やかだったのは言うまでもない。

「まず、前提となる基本的な知識として、仮想空間は現実を模倣したものではありますが、イコールではないということは皆さん知っていますね」

「ふああ、そりゃ、あんな訳のわからない建築物やら、フィールドなんて現実にないしな」

今起きたというような顔で、三井が相鎚^{あいづち}を打つ。

「うんうん」

内容が想像していたものよりは簡単で安心したのか、にわかに活気^き付く教室内。

「それは、もちろんその通りなのですが私が言いたいのは、仮想空間は現実の世界とは異なるロジックで構成されているという点ですね。世界が構成される要素から、物理法則に至るまで全てが違っているといてもいいのかもしれません」

淀^{よど}みのない澄んだ水月の声は、それだけで注意をひきつける。活気^き付いた教室は、水を打ったように和いでゆく。

「これは、地球複数個分あるといわれる仮想空間すべてに対して、分子レベルで再現することが困難とされるからです。例えば、意識体は内蔵などの器官を保有していますが、そこで再現される肺は呼吸を必要としません。空気がいららないなら、そもそも外見だけ再現すればいいのではないか、という話になりますが、そういうわけにもいかない理由があります」

わかりますか、と繋^{つな}げ教室を見渡す水月。

真っ先に挙手したのは、四葉だった。

「四葉君でしたね、どうぞ」

「はい。それは、人間が本来あるべき姿をイメージしやすく、また、感覚の誤認をなくすためと言われています」

「正解です。四葉君は賢い^{かしこ}ですねえ。そもそもが、人間の脳に作
用してこれが本物の肉体であると勘違いさせることで操作する意識
体には都合がよいといわれています。しかし、この感覚はどこまで
いつても錯覚でしかなく、AAに姿を変えても問題は発生しません」
そもそも、呼吸も食事^{はいせつ}も排泄も仮想においては全て不要であり、
これが第二の現実であるという感覚を促すための材料以上の存在に
はなりません。

「話を少し戻します。異なるロジックで構成されている、と言いま
したが。それではどのような論理で構成されているか、といえます
と。かなりいい加減なルールで構成されています。例えば物質の落
下^{おち}は、現実において物体はA地点からB地点において無数の点を通
過し、重力に引かれ、空気による摩擦^{まこつ}を受け、地面に衝突し、衝撃
を地面に伝え、均衡が取れた状態になることで停止します」

まくし立てた内容を同時に背面にあるホワイトボード^{とっえい}に投影しな
がら、教壇にペンを落としてみせる水月。ちなみに、ここに投影さ
れている内容はPIT経由でダウンロードが可能であり板書してい
るから、少し待ってくださいなどという言い訳は通用しない。

「しかし、仮想においては忠実にこれを再現する必要性は全くな
く。人間が信じてしまう程度に偽装^{ぎさう}できればそれでいいのです。つ
まり、何か物体が落下したように見えて、最終的にそれが停止すれ
ばいいということです」

「それは、結局どういうことなのでしょう？」
さっぱりわからない、という表情で三井が質問する。

「早い話が魔法^{まほう}に近いんです。特定の物体に対して、一定の働き
かけをすることで、結果を引き出す。仮想で走ろうとする我々の意
志が、意識体を走らせるということかな」

「そして、そこには複雑な筋肉の連動や空気^{きくう}の摩擦などの障害は

存在せず、結果として動いているように見える現象が発生している。ということでしょうが天宮先生」

捕捉するように四葉がつぶやく。

「そういうことです。そして、これがAAでの戦闘ではより顕著けんちよに現れますね。例えば、銃で相手を攻撃したとすると、物体が移動するのであるう時間だけ選択の余地がありますが、攻撃が発生した時点で相手へのダメージが先に決定してしまいます」

つまり、向けられた銃口、放たれた弾丸は、途中で回避や相殺さうさいという選択がされない限り、着弾というエフェクトを発生させ、破壊という効果を発揮する。その過程にある、地点間の移動は視覚上に再現されるものでしかなく、現象ではない。

「そして、ほとんどの現象は特定の経過を経る事で結果を引き出すのであって、厳密に計算され現実を模倣もほうしたものではありません。これが現実と仮想の違いです。難しい話でしたけど、理解できましたか？ 皆さん」

「はい、すごく賢くなった気分です。先生」

とは、三井。

「それこそ錯覚さくかくだろうが、三井」

さりげなく毒を放つ、白百合。

彼女は特定の対象以外には、かなり厳しい性格のようだ。

「皆さん、講義をきちんと静かに聞いていて偉いです。私なんてほとんど学校にいませんでしたから尊敬してしまいます」

これは、どう突っ込むべきなのかとクラスが短い沈黙に包まれると、その静寂せいじやくを破るように終業のチャイムが響くのであった。

3 1 4 R e t u r n (後書き)

点数増えるのは、うれしいですね。しかし、その分減った時の衝撃もすさまじいのですが。

新規にお気に入り登録してくれた方ありがとうございます、そして、さようなら。増えた分だけ減ったのでかなりショックです。ゲームシナリオ(ぶっちゃけエロゲシナリオ)を想定して書いていたので、序盤の煮え切らない展開が好みが分かれた原因なのかなあ。とりあえず、分岐するまで主人公の立ち位置が不明確なのは仕様ですね。

まあ、意図的に中立の立場にしているんですけど。

それと今後は、こんな感じの更新を続けることにしようかと思えます。頻度が上がる代わりにその量は以前より減ることになります。ご了承ください。

ああ、キャラをもっと魅力的に書ける文章能力が欲しい。(9月6日一部修正)

3 1 5 R e t u r n (前書き)

「待たせたな諸君、真打ちの登場だ。主役は最後に帰還するのだ」

3 1 5 R e t u r n

3 1 5 R e t u r n

三島平治の場合。

「初回から来られないなんて、あいつらしいといつかなんというか」

「我々の中では、彼が一番教師に向いている人材だと思うのだが」

「平治君、優しいもんね」

時は、正午。

学生食堂にて、昼食を取る明、鏡、水月の姿があった。

「あいつが担当していた中東エリアで、何かトラブルがあったらしいな。それが片付き次第こちらにくるそうだ」

「人事異動なら、適当に引き継いで置けばいいものを」

カップに注がれた有機紅茶を飲みつつ、鏡がいう。

「辛いところをいきなり新人には任せられない、なんて平治君らしいよね」

「損な性格だよ、あいつは」

「彼が受け持っていた講義はどうしたんだい？」

「休暇中の本物の教師を引っ張ってきたそうさ。まあ、外界とはかなり無縁な学校だからな代えもあまりいないのさ」

「私達が教えているぐらいだし、適当に卒業生引っ張ってくればいいんじゃないの？」

「一応、電研の任務という扱いでの赴任^{ふにん}だし、機密保持みたいな側面があるんじゃないのか？ 例によって、俺は何も聞いていないが」

「相変わらず使えない奴だな、君は」

「ほっとけ」

「それはそうと、私は二人が演習している間どうすればいいの？」
「暇なら、見学している振りしながら生徒の様子を観察でもしている」

「教職に夢中で本来の任務を忘れないようにね、水月」
苦笑しながら明と鏡が言う。

「うう、いじめられた。酷いよ二人とも」
うつむき軽く涙目になる、水月。

「明、君は鬼だな」

「さりげなく責任を俺だけに押し付けようとするな。鏡」

「私だけ、のけ者なんて酷いよ」

「って、そつちかよ。といっても、俺は生徒に決闘申し込まれただけだしな。本来、今日は演習なんてないし」

「私も売り言葉に買い言葉で、つい男子全員と演習すると言ってしまった」

さらに言うならば、鏡の発言で明の方にも何人か勝手に送り込んでしまった訳だが、そこは伏せておく。

「まあいいや。二人の言うように適当に見学してることにするよ」

「そうだな、好きな方を見ているといい」

とりあえず、普通に帰った水月をみて安心する明。

「それは、一択なの？」

と、水月。

「馬鹿、それは違うだろ！ 水月」

思わず突っ込みを入れる鏡の顔は少し赤い。

「冗談だよ、鏡。ほんと、鏡は可愛いなあ」

鏡を抱き寄せ、頭をなでる水月。

「やめろ、馬鹿」

と、口では抵抗するが、本気で振りほどこうとはしない鏡。

そんな様子を明は、どうしたものかと悩ましげな表情で眺めるのであった。

「全力でいかせてもらいますよ、新城先生」

「決闘ということならば、加減はしない。こちらも全力で迎え撃つ」

放課後、演習室から仮想に没入した明と四葉の二人が向かい合っていた。

転送されたエリアは、アリーナ。

黒木と幾度となく演習を繰り返した明にとっては、少し懐かしい場所への帰還だった。

「それでは、参ります」

「来い、四葉」

《Translation》（記号変換）

祈るように思考し、『GENESIS』を起動する。仮想空間上での肉体である二人の意識体は、その意思を反映し情報を上書きしていく。薄い透明な壁を抜けるような感覚の直後に、肉体は強靱な兵器AAへと姿を変える。

明にとっては、見慣れたビジュアルエフェクトと共にシステムアナウンスが響く。

【DUEL（決闘）】

「戦闘開始だ。いざ、尋常に」

「勝負！」

二人の声が重なりオープン回線上で響き渡る。

二人で戦闘するのにはいささか広大すぎるアリーナのグラウンドに、淡い光の羽を広げた青い機械の妖精、フェアリーと漆黒のローブを纏った黒い魔法使い、メイジがそれぞれの得物を手に対峙した瞬間に明は始動する。

《Double strike》（二重攻撃）

得意の速射を開始と同時に肉眼で見舞いする明、これで仕留められた過去のクラスメイトは開始一秒で決着という最高に不名誉な記録を手に入れ、二度と明とは戦闘しなかった。

「これで終わってくれるなよ」

着弾を示す轟音と白煙。

メイジは、左手に盾を持ちフェアリーの攻撃を防いでいた。メイジは盾に隠れるように半身になり、右手にはミスリルブレイドを構えて、弓を引くように掲げる。

「神代先生から話を聞いていなければ、瞬殺でしたよ」

そして、半身の体勢を維持したまま突進してくるメイジに明は、喜びすら感じる。

（それなりにいい人材がいるんだな）

たとえ、事前に話を聞いていたからといつても、反応できなければ攻撃は防げない。圧倒的な速度で放たれた弾丸を防いだのは、彼の実力があってこそその芸当だ。

胸部装甲、おそらくはその先にあるコアユニットを破壊するため
に放たれたすさまじい速さの突きをわずかに身を反らすことで回避
するフェアリー。細身の機体は、装甲が薄い回避には適している。
盾という死角から懐に潜り込むフェアリーは、右手に剣を、もう
片方の手にリニアライフルを構えて、斬りつけ弾丸を放つ。

剣を盾でパライして、脇からローブを突き抜ける。仕留められな
かったが、そのまま終わらせるつもりのない明は、腰を落とし脚払
いで相手の体勢を崩しに掛かる。前のめりに倒れる相手の顔面にブ
ースターを吹かし、ひざをめり込ませる。

手を付き、逆立ちするようにさらにあごに蹴りを打ち込み、その
まま空中に離脱する。

間合いが離れると、メイジの武装がこつ然と消える。メイジの持
つアビリティ『アイカイバ倉庫』の効果を利用した、戦闘中の武装変更。四葉
はリニアライフルを両手に構え、レーザービットで構成されたロー
ブが彼の前で蜂の群れのように展開される。

「一斉攻撃での即時制圧か。だが、残念だったな」

銃口が淡く輝き攻撃が放たれる刹那、明はリニアライフルとプラ
ズマライフルを両手に携え正確にレーザービットを打ち抜いていく。
その攻撃は、彼の言葉を体現するかのようであり、四葉が一瞬見と

れてしまう程に鮮やかだった。

「……噓」

そうつぶやいた四葉が我に返ったのは、中空から炎の剣を持って襲い掛かるフェアリーの姿に戦慄したからであった。恐怖から反射的に放たれた数十の弾丸は、実体のない虚気楼を突き抜けるばかりであり、直後に襲い掛かる本体がメイジの身体を両断した。

【THE END（戦闘終了）】

白熱した勝負を見ることができて興奮しているのか、アリーナには割れんばかりの歓声がこだまする。なぜか演習に参加することになった十名程度の生徒の面倒を見ることができそうになかったため、明は見学という名目で観戦させていた。

「……負けました」

「だが、いい勝負だった」

ポリゴンが霧散する一瞬、二人はそんな言葉を交わした。

明は、そんな光景にどこか懐かしさを覚えるのだった。

それから数分後、演習室に駆け込む男の姿があった。

「待たせたな諸君、真打ちの登場だ。主役は最後に帰還するのだ」
息を切らせながら現れたのは、高速で引継ぎを終わらせた三島平治。

しかし、そこでは明が演習を終わらせて戸締りをしようとしているところであった。

3 1 5 R e t u r n (後書き)

とりあえず、ここまででReturnは終了のつもりです。
ついでだから、一、二章も微調整しました。

ま、例によって内容にはあまり変化がないですが。

3 2 1 Opposition (前書き)

「そういえば、聞いていなかったが、なぜ俺に決闘を申し込んだんだ？」

「私は先生という強敵を倒して、英雄えいゆうになりたかったんですよ。先生は、子供の戯言でが言だと思いますか？」

3 2 1 Opposition

3 2 1 Opposition

早朝、教室にて。

新城明と四葉剣三が机越しに向き合っていた。

明の方といえば、自身が仮とはいえ教職なので職務のついでになんとか、四葉の方は芯しんから真面目だったようで、誰よりも早く学校に来ていた。正直に暇を潰していたとは、言いづらかったので、とりあえず、明は教師ぶってみることにした。

「そういえば、聞いていなかったが、なぜ俺に決闘を申し込んだんだ？」

「私は先生という強敵を倒して、英雄えいゆうになりたかったんですよ。

先生は、子供の戯言だと思いませんか？」

「それが勝利への欲求であるとするなら、なんらおかしくはないだろう。闘争心なくして勝つことはできないし、そういった意識がないやつは生き残れない」

勝ちたいと願うこと自体は自然なことであるし、四葉の実技演習の成績が優秀なことを考慮すれば手近なところに対戦相手がいなくなってしまうとも考えられた。だとすれば、戦う相手に飢えていて今回の決闘を申し込んだとしても不思議ではなかった。

「どうなのでしょう。私はただ、勝って勝者になりたいと思っていただけですから」

「間違っても戦闘バトルマニア狂にだけはなるなよ。早死にすることになる」

「強者に対して勝ちたいと言う気持ちはありますが、私は戦闘そのものに快楽を求めていますから。きっと、大丈夫だと思います」

「必要であるのならば、戦闘から逃げることも覚えるように。実戦になれば、次の機会など存在しないのだからな」

「肝きもに銘じておきますよ」

「それと英雄になりたいなら、誰よりも臆病者おくびょうものになるといい。無様でも生き残り続けければ、自然に英雄になれる」

彼の言う英雄というものが、撃墜王げきついおうや千人殺しが英雄だというのならば、電研で仕事をするうちに一年もしないでなれるだろう。それが映画や物語で描かれるような、人を導く存在や救世主のようなものでない限りは。

「そういうものなんですか」

「そんなものだ」

尤も自分が臆病者であつたかといわれると、無謀なことばかりやつていたようにも思え少し反省してしまう明だった。そして、思い出すと恥ずかしくなり照れているのを隠すかのように頭をかいて視線を左にそらす。

「よし、決めました。実技は、新城先生を選ばせて頂きます」

「とと、ずいぶんと急な話題転換だな。しかし、俺でいいのか？ 実技を教えるなら平治の方が上手いし、ビジュアルで選ぶなら鏡や水月もいるだろう。それに先に言っておくが、俺のやり方はスバルタ方式だ」

「身体に覚えこませる。いいじゃないですか、解かりやすくて。それに恋愛する気がないのにビジュアルで選んだりしませんよ」

「それもそうか。了解した、期待に応えられるよう努力しよう」
そうして、早朝という時間は過ぎていった。

同日、演習室にて。

明を含め、四人の教員と十六人の生徒が集合していた。

「さて、本日は選択した実習生と一緒に授業を受けてもらうことになる。なるべく希望に沿えるようにはしたが、あぶれたものはこちらで相談して勝手に振り分けた。提示された情報を確認した後、担当の教員と合流しろ」

教室前方にいる明が整列した生徒達に指示をする。

名目上は生徒達の学習が主眼となっているが、これは明達の部下に対する統率訓練の側面も併せ持つカリキュラムだった。各教員が五名のチームを編成し演習の成績を相互に競い合うという形式となっているが、これは実戦を想定した訓練だった。

電研では、単機での哨戒任務しやうかいなども行われているが、民間のセキユリテイ会社では二人から成るツーマンセルや五人程度のパーティーを編成して仕事にあたるのが一般的だ。そもそも相手の殲滅せんめつを主目的としない以上効率ではなく生存が最優先されるのは自明だ。

「分かれたか。俺の班は、四葉、赤木、白百合、桜井か。今日は、よろしくたのむ」

「よろしく願います」

四人の声が重なる。

四葉と赤木の二人が男子、白百合と桜井は女子の計四人。チームワークはそれなりに期待できそうである。

「演習というが、実際のところはゲーム版『GENESIS』で戦闘を繰り返すだけだ。硬くならないでもらって構わない」

「具体的には何を訓練するのでしょうか？」

自身の希望が通ったことが嬉しいのか、少し明るい顔の四葉が質問する。

「多対多の状況を想定した訓練だ。これから四人は、それぞれ役割を分担し相互に助け合いながらミッションのクリアを目指してくれ。細部については、今からデータを転送するのでそちらを確認しろ」

PIT経由で四人にデータを転送する。

「なるほど」

静かにうなづく四葉。

「……これは、なんとも」

絶句気味に話す赤木。

「……面白い」

薄っすらと笑みを浮かべる白百合。

「無理無理、100対4とか絶対無理！」

初めから諦めモードの桜井。

「ちなみにCPUの設定は最強にしてあるが、なにか問題はあるか？」

「「特にありません」」

冷静な様子で四葉と白百合の声が重なる。

「はあ、多数決で覆らないなら諦めるか」

「……うう、頑張ります」

何かの悟りでも啓いたのか、残りの二人の意見も同じ方向に収束していく。

「それでは作戦を開始する。各員の健闘を祈る」

明の声を合図にミッションがスタートするのだった。

3 2 1 Opposition (後書き)

非常に個人的な事情で申し訳ないですが、いろいろありまして更新が遅れました。すいません。

そして、一章のあとがきで点数くれと書いてみたら二点がつきました。善意なのか悪意なのか測りかねるところですが、依頼に応えてくれたのは素直にうれしいですね。まだ見ぬ誰かよ、ここでありがとうと言っておきます。まあ、その評価だと続きを読んでくれているとは思いますが。感謝の言葉をここに。

3 2 2 Opposition (前書き)

四人が、それは空けてはいけないパンドラの箱だと理解するのに時間
間は掛からなかった。

3 2 2 Opposition

3 2 2 Opposition

「まあ、予想通りだが。負けたな」

「そりゃあ、負けますよお」

桜井が明の意見に同意する。

「70体辺りから急に敵が強くなった気がします。もっと精進せねば」

とは、四葉。

「……次は、負けない」

決意表明か何かのつもりなのか、一人つぶやく白百合。

「てか、四葉と白百合に関してはこれ以上強くならなくてもいいと思うんだがな」

二人が好成績なのは周知のことだったが、一緒にチームを組んでみて、改めて自分との実力差を思い知らされたのか赤木がぼやく。

「私が不甲斐^{ふがい}なかったから」

「落ち着け四葉、個人技で全てがどうにかなるなら集団に属する意味はない。早い話わざと負けさせるためにあのミッションをやらせた訳だが」

「ひどっ」

反射的に口を出したのは桜井。

「新城先生は鬼畜^{きちく}です。……でも、それがいい」

何故か頬^ほを赤らめる白百合。

（白百合、お前は一体何を思っている）

軽く寒気を感じた明だが、気にせず話を進める。

「各人の問題点の洗い出し、連携^{れんけい}の必要性を説明するために今回のミッションを選択した。なぜ、お前達が負けたのかといえ、単純に連携が全く取れていないからだ。個人技に依存してごり押しで

勝ち進もうとした結果がこれだ」

A Rで戦闘データを参照にしながら、反省会を進めていく明。

「適度に広がって各個撃破といえは聞こえはいいが、実際のところお前たちはただ単にばらばらに戦闘してただけだ。まあ、個人技でも極めればあの程度の敵を無力化することは不可能ではないのは確かだが、限度がある」

数的優位というのは、それだけで一つの暴力となる。個別の戦闘では、不可避の状況や連戦に次ぐ連戦で体力的な限界で敗れることもあるだろう。いくら技を磨^{みが}いて強くなっても、一人でできることには自ずと限界があるのだ。

「事前に打ち合わせがなかったことも考えれば、善戦したと言えなくもない。しかし、俺は君達の戦力で十分に無効化できる程度の相手だと思って今回のカードを組み、君達は83体のA Aを撃破した段階で制圧された」

一呼吸の空白の後、続ける明。

「これは、相手が段階的に戦術を変えるようにしていた事にも原因がある。先程、四葉が指摘したように70体目辺りから、複数体で隊列を組み、Aの隙をBが、Bの隙をCが補填するようなパターンで攻めるようにしていたからだ」

そして、CPUの操作するA Aの途切れない攻撃に対し、即時反応して対処する限界が83体目だったということでもある。一人撃破され、二人目、後はなし崩しに全滅に至った。

「攻撃による相手の制圧は少数に対しては有効だが、数で押されると全てを撃破し攻撃を防ぐことは不可能だ。これは実際に体験してもらった通りだから、理解してもらえたと思う」

内省しているのか、静かに耳を傾ける四人。

「全員が前衛攻撃型か後方支援型の動きになってしまっている現状は、攻守のバランスが悪いのは言うまでもない話だ。最低限一人は、防御特化型に回り全体の隙をカバーする必要があるだろう」

厳密な役割分担というわけではないが、前衛攻撃型、防御特化型、

後方支援型、汎用型マルチプルなどのA Aの基本装備に照らした分類が存在する。

近接武器で攻め立てるエンジェルシリーズは、前衛攻撃型と言われ、武器というよりは盾として多く使用されるソードビットを使用するウィザードは防御特化型に分類され。射撃武器をメインアームとするヘッジホッグは、後方支援型。攻守ないし近接と遠距離をバランスよくこなすタイプ、あるいは前述した以外のタイプは汎用型に該当すると言われている。

しかし、装備のバリエーションや戦い方次第でこんな分類などいくらでも変わってしまうので大した意味を持つものではないが、役割分担することは作業の効率化に繋がり、それは即ち戦力の増強に繋がる。

「このメンバーだと汎用型のメイジを使う四葉か、ウィザードを使用している白百合が防御特化型に転向可能だな。単純な撃墜げきつい数を考えれば、白百合が防御に回るのが適任だが、近接武器主体のA Aであるスコアなら四葉が適任かな」

汎用機であるがゆえに、防御しながら武装を変更して援護射撃も可能だという考慮すれば彼が一番適任だろう。

「四葉君が攻撃できなくなるのは、戦力的に厳しいきびと思うのですが、あのと前置いて、遠慮がちに意見する桜井。

「無論、攻撃にも参加してもらう。戦況を見極めて指示を下し、必要に応じて支援砲撃や防御を行ってもらうことになる。そもそも手数が足りないのから役割分担をするのに、それで手数が減ってしまつては意味がないからな」

「解かりました、やって見せます」

「それでいい。桜井と白百合の二人は、ウィザードとアークエンジェルで前衛を担当、赤木はソルジャーで後方支援を担当しろ。それと形式的なものではあるが四葉が指揮官役となつてこのパーティーをまとめろ」

シンプルな役割分担だが、個人技に依存したやり方より効率は格

段に上昇する。

個人での打ち漏らしの減少、不意に飛んでくる流れ弾の防御、状況を見極めての配置変換、前衛の露払いなど利点を挙げればきりがなし。即興の高度な連携は期待できないにしても、それでも十分過ぎる効果が期待できるだろう。

「ところで、戦略的な問題点はわかりましたが、個人個人の戦術的な課題に関してはどのような問題があるのでしょうか？」

笑い出したいのこらえつつ、明は口を開く。

「ふふふふ、良くぞ聞いてくれた。そちらから、聞かれない限り絶対に話してはいけないと神代や三島に言明されていてな。まず、全員動きが遅いな。相手が出現してから一秒以内に発射モーションに入るか回避運動を開始しないと話にならない」

いきなり様子が変化した明に一同、そろって絶句する。

「赤木、お前の射撃は精度が悪すぎる。最低九割は当てられるようにしろ。三割も外していたら当てる前に殺される。白百合は、強引に前に出過ぎているな、装甲も兼ねているビットを当てにしているのはいいが、だとするなら四体程度は同時に捌けるようにならないと実戦では使い物にならない」

一気にまくし立てられ、啞然とする四人を尻目にさらに続く講釈。

「桜井は反応速度が遅すぎるな。あの程度の相手なら、防御を使うまでもなく全て立体軌道で回避しろ。それから四葉は、武装の変更に丁寧すぎる。アクションを起こしている最中に次の武装を用意して間断なく攻撃が続くようにしろ。必要に応じて使い分けるのではなく、攻撃し続ける」

四人が、それは空けてはいけないパンドラの箱だと理解するのに時間は掛からなかった。

3 2 2 Opposition (後書き)

戦闘の描写は、後ほど。ロボの戦闘が見たいんだよ、退屈な脳内設定ばかりみせてんじゃねえという方には、申し訳ない。でも、一章、二章は戦闘ばつかったし、配分って難しいですね。カスタマイズとかの描写もやりたいし、恋愛のパートなんかも完全に無視するわけにはいきませんね。

3 2 3 Opposition (前書き)

「では、征くでしょうか」

「仰せのままに、マイロード」

朝日を背に進むマクトにニクムが追従するのだった。

3 2 3 Opposition

3 2 3 Opposition

とある古城の一室にて。

黒のロングコートを着た銀髪の大男と白いワイシャツにジーンズを着たブラウンヘアの小柄な青年が向き合っていた。

「米帝は、仮想の完全掌握しちてんかくを目標としているようだね」

「何せ実質的には犯罪ギルドである我々にまで声が掛かるくらいだ。そうだろう、皇帝陛下」

ウェーブが掛かった銀のロングヘアをなびかせて、ニクム・ツアラが青年に話しかける。

「陛下はやめてくれ、ニクム」

白いワイシャツを着た青年こと、マクト・ロートシルトが窓際でワインを片手に呆れたような声で苦笑いする。

「あなたは俺の王だ。それに相応しい呼び方がある」

「はあ、好きに呼べと言ったのはこちらだったな。首尾は？」

一転、真剣な表情で問うマクト。

「既に複数の国が統括するエリアを制圧、人材の供給を絶つべく俺の部下が動いている」

「面白いことになってきたな。ゲーム自体の進行はどこまで行っている？」

「あと数階層というところまで着ている。最後に、あのクソ野郎を見つけ出して始末するだけという段階だ」

「問題は、彼がどの程度実権を握っているかどうかだね。AIも含めた全てのコントロールを奪われたらこちらに勝ち目はない」

「だが、『GENESIS』を利用した戦闘なら勝ち目は十分にあるはずだ。来るべき決戦のための『黒の旅団』というギルドだろう」

「終末は、まだ先だよ。『白の教団』という障害もある、すぐに結果は出ないだろう」

「俺は、何年も待つてきた。あいつらに復讐ふくしゅうするためだけに生きてきた。あんたもそうなんだろう？」

「なればこそ、焦ってはいけないんだニクム。年単位で費やした時間を絶対に無駄にしたいくはないからね。完璧に完全に叩き潰して、あいつが創ったこの世界ごと吹き飛ばしてやる」

マクトの冷静さの奥には、抑え切れない狂気の炎が見え隠れしていた。

「くく、米帝もとんだ怪物を腹の中に入れちまったな。我々を御し切れるつもりなのかね」

「自分達が戦う前の当て馬くらいに考えているのだろう？ 今頃は、漁夫の利を得ようと精々二枚舌三枚舌のピエロを演じているころだろうさ」

「最後には現実の武力がものをいうと信じているんだろうが、こちらも既にこちらが掌握しつつあるというのにな」

基本的には裏金の流通経路としての機能を持つ仮想は、広いエリアを統括すればするだけ莫大な利益を手に入れることができる。そして、仮想を利用し不正に手を染める企業の実態を掴つかむことも容易い。幾億もの篡奪さんだつ行為で稼いだ膨大な不正マネーを背景に『黒の旅団』は米帝の軍需産業を少しずつ、しかし、確実に侵食していった。

「蛇じゃへびの道は蛇というが、我々を利用するつもりが我々に食われることになるとは考えてもいなかったのだろうね。とはいえ、完全に管理された社会などいずれば崩壊する運命だったのかもしれないが」

「人が創ったアルゴリズムが人を管理する。まったく、ペットに飼われる主人ほど滑稽な存在はないだろうに。あはははははは」

「飼われていることに気が付きさえしなければ、案外幸せなものさ。飼育されているブタが、自分の境遇を不幸だと思っているとは思わないね。そんなものは、人間側からの勝手な想像の押し付けに過ぎないんだから」

「実際、野生で生きているよりも楽に生活ができていないことはないしな」

「それに、飼育されている状態と言うのは彼らにとっては適切に進化した結果なのかも知れないしね。野生で増えるよりも人間に飼育されている現状の方がはるかに効率よく種族を繁栄させているのだから」

「案外、家畜にされているのは飼育を義務付けられた人間の方なのかもしれないな。卵と鶏、あるいは、ウロボロスのような話だ」

「風が吹けば桶屋おけやが儲かる、我々も行為を別の側面から見てもそれを肯定しただけの集団さ。ここで行われる戦闘は正しい権利であり、手に入れたものは自分のもの。倫理なんて不明確なものではなく、事実を受け入れたただけだ」

略奪りゃくだつも殺人も仮想では肯定されうるものであり、感情や倫理で行動を否定する『白の教団』の方が異物であるという論理。ルールや戒律があるから悪と断じられる行為も、仮想においては否定される材料がないのだから現実のルールを持ち込む方がおかしいと言う話だ。

「まあ、正しいのか間違っているのかなんて、本人が決めればいいことだ。俺は、目的さえ達成できればあとはどうでもいい」

「君は、そうだったね」

クスリと笑い、窓辺にグラスを置く。

「では、征くでしょうか」

「仰せのままに、マイロード」

朝日を背に進むマクトにニクムが追従するのだった。

3 2 3 Opposition (後書き)

別キャラにフォーカスしてみた。まあ、伏線みたいなものです。てか、この作品そんなだらけなんですけど。比較的ぬるいのだと黒木愛がAIとか。細かいやつ言い出すときりがないんですけどね。……まあ、だから設定資料集でセルフネタバレやっているわけですが。

3 2 4 Opposition (前書き)

「対立してくるなら、正面から叩き潰せ」

「了解^ヤ！」「」

四人の声がぴつたりと重なって響く。スパルタな訓練を共に乗り越えた影響か、奇妙な連帯感が生まれていた。

3 2 4 Opposition

3 2 4 Opposition

放課後、宗光学院にて。

夕日に照らされた教室で四葉剣三がARを利用してメールチェックをしていた。

「了解しました、と」

ふう、と溜め息をつきながら四葉がPIET経由のメールを閉じる。
(厄介なやっかいことになった)

それが自身に与えられた仕事であるのなら、どのようなものであっても実行するという覚悟はしていたつもりであった。そもそも、そんな覚悟すらなしに来的には前線に立つことを要求される宗光学院に入学する人はほとんどいない。

最先端技術の仕事と言えば聞こえがいいが、やっていることはたとえばゴロツキの掃除や傭兵ようへい紛いの仕事だ。報酬はそこらの一流企業などの比ではないが命懸けの仕事であることを考慮じこうすれば高給取りというほどのものでもない。

彼のように学生の中から依頼を受けて仕事することは珍しいことではなく。金銭的に問題を抱える学生が宗光学院に入学した直後に雇われの用心棒をすることや自主的に民間人の護衛に就くことはよくある。宗光学院は教育機関ではあるが、電研では少しでも経験を積んだ優秀な人材が欲しいこともあり、黙認されている行為である。

訳の分からない『海賊』崩れの企業に頼るよりも宗光学院のネームバリューを持ち教育や訓練を受けている学生の方が信頼されているし、実力的にも上の学生が多いのも事実だ。無論、民間企業全てが粗悪な訳ではないが、仕事の量に対し人材が不足しているのが現実だった。

「まあ、何とかならなくても何とかするしかないのですが。仕方がない、私のポケットマネーを切り崩してでも間に合わせるとしますか」

そういつて割り切ると演習室を目指す四葉だった。

「さて、我々の目下の目標は三島先生、神代先生、天宮先生のそれぞれが受け持つチームの打倒にある。対戦相手はまだ確定していないが、事前に対策を立てて置こうと思う」

現実に対して追加の視覚情報を付加するARの機能である、セカンドサイト越しにARを確認しつつ明が説明を始める。

「基本的な戦術や個人技に関してはこれまで仕込んできたことをやってくれば構わない。しかし、それだけで確実に勝てるとはい切れないので敵の動きを想定した訓練を検討することにした」

そんな明のレクチャーを四葉、赤木、桜井、白百合の四人が傾聴する。ちなみに演習室は複数個あるので各自情報が流失しないようにチーム毎に違う部屋を利用するのブリーフィングをする事になっていた。

「まずは三島先生の率いるチームだが、おそらく生存を優先とした隠蔽からの奇襲特化型の作戦を取ってくると思われる。透過迷彩^{ステルス}を利用した狙撃戦術、陽動から地雷源への誘導、待ち伏せからの十字砲火^{クロスファイア}が考えられる」

それぞれの戦術の画像を添付した資料をAR越しに表示しつつ、説明を進める。

「いずれにしても待ちに特化した作戦で自分から攻めてくる可能性は薄いだろう。そして、特定のポイントに踏み込まなければ脅威にはなりえない。個別での戦闘になれば、間違いなく勝てる断言できる。それだけの訓練をこなしてきた」

あれから、幾度となく繰り返してきた戦闘演習で彼らは、反応速度、回避技術、防御技術、射撃精度、全てが学生の水準を超えていた。同様の訓練をしていない限りは、遅れを取るとは明には思えない

かった。

「基本的に、全滅するまで戦闘は行われることになっている。例外となるのは、突発的な事故や相手が降参をしてきた場合、相手が戦闘エリアから離脱した場合だ。いかにして効率よく破壊するかについてはこれ以上教えることはない、相手の戦術についても連携を乱さなければ対処可能だと考えている」

一呼吸して、強く言い放つ。

「対立してくるなら、正面から叩き潰せ」

「了解！」「了解！」「了解！」

四人の聲がぴつたりと重なって響く。スパルタな訓練を共に乗り越えた影響か、奇妙な連帯感が生まれていた。

「ふう、次に神代先生のチームについてだ。まあ、あいつが何をやっているのはあまり想像したくはないが、おそらく俺と同じような指導法を相当に苛烈に実践しているのだろう」

ここ数日、彼女が指導する生徒たちは何かに憑依されたかのようなであった。訓練された猟犬のように彼女の指示に的確に応え、従順な犬のように服従する。気の毒な話だが、よく訓練された軍人と言うよりはそのような表現の方があっていた。

「個人技については、お前達と同等程度かそれ以上に訓練されているだろう。気を抜けば一瞬で破壊されることを覚悟しておけ。戦略プランについては、戦力を分散した各個撃破をしてるかと思われる」

個別の四体、二体毎の連携、一体と三体の組み合わせなどのパターンが役割に応じて動くと言うスタンダードな戦略。しかし、フィールドを移動しつつ陣形や布陣を変更してくることを明は想定していた。

「深追いはするな、複合的な戦術で先行する機体が挟み撃ちにされることなるだろう。常に二人はセットになるように心がけ、相互に仲間を支援しろ。先行してくる相手に対して数の優位で個別に撃破するように動け」

移動しながら攻守を切り替え、全員がゼネラリストとして機能するハイレベルな連携であるはずだが、幽鬼ゆうきのような生徒達の様子をみていると完璧にこなしてくるだろう。パブロフの犬よろしく、身体に刻み込まれたのだと明は推察すいさつしていた。

「さて、最後に天宮先生のチームについてだな。おそらく、こちらの攻撃を防御しつつ陣形を変更、相手の一部を包囲して撃破するというような作戦で動いてくると考えられる。個別での戦闘に持ち込めれば負けることは無いと思われるが、連携重視で動いてくるだろう」

「つまり、いかにして連携を崩すかが重要になってくる。ということですか？」

四葉が軽く笑みを浮かべ質問をはさむ。

「その通りだ、四葉。役割を固定化した連携訓練で、その技術だけが高いだろうが個別の技術までは完成されていない。防御主体の連携は、個人の能力の低さを隠すためのまやかしかたしかない」

「戦略さえ突破できれば、なし崩しに勝てそうだ」

期待に満ちた目で強気に断言する赤木。

「仕掛けてくる瞬間を逆に狙い撃ちにして仕留める。ということころでしょうか？」

と、不敵に微笑む白百合。

「そんなところだ。まともにやり合っても防御主体で動かれれば長期戦は必至。その場合、先に隙を作るのは攻め手の側であるこちらだ。なら逆に攻めを陽動として相手に攻撃させそこをカウンターする」

「そうは言いますが、全て新城先生の想像ですよ？ 情報が相互に秘匿ひそくされていますし」

おっかなびつくりしつつ手を上げて、桜井が質問する。クラスの内部で情報統制がしかれている訳ではないが、勝負の前に進んで自分の情報を提供する輩はいなかった。教師の性格が反映されているのか偽の情報を流す作戦をしているチームもない。

「なんだかんだであいつらとは付き合いが長い、大きくは外れていないと思うぞ。それにあくまでも留意しておく程度に知っておけばいいことだ。当れば儲け物、外れてもそれが実戦では当然のことだ」

「相手の情報が筒抜けつつぬになっていることなんて、例外もいいところですからね」

とは、四葉。

「だが、何かに特化することはそれだけで武器になる。それは、あいつらもよく知っているはずだ。なら、下手に何でもできるように仕込んだりはしない。自身が一番得意な方向で特化するように訓練しているはずだ。わかっていても対処できるかは、お前達次第だ」

「違う不是吗」

四葉が小さく答え、他の三人は首肯する。

「あとは、本番で結果を出すのみだ。あえて、命令させてもらうぞ」

拳を心臓に当てて一息して明は声を張り上げる。

「必ず勝て」

「「「了解ヤ！」「」」」

再度、四人の声がぴつたりと重なって響くのだった。

3 2 4 Opposition (後書き)

…… 一体ために口ボ描いてみた。超疲れた。全部描くのは無理だ
と思った。きちんと仕上げることができたら設定資料の方にもで載
せたいと考えてますがいつになるやら。キャラも下書きくらいはし
てみたが、文章書いてるだけで清書するまで手が回らない。

3 2 5 Opposition (前書き)

「敵が攻撃する瞬間が最大の好機だ、赤木。今だ」

四葉がここで逆転のカードを切る。

吹き荒れる風、重力、熱や磁気による乱れを全てアシストプログラムで演算しつつした赤木のソルジャーがビルの屋上から敵に照準^{レティクル}を重ねる。

3 2 5 Opposition

3 2 5 Opposition

演習室にて、列になった講義用テーブル越しに明と平治が対面していた。

「一回戦の相手は、平治のチームか」

「男女別になったな。今回は、俺のチームが勝たせてもらっぞ」

「生憎と俺のチームは強いぞ」

済ました顔で断言する明。

「攻めるだけが能ではないさ。個人技も一つの強さだが、チームでの戦闘であるならそれなりの戦い方がある」

そんな挑発するような言動もどこ吹く風と受け流す平治。

「はあ、どうやらお互い相手の戦闘方式は予想通りみたいだな」

「万全の対策はしてある。お前と同じ実力の学生が四人いない限り負けないはずさ」

元チームメイトだけあって、互いの行動パターンや性格は熟知していた。そして、おそらく行ってくるであろう戦術や戦略、訓練方式には検討がついていた。

「それは、こちらも同じだよ。だが、今の俺と同じとは言えないが昔の俺と同じくらいには鍛えてやったつもりさ」

「それでも、勝つのは俺のチームだ」

「結果は、学生達が示してくれるさ。そうだろう、平治？」

「できれば、俺達も参加したかったな」

残念そうに語る平治。

「俺達が学生を全滅させてもなんにもならないだろ」

「いい経験じゃないか。とはいえ、俺達はもう見守ることしかできないか」

「そういうことだ。静かに試合を観戦しようじゃないか」

対面する二人は静かに思考し、視界を仮想へと移すのだった。

「透過迷彩か。座標は割れているが罨でしょうか」

「かといって放置もできないでしょ」

ツーマンセルの形を取った四葉と白百合のコンビが先行する。戦闘フィールドに選ばれた曇り空の『廃墟』にて二体のA Aが地上付近を並走する。近代的なビルディングが乱立する『摩天楼』のフィールドが爆撃を受けたような状態のフィールドである。

「敵はソルジャーが三体、ヘッジホッグが一体。スタンダードな構成ですね」

「そうね、誰かが先行して仕留めない」と

「君の技術に期待しよう」

「そこは、男であるあなたが進んで行く所ではないの？」

「レディファーストで」

「口の減らない奴。……背中、任せるわよ」

「狙いを外す程、射撃は下手ではないつもりです」

チーム用の秘匿回線を利用してつつ加速するメイジとウィザードの二体。目標は、廃墟に潜むソルジャー一体。遮へい物も多く、到達までに時間を掛けているために既に地雷原と化していることだろう。だが、相手が待ちの戦術を選択する以上時間を掛ければ掛けるほど状況は彼らに不利に働くとわかつている。自ら積極的に攻めない、と言う選択肢は存在しなかった。

「接敵まで十秒弱、援護して」

「了解しました。一部を建物に当てますので、煙に乗じて仕掛けてください」

『倉庫』からカチューシャと呼ばれる多連発ロケット砲を取り出し、メイジが援護射撃の構えするべく構える。

「仕掛けるわ」

その声を合図に爆撃染みたミサイルの雨がソルジャーの近辺に降り注ぐ。援護射撃に合わせてウィザードは大剣を引き抜き、敵に向か

い加速する。攻撃がないのは、自身の位置を特定されることを恐れているのか、防御に専念しているのかは定かではない。

予想通り地雷原だった、ソルジャーの周辺部が爆撃を受けて派手に爆発する。火炎の中を一直線にウィザードがロープをはためかせながら剣を振りかぶりソルジャーに斬りかかる。目標に到達する直前、白百合の視界に映ったのは三方向からの火線、獲物を仕留めべく眼前で煌めく銃口のフラッシュマズル。

（やはり、こいつは^{おとこ}罔。それでも）

そのまま加速して相打ち覚悟で仕留める選択は、今の彼女にはなかった。どんな状況でも自身が生存するべく思考するように何度も教えられたからだ。その先にあるのは実戦を想定した思考、自身が死んでもゲームのスコアを上げる方向で考えるのは愚か者だった。

彼女は即座に思考を切り替えてロープを自身の前面に展開、コアユニットを守るべく大剣で守りを固める。ギリギリで間に合った防御は、四人がかりの攻撃にさらされるが火線の大半は彼女の眼前を通り過ぎる。

（ふう。あのまま突っ込んでいたら死んでいましたね）

「座標特定。素晴らしい戦果です白百合さん」

メイジが展開した数十ものビットの砲火が駆り立てるようにひし形状に展開した左右の二体に向かう。回避するべく二体は散らばるが、回避した直後の位置に向かい一条の光が走り抜けて行く。

見えざる砲台と化した赤木のソルジャーからの狙撃に右の一体が被弾する。直撃だけは避けたのか、ダメージはあるものの射程から抜けるべく移動を続ける。しかし、破損部からの炎上やスパークで可視化された機体を桜井のアーケエンジェルが両断する。

敵の陣形は、ひし形は逆三角形となり前衛の二人が戦力を集中しつつ、砲台であるメイジとソルジャーは両翼に展開する。不可視の相手と切り合うのは分が悪いかと思っただが、桜井が相手をしている間にウィザードのソードビットが敵を包囲して問答無用でこれを撃破。

味方もろとも撃破することを避け、この間の援護はなかった。しかし、それは次なる攻撃への布石でしかなく、四人たちに向かい多弾頭ミサイル、ガトリングガンの火線が降り注ぎその場で釘付けにされる。

ヘッジホッグからの攻撃で前衛の二人は、盾で攻撃を防ぐが身動きが取れない。この時点で彼女達の側面に移動していたソルジャーによる射撃でアークエンジェルが撃破される。しかし、敵の攻撃を掻い潜りつつ武装を展開していたメイジのビットと二丁拳銃による一斉射撃で蜂の巣にされる。不運なことに一直線状に並んでしまったメイジとウイザードは次の攻撃を交わすことはできなかった。

ヘッジホッグの切り札ともいえる、荷電粒子砲による敵の掃討。フィールドに存在する障害を融解させながら光の奔流ほんりゅうが薄闇を照らしていく。何重にも盾を展開してこれを何とか防ごうとする白百合だが、一枚、二枚と盾が光に融けていく。瞬時に盾を取り出したメイジがその後ろに並ぶ。

「敵が攻撃する瞬間が最大の好機だ、赤木。今だ」
四葉がここで逆転のカードを切る。

吹き荒れる風、重力、熱や磁気による乱れを全てアシストプロゲラムで演算しつくした赤木のソルジャーがビルレティクルの屋上から敵に照準を重ねる。

「俺達の勝利だ」

彼の思考に応え、ソルジャーがトリガーを引く。弾丸は音速を超えて敵へと向かい、その装甲を食い破り、コアユニットを粉々に破壊したのだった。

3 2 5 Opposition (後書き)

更新遅れてすいません。なんか、風邪ひいてました。ぐは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8801t/>

ROG(real online game)

2011年10月7日20時27分発行